

昭和十七年三月

アジアの諸民族

厚生省人口問題研究所

B50.4/
90
10-5

M93A06
10

序

本輯は調査研究の參考に資する爲、ハックストン著「マリアの諸民族」(Buxton, L. H. Dudley, M.A., F.S.A. "The Peoples of Asia." London. Kegan Paul. 1925) を本研究所小山榮三、河野和彦をして翻譯せしめたものである。尙、本輯は早急の間に取纏めたものであるから粗漏なきを保し難いが、將來版を改める際補正することゝしたい。

昭和十七年三月

厚生省人口問題研究所

目次

序 言	一
第一章 序 説	五
第二章 アジアの諸民族	五
第一節 人種地理	五
第二節 白色人種と褐色人種	六
第三節 黄色人種	六
第三章 アジア諸人種の起源	七
第四章 西方アジア	九
第一節 近東の諸種族	九
第二節 中東の諸種族	一三
第五章 印度	一三
第六章 支那	一七
第七章 支那の邊境地帯	一七

第一節 中央アジア・チベット・支那トルキスタン	一七
第二節 モンゴリア	一七
第三節 滿洲	一六
第四節 朝鮮	一〇
第八章 極北アジア	二五
第九章 日本	二九
第十章 南東アジアとインドネシア	三三
第十一章 結論	三七



支那回教徒
(起源地 サマルカンド)

アジアの諸民族

序言

アジアの諸人種について有用な知識を蒐めんとする人は、種々の權威によつてものされた言語の多いために他の研究に於けるよりはとりわけ錯雑な問題に當面してゐる。東アジアの人種學の母胎たる廣大な量に上る支那語文獻は通常の人類學者には未開の寶庫となつて居り、西歐の學徒は其れを一層馴染み深い言葉に翻譯し始めたけれども、依然として未開の寶書を開くに熟達した將來の支那學徒の手に委ねられてゐるであらう。支那地理評論と云ふ極めて興味ある人種學的出版物として、既に支那及び外國人の研鑽によつて其の仕事は始められてゐる。日本の出版と同様に其の大抵の出版物は土着語と若干のヨーロッパ語で書かれ、それ故廣く社會に提示されてゐる。一方、部族名、地名を記號や音譯を使つて用ひ、單なる音譯のみ與へられる場合に起し勝ちな錯雑さを回避してゐる。

然し乍ら、西歐の言葉に於いてすら、此の問題に關する文獻は廣大であり常に増加しつゝある。私は私の研究に於いて最大の貢獻を與へて呉れた著書を文獻として示して置いた。それ故、讀者はそれに眼を通されることにより少くもアジアの各地域に關する大部分の専門的な文獻を跡づける事が出来るであらう。可成り著名なものも容易に手にし得べき書物となつて公刊されてゐるから、一層關心を持たれる讀者は偉大な文獻に至る途を知られることと思ふ。自身の經驗から見ても、研究者の屢々手にしてゐる文獻が研究對照に於ける最も有用な研究を呈示してゐないこと程、根本的な研究家にとつて嫌やな思ひをする經驗はないと考へる。或ひはたとへ提示してあつても、完全には理解され

ない言葉で書かれてあることもある。それ故多くの場合私は原語論文を英語、フランス語又はドイツ語で要約して書いた。之は初學者に彼が要求してゐるものを與へてゐるであらう。更にもう一段進んだ學徒には充分な研究への踏石となるであらう。

私は内外の極めて多數の學者に負ふてゐるものを適切に表現することが出来ない。私の見事するアーサー・トムソン教授、オックスフォード大學に於る人體解剖學教授リー博士は私の研究に限りない援助と懇切な忠言・批判を與へて下さつた。ピットリバーズ博物館の管理者ヘンリー・バルフォア氏(H. R. S.)は其の博學識見を以て私を絶えず援助して下さいました。此の書は氏に負ふ所誠に大である。マイアー教授は始めて私にアジアへの眼を開いて下さり、更に重要なことは私に現地調査の機會を與へて下さつたのである。私は彼が教示して呉れたことを忘れないであらう。マレット博士に對して私は特に人類學記述の技術の點で負ふ所大である。國外では北京に於るロックフェラー教會のブラック博士に感謝する。而も研究所長は私を臨時幹部の一員とし研究室を利用する事を許してくれた。足立博士は時々彼の指導下にある京都帝國大學の數多い蒐集物を吟味する機會を與へて下さつた。ニューウエンフウイス博士は個人的又は代理として私に力を借して下さり、ジャバ中を案内して下さいました。此の長期の旅行を企てる機會はカインの獎學資金によつて與へられた。私は亦、北京に於る多數の支那人及び蒙古人の學者に等しく感謝する。之等の寫眞の或るものは、彼等自身の民衆及び其の友邦民衆、——アジアの遠隔地に於る居住者——此の廣大なる大陸の異つた人種型の或るものを現してゐるので此の書の中に利用して置いた。

確かに之等の學者は老いざれば此の廣大な研究題目に向つて限りなく研究の歩を進めねばならぬとお考へになつてゐられるであらう。私程、之がアジアの肥沃な土地の單なる第一の收穫(Vindematio prima)に過ぎないとお考へて

ゐるものはない。私は斯る乏しい拾遺ですら、豊富に發見される寶物を積み重ねんと準備されてゐる他の人に資せられんことを願つて筆を執つた。限られた紙面では既に公刊された此の問題に關する研究の一般的傾向を支持する以上に出ることは不可能であつたし、私が一、二の場處でなし得た最初の研究の若干を諸所に附け加へることも不可能であつた。

私の父ダッドレイ・バクストン博士及びG・R・カーリン氏は原稿を通讀して下さつた。私はその慎重な校正に負ふ所大である。チャールス・ヘンダーソン氏(F・A・C・S)は原稿及校正刷に於ける印度の章を、アーメスト・トーマス氏は近東の章を讀んで下さつた。私の學生たるクイン・カレッヂのフレイザー氏は索引に多大の勞を費された。オックスフォード人體解剖學教室助手チェスタトマン氏は私の寫眞の中から出版用の圖版を準備してくれた。

上記の人々及び何時も私を助けてくれた方々に對し私は深甚なる感謝の意を表したい。

一九二五年六月

オックスフォードにて

L・H・ダッドリ・バクストン



第一章 序 説

人類學を研究するに際して何よりも先づ最も困難な問題の二つは、研究者自身に直面してゐる數多の人類をどのやうに區別するかと云ふ問題であり、従つて其の區別すべき規準を何處に求めるかと云ふことが解答を迫つてゐる。多くの斯る規準は過去に於ても提案されたし、又様々に認められて來た。それ故特別に制限された地域以外の、何等かの地方を取り扱つた大抵の書物は同一の分類基礎が一貫してゐない結果、極めて錯雜した内容を持つ傾きがあるのである。或る場合には著者は一般に認められてゐない規準を用ひてゐるので、同一分野に於る他の研究と殆んど比較し難い事になり、有用な研究であるかどうかを立證し難いものとなつてゐる。

傳統的な人類の分類は肉體的なものか、或ひは文化的なものかに依存してゐる。ヘロドトスは肉體的なものを提案せる最初の人類學者の一人である。彼は或る戰場でエヂプト人とベルシヤ人の頭蓋骨を區別することは、前者が比較的容易には破壊し難かつた爲に可能であつたと述べてゐる。此の陳述は現在の教科書に於いてすら廣く認められてゐる所であるが、遺憾乍ら正しいものではない。アリストテレスも亦、ギリシヤ人は野蠻人と異ると (*ethnologia*) 云つてゐる場合、肉體的な規準を受け入れて居たのであらう。然し乍ら彼は疑ひもなく醫學の一分岐を考察してゐたのではなかつたから、解剖學的な差違と云ふよりは寧ろ心理學的な差違を意味して居た様に思はれる。

人種標準としての言語も亦、廣くギリシヤ人によつて認められて居たし、ホトマーの時代ですらカリア人は野蠻語を語るものとして分類されて居る。此の分類形態は極めて廣範に人類學者によつて認められて來た。其れは疑ひもなく、十九世紀の初めに比較言語學者によつてなされた急速な進歩に基づくのである。モンゴロイド人種の場合には肉

體型を、セム族の場合には親縁語を語るものとする時に、我々はセム語を語つてモンゴロイド人種を意味付けてゐるのである。國民性も亦屢々人種標準とされたけれども、此の規準は言語學的なもの程廣く受け入れられる所とはなつて居ない。此の書に於る分類基礎は肉體的なものであつて、出来るだけ言語學的な、國民的なものは避けられて居る。だが現在、全く新しい一聯の名前を鑄造する事に依る以外、斯る言葉を全的に抽出する事は妥當ではない。トルコとかアラブとかいふ言葉は肉體的な意味よりは寧ろ言語的な或ひは文化的な意味を持つて居るのであるけれども、我々はこれ等の言葉を避ける事は出来ないのである。

人類の分類史は現在に於ても大なる意義を持つてゐる。それはさもなければ屢々混亂に陥りがちな正確な意義を説明すると同時に亦、一定の言葉を現在何故に用ひてゐるかに就いての理由を記述するものである。

ヘロドトス及びアリストテレスの事は既に述べた所である。西ヨーロッパが古代世界から贈られた人種學の問題を再考し初めたのは、十七世紀初頭になつてゐた。一方では多くの比較資料がエリザベス時代の航海者によつて集積されたのであるが、水夫達は古代世界には知られなかつた新しい型の野蠻人に就いて簡潔な考察を齎したのであつた。

文藝復興以來提案されて來た多くの人類分類を詳細に考察することは必要ではない。讀者はキーン(A. H. Keane)の民族學の充分記述されてゐるのを見出されるであらう。然し乍ら一層重要な問題がアジアに關する限りに於て述べられるかも知れない。一六八八年に死んだベルニエは人類に四ツの主要な系統があると提案しゐる。即ち白系たるヨーロッパ人、黒系たるアフリカ人、黄系たるアジア人及びラップ人が之である。殆んどそれから一世紀後にリンネの(C. Linnaeus)(一七八三年死亡)は三つの同様な主要集團を依然として採擇して居るが、毛髮及び眼の色を其の中

に含めて居る。其の結果アジア人は褐色の眼と黒色の毛髪を持つた黄色人として分類されて居る。彼は亦、アメリカ人を第四の集團として含めてゐるけれどもラップ人を獨立人種から除外してゐる。

然し乍ら我々が眞に近代人類學の基礎として恩恵を受けて居るのはブルーメンバツハ⁽³⁾ (J. F. Blumenbach) であつて、彼の使つた術語の或るものは今日でも生き續けて居る。彼の人類學研究への貢獻は次の如くダックワース⁽⁴⁾ (W. L. H. Duckworth) に依つて要約されてゐる。彼は記述的形態學研究に於て人類學と云ふ言葉を始めて採用した人であつた。彼は人類の持つ數々の多様性を鋭く一線を以て劃すると云ふが如きことは困難であり、類型から類型への推移にしても殆んど判らないと云ふ事實を認識して居つたのである。更に彼は種々雑多なる人類の分類構造を明確に述べたのであるが、其の分類の基準は皮膚、毛髮、頭蓋骨の特性に求められてゐた。結局、彼は人類を含めて動物に於る連續的變化的變化に外的原因の影響の存することを既に認めてゐた。最後に彼は人間を含めて動物には、變化を作り出し繼續させる外的原因の影響のあることを認めた。彼は亦、退化による變動的期限を認めて居つたのであつて、極めてダーウイン説に近い見解を持つてゐた。

彼の使つた用語は今日も亦使はれてゐる。彼は白色人種をコウカサス人種と呼んだ。其の理由は、彼が偶々吟味した若干の頭蓋骨の中にジョルジア人の立派な頭蓋骨の若干があつた事から、それ以後其の人種をコウカサスと云ふ名で呼んだのである。アフリカのエチオピア人に對して彼が使つた用語は今日の所では残つてゐないけれども、モンゴールと云ふ用語は未だ使用されてゐる。近代人類學は、彼がマレーに對して分類した所のものを認めては居らな

5。 次の八十年代になると人類學に關する巨大な數に上る勞作が發表されたが、此れ等のものは此所では論ずる必要は

なり。だが一八七〇年、人種學界誌⁽⁵⁾に發表されたハックスレー (T. H. Huxley) の分類は極めて興味あるものである。彼の分類の中には、其の主要な論議の跡は異つてゐないけれども、ブルーメンバツハ以後の分類よりは一層綿密な調査の結果が稔り豊かな精密な分類を齎してゐる。彼はネグロ族の下にネグリート族を包含してゐるけれども、近代の研究者と異つて彼は其の名の下にアングマン族、パプア族、タスマニア族を一括してゐる。彼の第二の分類たるアウストロロイド群も亦、我々の目的上興味あるものである。これらのものの中には、オーストラリア現住民、デカン高原種族 (ドラヴィダ族) 及びエチプト人が含まれる。彼のモンゴロイド集團はラツプランドからシナム迄のモンゴール人、マレー人、インドネシア人、ポリネシア人、エスキモー人、アメリカインディアン等を包含してゐる。彼の試みた明白人種集團は現在の考察に入り來るものではないけれども、暗白色人又はメラノクロイド群の下に彼はシリア、アラビヤ、ペルシヤ、及びヒンドスタンの住民を含めてゐる。

ハックスレーの分類以後、三十年程の中に種々なる分類が試みられたが、其等の中、大抵のものは、微細なる點でハックスレーの分類とは異つてゐるものがある。或る場合に於ては異つた基準を使用してゐると云ふ事が重要である。皮膚の色と毛髪とが全體として昔の研究者の分類基準となつてゐたが、一層近代的な分類は、たゞ毛髪のみによつて爲さんとしてゐる。トピナル⁽⁶⁾ (Paul Topinard) は皮膚の色と鼻形指數とのコンビネーションを該分類の中に導入し、アジアの黄色人種を黄色中鼻型として分類した。そして彼の分類は一般に追従された。

セルジ (G. Sergi) の分類は、彼が全く獨創的な分類形態たる頭蓋骨による分類を暗示したと云ふ點で重要性を持つものである。セルジはヨーロッパ人種に侵透してゐる所の短頭の要素は根源的にはアジア的なものであり、歐亞非利加的長頭と全く相反するものであると考へた。それ故彼の分類は多くの點で、アジア人種の研究者に對してよりも

一層アフリカ人種の研究者に對する一大挑戦を試みたことになる。斯る頭蓋骨形態によつて分類を試みることは、しかし乍ら新しい方法であるのだが、彼によつて暗示されたあれこれの亜類を理解するに際して逢着する困難な問題の爲に、それは一般に廣く受け入れられる所となつてゐない。

「形態學と人類學」と云ふ論題の下にダツクワースによつて示された分類は近代的企圖の中、最も重要性を持つものの一つである。それらは長年の間、人類學者によつて用ひられて來たものであるけれども、私の知る限りには一般的分類に對して廣く採用されなかつた規準に基づいてゐるものである。彼は他の動物を分類するに際して、多くの形態學者によつて用ひられたところのものと原理的に同一であつた方法を導入した。其の結果は、それ以前の觀察者の研究と多くの場合一致してゐたけれども或る差違を持つて居り、若しそれが眞實なものであるとされるならば、其の結果はアジアの住民に就て我々の抱いてゐた見解の多くを根本的に變更するものとなるのであらう。彼は三つの主要な規準を採擇し、之等の規準によつて配慮された基礎の上に人類を分割する。即ち頭蓋容量(Cranial capacity)頭形指數(Cephalic index)及び顔面斜形(Projection of the face)が彼の採擇せる三規準である。斯くの如くして彼の第一集團は小頭蓋容量の人類、即ち長頭、斜頭型顔面のものを包含し、斯る類型をオーストラリア型と呼んでゐる。第二集團は同様な性格を持つてゐるものであるが、其の他の形態上の詳細な點で差違を示して居り、その型はアフリカネグロ型である。アジア民族については彼は次の如き分類を試みた。第一に、彼が歐亞型として記述せる第四集團に屬する一切の人類は大頭蓋容量を有して居り、正頭型である。之等の者は分れて二つの亜類を形成する。即ち長頭型、短頭型亞群とが之である。此の類型を持てる人類はヨーロッパ、北アフリカの一部、アジア全體、殆んど總てのアメリカ大陸等の住民を形成してゐる。他のアジア的集團は小頭蓋容量のアンダマン族であるが、之は短頭

型、正類型である。之等二つの群間の大きさと、重要性とに於ける対照は極めて顯著であり、ダックワースの分類と、其れに先立つ著者達によつて爲された分類との間の相違点となつてゐる。ダックワースは、人類の大部分は同一集團に屬してゐると云ふこと、多少の相違は環境或はその他の條件に應じて特殊化されるものであると云ふ見解を持つてゐたものゝ如くである。之等人類の多様性は、大抵一般に後進民族と看做される種族を包含してゐるのであつて、單に、明かに特殊化された種族たるアングマン族、エスキモー族のみならず、またネグロ族、ブッシンマン族、オーストラリア原住民、及びポリネシア族も包含してゐるのである。

大抵の分類は二つの大きな差違として、白色人種と黄色人種の分類で充分であると云ふ見解に基いてゐた。所でダックワースは之等二人種の相違よりは相似と云ふ觀點の下に、之等二つの人種を分離して考へると云ふ方法を拒否したのであつた。ダックワースの細分類は亦、それがヨーロッパの短頭種族を長頭型ヨーロッパ近隣族とよりは一層密接にアジアの黄色人と結び付けてゐるが故に、根本的な重要性を持つものである。それと同様に、或る著者は(著しくイタリヤ人類學派にこの傾向が見られる)地中海人種とニグロとを結び付ける傾向がある。

支那人の頭蓋及び西方アジアの圓形頭蓋を吟味してみると、頭蓋形慮の近似性を表してゐるに違ひない。二つのものを區別するに、頭蓋穹隆のみの吟味を試みる事が出来るにしても、それには屢々困難が伴ふ。だが然し顔の骨格及びその他の骨組が違つてゐる事は、二つのもの間に可成りの相違がある事を暗示してゐるのである。然し乍らダックワースの規準は二つの場合に於て頭蓋穹隆に基礎を置き、従つてその相違を掩蔽せんとする傾向がある。人類の異なる集團間の關係度は未だ極めて不正確であるので、この特別の分類は大抵の著者達によつて人類に關して受け入れられて來た所のものよりは、一層の認識を與へられてゐる。それらの著者達の多くのものは、比較的傳統的な、而し

て一見より明確な分類に従ふ事に満足して来た。

リップレス(W. Z. Ripley)は我々が上述して来た著者達と異つて、全世界の住民を論ぜず、ヨーロッパと云ふ大陸に命題を限定した。而して頭形指數即ち頭幅に對する頭長の百分率、身長、色素の三規準の下に分類を試みた。斯る基礎に立つ場合には、ヨーロッパの住民はドニケ(G. Deniker)の試みた六種族に分類されるのではなくて、三種族に分割される。北方にはノイディックと呼ばれる明色にして身長の高い長頭人種があり、中央大山脈地帯には中庸な皮膚色と身長を持つた圓頭型人種たるアルプス人種が見出され、更に地中海沿岸にはセルジの地中海人種と一致せる所の身長の高い長頭ブルーネット人種がある。ニグロに關するリブレの見解及び特に中央ヨーロッパの圓頭型頭蓋の研究に對して彼の抱いてゐた見解には或る種の反對意見が表明されてゐるけれども、概して彼の見解は頭形指數、色素、毛髮等を分類基準としたと云ふ點で、現時に於ける人類學の領域を支配してゐるものと言ひ得られるであらう。而してヨーロッパ又はアジアの人類學研究者は、彼の輝かしくも驚異的な論文の中に集められた材料を探求してみなければならぬ。

以上引用した著者達の大部分は解剖學的態度を持して来たものと云ふことが出来るのであつて、彼等はケトレー(A. Quélet)やレイウズ(A. Reclus)等の先達に従つて、一連の測定を試みたものではあるけれども、大部分は該問題の數理的面に興味を抱いた譯ではなく、之等先達の特質を充分利用することもなく、ケトレーによつて示された道程を跡付ける事にも成功して居らないのである。數多くの資料からの科學的研究を人類學の中に導入すると云ふ方法は全く、ピアソン教授(K. Pearson)に負ふ所大である。

彼の説く方法は一般に統計家や天文學者の採擇する所となつてゐたが、又生物學的問題への適用可能性も示され得

たのである。此の方面に於ける開拓者はゴルトン及ウエルドン等もゐるが現存せる者はピアソンなのであつて、人は稱して「生物測定學派」と稱する。而も之等の多くの人達が人類學に可成りの關心を示したのである。此の派の者は三十年前に初期の論作を發表してゐるが、一般に受け入れられる處となつてゐない。之、一つは其の叙述の方法の比較的漠然とせる事によるべく、他は生物測定學者達が應用數學の原則に特殊的訓練を受けて居らざる事によるものと思はれる。又或る場合には解剖學的教養をうけてゐないことによる。此の派の行績を考察するに際しては、資料の數學的取扱が單に機械的であり、始めからそれに適合されなかつた仕掛けから、何等のものも生れてゐないと云ふ事が常に記憶されねばならない。だが然し、數學的方法に依つて、さもなければ取扱ひ得ないと云ふのではないにしても、極めて扱ひにくかつたであらう所の龐大な資料を位置づける事が可能であつた。

昔の人類學者は測定値を取り上げ、指折り算の方法によつて平均を算出する事に満足して居つた譯で、之等の平均が現實にどれだけの集團の典型的測定値として考へられ得るかと云ふ事については、何等正確に考察する所がなかつたのである。我々は一定の大きな實際的價值概念を人類學に導入したと云ふ點で、生物測定學派に恩惠を蒙つてゐる。之等のものは便宜的に次の三つのものに求められるであらう。即ち、散布度の測定、蓋然的誤差の測定及び偶然、相關々係の理論、之である、之等の考へが此の學派に依つて生れ、此の學派に依つて人類學に導入されたと考へられてはならない。人類學的研究に於て彼等の使つたものは、以前にケトレーに依つて少しく異つた名前で提案されてゐた所のものである。だが然し、生物測定學派は其れ等を普遍化し、以前の研究者によつてなされた以上に其の領域を擴張したのであつて、古い方法を發展させ新しい方法を工夫したと云ふ點で人類學がピアソンに負つてゐる所のもは、今日ですら充分と迄は認識されて居らないのである。

一定の人種がその他の人種と混淆した、即ち一定の種族が持つ構成的種幹が現象に現れた近似的特徴を表し、他の種族の場合に於ては其の起源が相互に混血し雑種の間を作り出してゐる密接な關係を持たない種族に捜し求められねばならないと云ふ事は、ヘロドトス以來、總ての著者達に依つて認められて來た所である、標準偏差及び變異係數を使用することによつてピアソンは、種々の種族の比較的純粹性を測定することが可能であることを示した。

標準偏差は平均からの平均的平方差の平方根を取る事に依つて見出される。勿論、一系列の數値の平均をとり、その平均と數値との平均的差を求めることは可能であらう。然し乍ら、現實の偏差をとるのではなくて其の等の偏差の平方を求めることによつて、より大なる正確さが獲得されることが實際に發見された。斯くて獲得された數値は散布度の測定と呼ばれてゐる。何故なら其れは、吟味されてゐる系列の様々な個體がどれ程散布されてゐるか、或ひは中心點又は平均との關係に於てどれ程バラ撒かれてゐるかを示すものだからである。若し標準偏差が小である、即ち散布度が大きくない場合には、その平均は集團の中、典型的なものとなるが、若しそれが廣く散布されてゐる場合には明かに一集團内の極く僅かな個體のみが平均に近い値を持つてゐると云ふことになるのである。換言すれば我々の平均を以て人種型を表示するに際して、信頼度が少くなると云ふことになる。若し我々が人類學的測定をクリケットのスコアと比較するならば、問題は一層簡単に理解されるであらう。若し一人の打者が打ち番で零、十五及び三十を獲得し又一方十三、十五及び十七を獲得する場合、兩者は全く同じ平均を持つてゐるけれども、一は他よりも一層堅實な打者であることを認めねばならない。勿論我々が決定的な判断を與へる前に、三つの打ち番以上のスコアを欲すべきであるけれども、その點に付いては後に説くことにしよう。我々が想像する堅實な打者は常に約十五の得點を得る。即ち彼の平均は我々が期待する平均に緊密に近附くのである。此の事は一見して觀取され得る所である。若し兩方と

も五十回プレイするならば、それは比較的容易でなかつたであらう。それ故我々はこの標準偏差を算出せねばならない。兩方の場合に於ける平均は十五であり、最初のプレイヤーの最初の打ち番は平均から十五違つてゐる。その平均は二二五である。彼の第二の打ち番は平均に等しく、第三の打ち番は第一のものと同様な偏差を持つてゐる。全平方差はそれ故四五〇である。此の平均を獲得せんが爲めには、我々は打ち番の全数即ち三で割らねばならない。その平均平方差はその故一五〇である。(三分の四五〇)平方根はまさしく十二を越える。之は彼のスコアの標準偏差を表はしてゐる。同様な方法を使つて第二のプレイヤーのスコアの平均平方差は三分八即ち一・六七である。その平方根は一・三以下となる。此の例は誇張的な形態に於て如何に標準偏差が用ひられるかを示すに役立つであらう。だが我々は單一のプレイヤーの得點に混淆人種の理論を當嵌める事は出来ないのである。

若し我々が二つの系列を混ぜ合せるならば(即ち頭の短いものと長いもの)その平均測定値はその系列の典型的な成因ではなくて、二つのものの間の合成物を現はしてゐることになり、標準偏差は大きくなるであらう。何故ならば一方に於て短頭型系列が擴大し、他方に於いて長頭型系列も擴大するからである。疑ひもなく或る場合には之はグラフに依つて現はされるであらうが、散布度測定の使用が一層便利である場合が相當ある。時として偶々我々は可成り違つた平均値を持つ測定値を比較したいと考へる場合があるかも知れない。我々は又一定の人種が一層可變的な頭長を持つものか、それとも身長を持つものであるかどうかを知りたいと思ふことがあるであらう。此のことの爲には我々は或る共通なフアクターをとつて來なければならぬ。之は變異系数に依つて見出されるが、之は多數の標準偏差を掛け合せる事によつて或ひは平均に依つて作られたものを割る事に依つて獲得される。クリケットの論議に立ち返つて説明しよう。シーズンの終りになつてAの得點を吟味せる時にクラブのメンバーは彼が投手であるよりは打手

に一層適して居ると云ふ見解をとる、他のメンバーはそれと反対の見解をとる。若しクラブの成員の中に生物測定學者が居るとするならば、Aの投球と打球の平均の變異係數を比較することによつて一層問題を容易に解決するであらう。そこで彼の平均打は十五である。その標準偏差は九である。變異係數はそこで十五分の九百即ち六十となるであらう。之と同様に投球平均を出す。そこで我々は二つの數値を比較し、クラブのメンバーのどちらが正しいかを決定することが出来るのである。

斯かる方法の持つ大きな價値は、一人種が何等かの共通な特徴を表はしてゐるが、他の點で異なる二つの人種の混淆の結果であると當然考ふべき場合に表れるであらう。

我々は雜種が二つの原基的系統に於て相似してゐる特徴に於ては殆んど變異を示すことなく、彼等の相異せる散布度の廣範な測定がなされると考へるべきである。此の提案は變異係數を比較することによつて測定され得る。

我々は馴染深い分析を用ふることによつて標準偏差の意味を例示することは可能であるが、蓋然的誤差の意味を説明することは比較的容易でない。若し私が野蠻な種族について行はれた一系列の測定値をとるとして、亦その次に他の系列をとるとする。そうすれば私はラプラスが言つてゐる様に、選擇の方法によつては兩方の場合について同一の結果を正確に得ることが出来ないであらうことは明瞭である、亦、個々のもの數が大なる程二つのものがそれだけ多く一致して來ると云ふことも明らかである。情、出来るだけ大きな系列から平均を抽出することが一層良い様であるけれども、その平均が觀察されてゐる母域 (Population) をどれ程實際に表はしてゐるかどうかを知ることが便宜である。之は二つの事象に存してゐる。先づ第一は母域がどれだけ變るか云ふことであり、第二は個々のもの數がどれ程あるかと云ふことが之である。私の測定するものが大なれば大なる程、即ち標準偏差が小なれば小なる程系

列は母域の眞の平均に近くなるのである。蓋然的誤差の値は之等二つの因子から計算される。それ故其れは便利な方法で資料の信頼度を示す方法を與へてゐるのである。蓋然的誤差が大であるならば計算された平均値は警戒を要すべき値であり、若し小であるならば計算された値は眞の平均値に近づくものであらう。蓋然的誤差は、標準偏差、相関々係やその他のものの變異係數で計算され得る。偶然論及び相関々係論は同一問題を形成する二つの異なる面である。前者は測定し得ない特徴を取り扱ふものであり、後者は測定され得るものを取り扱ふ。人類學に於いてはそれは最も大なる重要性を持つものである。一つの係數が構成された。その現實の計算方法については此處で述べる必要がない。二つの變數が正しく相互の關係に於て變化するものとする。(量と質)さすれば其の二つのものには相関々係があり、その係數は計算すると一となるであらう。何等の關係がないものとするならば其の係數は零に近い値をとる。人類學的研究に於いては殆んど一もなければ零もない。それは多くは偶然的な特徴にもとづいてゐるのであるが、係數の可變的數量は二つの特徴が原因結果としてか又は同一原因の同一結果として、緊密に結び付いてゐると云ふことを示すに役立つのである。こゝで其の例を與へることは必要ではない。

私は或る程度、此の面について考察して來た。恐らくは最も單純なものであらうけれども、ピアソンの研究の中では少なからざる重要性を持つものである。何故ならば、アジアの種族について隨分澤山の資料を使用し得る場合、それを適當に理解しておくことは必要だからである。

生物測定學者は大部分は此の方法に興味を持つて來た。それ故彼等は此の方法を人類學的な問題に適用した。然し乍ら、最近或るアジア人種の研究に基礎をおいた一ツの試みが「地域的人種近似係數」⁽¹⁾を構成することによつて、古い分析方法を凌駕するに至つた。此の係數は人種の結合的特徴に數多くの價値を與へんとするものである。多くの人

類學者に感じられて來たものは、單一の特徴又は指數、或ひは二、三の任意的に選定された規準、例へば身長、頭形指數等々だけでは人種差異を表はす充分な方法ではないと云ふことである。亦或る場合には、明らかな證據が極めて相反せるものであることが見出されてゐる。即ちA集團とB集團とは相互に相違してゐるが、或る二ツの規準の下では其の差異がなく、他の二ツの規準の場合は大である。その反對は、AとCの場合である。違つた方法に於いては相互に相違つてゐるBとCとの關係を決定することは容易な課題ではない。

提案された係數は凡ての特徴を結合させ、其れ等を單一な指數に換元することに依つて此の困難を打開してゐる。二ツの異なる人種に於ける同一特徴の平均値間の本質的な差異は、その蓋然的誤差を以て此の差を割ることに依つて評價されることが充分知られてゐる。この分割の商が三以上である場合に此の差は本質的なものと云はれてゐる。平均の蓋然的誤差は標準偏差を獲得すべき事例數の二ツの事象に依存してゐる。それはコンスタントで〇・六七四五である。人種近似係數はそのコンスタントな値の基礎にある事例數を以て、各々を割れる二ツの標準偏差の合計によつて割られた二種族の平均値間の差を割ることに依つて見出される。平均かあの平均的偏差ではなくて、平均的平方差をとると同様な方法に於いて、その數は割られる前に平方されねばならない。勿論その様にして獲得された數値は、我々が選擇せる特徴の數を以て割られねばならない。さすれば我々は、實際平均的本質的差異に見積らるべきもの、或ひは寧ろ〇・六七四五を以て割られた平均的本質的差異の値を獲得するのである。數式的に云ふなら、本質的差異は次の如き場合に見出される。 M_1 は第一の人種の平均頭形指數、 M_2 は第二のものの平均頭形指數を表せば次の如きものとなる。

$$\frac{M_1 - M_2}{\sqrt{\frac{E_1^2 - E_2^2}{K} - \left(\frac{.6745 \delta_1}{\sqrt{n_1}} \right)^2 - \left(\frac{.6745 \delta_2}{\sqrt{n_2}} \right)^2}}$$

此の場合、人種近似係數は次の如き公式から得られる。

$$\frac{1}{K} \sum \frac{(M_1 - M_2)}{\frac{\delta_1^2}{n_1} + \frac{\delta_2^2}{n_2}} - 1$$

Kは考察されてゐる特徴の數、Eは蓋然的誤差及びδは標準偏差である。本質的な差異を取り扱ふ場合、最初の人種と第二の人種が或る特徴に關してはヨリ大きく、他の特徴に關してはヨリ小さいかどうか、直ちに氣付く場合、我々が平均間の差異を平方することによつてプラスとマイナスの記號の持つ困難を避けてゐると云ふことが知られるであらう。之が有利であるか不利であるかどうか、は此の方法が更に試された場合に知られるであらう。だが然しその記號から離れて差異を考察する事は有利なもの様に思はれる。勿論、平均値を獲得するが爲には、そのプラス、マイナスの差異を相殺する何等かの手段を持つことが必要とされるであらう。

違つた人種に對する同様な標準偏差の過程に對する反對は（其の過程についてはモラントが彼の論文に於いて論じた所である。）こゝで論ずる必要はない。

何等かの特徴が他のものよりも一層大なる比重を與へられると云ふ困難が提示されるかも知れない。だが標準偏差を用ひ、之によつて其の差違を表明する方法は技術的觀點から見て此の困難を氷解させるものである。だが其れは實際的なものからは其の困難を氷解しない。明らかに若し我々が緊密に關聯を有つてゐる特徴をとるならば、我々の測

定値には充分な比重を置いてはならないのである。三つの特徴は緊密な關聯を持ち、残りの七つは微妙にしか關聯を持つてゐない十の特徴を執り上ると假定せよ。之等の事情の下に、平均的係數を獲るために十で割ることは充分ではないであらう。而も相關々係は完全ではないやうであるから、緊密に關聯を有せる三つの特徴を一つとして取扱ひ、一で割る事は誤りと思はれる。此の困難は實際、互ひに微少乍らの相關度を持つて特徴を選択することによつて氷解される。此の困難は常に考察さるべきものである。

更に一つの障害は我々の選擇せる測定が必然的に任意的な性格を持つてゐると云ふことであり、現在の知識狀態を以つては或るものが他のものよりも一層大なる人種の重要性を持つてゐるやうに思はれるのである。人種のと云ふことは環境よりも遺傳によつて一層影響を受くるものである。係數を形成するために選擇された特徴は任意的なものであり、其の結果の價値は其の選擇の行はれる熟練に依存してゐるのである。人類學者は現在、何が最良の特徴であるかに關して意見の一致を見て居らず、又現在我々の知識狀態では問題は純粹に實驗的な段階にあるものと考へられねばならない。

提起される更に一つの障害は我々が明白な測定値を純粹に任意的な數値に換元してゐると云ふことである。若し同様な測定値が總ての場合に選定されるならば、此の數値は大なる價値を持つものであらう。其の選定が各々の著者の論文に於いて異つてゐるならば係數値は、それによつて著しく價値を減ずることとなる。必要とされる計算の量は、一人の著者が限られた時間で比較的限られた分野以上のものに涉らなために爲し得るものとは考へられないやうである。

然し乍ら科學的方法はその結果によつて判斷されねばならない。而して現在其の係數が實驗的な段階にあること、

明瞭である、然し乍ら、それを此所に詳細に考察することは、するに値することのやうに思はれる。何故ならば、それはアジアの種族の問題の解明に之迄用ひられて來たし、また比較的不明なためにそれが人種學者に充分理解されてゐないがためである。現在其の方法は南印度と黄色人との結合を除いて比較的簡単な方法によつて發明され得なかつたものを示してゐないけれども(その陳述は一般に公認される所とはなつてゐない。)之については後の章で考察することとする。然し乍ら生物測定學者は充分、此の方法を發展することに成功したやうである。斯る方法は若しそれが工夫に工夫を重ね充分なる事が證明されるならば、斯學に最も大なる貢獻を與へるものと思はれる。

私は以下の章で此の方法を使用するために生物測定學派の業績のある程度述べて來た。この方法は一般の人種學教科書では大部分無視されてゐる。例へばキーン、ドニケ、リプラー等がさうである。現代の論文は一方では標準偏差等を用ひ乍ら、複雑な部分に入ると其れを無視する傾向があるのである。

之迄、生物測定學派の方法は一般的人類分類を公にせんと企圖しなかつたけれども、それはケトレイ(Quetelet)によつて提案されたものと相似せる目標に向つて研究して來たやうに思はれる。

公にされた最も最近の分類はハットン(D. A. C. Hutton)の分類である。彼は三つの特徴即ち皮膚、毛髮及び鼻を適用した。「其の圖式は動物學者や植物學者等によつて理解されてゐる言葉としての分類ではなくて、地理的考察を含んでゐる分類である。人類を體系的に分類せんと試みた者は總て困難に遭遇し、屢々地理的集團に尻込みしてしまつたのである。」とハットンは云つてゐる。

ハットンは全體としては可成りの修正を加へてトビナールによつて提案された分類に従つた。彼は或る點では生物測定學派によつて主張された多くの見解とは異つた見解を抱いてゐる。彼の規準は一般に認められてゐたものと廣範

に異つた分類を提案するに至らしむる態のものではない。だが彼は何か異つた人種關係觀を持つてゐたやうに思はれる。

極めて異つた立場から該問題に接近した著者達も全體としては一見彼等が異つたものと見えても、根本的には一致した調査研究に見出される意見を保持してゐた。然し乍ら、其の分類は大部分は技巧的なものであり、結局意見の差違は或る種族が白色人種に屬するの、黄色人種に屬するの、かに關して分れて來る事が知られるであらう。國境線にある事例は多々あるために、人種學者は未分化種族を認めなければならぬか、或は人種的混淆を提案しなければならぬ。數學的方法の信奉者は變化を極度に測定し、變化の存する所、人種的混淆がたゞ、次の如き場合に高度に行れると信じてゐる。即ち混淆が合成的となり、二つ以上のものが極度に混淆する様になる結果、最後の人種が純粹なる人種と隨分變つてゐるか、殆んど變つてゐないか何れかの場合が即ち之である。

だが主要な人種系統に限られる困難ばかりではない。主要な集團の細分類は殆んど數限りない數であり、際限なき論争に對する主題、廣範な數値、限らない測定、等は屢々不完全にしか理解されてゐない。一般に認められてゐる若干の基準があるが、研究家は互に意見の對立せる文獻に引きずり廻はされると云ふ状態である。

基本的な問題は人種的不變性に關するものであるやうに思はれる。進化論が認められてゐない時代には此の問題はブルーメンバツへの如き人類學者によつて知られてゐた。其の理由は、人類の衰退は其の進展よりも一層強く燃焼された幻想であつたからである。

今日此の問題は廣範な立場に立つて論ぜられてゐる。一般的には此の問題は環境が遺傳的特徴を作り出すが如き方法で人類に影響を與へ得るかどうかの論議に限られてゐる。大抵の生物學者の意見は他の動物と同様に人類も胚原

形質⁽⁴⁾の媒介體であると云ふ見解を持つてゐるやうである。其の可死的肉體は將來の世代に受託された不死的にして貴重なる物に對する刺戟の効果を遺傳する事が出来ないものと認められて來た。生存の松明の擔ひ手は山の高みに置き、登り、彼の齋せる松明を消滅するかも知れないが、彼等は神聖なる火の性質を變改することが出来ないのである。

人類には一定の多様性があり、それは肥沃な雜種を作り出す事が出来るけれども、多少とも眞の系統を現はしてゐるやうに思はれる。其の差違の中の若干のものは恆常的であり、他のものは正確な觀察・測定を加へること困難である。之等の差違の起源は、進化論の受容以來可成りの論議の對象とされて來た。二つの觀點が表明された。全體として殆んど認められる所となつてゐない一派は人間の多様な起源を異れる猿又は其れと相似の祖先から主張する立場であつて、此の見解は人類の異つた集團の緊密なる相似性によつて支持され難きものとなつてゐる。第二の派は人間が環境の影響の爲に修正を受ける様になつたと云ふことを提案してゐる。更に此所で此の修正は二つの方法に於いて行はれる様に思はれる。人間の多様性は變種又は變異に基いてゐるのであり、生存してゐるものは其れが歸屬してゐる條件に最も良く適合してゐるものである。或ひは一定の環境的刺戟に應ずるために、種々の機關の暫時的集成に最も適合されたものである。ハッドンは嘗て人間が現在よりも分化されて居らず、それ故に一層環境の影響を受け得ることが可能だと提案してゐる。キース⁽⁵⁾(A. Keith)は此の進歩的な進化が作用することを決して止めず、文明が人類の一定成員の肉體型に一つの影響を持ちつゝあると云ふことを提案したのであつた。

異つた型の混淆を持つ効果は一定の人類型の可能な起源として指摘された。斯る提案は然し乍ら特殊型の持つ原基的困難を克服しては居らない。

變化の現實のメカニズムについては我々はこゝで觸れない。だが然し、證據は一定の人間型が一定の環境條件と關聯を持つことを暗示してゐる様に思はれる。然し人種には潜在力がある様に思はれ、之等の潜在力が認められる限りはその環境に應ずる充分な運動は可能であり、特殊化が行はれた後、進化の線は後方ではなく前方にとられる様に思はれる。即ち若し何等かの理由で一つの特別な型が廣鼻型として發展した様な場合には、狭い鼻を持つ型を發展させる刺戟は廣い鼻を發生させないであらう。

研究目的上、我々は一定の特徴を孤立化すけれども、現實の事實に於いて人間は複合的な有機體であり、その存在が色々なオルガンの個々別々な機能ではなく、寧ろ最も複雑な一聯のオルガンの相互浸透的な機能に依存してゐると記憶されねばならない。以下私は一定の特徴が(その或るものは屢々人種の重要性を持つものと考へられてゐる)どれ程環境に相應するものであるかについて簡略に示したいと思ふ。然し乍ら私が最初に述べたことは記憶されねばならない。全オルガンと環境との關係は實際最も重要な特徴である。だが然し此の關係を論ずることは此の書で企圖され得ないものよりは一層大なる複雑性を持つた研究となるであらう。トムソン教授(Arthur Thomson)は環境が人間構造の主要な特徴を形成するに際して一つの重要な役割を演ずると云ふことを提案したのであつた。彼の見解の大抵のものは所謂機械的考察に基いてゐるものである。例へば彼は頭が最も形態形成上重要な影響を受けると云ふことを強調してゐる。同時に彼は斯る機械的な影響が效果的に働く様になる時間の長さについては何らの意見も表明して居らず、又それ等がどれ程人種的な特徴、或ひは個々の特徴に影響を及ぼすかについても正確に述べて居らない。この研究の重要性は、我々が通常好適な人種徵標と考へてゐる特徴を詳細に考察するやうになる場合に知られるであらう。若し之等のものが集團としてか個人としてか兎も角、環境の直接的影響の結果たるべしと云ふことが證明され

得るならば、それ等が一定特徴を共通に持つ各種々族の現實の親縁關係を示すには役立つものたることは明瞭となる。人種が何らかの意味を持つものとすれば、プロカによつて與へられてゐる意味とならねばならないと云ふことが明らかになつて以來、此の問題は特別の重要性を持つてゐる。即ち彼は云ふ。「人類の多様性は多少共同一の變動を持つ個々人の間の直接的關係の觀念を與へる所の諸々の人種名を求めてゐる。だが然し確定的にも否定的にも、異つた多様性を持つ個々人の間の關係の問題を決定しては居らないのである。

我々が人間構造に與へる環境の影響の問題に直面する場合、我々は既に述べた相關々係論、偶然論を特に使用せねばならぬ事になる。それは我々をして人間の肉體に於ける一定特徴が他の特徴又は外的影響と關聯して變動する範圍を極めて正確な方法で吟味せしむるのである。それらは常には用ひられ得ないけれども、用ひられ得る場合にそれを使ふことは最も重要性を持つ。

過去に於て最も一般に認められた人種規準は頭形指數であつた。トムソン⁽⁵⁾は頭蓋形態を決定する要因が若干存することを示した。最も重要なものは頭のサイズである。全體として頭の大きさと身體の大きさの間に一つの相關關係があることは殆んど疑ひ得ないが現在我々は頭の大きさがどれだけ異なる人種と相關々係をもつてゐるかについては知らない。この點で人種差異の一つの重要な標識を見出すことは可能であらう。

第二に鼻の根元から大肺孔の前限の中央に至つて測定された頭蓋基底の大きさは大なる重要性を持つ。形態學的に背柱の一部の長さを形成してゐるこの長さはその長さと相關々係を持つてゐる。背柱の長さは可成り變動的であるが、その合成的な部分は常に同様な比率を保持してゐるやうに思はれる。若し小さな頭が長い基底の上に存するならば頭蓋は長頭となり、頭の大きさが増し、その基底の長さが減退するにつれて短頭型となる。

トムソンは又、顛筋が長頭人種には相對的に長く、頭の大きさと顛筋の長さの間には決定的な相關々係があると云ふことを示した。例へば圓頭型人種に於いては咬筋は一層發達してゐる傾向があり、顎は狭く、長い顎を持つ長頭型のものよりは一層廣く一層短い。ケース⁽¹⁾は之等の理論に反對意見を表明した。即ち、咀嚼筋肉及び首の筋肉は十二歳から二十八歳の間の大なる發達をとげる。その時以前に頭蓋骨は殆んど完全に成人の大きさと形に達するのである。生存者の測定から得られた證據は頭蓋形態に於ける變動が唯その外形にのみ影響し、頭蓋腔の形状には影響を與へないものなることを示してゐる。以上の立場に立つてケースは反對意見を表明したのであつた。

頭蓋形態と筋肉發達との關係が現在の所では何等證明されて居らず、多くの理論的困難があると云ふことを認めると同時に、現實の相關々係を提案するに充分な證據がある様に思はれる。その緊密な關係の問題は現在疑問に附されてゐる。

頭蓋形態を決定する現實の要因の關係に於いて疑問がどこにあるにまれ、今日までそれが色々な人類型を分類するに最も便利な方法を構成してゐると云ふことは疑ひ得ない。先づ第一に頭形指數に關する豊富な資料が、之まで多くの觀察者に依つて他の特徴に關するものよりは、一層多く蒐集されて來た。我々が大なる地域を取り扱ふ場合此のことはそれ自身有利である。第二に屢々用ひられてゐる總ての指數の中、頭形指數は最も變動の少ないものである。だから其の平均は人種の眞の平均を表示するのに最も好適なものである。第三に人種間の狭い變動にも關らず、一般に人類の中にあつて各集團の平均的頭形指數は約二〇パーセントの變動を持つて居り、觀察者をして集團構成を可能ならしむるに充分な廣さの變動である。他方一定の觀點から見ならば頭形指數は不十分な指標である。何故ならば指數が同じでも決して人種的な親縁關係の存在を意味してゐるのではなく、亦明らかに關係を持つた人種でも極めて廣く異つ

た指數を示してゐるからである。廣頭のドイツ人と長頭のスカンデナヴィヤ人と同一の人類分類に屬してゐる様にはれるが、彼等は廣く異つた頭蓋形態を持つてゐる。ドニケの人類學の末尾に與へられた表に従へば、ニューブリテン群島の土人、マイゾールのカナリーズ、カサイのバンラング族、グリーンランドのエスキモー族、南アメリカから來たポトクド族及びバレンシアのスペイン人など、總て之等は僅かに〇・一センチの差を持つ頭形指數を示してゐる。だが之等のものが、如何なる意味に於いても相互に緊密な關聯を持つた種族であると云ふことは出来ない。ライヘルは支那人の頭蓋形態がデイツェンテイス型から分化して居らないが、顔面測定は二つのものを顯著に區別するのに役立つと云ふことを示したのであつた。

其の價値とそれが受けた一般的好評にも拘らず、頭形指數が絶対に信頼し得べき指標ではないことは明らかである。一定の事情の下に於いてそれが個々の筋肉發達によつて、亦環境に敏感な他の特徴によつて影響を受けることは可能である。極めて異つた人種系統に屬する人が同一の頭形指數を持つかも知れない。

更に重要な事は異なる人種集團が同一の平均頭形指數を持つてゐるかも知れないことである。逆に云ふなら頭形指數に於ける差は必ずしも人種の差異を意味するものではないと云ふことである。之に對して我々はただ頭形指數の便宜性を選択する。それは屢々疑ひもなく好適な人種規準たる役割を果すし、亦それは最も變動少なき測定値だからである。

鼻形指數が或る著者達によつて好適な人種微標であることは既に述べた。多くの理由から相互に關係を持つてゐない人種でも同一の指數を持つてゐることがある。トムソン教授と共に私はこの問題を他の場所で既に論じた。⁽⁸⁾ トムソンは特に二つのアメリカ人に關して鼻形指數が一定の氣候條件と關聯をもつこと、高指數は湿度の高い暑い氣候の

中に見出され、低指數は寒冷な氣候の中に見出されることが示され得ると云ふことを提案した。後の論文に於いて世界全體から證據が齎され、氣温が最も重要な影響を與へ比湿度と云ふものは比較的低い影響力しか持つてゐないといふことが示された。然し乍ら多くの國民を吟味してみると、勿論多くの例外は起るけれども、住民の居住せる地方の氣温及び比湿度の知識から鼻形指數を規定することが相當種族に對して正確に可能であることが判明した。北極圏に居住せるエスキモー族は最も狭い鼻を持ち、廣い鼻を持つたものは熱帶地域に擴がつてゐるのである。トムソンはこの分布は肺臟に入る前の空氣が肺臟のデリケートな組織を害しないやうにあためられ、湿度を加へられねばならぬといふ必要から結果したものと提案した。熱帶森林にある條件に於いては空氣は暖いと共に濕つてゐる。だからその肺臟に吸入されるのである。

鼻形指數と氣候條件との間の相關々係は極めて高いので、何等かの説明が必然的ではその現象に對して加へられねばならない。その例外となるものは恐らくは特殊化作用に基くか、或ひは調査されてゐる種族が、その現に住居してゐる條件に屬してゐない事實に基くものと思はれる。之は恐らくはオーストラリア人及びグスマニヤ人に見出されるであらうが、彼等は環境が與ふべしと思はれるよりも一層廣い鼻を持つてゐる。

だが然し現在我々は環境が人間の肉體に作用するにはどれ位の時間が必要とされるかと云ふことについては知らない。だが問題が一層充分に理解される場合、我々は鼻形指數の中に種族變動の價値ある道すじを見出すこととなるであらう。殊に我々が一定の種族がその現在の環境に應じて變動せる指數を持つと云ふことが發見される場合はさうである。鼻形指數が我々に原基的證據を與へると云ふことは妥當ではなさそうである。

身長は或る著者によつて好適な人種徵標と考へられてきた。それはリプリーの⁽⁶⁾によつて極めて適切に論ぜられた。

彼は次の如く要約してゐる。「身長は寧ろ人種の問題に於いて一つの不確定的證據物件である。だが肉體的特質は主として環境からの擾亂的影響を受け易い」と。身長は二つの影響を興へるものと思はれる。環境的特徴は、氣候、場所、食物、集團に關係を持つ健康状態、社會淘汰の影響などの如きものに分類されるであらう。

氣候の直接的影響の効果は現在の所不確定である。最も身長の高いものは最も反對な氣候條件の下に生活してゐる。北西ヨーロッパは身長の高い集團が存在する。リブレは之を北方人と呼んだ。上ナイルのまはりの沼澤地帯に住んでゐるナイロティクニグロ族も亦、大なる身長を持つてゐる。北支那人はその近隣族及びその親縁族よりも明らかに身長が高い。南アメリカのパタゴニヤ人はその身長で有名なものとなつた。他方、倭小人種は大部分は熱帶地方に住居せるものである。彼等はこゝで他の身長の高い人種と兩々相ならんで生存してゐるが、彼等の身長を純粹に氣候的な條件とかゞづらはせることは困難なやうに思はれる。一般的な規準として極端な條件は寧ろ低身長と關係を持つ様と思はれるが、之が食糧供給に間接的に影響を及ぼすことによる以外の氣候の影響であると提案する理由は現在のところ何もない。而も彼等は同一地域内で他の長身型種族と一緒に住居してゐる。このやうなと、種族の身長と純粹に風土的條件を相關させると云ふことは困難であるやうに思はれる。

居住は直接、間接の影響を持つてゐるやうに思はれる。間接的影響は異なる條件下に住居せる集團が獲得しうる食料のあれこれ異なる供給に依據して居り、之は人種住居地の風土と位置とに關係を持つてゐる。山嶽地帯の人種の身長は低地の其れより低いと云ふ事が叫ばれ、此所で再び其の論證が聞はされることになる。其所で之に對しては次の如く解釋するとよい。一般に山嶽地は平地よりは寒冷であり、食物の供給は不充分である。其所で右の様な現象が起るのでないかと思ふ。之に付いての詳細はアジアの高地人種を觀察するときに委ねよう。

食物が身長に對して重要な効果を持つことは殆んど疑ひのない所である。一般的に云ふなら、食物の供給が不充分である様な種族は他のものより身長が低い。だが熱帯地域の倭小種族が此の種の種族的貧困の結果であると云ふ様に判断することは不可能ではない。熱帯地方は生活するに不快適なる地方であり、従つて食物によるカバリーが充分達せられないと云ふ事情を持つてゐるのである。此の様な食物供給の僅少さの身長へ與へる影響が、どれ位の時の経過によつて現れるかと云ふことは不確定であるが、恐らく、その影響は種族的なものよりは個人的なものに基くものであらうと考へられる。ビタミンの持つ人類學的重要性如何は未だ充分に論證されてゐないけれども、未開人の食物の或るものには斯る必要營養を缺除してゐるのであることを思へば、何等かの影響はあるであらう。他方に於て或る低身長の原始種族の食事は充分釣合のとれた營養價を持つてゐると云ふことを私は知つた。(例へばセイロン島のヴェツダ族)

コリニオン及び彼の後にリプレは所謂悲惨な地點の存在に注意を拂つた。そこでは恵まれた状態にある近隣のものよりは一層顯著に悲惨な地點が存在すると考へてゐる。南支那の福建省に旅行した時に、私は或る村人が低身長であつたことをはつきり記憶してゐる。彼等は全體として不十分な食事をとつて生活してゐる様に思はれる。ヨーロッパの證據が示す所では悲惨な地點から平野に種族が移動する場合に、子供の身長は正常的な身長をとりもどすといふ事を示してゐる。之が支那にあるかどうかの證據については遺憾ながら存在しないが、支那にはあるものと考へられようである。かゝる事情の下に悲惨な地點は人種にはなく、かゝる不幸な條件にたま／＼屬する成因に影響を及ぼす所の非人種現象として考へられるであらう。我々は現在、所謂個人的な條件と人種的な條件とを區別する事が出来ない。何故ならば我々は長期間に渉る資料を殆んど有してゐないからである。

社會全體の一般的健康状態が一種族の身長に影響を興へると云ふことは充分理由のあることである。マリアアの様な疾病が平均的身長を退化させるものなることが示された。斯る劣弱なる生命力は種族的なものよりは個々のものとして考察さるべきであるやうに思はれる。

淘汰は疑ひもなく身長の發達に一つの大きな役割を演ずるであらう。ピアソンが示した如く身長の高い個々の後裔は人種的な平均に近づく傾向があるけれども、多くの複雑な要因がそこには働いてゐる。アジアを取り扱ふに際して我々はヨーロッパのそれとは異つた問題に直面するのである。何故ならば住民の大多數の間に子供に對する願望が極めて強く、それ故生産に好都合な大なる偏見が存在するからである。不妊の結婚者は社會的原因ではなくて肉體的無能の結果であり、婦人の不妊はヨーロッパに於けると同様には作用しないのである。それ故、活力ある系統のものはあらゆる生存機會を持ち、屢々身長は活力ある系統と相關的な關係を持つてゐる様に思はれる。淘汰がアジアの住民に影響を及ぼす他の道は、現在の所證明するのに一層困難である。この大陸のある部分は數百萬のものを破壊した大激變に見舞れた。通常最初の激變は強きものと弱きものとを破壊する。然し乍ら、屢々平均以上の身長を持つ最も強きものが此の危機によつて、生存することになる譯である。生命の大なる損失は地域に住む人口を稀薄ならしめ、人種の身長は他の事情にして等しいとすれば、微小ながら増大する傾向をもつのである。

私は身長に直接間接影響を興へる環境の五つの場合を述べて來た。多くの場合之等の影響が個々のものに限られるか、或ひは人種的なものにまで及ぶのであるかについては全く不確實である。然し乍ら人類學的結論の基礎となつてゐる資料は個人から集められてゐる。特徴的な身長が個人の歸屬してゐる種族の特徴であるか、或ひは觀察されてゐる村又は町が何らかの特徴的な制限を身長に課するのかどうかについて一般的に評價することは殆んど出来ないの

である。異つた種族は異つた影響を受けてゐる。従つて一定の事情の下に於いて、我々は異つた条件からの特徴の複合體を確得するのである。或ひは更に同様な條件ではあるが、異つた人種的潜在力は異つた結果を作り出すかも知れない。それ故、我々は之等の困難を記憶し、環境の直接的影響を決定的にあとづける場合に、それを抽出して身長をあるがまゝに取り上げねばならないであらう。

私が之まで考察してきた特徴は決定的な測定を受け入れてゐるのであり、それ故異つた個人は互ひに微小に異つてゐる結果を現はしてゐるものかも知れないが、全體としてその差違は大したものではないであらう。だが然し觀察の容易でない多數の特徴が残つてゐる。これ等は量としてよりも質として考へられるであらう。斯る特徴の中には毛髮、眼及び皮膚の色、毛髮形態等が含まれる。楮、一人の男が頭形指數八二を持つとする。だが我々はその男の眼は青いと記述する場合、直ちに我々が誤つた概念の前に立たされてゐる事は明瞭である。何故ならば青いといつてもそれには種々のものがあるからである。觀察者が色のついたガラス、レザー、又は毛髮を規定しても、彼は依然として極めて重大な誤謬をおかしてゐるやうである。何故ならばそれらが同一の度合にある場合にすら、それらの陰影をませ合す事は明らかに困難な問題だからである。だが毛髮の色の差はヨーロッパ程アジアには重要なものではない。何故ならアジア大陸に於いて毛髮は殆んど大部分の住民に於いて黒であり、眼は通常褐色であるからである。毛髮組織も様々な變化を現はしてゐるが、大部分は直毛であるからその例外となるものが注目されねばならない。皮膚の色は、アジアの種族を取り扱ふのに際して大なる問題を構成してゐる。それは殆んど完全な黒色から白色に至る變度を示してゐる。皮膚の色は同一の人種でも個人を異にする變つて居り、又、同一の個人でも身體の部分に異になると變つてゐる。我々が量を取り扱ふ場合、この困難は集團の量の平均値を作成することによつて便利に克服することが出来る。

質に關しては之は一層困難である。之まで若干の提案がなされて來たけれども未だかつて充分な方法が提示されたことはない。之は依然として遺憾な問題である。何故ならば疑ひもなく皮膚の色はアジアの若干の種族を區別するに便利な方法となつてゐるからである。

我々が以前に述べたやうに、之等の特徴が環境によつて影響を受けると云ふ事は殆んど疑ひない事である。明らかに全體として、黒色は熱帶的氣候と關聯を持つてゐる事である。他方では決して黒くない住民が熱帶に存在する。然も、熱帶から移住し、熱帶よりも一層好適な氣候の中に生活を營んでゐる北アメリカのニグロ族は、依然としてその近隣の明色のものとは異つた黒色を呈してゐるのである。此所で再び鼻形指數の場合に於けると同様に、一特徴は氣候條件と關係を持つてゐる様であるが、之等の特徴はその條件が變動した時ですら一貫して殘ると云ふ事が知られる。

眼の色は皮膚の色と相關々係を持つてゐる様に思はれる。だが問題は此の場合一層困難である。何故ならば皮膚及び眼の色の異つた蔭を認識する事は比較的容易であるけれども、一度び比較的制限された青と淡褐色の眼が選び出されるや、すべて褐色のものとして分類されるからである。それ故この點で決定的な結論を與へるに足る資料は現在殆んどないと云つてよい。

毛髪の色もまた困難な問題である。アジアに支配的な色は黒であるが、一見環境的條件はこの色と殆んど關係を持つてゐない様に思はれる。他方ヨーロッパに於いて、明るい色の毛髪は少くも西海岸に沿ひ南方に進むにつれて減退してゐる。

然し乍ら毛髪の組織はアジアでは可成り異つてゐる。形體に於いても組織に於いてもアジアの大部分の住民とは毛髪を異にしてゐる羊毛質のネグリート族はさて置き、直毛の人種は極めて差異を呈してゐる。殊に個々の毛髪が試さ

れた場合には其の現象が見られる。例へばアイヌ族はその近隣族たる支那人、日本人とは非常に異つた毛髪を持つてゐる。

我々の前に横たはる之等の困難にも拘はらず、我々はアジアの異つた種族を區別するに好適な若干の規準を選び出さねばならない。リプレーがヨーロッパに對して適用した如き單純な分類を適用し得ない事は明らかである。

第一に彼等が取り扱つた程の資料を我々は現在持つてゐない。第二に疑ひもなく頭形指數が様々な人種を區別するに價値を持つてゐようとも、その重要性は一般的なものよりは寧ろ地方的なものである事が知られるであらう。我々はそれを一種族と、その近隣種族を區別するのに使用し得るが、この特徴のみによつてはアジア民族の中に於ける或る種族を系統的に位置づけ得ないのである。だが然し頭形指數に關する資料は、恐らく他の特徴に關するものよりは一層豊富であるから一つの重要な役割を演ずるに相違ない。

次に毛髪と眼の色はヨーロッパ種族に於ける程の價値を我々の研究目的に持たぬやうである。と云ふのは、アジア種族の毛髪は殆んど總てが黒色であり、眼は褐色であるからである。尤も例外もあるから、其の様な場合には特別の價値を持つ譯である。そこで、毛髪の色彩よりは其の形態、性質が最も爲になる分類の基礎である。

ブロンドと皮膚の色は、(ブロンドとブルーネットと云ふ彼の言葉が元來皮膚の色と共に毛髪及び眼の色を含ませるために用ひられたものに相違ないが)リプレーによつては殆んど考察されなかつた。アジアに於いては既に見た如く皮膚の色が環境に影響される特徴であると云ふ事實にもかゝらず、我々はその中に屢々廣範な人種集團を識別するに役立つ導きを見出すのである。たとへ、その不明確な程度のために一層地方的な問題を取り扱ふのに際して失敗に陥つてすらさうである。

身長は不確定なものであると云ふ事は既に述べた。だが其の規準としての不確定性にも拘らず、両親の身長と、子供の身長との間には極めて密接な關係があることは記憶して置かねばならない。アジア民族を分析するに際してもこの明瞭な關係を考慮に入れて置くこと自ら開ける分野も出て來るであらう。

鼻形指數が特に民族の住居せる地域の風土的條件と密接なる關聯を持つてゐることに付いては既に述べた。だが子供の鼻形指數が其の両親と密接なる關係を持つてゐることは殆んど疑ひのない所である。尤もこの點に關する有用な資料は數少い。とまれ、我々が同一環境内の異種族を取り上る場合には、鼻形指數は、時には、其の起源に對する導きともなり、暗示となる事がある。

アジアに於いては顔の廣さの點で人種を區別するのに貴重な資料となるものが發見される。このアジアの種族のあるものに特徴となつてゐる特に扁平な顔を適當に示すべき何らかの方法が工夫されるならば、顔は一つの人種徵標となるであらう。だが現在、かゝる方法は何等一般に使用されてゐないし、通常の測定もかゝる顯著な特徴を示すに全く失敗してゐる。

之迄、私は靜態面として記述されうるものから、環境が人間構造に與へる影響を考察して來た、だが、斯る方法は明瞭に不利益である。何故なら人種は決して靜態的なものとしては考へられないからである。全大陸に涉つて人種移動が行はれた。然も文化的移動の影響をあとづける事は可能であるけれども、肉體的移動が行はれた正確な経路を跡付ける事は、不可能ではないにしても一層困難である。我々は今日アジアに於いて環境の影響を研究する場合、我々の研究してゐる種族が現在の習性をその特徴形成に要する充分な時間に涉つて行使してゐるといふ假定に立つてゐるわけである。

環境と、人種的なものとして認められてゐる特徴との間に、何等の相關々係がないとするならば、人種移動が與へられた地域の住民に影響を與へるものと考へられる。支那には特に北方から數限らない侵入者があつた。だが之等の侵入は支那の住民を何等變改しなかつた。といふのは侵入者は支那の住民に吸收されてしまつたからである。我々は之が事實であるかどうかは知らない。眞實だとするならば二つの可能性が残る。侵入者は餘りにも數に於いて少なかつた。だから生物學的に彼等の侵入した地域の住民に影響を與へるには不十分な強さを持つにすぎなかつたか、或ひは彼等の發見した新しい環境に應じて彼等自身を變更させたものと思はれる。我々がアジア史を跡付け得て以來、アジアの部分は深く變容を受けた様に思はれ、他の部分は現在の住民と殆んど異つて居らないやうに思はれる。サイプラスの歴史は侵入に次ぐ侵入の歴史であつた。西から東から來た首長がこの島を支配した。それ故、様々な時期に顯著な文化的差違が存する。他方に於いて北岸に於ける青銅器時代の一寒村の住民は(ラピトス)今日の住民とは殆んど變つてゐない住民が生存してゐた。全島に涉つて獲得された種族の頭蓋骨を選択してみると、異なる時期にあつても大なる差違を表はして居らないのである。他方に於いて、アルメノイドと地中海人の血の割合は、或る村では微少ながら場所的差違が表はれてゐる様に思はれる。二つの種族は四千年以上もの間、恆常的なものとして残つた譯である。古代の村に若干の差異があつたかどうかは現在手にし得る資料からは決定し得ない。だが然し本質的な變動はなかつたものゝやうに思はれる。この問題の正確な説明は更に探求されねばならない。

多くの人種が西アジアで會合し混淆した事を我々は知つてゐる。二つの系統はアルメノイド人種と褐色人種とであつて、之等二つは極めて初期の時代に存在した。彼等は明らかに兩々相併んで存在してゐたのである。だがその當時、長頭型がメソポタミヤ地域の大部分に涉つて存在してゐたやうであるが、環境的效果は何ら現住民を驅逐し得なかつ

たわけである。

そこで、環境が人種形成に一つの重要な要因となり、多小とも大抵の住民の主要形態が此の決定に都合よく説明される事を暗示する強力な議論が表明され得る。だが、我々は人種移動が現住民との混淆によつて一定地方の住民を變化させるに充分な力を持つてゐたかどうかを知らない。他のものと殆んど混淆しなかつた種族が最も少い變異を示してゐる事はあり得べき事と思はれる。それ故、我々はそれらのものが多少とも、この環境と完全な均衡状態にあると説いてよろしからうか。或ひは我々は環境は考察の範囲外におかれねばならぬと考へるべきか。環境の影響に都合の良い議論は無視されるには餘りに強力なものであるが、他方で移動は類縁的な系統を屢々導入したやうに思はれ、それは異つた地域から來入して新しい環境と調和しなかつたものと思はれる。若し環境が有力な要因であるならば、新しい系統のものは變動するか死滅しなければならぬ。時としては消滅し、時としては消滅しない。此の問題を適當なベースペクチブを與へてなめるには、我々は餘りにも短期間の人種史を取り扱かつてゐるに過ぎない。だが我々が一層數多い化石を確得する場合には一歩ふみ込んでこの困難に接近する事が可能であらう。

第一章 關係文獻

- (1) Keane, A. H. *Ethnology*. Camb. 1896.
- (2) Linnaeus, C. Ed. *decima reformata Holmiae*, 1758. Reprint, Leipzig, 1894.
- (3) Blumenbach, J. F. *De generis humani varietate nativa*. Gott., 1775.
- (4) Duckworth, W. L. H. *Anthropology and Morphology*. Camb. 1904.
- (5) Huxley, T. H. *Journ. Ethnology Soc. London*, 1870, N. S., II, 404.

- (6) Topinard, Paul. *Elements d'Anthropologie générale*. Paris, 1885
- (7) Sergi, G. *Specie e varietà Umane*. Turin, 1900.
- (8) Ripley, W. Z. *Races of Europe*. London, 1889
- (9) Deniker, J. *The Races of Man*. London, 1900
- (10) Pearson, K. *The Grammar of Science*. Lond., 1911.
- (11) Pearson, K. (Editor). *Tables for Biometricians*. Camb. 1923
- (12) Yule, G. Udney. *An Introduction to the Study of Statistics*. Lond. 1911.
- (13) Buxton, L. H. D. *The Anthropology of Cyprus*. J. R. A. I. 1920, I. 194
- (14) Morant, G. M. In *Biometrika*. Camb, 1924, XVII. 1.
- (15) Thomson, A. (*Man's Cranial Form*) J. A. I., 1903. XXXIII. 135.
- (16) Keith, A. *Human Embryology and Morphology*. Third Ed, Lond., 1913
- (17) Keith, A. Huxley Lecture, *Nature*, 1923, CXII. 257.
- (18) Thomson, A., and Buxton, L. H. D. *Man's Nasal Index in relation to certain climatic conditions*. J. R. A. I. 1923, LIII. 92.
- (19) Haddon, A. C. *The Races of Man*. Camb, 1924.
- (20) Quételet, A. *Lettres..... sur la théorie des probabilités*. Brussels, 1843. (Fag. Trans, O. G. Downes, Lond. 1843.)
- (21) Retzius, A. *Ethnologische Schriften*. Stockholm. 1864.
- (22) Giuffrida-Ruggieri, V. *Homo Sapiens*. Bologna, 1913.
- (23) Giuffrida-Ruggieri, V. *U' origine dell' Uomo*. Bologna. 1921

- (24) Biasutti, R. Studi sulla distribuzione dei caratteri e dei tipi antropologici. Mem. Geogr., Firenze, 1912, VI.
- (25) Dixon, R. B. The Racial History of Man. New York, 1923.
- (26) Keane, A. H. Man Past and Present. Camb. 1920.
- (27) Martin, R. Lehrbuch der Anthropologie. (Extensive bibliography.) Jena, 1914.
- (28) Flower, Sir W. H. Cat. Roy. Coll. Surgeons. Lond., 1879, I (Man).
- (29) Quatrefages, J. de, The Human Species. Lond., 1879.
- (30) Quatrefages, J. de and Hamy, E. T. Crania Ethnica. Paris.
- (31) Turner Sir W. Sci. Results of "Challenger" Exped. 1884, XXIV, 10.
- (32) Brooks, C. E. P. The Evolution of Climate. Lond., 1922.
- (33) Lyde, L. W. Climatic Control of Skin Colour (Papers on Interracial Problems, ed. G. Spiller, 1911, 104.)
- (34) Grimbie, A. (Effect of Indoor Life on Pigmentation.) J. R. A. I. 1921 LI, 42.
- (35) Huntington, E., and Visher, S. S. Climatic Changes, their Nature and Causes, 1923.
- (36) Mathew, R. Climate and Evolution. Ann. New York Acad. Sci., 1915, XXIV.
- (37) Conklin, E. G. The Direction of Human Evolution. Oxford, 1921.
- (38) Pearl, R. Modes of Research in Genetics. New York, 1915.
- (39) Carr-Saunders, A. M. The Population Problem. Oxford, 1922.
- (40) Keith, A. The Antiquity of Man. New Ed. Lond. 1925.

第二章 アジアの諸種族

第一節 人種地理

先きの章で私は種々の人種、人種間に存する關係、並にそれ等人種の居住する環境を考察して來た。私は一般的方法で環境的條件並に其れと人類との關係を叙述して來たのであるが、現在先づ第一にアジアに於る現實の環境條件を、第二にこの大陸に住居せる人種を概略論議する事が必要であるし亦、いやくもこの二つのものが文化的な特徴に對してよりも、特に體質的特徴に對してどれだけの關係を持つものであるかを見る事が必要である。

人種學的には、アジアはヨーロッパとは分離して考へられ得ない事は、リブレのヨーロッパ人種研究によつて明瞭にされた所である。アジアの北部と地中海沿岸を除く全ヨーロッパとは一つの生物的領域を形成して居り、或る人類學者の意見に依れば單一の人類學的領域を形成してゐるのである。ウラル山脈は大抵の地圖の上で一つの顯著な特徴を形成してゐるのであるが、民族移動を防禦してゐるものではなく、南方では全く障害がないと云つて良い。現實の人種學的境界は東西に走つて居り、其れ故ただ、大陸間の人種を分割する事にのみ役立つて居り、其の大部分は大歐亞大陸の人種的統一を明瞭ならしめてゐるのである。

所でアジアばかりがヨーロッパと緊密な連環を有してゐるのではない。其の他の大陸も密接な連環を有つてゐる。アフリカ大陸は殆んどヨーロッパの外圍地と云へるし。アメリカは極く僅かな一點で結び付いてゐるに過ぎないが、人種學的にはアジアと緊密に結び付いてゐる。アリユーション群島は一つの橋梁、或は寧ろ一列の踏石を形成してゐる。

るが、それ等は世界で最も荒れ狂ふ海に満たされた大きな溝を含んでゐる。ベーリング海峡を越える溝はアメリカと最も緊密な連環を構成して居り、特に氷の存在に依つて此の連環は比較的容易なものとなつてゐる。人類は殆どたしかに此のルートに依つてアジアからアメリカに達したものであらう。そして或る人類學者によれば、反對に此のルートによつてアメリカからアジアに人種移動があつたと主張されてゐる。だが此の連環は可成りの論争を巻き起したものであつて、我々の現在の研究目的上、人類が少くとも一度或は數度はこのベーリング海峡を渡つたと述べる以上、再説する必要はなからう。

太平洋諸島は大部分アジア大陸の東及び南東に存在する。之等群島の地表の面積は極めて微少なものであるが、廣く散在し、而も其の島と島との間のギャップは大きくない。

アメリカ沿岸に最も近い島はイースター島であるが（私はこゝで勿論大洋諸島について述べてゐるのであつて、アメリカ大陸と有機的連環を持つ島について述べてゐるのではない）それ等の島はバルパライソから海上一千哩の距離の所にある。ヨーロッパは先づ第一に太平洋については其の東部海岸から認識を始めたのであつて、島々はアメリカよりは寧ろアジアに一層緊密な連環を持つてゐたのであつた。

一般に群島は南東アジアの大群島から廣まつてゐる扇状のものとして記述されるかも知れない。太平洋の大抵の住民が遠い住居地を目指して出發したのはこれ等の大嶼島を傳ふルートに依つてであり、その或るものは人類が最初にそこに生活した時代には、恐らく本土の一部を形成してゐたであらう。

スマイス教授 (Elliot Smith) は太平洋の島嶼は現實に一つの橋梁を構成して居り、此の橋梁を傳はつて文化がアメリカに導入されたと考へてゐる。彼の結論は多くの人類學者によつては認められなかつたけれども、最近一定量のア

アジア種族の血が太平洋と云ふ大きな廣がりを経てアメリカに流れて來た事は疑ふ事が出来ないのである。尤もこれがどれだけその住民に影響を與へたかと云ふ事は、未だ一つの研究さるべき餘地を残してゐる。

大洋洲は恐らく長期間世界の爾全の地均と分離されてゐたものであらうが、人間と犬などの伴侶はオーストラリアと云ふ最大の島の中に初期の時代に生活を營んで居り、又此の島に屬する近隣の地域に生活を營んで居つたのである。アジアがオーストラリアの住民に影響を及ぼした事について一つの役割を演じたこと云ふ事は想像される所である。この事は時代的に極めて初期の事に屬するので、オーストラリア及びタスマニア及び其の他若干の島々は殆んど慥かにこの母國であつた所のものに關らしめずに取り扱はれ得るのである。他方アジアとポリネシヤの遠隔群島との關聯は最近のものであり實際的に歴史的なものである。

ハックスレー(H. H. Huxley)以來の人類學者は、アジア大陸にオーストラリア原住民と緊密な關係を持つた住民の生存してゐる事を信じてゐる。其れは、オーストラリア原住民こそは嘗つてアジア人口に於ける重要な要素を形成した住民の中、最後に生き残つてゐる子孫だと云ふ學説を支持する人々によつて暗示されたものである。尤も後になつて彼等は戦闘生活に一層備へた人種によつて壓倒された。

アフリカ大陸は、人種學の見地から見て、殆んどアジア大陸に外圍する地域と見て宜しいだらう。アフリカ自身がアジアに對する影響よりは寧ろ其の逆の事情があつた。此のアジアとアフリカをつなぐルートは三つある。第一の、而も最も重要なものは、地中海沿岸及地中海其れ自身である。

初期の時代に人類が地中海沿岸に現居して居り、ヨーロッパとアフリカとの間の陸橋が依然として存在してゐる事が證明され得るならば(ザミット博士がマルタでなした研究は此の事が眞實であつた事を暗示してゐる。)アジ

アとアフリカとの溝は當時何等存在しなかつた事になる。アジアは東部地中海を支配し、スエズ運河が切開かれてゐる狭地は今日北アフリカに住む多くの人種が大陸に達すべき一つの媒介地を構成してゐる。

二大陸間の第二の連環はバベルマンデブ海峡に見出されてゐる。種族がこの路をどれだけ經由したかと云ふ事については疑問がある。現在アジア側の背後地は人種移動に好適なものではない。だが、人類が此の地域に住居して以來風土が厳しさを少くしたといふ事は、充分可能であらう。

印度洋が二大陸を結び付ける媒介となつてゐたとする事は何か逆説的な様に思はれる。アフリカ本土が人種學的に此の海を通つて來た種族によつてどれだけ影響を受けたものであるかは明瞭ではない。だが然し、現在現住民たるニグロはさて置いて、マタガスカルの大部分の住民は人種學的にはアフリカのによりもアジアに屬してゐる。

情、アジアは其の地理的位置から判断して見ると、以上の考察によつて他の大陸の住民に一つの重要な役割を演じてゐる。實際アジアは人類散布の原基的中心地を形成してゐるのである。其の沿岸は相對的にはヨーロッパのそれ程外延的ではないけれども、東部沿岸は大西洋と異つて人類の住居可能な多くの島々を含む大洋に臨んでゐる。アジア大陸の南部を洗ふ印度洋は上述の例外として、人類傳播に重要な役割を演じて居らない、人種學的見地から見た地中海史に對する重要性が強調されることは殆んどないのであるが、西部アジアの住民をして西方に移動せしめる役割を演じて來たことは否めない所であらう。尤もヨーロッパ住民の分布に役立つた程、アジア住民の分布に役立ちはしなかつたのであるが、とも角、地中海の重要性は記憶されねばならない。

北極洋はアジア大陸の北岸を洗つてゐるが何等の交通媒介體を與へてゐないので、少くも我々の現在の目的には省略してもよろしいであらう。

後の章に於て私は詳細に涉りアジアの夫々の地域の特徴及其れと人類との關係を記述するであらう。此處ではアジア大陸の全體的關係の下に此れ等の特徴を概観する事が重要である。アジア大陸は一連の山嶽地帯によつて分割されパミールを中心として、高原地帯を形成する高みが打續いてゐる。其等は或はイランの大沙漠へ、アルメニヤやアナトリアの山脈につらなつてゐる。東部には人類史に深刻な影響を興へた地帯があり、之は太平洋に達してゐるのみならず、洋上の群島として存在してゐる。北部には西藏高原やタリム盆地があり、其處から崑崙山脈がそびえ立つてゐる。此の崑崙山脈は遠く延びて、中部支那平野になり、支那の「萬里の長城」の造られてゐる懸崖を構成してゐる。

だが、地理學的には日本の南部山脈は此の集團の一つの連續をなすものである。ゴビ沙漠はシベリアの諸大河の水源をなしてゐる一連の大地帯によつて北西に境界づけられてゐる。西方に於るアルタイ山脈から發して、南アルタイ山脈は南東に走り、その他の地帯は東及び北東に擴り、ヤポロノイ山脈に終り、蒙古高原からシベリア大平原に涉つて、通行容易な經路を構成してゐる。此れ等の地域の大きな溝は人類史に貢獻を興へた。即ちそれ等はその高原地帯から西方に向つて蒙古遊牧民の通路となつたものであるからである。

大陸の約五分の二は高原から成立して居り、平原を互に分割してゐる之等の地帯並びに高原は種族發展の母胎となるものであつた。此の高原地帯のあるものは殆ど半沙漠地帯であるか、或は沙漠地帯であり、其所には眞にオアシス型の文化が發達したのであつて、通常斯る文化は民族大移動によつて踏襲されたのであつた。その場合若干の地理的な、或はその他の變動があつた爲に、このオアシスを可能ならしめてゐるデリケートな均衡が阻害せらるゝに至つた。人種學の見地から見て興味ある高原及平原は先づ第一には北の大凍土帯であり、そこでの生活は特殊化された條件の下に於てのみ可能であるのだが、これは北アメリカとの人種學的結合として役立つ所である。北部及び西部に

於ては山嶽並に森林によつてこの最後に名付けられた地域から分離され、南方には常に効果ある境界とはなつてゐない所のゴビ沙漠は人種史上大なる興味を有する第二の高原地域であつた。天山山脈と崑崙山脈との間の大盆地は、一つのオアシス文化が発生したのであつた。だがたとへ、この地域がアジアの歴史上重要性を持つてゐても人種學的には重要性を持つものではない。ゴビ沙漠からは興安嶺の懸崖によつて、タリム盆地からは崑崙山脈によつて、南方からは折重なる數々の山脈によつて分離されてゐる。支那の大中漬平野は、黄河と揚子江の二大河の三角洲を構成してゐる。構造的には大部分、上流から齎されたものによつて蔽はれて居り、人種學的にはその地域から流れ込んだ種族から構成されてゐるのであるが、それにもかゝらず、一つの驚くべき特徴型を發展させたのである。印度の大平野は效果的に爾餘の大陸と遮斷されて居り、殊に北東から遮斷されてゐる。そこで偶々此の地域に入つて來た大抵の移入民は西部から入りこんだものである。西部アジアはイランの大平原を含み、政治的には分れてベルシヤ、バルチスタン、アフガニスタン、アナトリアとなつてゐる。而してそれ等はアルメニヤやクルヂスタンの高地によつて構成された橋土で、先きの高原と連結し、大メソポタミヤ地域によりアラビヤ高原と分離されてゐる。此の高地の北部に橋土たるイラン高原が北東から發シベリヤの大平原となり、さては北部の凍土地帯に擴れる平原をなしてゐる。

之等高原の多くのは群島の形態で海にまで續いて走つてゐる。アジア大陸の邊境地帯は世界で最も大なる、或る場合には最も稠密な人口を容してゐる。我々の現在の研究目的上、其れ等は分れて五つの集團となるであらう。アリューシヤン群島は既にアメリカとの關係に於て述べた所である。日本群島はこの最も廣き意味に於てカムチャツカから臺灣に至る迄の群島線を包含してゐる。我々は此の中に次のものを含めよう。

(一) 千島及び樺太

(二) 日本本土、尤も人種學的には北海道(日本の北部の島)は日本本土によりは樺太に屬してゐる。

(三) 琉球列島

(四) 臺灣

第三のものは多くの點で第四のものと異つて居り、一つの顯著な集團即ちフィリッピンに屬するものである。東印度群島、通常オランダ及びドイツの著者達によつてインスリンドと呼ばれてゐる所は、一系列の群島から構成されて居り、或るものはその規模大きく、一方ではアジアから太平洋上の諸島に、他方ではアジアからオーストララシヤに至る橋土を構成してゐるのである。第五の群島系列は不明確な集團であるが便宜的にインド群島と呼んでおかう。本土と密接なつながりを持つセイロン島、アンダマン及びニコバルの一層孤立的な集團等が此の中に含まれる。

アジアと云ふ大規模な大陸は元來數多くの河を容して居り、或るものはこの河長が極めて長い。

之等は、すべてではないけれども、人類史上等しく重要な役割を演じてゐる。アジアに棲する民族考察上、極めて重要性を持つものは次の四集團である。

(一) メソポタミヤの大文明を可能ならしめたチグリス、ユーフラテス兩河。

(二) 揚子江及び黄河、此の兩河、殊に黄河は漢民族播藍の地となつた。

(三) 印度の諸河

(四) 北部の大河

之等四つのものは夫々アジアに於ける人種史上異つた役割を演じた。アジア北部の諸河を除いて、大部分の大河は夫々、人種に與へた其の影響力まことに大であつた。第一の二つの河は共に生活が集中された一つのオアシスを構成

して居り、隣境地帯に比較して土地が肥沃であつた事によつて今日でも我々が記録を有する初期の時代から色々の型の種族が會合せる地域を構成したのであつた。直接之等の河によつて影響を受けた地域は比較的小さいのであるが、この恵まれた地理的位置のために古代史上巨大な重要性を持つてゐる。黄河は一つの極めて異つた役割を演じた。それは支那史上緊密な聯關を持ちながら、一方には生命の附與者であると共に他方では破壊者であつた。黄河は老大な量に上る泥濘を齎し、暫時隆起して打續きその結果平野の中を流れるよりは平野の上を流れることゝなつたのである。

時たま、これは堤を破り巨大な地域に涉つて水が擴つた。こゝで大なる生活の破壊が惹き起されて來る。歴史時代に入つても相當河の流れが變動した。それ故黄河は上述せる諸河とは異つた範疇に屬するのである。揚子江と共にそれは一つの驚くべき肥沃な平原を作り上げた。その起源を河に持ちながら、支那大平野は、メソポタミヤがその河に依存するものとは異つた關係をこれに持つてゐる。前者の場合、平原には極めて宏大に打ち擴げられた平原全體に涉つて人々が住居して居り、その土地の肥沃が河に依るものではあるけれども、遠く狭い河谷にまで打ち擴がつて居る。

印度の大河は又支那の諸河が演じたものとは極めて異つた役割を種族史上演じた。北部に於てインダス河の影響はナイルの影響と密接に平行的なものである。東部のガンガ河谷はその幅に比して長く、暑い肥沃な地域を成してゐる。植物の生長に極めて好適な條件を成してゐる爲に、人口密度は極めて大なるものとなり、又河谷とアジアの南東部との交通が可能である爲に、多くの點でその他の印度とは異つた人種史を持つてゐる。ナルバタに依つて北部と遮斷されてゐる南部印度の諸河は異つた機能を持つてゐる。西方に流れてゐる唯一の重要な河はナルバタ河及びタブチ河である。其の他西ガート山脈は接近困難なる沿岸となつて居り、東に見えるデルタ上に人口が集中されて居る。然し乍らどの河も人種學的な重要性を持つものとは思はれない。

大きな長さと同規模を持つてゐるにもかゝらず、アジア北部の諸河は北部大平原の人種史上極めて重要な役割を演じたのではなかつた。だがロシア定住地の分布を示せる地圖を吟味して見ると、之等の河が文化や體質の相互浸透を可能ならしめる一つの媒介體として役立つたものである事を極めて明瞭に示してゐる。ロシア人の分布地圖はオビ河、エニセイ河、レナ河、及びアムール河に沿つて長く進展してゐる事を示してゐる。大抵の圖は河線に沿つて人口集中が全く明瞭にされて來たのである。

アジア大陸の規模が極めて大である爲に氣候も極端な相違を示してゐる。即ち此の極寒から、南及び南東部の極暑に至るまでの氣候が示されてゐる。亦、湿度の高い熱帯森林地帯の空氣から沙漠地帯の乾燥せる空氣に至る迄變動を見せてゐる。赤道の附近では氣候は比較的一様である。我々は現在氣候が變る事によつて興へる人類學的效果については殆んど知る所ないが、それが可成りあるものと認める事は妥當であらう。

北部の極寒は次の事實に基く。即ちツラン及びシベリアの低平原が極めて高い山脈の障壁に依つて暖い南風の影響をさへぎられてゐると云ふ事である。それ故冬はそれに相當するアメリカの地域よりも一層嚴しいのである。アメリカでは一般に山脈が北及び南に走つてゐる爲に大平原は北極の影響を受けると共に、又熱帯或は亞熱帯の氣候の影響を受けてゐる。

人類學的研究の觀點から植物は大なる範圍に涉つて具體的な形態に於て氣候條件に依存するのであるから、氣候と植物地帯と併せて考察する事が最も便宜である。極北地方はツンドラであり、その北の限界は北極界、南の限界は最も暑い月ですら華氏五十度の等温線に區切られてゐるのである。一般的にその北の限界は凍土地帯と云つてよろし

。

實際に大陸の東の涯はツンドラであり、ツンドラ的な氣候條件は少くも大範圍に涉つてチベットの或る部分にまでも形成されてゐる。冬には殆んど降雪がなく、而も下層土は決して溶ける事がない、風は高く吹くので雪は地上に深く積らない。然し乍ら、冬の寒さは待機期間を必要とするので、大抵のツンドラ住民は氣候の厳しさを避ける爲に森林地帯に逃避する。冬が終ると共に急激な生の活氣が蘇つて来る。植物は生長し初め、ツンドラの住民は森を離れ、再び北に進む、此の地方は極端な荒廢、單調に特徴づけられてゐる。樹木は何らなく、唯、灌木のみがあちこちに生ひ繁つてゐる。そして最も特徴的な動物は馴鹿、齧齒類動物等である。ツンドラの南部には松拍科の大森林が見出され、此等の樹々はラリクスシベリカ及びアビエスシベリカ等の樹々によつて特徴づけられて居る。之等のものは暫時落葉樹森林の占むる所となり、今日英國の森林樹木には大部分馴染み深いものとなつてゐるものである。そこには亦、英國の草地や仕切樹と同様な植物の生えた森林牧草地がある、森林並に牧草地は暫時草原に變つてゐる。一般に、この境界はイルテイシ山脈、アルタイ山脈及びヤブロンイ地帯の南にあると考へられよう。尤も草原地帯は興安嶺の東部にまでは延びては居らない。

草原地帯は便宜的に降雨量によつて二つの型に分けられよう。第一のものは豊かに草の生えた草原地帯である。之等のものはシベリアの大草原地帯であつて、北緯五十度—五十五度の間にある。即ちオビ河の遙か東にある譚だ、之と同様な草原地帯がアルタイ山脈及びヤブロンイ山脈の南にあり、亦チベット高原に發する河の上流の谷に、亦ツランの一部に、イランの南西部にある。

貧弱な草原地帯として記述される地域は五ツある。屢々沙漠地帯に迄涉つてゐる。

(一) ツラン地域 カスピールバルカス地域、トルコマン沙漠が含まれる。

(二) タリム盆地のタクラマカン沙漠

ゴビ沙漠

(四) アラビヤ沙漠 此れはアフリカのサハラ沙漠の連続である。此の地帯の住民も亦、北アフリカの住民と同様な特徴を示してゐる。

(五) イラン及びアナトリアの高原。實際總て之等の地域は殆んど十インチを越えない降雨量である。

此の地域の南部には亞熱帶地域があり、それは便宜的に西部地中海地域と分離されてゐるのであるが、冬でも降雨がある。そこで最も典型的な樹はテンミンクワ、オリブ、無花果、柘榴、常緑櫟等である。更に東部地域は夏に降雨があり、通常支那日本地域として知られてゐる。此處で植物や人類の型は地中海に典型的なものとして我々に馴染み深いものとは極めて大なる差異がある、だが然し之等の差違にもかゝらず。此二つのものが亞熱帶的特性を持つてゐる事を記憶するのは重要であるし、亦それ等の差違を研究するに際して環境の一般的近似性が忘れられてはならない。更に南方には大なる沼澤地帯があり、熱帶的牧草地帯がある。この中には南アラビヤ、印度、印度支那、セイロン高地及びマレー群島などが含まれる。南アラビヤはアジアの大草原とよりはアフリカのそれに一層緊密な聯繫を持つものである。

此の沼澤地域の總てではないけれども大部分は極めて高い降雨量があり、其の氣温と同様に牧草地は様々な種類の樹木の存在によつて特徴づけられてゐる。西ヨーロッパに於て牧草地や森林が文化の發生地となつた如く、南東アジアに於て人々は最も良く發展し得る地帯を熱帶大草原に見出したのであつた。此の事は重要性を持つものである。何故ならば、西ヨーロッパ大陸に於ては大部分の種族は明らかに森林牧草地帯にある氣候條件に體質的に適合する様に

なつたからである。アジアの大部分の住民は熱帯大草原の氣候條件と體質的に一層緊密に結び合つた様に思はれるからである。

大草原の南部並びに低地帯には熱帯森林を發生せしむるが如き極端な熱帯氣候型がある。温度は或る沙漠地帯に於る程高くないが極めて高く、激しい降雨量があり高い比濕をもつてゐる。森林樹木の發生及び森林の繁茂は、他の地域に打ち擴がつてゐるものとは極めて異つた條件を作り出してゐるのである。之等の條件が人類に極めて大きな影響を持つたと云ふ事は殆んど疑ひ得ないのである。赤道森林地帯に住む典型的な住民は、アジアによりは寧ろアフリカに屬してゐる。だが、アジア大陸の森林地帯に住む一定住民は、彼等の住んでゐる極めて特別な條件に密接な關係を持つ様に思はれる所の特徴を持つてゐる様である。

第二節 白色人種と褐色人種

體系的人種學者はアジア人種を随分あれこれと分類し學名を附してゐる。之等の差違は採擇基準の差にも一部は基因し、一部はまた學名の違つた使用法にも基因してゐる。或る場合には同一の名辭が違つた事象を意味する爲に用ひられ、亦同様に異つた命名が實は同一の人種名を指してゐる事が見出されるであらう。私が與へんと思ふ命名を附與する前に現在教科書に一般に採用されてゐる分類を示して置くことが便利であらう。

ドニケ(Denis) (G. Deniker) は十一の人種のある事を主張し、この中、ドラビダ族、アツシロイド族、インドアフガン族、アイヌ族及蒙古族の五種族をアジア特有の種族としてゐる。この外、他の大陸にも涉つてゐる種族として、ネグリート族、インドネシア族、アラブ族、ウグリア族、トルコ族、及びエスキモー族の六種族を擧げてゐる。其の分

布を彼は次の如く定義してゐる。エスキモー族はアジア大陸の北東部に、アイヌ族は樺太、北海道或は恐らく日本の東北地方に棲息する。ウグリア族はエニセイ族變種によつて代表されてゐる。蒙古族は殆んど全アジアの地域に涉つて見出され、此の南に二つの第二次的種族に分れてゐる。トルコ族は中央アジアの内部に限られてゐる。インドネシア族は印度支那、日本からアジアの諸群島に於る諸島に數多く、之に反しドラビダ族、インドアフガン族はインドに限られる。印度アフガン族は亦、アツシロイド族及びアラビヤ族と相並んでアジア前部に見出される。ネグリート族の代表はマレー半島及びアンダマン諸島に棲息してゐるが、此の人種の要素はやはり印度支那及び恐らくは印度住民の居住せる地域に見出される。この分類は包括的にして便利な分類であるが、我々がそこに用ひられる名辭を研究する場合に困難が見出される事になるであらう。その若干のものは本質的には言語學的なものであらう。トルコ、ウグリア及びドラウイダ等は既に知られた言葉、又は言葉の集團を意味して居るのだが、之等の言葉の使用が體質的人類學に適用される場合には不充的なものである。何となれば體質類型と言語類型とは決して相關して居らないからである。ドニケ自身も言語的な觀點からか、或ひは體質的觀點から彼の分類の困難を認識して居つた様である。彼はアジアの種族を委しく取り扱ふに際して、その分類の大部分を放棄して居た様に思はれる。

ジョイス(S. T. A. Joyce)は次の如く述べる。蒙古族は分れて北蒙古族と南蒙古族の二集團に分けられる。北方族は滿洲族、朝鮮族、モンゴル族、トルコマン族、トルコフィン族及マチャール族であり、南方族は日本族、印度支那族、西藏族、及マレー諸島の住民のあるもの、之である。それらの集團内部の小分類を彼は人種的家族と云ふ言葉で記述してゐるのであるが、更に此の言葉に依つて何を意味するかと云ふ事を正確に定義する所なかつた。だが然し、彼が用ひて居るモンゴリアンと云ふ名辭とドニケのそれとは極めて相違してゐる事が知られるであらう。

ハットン(A. C. Haddon)は上述のドニケ、ジョイスとは異つた分類を試みてゐる。彼は次の如き分類を認めてゐる。

先づ第一はモンゴロイド人種である。此の種族が短頭型であると述べる以上、ハットンは一歩を進めて記述してゐないけれども、彼の第二の集團たるアルプス人種とは區別してゐる。アルプス人種についてはアジアに於て短、長、兩方の身長を持つてゐるものと見てゐる。

第三に彼は二つの主要なる短頭族たるトルコ人種とウグリア人種を擧げてゐる。之は疑ふべくもなく多少とも共通の起源を持つものであつた、と彼は説いてゐる。通常之等の種族は原北方人種とアルプス人種とが早期に混淆したものだと言張されてゐる。時として其れ等は蒙古族とも混淆したと云ふ。更に他方ではモンゴロイド人種とアルプス人種との中間的種族の後裔であるかも知れないと思はれる。惜、ハットンによつて、體質的に異つた四ツの人種が擧げられてゐるのであるが之等は總て、共通なる短頭型の特徴を有してゐる。トルコ人種とウグリア人種は其の根元をアルタイ山脈及びエニセ河上流に發見することが出来るやうであり、恐らく、古代スリメリア人の祖先であつたかも知れない。ハットンの次の種族はブルーネットの長頭型として記述されてゐる。ハットンによればこの種族はアジアの南東部に散在してゐる。

例へば南支那の蠻子族、インドネシア族恐らくは亦ドラウイダ族の本質的要素をなしてゐるなどである。それはスミス(Eliat Smith)の褐色族と符合してゐるやうに見えるけれども、何か之よりより廣範な分布を爲してゐるやうに思はれる。

ハットンには原マレー人をモンゴロイドの短頭型として定義する事については極めて慎重な態度を持してゐたやうで

ある。しかもその定義は大なる重要性を持つてゐる。この點については大低の斯學の權威者の見解と一致してゐたのであつて、マレー諸島の住民間にある疑ふべからざるモンゴロイド的要素が決定的に此の名で呼ばれるならば、大變有利となるであらう。然しながら、ヒルドリツカ⁽¹³⁾ (A. Hrdlicka) は其れをインドネシア族と混同してゐるやうである。勿論、其の混同は純粹に用語上のものである。而して私が理解し得る限りに於て同様な用語の差がニアスに關するドウ・ツヴァン⁽¹⁴⁾の流麗な論文の中に現はてゐる。アイヌ人はアルプス族の外住者としてハッドンは考へたのだが、この説は後の著書で修正した様である。

最後に黒色羊毛人種の中の倭少人種の代表者としてネグリート族、アングマン族、マレー半島のセマング族、フリッピンのアエタ族、ニューギニアの矮少族を擧げてゐる。身長の高いものとしてニューギニアからタスマニアに渉るタスマニア人、パプア人、及びメラネシア人の原基族等に著しい。

ハッドンの小著に示された多くの輝しい提案を刻明に批判する事は困難である。最近彼は別の分類を提案した。此の新しい分類は始めジュフリダ・ルジェリ⁽¹⁵⁾ (V. Giffrida-Ruggieri) に依つて述べられたのであるが、ハッドンは彼の著書たる人類學⁽¹⁶⁾ (The Races of Man, Camb. 1924) の最後の版で若干の修正を加へてそれを採用したのであつた。その分類は簡明にして直接的であり、然もラテン語を使用する事によつて同じ名辭に觸れる異つた意味から來る混同を避けんとしてゐる。ネグリート族はさて置き、アジアの住民はリュコデルムス (Leucoderms) 及びサントデルムス (Xanthoderms) 即ち白色系と黄色系に分割される。リュコデルムスは長中頭系と短頭系の二つの集團に分割される。長中頭系は更に分れて三つの亜類に分れる。インドアフガヌス、イランメデイテラヌス及びインドイラムスが即ち之である。インドアフガヌスは長頭にして狹鼻、中から高までの身長である。アフガン族、バルチー族、

カシミリ族、ダルヂ族、ラジプト族、バンジャビ族、シク族等がこの中に含まれる。之等のものが特徴化された地域はヒンヅークシとスレーマン山脈との間であつたと云ふ事が云はれて居り、そこから彼等は北印度及び恐らくは東方に擴がつたものであらう。この體型はリズレーのインドアリアン型に密接に一致してゐる様に思はれる。イラノメデイテラヌスはハツドンに依れば何か不明瞭な集團として記述されてゐる。中頭型にして狭中鼻形、身長は中から長に渉るものを示してゐる。部分的にはリプレーのイラニヤ型⁽⁵⁾と一致してゐる様に見える。この中にはベルシヤ人及近東中東の様々な種族が含まれてゐる。頭形指數は約七六、鼻形指數は約六一—六三であり、身長一・六三三米（六四インチ四分ノ一）であつて、その他の特徴は地中海型に一致してゐるので地中海型と呼ばれた方がいゝかも知れない。之等のものは主として西方に漂泊してゐる集團の代表種族として認められかも知れない。

インドイラヌスの中にはバルチー族、デワール族、ブラユイ族、等が含まれる。中頭型と短頭型狭中鼻形の限界の頭形を呈してゐる。身長は中から長に渉る。之等のものは中間型又は混淆型として認められるであらう。

白色短頭系はジョルジアヌス、及びアルメノ^{II}パミリエンシスの二集團に分れる。前者の中にはグルツスイニ族、スワニ族、ミングレリ族、及びイメリ族が含まれる。この型のもものは短頭の氣味があり、強度の狭鼻型であり身長は中である。アルメノパミリアンシスはジュフリダ・ルジェリとは少しく異つた見解を持つハツドンに依つて二つの分類がなされてゐる。第一のものはパミリ族又はイラニア族であつて強度に短頭狭鼻型、身長は中から長に至る様相を示してゐる。第二のものはアルメニア族であつて高頭、垂直後頭、極端に際だつた鼻、高身長等の特徴を持つてゐる。

アジアのサントデルムスは三つの主要なものに分割される。即ち中頭系、第一短頭系、第二短頭型が之である。中頭系の中にはプロトモルフス、パレアクテイクス、チベタヌス、シニクスが含まれる。プロトモルフスの中には所謂支

那及アツサムの原住種族が含まれる。之等のものはサントデルムスによりはリュコデルムスに一層緊密な親縁關係を持つものであらうとハッドンは附け加へてゐる。我々が其れ等のものをジュフリダ・ルジェリの圖式にてはめるならば、イラノメデイタラスの領域を廣めるか或ひは一つの分離した集團を作るかしなければならぬ。パレアクテイクスは唯部分的に此の集團に屬するに過ぎない。パレアクテイクスの或るものは圓頭型であるから體質的な分類よりは文化的な分類と云へる。然し乍ら此の集團に屬してゐない他の種族の中に發生したのは平頭型によつて區別されると言はれてゐる。チベタヌスの極く僅かな部分のものが中頭型の中に含まれてゐる。その典型的な種族はレプチャ族及東方チベット族の如き種族である。第四の亞類はシニクスであり支那人がこの中に含まれる。

第一の短頭系集團の中にはアルタイクス及ネアクテイクスが含れてゐる。アルタイクスの中には多くのアルタイ族が含まれ、ネアテイクスの中にはチュクチ族が含まれる。

第二の短頭型集團は四つの亞類を持つてゐる。ビルマ及アツサムに見られるメリデイオナリス、パレアクテイクス及チベタヌスの分岐たるブラキモルフス、滿洲族、南ツングース族、ブリアート族及その他のトウルグートやタランチを含む蒙古族、セントラリス、及アフガニスタンのハザラが即ち、之である。

此の様な圖式の下にハッドンの加へた註譯は興味あるものである。

「以上の配列は主として頭形指數、鼻形指數及び身長に基いて居り、余はジュフリダ・ルジェリの配列を少しく修正を加へて借用した。彼がアジアの種族的人類學的混亂狀態を解剖學的資料に基いて統一したことは誠に興味ある所であるけれども、まだ分類し得ざるものが若干ある。他の特徴に關する考察は疑ふべくもなく、彼の圖式の修正に導くであらう。」

此の批判は圖式の最弱點に注意を拂つてゐるのである。著者は又、生物測定學派に何等の關心を寄せて居ないのである。即ち指數の信頼度の表示に關してさうである。

比較的微細な分類は特に深刻な障害に逢着する所のものである。疑ひもなく地方的な分類たるものゝ如く思はれるものを認識する事は可能であるけれども、更に人類をより細く分類して行くと、互に緊密な繋りを持つてゐる様に見えるので、其れ等のもが同一系統に屬するものであるか、それとも他の地方的環境的原因に基くのであるかの問題に屢々疑惑が生じて來るのである。微細な細分類は相互に混淆し合つた集團を掩蔽し、しかも屢々異つた種族の混淆を考察する事に失敗してゐる。例へば我々がジユフリダ・ルジエリの主張した提案を論理的に跡付けて行く場合、半白半黃の集團に逢着せねばならぬ事となる。而も彼に依れば人種は何れかの集團に屬せねばならぬと主張してゐるのである。

我々が純粹に生物學的觀點からアジアの諸種族の分類に接近し、更に我々が考察して來た大多數の著者達が他の規準を考察に持ち込むものであることを併せて考へるならば、我々は少くも假に三つの主要なる人種を採擇して宜しいであらう。尤もそのどれもが常に純粹なものとする事が困難な程、相互に混淆し合つてゐるものではあるが、人種は混淆し而して混淆の結果は極めて緊密なるものがあつた爲に一つの合成物となつた。而して高度な散布度の代りに低度な散布度が純粹な人種の中に見出される。だが然し此の事實にもかゝらず、比較的大なる分類を固守し、其れから岐れた分類を無視する事は研究目的上より明確なものゝ如く思はれる。三つの主要なる人種は次の如くである。第一のものはヨーロッパ民族に近い大民族集團であつて、之はブルームンバツハがカウカサス族と呼んで以來、屢々言はれて來た型であり、極めて屢々白色人として知られてゐるものである。第二集團は黃色人として知られてゐるものであつて、蒙古族、モンゴロイド族、等が之である。此の名前に就て私は後説する所があるであらう。

第三集團はネグリート族である。アジアの種族の吟味に於て赤色人の人間集團を第四のものとして附加へる事は安當である。何故ならば疑ひもなくアジアには北アメリカの原住民に密接な親縁關係を持てる種族が存在してゐるからである。だが我々はそれ等を黄色人の特殊化された分岐種族として考察する事にしよう。

偕、ヨーロッパの諸種族に近い人種は次の如き特徴を持つ事によつてその他の種族と區別される。明るい、即ち褐色の毛髪はこの種族に至る有用な導きである。だが大抵のアジア人種の毛髪は黒色であり、眼は褐色である。頭形指數は時には有用な導きとなるものであるけれども常に價値を持つものではない。我々が論じてゐる人種は極端な變動の跡を示す指數を持つてゐるものである。他方に於て、現在、我々が知る限り黄色人の代表者の中には長頭型が表れてゐない様であり、集團の平均は常に中頭又は短頭の傾向があるやうである。それ故我々が特殊の集團がその人種に屬してゐるか否かについて判定を與へ得ない様な場合に、頭形指數は時として絶對的な導きとなるものではないけれども、一つの有用な導きとなるものであらう。

毛髪の組織は、常に好適な規準をなすものではないけれども、屢々一集團と他集團とを區別するのに役立つであらう。ヨーロッパ人種に近い人種は常にではないが、屢々波打つた或ひは縮れた毛髪を持つてゐる。而して時として直狀毛と羊狀毛のネグリートとの混淆は波狀毛髮型を惹き起すであらうけれども、通常はヨーロッパ及びアジアに於ける其の同類者の波狀型とは全く異つてゐるものである。

皮膚の色は一見好適な導きとなるものゝやうに思はれるけれども、白人に近くして而も黒色の肌色を持つ人種を發見する事がある。黄色と白色との中間の褐色を呈してゐるものもある。然し乍ら第一集團と第二集團との識別點は皮膚に黄色の色合があるが、どこかにある。身長、鼻形指數及び他の測定値は、地方に分散せる種族の識別には屢々力と

なつても、此の場合は殆んど役に立たないものと考へられる。だから兩種の集團を識別する場合には我々は複合的な特徴を取り上げて行かねばならない。

私がヨーロッパの住民に近い何か扱ひ難い人種として記述した種族は、若干の集團に分類されるであらう。我々は既にリブレが北方型、アルプス型、地中海型の三つに分類せる事を見て來た。最近の觀察者はリブレの立場、殊にアルプス型と地中海型人種に或る程度まで賛同してゐる様である。之等三つの人種はリブレ自身が示した様にアジアに現れてゐるものである。それ故、詳細に涉つて論議せねばならないであらう。北方型は身長高く、長頭にして明白の毛髪を持てる種族である。之等のものはリブレの説ける主要な特徴である。通常男性の間には眉の邊りにしつかり縁どつた筋肉組織が見られ、骨格は男性・女性共に大である。頭蓋容量は大きく、頭蓋骨は充分發達して居り、横顔はカーブしてゐる。鼻は通常相對的にも絶對的にも比較的狭く長い。顎は屢々重く、殊に初期の標本を見るとさうである。今日前北方型及原北方型について語る事が通常となつた。之等は、大部分現在の北方人種の分布の證據に基いた想像である。だが我々は現在原エチプト人の解剖學を記述し得ると同様には原北方型の解剖學を記述し得ないのである。

北方型の特徴を持つた現在の地域はスカンデナヴィヤ半島である。その起源地は後に説かれる所である。彼等は西ヨーロッパに見出されるが、バルチック地域を距るにつれてその數を減じてゐる。一時彼等ははるか南部に浸透して居つた様に思はれる。而して彼等がスーメリア人口の指導者となつてゐたと提案してゐる者もある。だが然し、現在我々は此の點で明確な證據を持つものではない。オックスフォード解剖學教室の蒐集にあるテベドの古代人の頭蓋骨の間には、直ちに北方型と考へられねばならない標本がある。若し果して然りとすれば、彼等は恐らくその他の異質要

素と共にアジアからエチプトに浸入したものと思はれ、北方人が其の地方の人口にどれ位の要素を形成したかについては疑しいけれども、之等の種族の存在を證明してゐるものと思はれる。此の長頭型を古代地中海沿岸に見出すことは特別の興味をそゝるものがある。と言ふのは、或る著者例へばジュフリグ・ルジェリ(Griffide-Ruggeri)やフルエール(H. J. Flegel)等は地中海沿岸人と北方人との間に何等窳局の差違はないものと信じてゐたからである。

所で此の二つの種族は頭形指數を除いて、殆んど共通點を持つてゐないのである。北方人は北海地域の北部に棲息してゐたのであり、之等のものが時に地中海の方に進出したと云ふことは珍しい。例へば今日英國では元來地中海住民を之等の島嶼から追放つた北方人が今や地中海人によつて没却されつゝあると信ずる觀察者がある。之は兩種族が同一幹族から出た二分岐であると云ふことを附加的論議として表明してゐるのである。全體としては可能であるけれども、之はありさうもない様に考へられる。

北方人がアジアに存在すると云ふことは、既に述べた如く可能であるけれども、現在では他の種族との混淆を除いて、存在すると云ふ適切な事例が存しない様に思はれる。又、スーメリア人の間に存在すると提案する著者達も其の論議を裏付けるやうな頭蓋骨による證明を何等有してゐないやうである。然し乍ら、原始北方人に恐らくは近いやうな型の大人口が存在してゐる。

我々が地中海の西部高原地帯から南東部に進むにつれて、大部分の住民が同一種族に屬してゐるものなることを知る。此の地域では殆んどの者が白色の皮膚を呈してゐるものはなく、褐色である。彼等は弱々しい體軀の持主であり、寧ろ小軀、長頭である。毛髪は直毛或は縮毛であり、眼は褐色である。顔や身體には殆んど毛が存しない。横顔を見ると最も顯著な特色は後頭部頭蓋が突起してゐることである。前頭は滑らかであり、寧ろ隆起してゐる。眉峰の

發達が貧弱であるために、「ミケランジェロの棒」と云ふ名の下に有名になつた強力な表情を缺いてゐる。此のやうな眉峰のないことは疑ひもなく此の種族特有の筋肉の缺除することによるのである。更に頭蓋骨を見る場合に、顎が輕やかに作られて居り、觀骨は細く、筋肉が殆んど缺除してゐる事が知られる。

更に東に進むにつれて、我々は皮膚の色が次第に暗褐色になつてゐるのを見出す。殆んど黒色の皮膚を持つ南部印度やセイロン島の住民は以上の種族と餘り違はない頭蓋骨を持つてゐるやうに思はれる。又これは大部分のエジプト住民の一般的敘述に於ても貢獻する所のものであらう。エジプト人の特徴はエリオット・スミスによつて古代エジプト人のと云ふ書物の中で輝しくも敘述されてゐる。即ち地中海の東沿岸の多くの住民、及メソポタミヤの大部分の人口等が、スミスに依つて美しく描畫された。印度及び其の他の熱帯地域に住む種族を持つ特徴は鼻形指數が他のものよりも極めて大きいことである。之は第一章で述べた如く殆んど環境的條件に基くのである。更に東方に進めば、此の褐色種族の最後の進展の跡がネジオト族として現れてゐる（インドネシア人）。

上記せる全種族は夫々の種族の間の差違は大きいけれども、大部分は次の三つの特性を夫々有してゐる。第一は皮膚の色、第二に身長、第三に鼻形指數が之である。

之等詳説して來た假説が正しいとするならば、褐色族として考察して來た人種も分れて數個のものに概括されることになる。先づ西方では褐色族の中心地として、地中海族がある。次には印度である。印度に居るものについては決定的な名前が與へられてゐない。ドラビダ族は之と最も深い親縁關係を持つてゐるであらう。第三には東亞諸地域である。之はネジオト族と呼ばれる。

以上の外に更にヨーロッパ族からの分岐種族が残存する。之はリブレによつて命名されたアルプス型である。最近

の論文を見ると、ヨーロッパに於てさへ、アルプス型は分れてアルプス型とデイナル型との二つに分ける方がよい様である。デイナル型とアルプス型との相違は特に前者の身長が後者よりすば抜けて大きいと云ふ點に求められる。此のアルプス型とデイナル型の兩型がアジアに居るとする事はありそうなると思はれる。此の種族の第三の分岐はアルメノイド型として知られてゐるが、之は西部アジアに於ける最も重要な要素の一つである。此の分岐種族は又西部アジア人種 (Asiatische Rasse) 及びヒッタイト (Hittite) 族と呼ばれてゐるが、多くの學者は之をアルプス型からの分岐種族として別に區別して居らなす。

總て此の集團に屬する種族は圓頭型の地中海種族及北方種族と異つてゐる。之と共に頭蓋骨の一般的構造も非常に異つてゐる。顎骨は廣く屢々充分に發達してゐる。此れは廣い頭蓋基底と關係あるものであらう。鼻は時として極めて充分に發達して居り、眼立つて大きい頬は廣い傾向があり滑らかに平面を呈してゐる。眉峰も大きからずして極め良く發達してゐる。毛髮組織は第一集團のものより一層豊富であり、顔面及屢々身體に毛が豊かに生えてゐる。

エリオット・スミス (Elliott Smith) は之等の種族を古代埃及人として其の著書中に記述してゐる。スミスが先づ注目してゐるのは顔面であつて、之等の種族は元來長頭型であるけれ共、等しく大きい頭蓋容量を持つてゐる。或る場合長頭型のもとの共にすら發見されると云ふ事は別に驚くには當らない。何故なら、殊に一定の人種混淆が行はれた場合に於て、集團の正規的變動は常に大きいからである。一般に之等の種族は顯著に丸型の頭である。多くの場合、頭は際立つて高く、後頭部は平たい。之は地中海種族と著しい對照を爲してゐる。之等の差違が頭蓋容量に於ける差違と相關々係を持つてゐる事は認め得るであらう。地中海人は小さな頭蓋を持つてゐるのが傾向として認められるが、一方アルプス人は大きな頭蓋を持つ傾向がある。この規模の増加を調整せんが爲に丸型の頭を持つ傾向がある。

だが然し、頭蓋骨の基底が長い場合には、頭のサイズの増加ですら丸頭型を確保するに役立たないであらう。

頭蓋指数が影響されるばかりでなく、また頭の高さもその中に入れて考へて見なければならぬ。前額部の形態も亦異つてゐる。頭の頂が高く、ドーム型のやうになつてゐる場合には前額が直立型をなしてゐるのであるが、頂が平たい場合にはスロープを爲してゐる。此の様な相違は疑ひもなく、二つの種族に於ける個々の頭蓋のもつ構造的必然性に基いてゐるものと思はれる。

アルプス人種の間には、顎骨の形態は通常極めて際立つた特徴をなしてゐる。地中海族に於て顎骨は通常小さい。上走岐骨は相對的にも絶對的にも廣く、S字型の切目は浅い。

此のやうな型の顎骨は屢々長頭型と關係を持つて居り、一般の形態に於て多くの原始長頭種族の顎骨と似てゐる。他方アルプス族の顎骨は長く狭い上走岐骨を持つてゐる。S字型の切目は深く、嘴狀過程は長い。エリオット・スミスは之等二種族の差違を論ずるに際して、上述の諸特徴に注意を引いて居り、之等が人種的特徴に屬するものであつて、決して環境的特徴に屬するものではない事を強調してゐる。此の論議自體、疑ひもなく重要な價値を持つてゐるけれども、この點についてトムソン (Thomson) は環境及び特性は後に人種的性格に品化される所の特徴形成に當つて重大な役割を演ずるものである、と主張してゐる。

眼窩の形態はエリオット・スミスが既に指摘せる如く之等二つの小集團を區別するもう一つの便利な方法である。アルパイン型に於てはそれは傾斜してゐるが、地中海型では眞直ぐである。然し乍ら此の眼窩形態が一部は顎骨形態と、一部は鼻の構造と相關々係があると云ふ事は妥當ではない。環境と相關的なものとして示された鼻形指數はさておき、通常アルプス型はヨリ大きな、而も一屬隆起せる鼻を持つてゐる。

之等の種族を區別するに採用される其の他の特徴が存するけれども、上述のものは其の中でも最も重要なものである。廣頭型種族は恐らくアルプス型に屬するものであらう。エリオット・スミスは之を親縁族としてゐるが、之はリプレーの云ふアルプス族と共に疑ひもなく其れに近い他の異種族も包含せしめてゐるのである。

ヨーロッパでは之等のものは眞のアルプス族を包含してゐる。即ちリプレーが廣頭、中身長、褐色眼として記述したものである。之等の種族は廣くアジア洲に分布してゐる。ヨーロッパの或る部分、殊にアドリヤ海の東岸地帯には一つの型があるのだが、之に就いて、或る著者、特にドニケは、アルプス型の明瞭な變異たるものと信じてゐる。之はデイナル型と呼ばれてゐるが、その主要な特徴として通常のアルプス型よりは身長が高いと云ふ事が云はれてゐる。身長が不確かな規準だと考へるリプレーは、此の型のものを細分類する必要がないものと考へてゐる。我々が現在持つてゐる知識に於ては、此の型のものがアジアに存在すると云ふ直接的證據がある様にも思はれない。尤も、分折を更に進めて行けば、此の型のものが存在すると云ふ可能性はある。

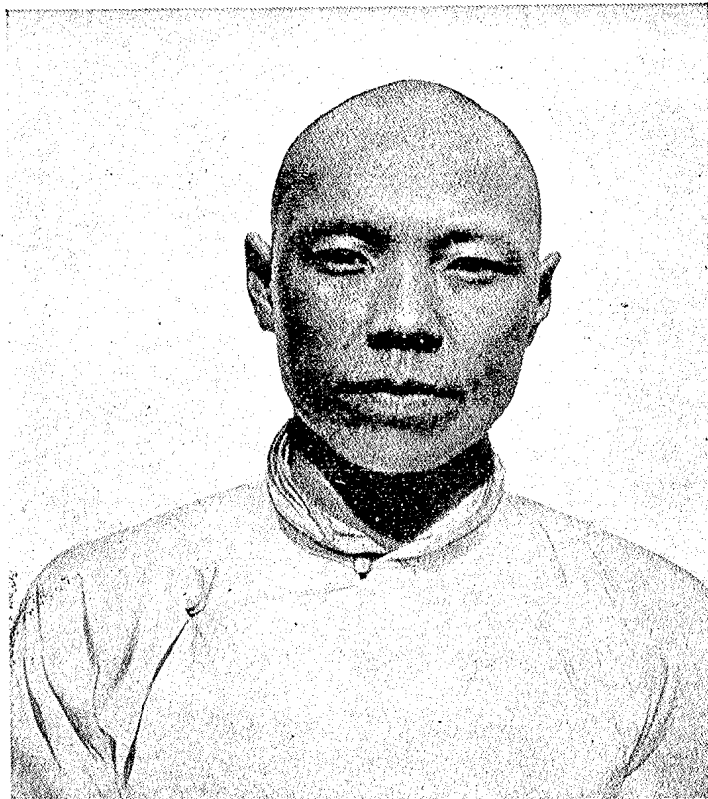
更に一層重要な型はアルメノイドと呼ばれてゐるものである。純粹アルメノイドに於ては身長は中であり、毛髮は殆んど黒く、眼の色は通常褐色である。鼻は極めて大きく頭は後部が平たくなつて居り通常極めて高い。眉峰は屢々大きく發達して居る。此の特徴はダックワース⁽²⁾がシリアからとれた頭蓋骨を吟味してゐる際に發見されたものであり、私もサイブラのラピトスで發掘した青銅器時代の頭蓋骨に於て極めて屢々觀察した所のものである。此の型のものは東ヨーロッパに發見され、極めて重要な要素を成してゐる。而して恐らく西部アジア住民の原住種族と看做されるよう。其れは古代キンに起り、今日ではメソポタミヤに發見されるが、更にインドにも延びてゐる。其れは又中央アジアの住民の一部を形成してゐるが、眞のアルプス族が住居してゐる北部アジアに存在するとは考へられない。

絶對的な正確さを以てアルプス人種から出た之等異つた分岐種族、或ひは一、二の他の部類を認識する事は屢々可能であるけれども、その人種學上に於ける正確な價值については極めて疑はしい様に思はれる。地方的變異が特殊な環境的條件によるものであるか、或ひは何か孤立的な原因が働いて長時間の間にそれ等を分化したのであるかどうかについて確定するには現在充分な資料が存在しない。

第三節 黄色人種

我々がアジアで逢着する大種族集團の第二のものは所謂、黄色人種 "Yellow Man" と呼ばれるものである。之等のものは通常、蒙古族或はモンゴロイド族、時には非精密な用語でモンゴールと呼ばれてゐるものである。此の命名は極めて不十分なものであり、それは實際、成吉思汗とか忽必烈汗とかの或首長の軍略的天才が優れてゐた爲に、大なる範圍に渉る人種集團を轉々し、其の中にはカルマツク族、ブリアート族等を包含してゐるのである。

支那にマルコポロが來た時分に忽必烈が支那を統治した事實の爲に、其の名は密接に支那と聯關を持つてゐる。それ故忽必烈が支配してゐた支那人が最も典型的な蒙古族であるとして屢々擧げられる事となつた。然し乍ら、蒙古語を話す或る種族、例へばブリアート族、モンゴール族、カルマツク族等は東部アジアの大種族に屬してゐる一方、他のものは最も密接にヨーロッパの種族に親縁關係を持つてゐるやうである。之等の者が漂泊的種族である爲に、人種雜交が行はれたのであり、リプレーが極めて明確に示した如く、其の種族名及び言語が内體的諸特徴と撞着したのである。それ故我々はアジア型種族を記述するに際しては、動態的種族名を用ひてゐるのであり、歴史的にも言語的にもモンゴールと云ふ誇らしげな名前を呼び得る數多くの種族が體質的にはモンゴロイド族であるけれども、他方では彼



蒙 古 族
(漢族の血を含むものであらう)

等の中多くのものは幾分此の血を引いてゐると云ふ事實を漠然たらしめてゐるのである。然し乍ら其の命名は決定的な意味を受け入れて居り、假令その主張を不明確なものとする傾向があつても其の様な呼名を全く避けることは難しいやうに思はれる。モンゴール族の現實に持つ人種的特性が論ぜられる時に此の全問題はヨリ單純となるであらう。

此の第二の大アジア人種は上述の諸人種との對比に於てまさしくアジア的と云はれてゐる。此のものは多くの點で最も典型的なアジア型である。而も之はヨーロッパにも侵透してゐる。

最近ブタペストの蒐集の中に含れる數多くの頭蓋骨を吟味した時に、私は隨分數多くの頭蓋骨が通常ヨーロッパ型よりは寧ろアジア型と關聯を持つ特徴を有して居り、之等のものが西ヨーロッパから來れるものと強度な對照を成してゐると云ふ事實に驚いたのである。

一般的規準として黄色人種に屬する人種は短頭型であり、屢々際立つてそうなのである。

ライヘルは綿密な研究をやつてゐるが、彼が吟味せるアジア的短頭種族の頭蓋形態、及彼が比較規準として採用せるアルプス型に屬するディゼンテイス頭蓋骨に於ける際立つた差違を示す事には失敗した。だが然し、彼のアジア的頭蓋骨の中のあるものは、黄色人種よりも一層ヨーロッパ人種に近いもののである。他方、彼の支那の頭蓋骨は確かに黄色人種中適切な代表型である。二つの大種族間の頭蓋形態に於る相似は、疑ひもなく頭蓋形態の基礎の上にニグロと地中海人が分類されたと殆んど同様な方法で、多くの觀察者が此の二つのものを分類し勝ちであつた理由である。然し乍ら顔の型を比較基準として採擇する場合には立ち所に兩者の差違は判然として來る。大低黄色人中すべてではないけれども觀骨の幅は平均的なヨーロッパ人程大きくはない。尤も、アジアの極北に住むものは絶對的にも大きな顔幅を持つてゐる。顔幅は實際よりも絶對的にも相對的にも一層はつきりしてゐる。觀骨は深さも強さも兩方共充

分に發達してゐる。之は多くの支那人の顔の持つ顯著なる特徴たる著しい平盤さに依るものである。顴骨は極めて大きな幅と強さを持つほど、充分發達してゐる。凸な顔面を表してゐる代りに寧ろ偏平な容貌を呈してゐる。

顴骨の一般的構造も亦異つてゐるやうで殊に地中海型とは異つてゐる。地中海型では大抵の力は顚筋の筋肉に依存してゐるのであつて、其の原は顚筋の筋膜と小窩とから、即ち頭の拱狀部から發してゐるのである。それは内面と吻狀過程とに固着してゐる。此の様な状態は顴骨の上下運動に大きな力を與へる。それは頭蓋穹隆の側をともしれば塞する傾向を持つてゐる。黄色人及白色人のある者に於ては、咀嚼の主要な筋肉は咬筋肉である。此の筋肉は其の源を顴骨の頬部過程から發して居り、分岐下顴骨の外面のアンクル部分及ヨリ低い部分となつて着生してゐる。

之等二つの集團の筋肉組織が大なる範圍に涉つて補完的である事が判るのであるが、ある種族に於ては、一は他より良く發達してゐると云ふ事が通例見出される。下顴骨の癒着點は同一人種に於て亦充分發達して居り、顔の下部の筋肉の發達は殆んどあらゆる支那人に容易に觀取される所である。

顚筋の筋肉による緊張は多小共直接に上向きを呈してゐる。咬筋によるものは顔全體に涉つてゐる。黄色人は筋肉型の人間として記述されるであらう。ある特殊形態を持つ黄色人（エスキモー人）の中には顚筋と咬筋とが等しく高度に結合してゐる。

鼻の形態は黄色人が等しく特徴とする所である。ヨーロッパ人種にあつて鼻骨は前額骨との結合によつて壓へ付けられた形をなしてゐるが、アルメノイド族の場合では直接に前額骨に續いてゐる。どちらの場合に於ても鼻骨は相互に比較的銳角をなしてゐる。通常、典型的黄色人に於ては鼻骨の窪みが鼻額縫合點以下にあることが見える。鼻骨も亦開いたアングルを爲して居り、鼻の峯の頂は平たくなつてゐる。

支那の各地に見出される相當多數の支那人の骨を吟味して見ると此の種族に關聯を持つ様に思はれる所の別の特徴を表してゐる。蹠點の骨の一つたる距骨の特殊なる形態がそれである。だがその相異はこゝで論ずるには餘りにも技術的なものである。然し乍らその差違は、唯骨のみの證據に基いて考へるならば、黄色人には決定的な人種的地位を與へるに充分なものである様に思はれる。だが然し、次の事は記憶されねばならない。諸々の特徴の中のあるものは窳局的には環境的諸條件と相關々係を持つ人間形態の變異たること、之である。

我々が外面の特徴に眼を留める場合には、黄色人が多くの點で先に述べた人種と異つてゐることが判る。先づ第一に毛髪は形に於ては實際に直毛で黒色である。身體には殆んど毛がない。鬚髪はたまさか、まばらにあるだけで、殆んど無いと云つた方が宜しい。勿論黒い毛髪は黄色人に限られてゐる譯ではない。直毛の人種は他の者にも見出される。然し乍らアジアに縮れた毛髪の者が存在することは黄色人とは異つた系統に屬する血が混入してゐることを示してゐる。毛髪は非常に品質粗剛のものとも云へぬし、しなやかでもない。

皮膚色には可成り相違がある。實際には常に黄色い影が現れてゐる。最も明るいものですら、通常極めて青白い蕃紅花色を呈してゐる。

各々複合せる色の者は各種黄色い影のものから暗褐色の者に至るまで變化があり、時としては極めて暗色を呈してゐるので黄色の色とは殆んど見えないものすら存する。熱帯種族の或る者の中には褐色が殆んど綠色の色合を含んでゐる。太陽光線に曝されてゐる者と曝されてゐない者との間には通常大なる對照を爲してゐる。曝されてゐない種族は黄色の影が一層判然として居り、炎天に曝されて勞働する苦力カワカは上流階級の者よりはヨリ一層暗色を呈してゐる。皮膚の色は北部よりは南部の住民の方が暗色を呈してゐる。黄色人は南部印度やセイロン島の住民ほど暗色ではない。

が、最も明色なヨーロッパ人種明るい肌色も持つてゐない。

眼は通常褐色であつて、暗褐色と淡褐色との間の種々の程度がある、眼の白みには通常色がついてゐるが、ニグロの場合には殆んど之がない。

眼の形態は極めて興味ある二つの特徴を現してゐる。第一の特徴は斜眼であること、之は決して等しく認められると云ふものではないけれども、極東に於る人間の顔を表現するに際して分類さるべき充分に顯著なる特徴である。

第二の眼の特徴は所謂、蒙古の皺である。此の特徴は眼の内角を被ふ皮膚の折目によるものである。或る場合には、眼の全内部の隅を被ひ、低い。眼瞼以下に數ミリメートルの皮膚を接ぎ合せてゐる大きな半月形の折目がある。他の場合には、其の折目が丁度眼の内角を被ふ細い圍ひに迄引下つてゐることがある。

此の折目はヨーロッパの子供に現はれて居り、時には大人ですら現れてゐるものもあるが、黄色人に現れてゐる繁度が高いと云ふことは矢張り人種的特徴として認める方が正しいであらう。以前には鼻形指數が黄色人種の適切な規準と考へられてゐたが、後の調査は之が必ずしも適切なるものではないことを示してゐる。

黄色人の分類は我々が前章で考察した人種の分類程明確に定義されてゐるのではない。頭形指數は我々には充分な分類基礎として考へられない。多くのアジア住民の中には極めて高い頭形指數を持つた者がゐるが、實際には其の者はアルプス型に屬してゐるのであつて黄色人に屬してゐるのではない。一般的規準として、黄色人の頭形指數を中心とする微細な高低値が求められるのであるが、而も殆んど前者は、80に近い數値を示してゐるのであつて、此のことから黄色人が殆んど分化し居らざることを我々は知ることが出来る。

然し乍ら極めて大雑把に云ふならば支那人を其の典型的例とする人種に分割されるものと考へられる。之が又分れ

て種々の分岐種族を生ずるが此所ではそれを詳説する必要はない。所で今我々の研究目的上重要なものは、シエズツプ探險隊に依つて強く主張された説であつて、それに依れば、シベリアの或る北部種族は其の根源に於て決定的にアメリカ人であり、初めアジアからアメリカに横断した種族の反流を表してゐると云ふのである。

之等の住民達はヘツドンがパレアンと云ふ便利な名前を興へた南部諸種族の例と異つてゐるのである。其の最も顯著なる特徴は顔幅が極めて廣いと云ふことである。之はアルプス型のあるものに現れてゐるけれども、パレアジア人に於ては、パレアンよりも一層大きなもののやうに思はれる。

之等北部住民の眞の特性は顔幅によつてよりは寧ろ顎幅の測定によつて興へられる。そこで此の住民集團を最も明確に識別するに役立つ特性は通常の觀察に於ては殆んど示されることなく、個々の現實の住民とか、寫真とかに於て極めて明確に現れてゐるのである。

第二の特徴は之等北部住民の身長が極めて低いことである。之は恐らく之等の住民及び其の祖先達が長期間に涉り、困難な氣候條件の下に生活して來たことに關係を持つてゐるものと考へられる。通常鼻形指數は低く、若し前述の理論が果して眞なりとせば、之も、環境に歸せしめうるものと考へられる。而してそれは彼等を極北的條件に應じて特殊化された黄色人の一類型として分類する事に役立つものと考へる事が出来る。

皮膚、毛髮、眼等の色及び毛髮、眼の形態はパレアン族と殆んど異つてゐるやうには思はれない。

支那に居住せる廣大な人口には随分數多くの變種があると考へられるが、二つの類型に之を分けることは妥當であらう。ハン型とサン型とが之であつて、之は北支那、南支那の二地域を大體占めてゐる。私は唯、黄色人の眞の代表者であると考へられ得る支那帝國の住民のみ含めてゐるのである。

北支那人、即ち「ヘン型」は其の最も顯著なる特徴として、身長が高いと云ふことが人種の特徴である。北支那人は南支那人に比べて頭が輕微乍ら長いが現在之がどれだけ正確なものであるかについては不定である。顔幅も寧ろ南支那人よりは廣いようである。

南支那人、即ちサン型は北支那人よりは背が低い。色はヨリ暗色を呈して居り、鼻形指數は高い。どちらかと云へば短頭型である。南支那人と北支那人を區別する規準は現在の所身長と鼻形指數とに求められる。之等の二つの特徴は環境と相關々係を持つてゐるやうに思はれるが、支那住民を二分割する便利な方法であると考へられる。よく云はれる事であるが、支那全土の住民は殆んど同種のものであつて、たとへ外部から侵入者があつても之等侵入者はこの支那人の環境的條件に吸收されてしまふ。然し乍ら北支那に近くなり、更に進んで北に行くにつれ、所謂ヘン型が多くなり之と反對に南にはサン型が多いのである。古來、支那には疫病、洪水、戰亂等により北から南へ、南から北へ廣範な移動があつたのであつて、南に北支那人型が居り北に南支那人型が居り、其等が雜交してゐる。而も尙之等の二つの型が認められるのは環境的影響を受けてゐることを證左してゐるのである。この二つの特徴の差は人類學者にとつて誠に輕視する事の出來ぬ重要性を持つてゐるものである。

黄色人の大集團の範圍内之に次ぐものとしてはハツドンが原始マレー人と記述した種族であつて、現代に於ては特徴化されたマレー族が之である。之等の住民は南東アジア及諸島に廣く散在してゐるのであつて、通常丸型の頭であり、相對的に云へば廣いけれども近隣ネジオット族に比較すれば狭い鼻を持つてゐる。毛髮や眼は支那人と異つてはぬない。通常、身長は低く、皮膚は時として鈍い暗黄色を呈してゐるけれども、屢々煤けた黄褐色を呈してゐる。頬骨は支那人程際立つてはぬないし、顔も強く發達して居らない。大部分の者は北方人程筋肉の發達はなく、一般に

一層薄弱な組織を持ち、顎は小さく支那人に特徴的な咬筋肉の發達は見受けられない。

アジアに發見される第三の種族は通常ネグリート族Negritoとして知られてゐる。之等の者は現在アジアの外圍地域に居住して居るが、或る時期には、現在居住する所よりはヨリ廣大な南東アジアの部分をも占めてゐたと考へる事は、さう不適當な推論でもないやうである。そこで、之等の地域によつて考へて見れば自ら其處に次の如き三つの地理分布が出て來る譯で、マレー半島、フィリッピン群島、アンダマン群島が即ち之である。スマトラにはネグリート族の血を受けたものが多數存在し、同様に佛領印度支那の住民についてもその様な報告が爲されてゐる。然し乍ら上述せる三分布地域を除いて現在アジアには集團として存するネグリート族は最早存在しない。

ネグリート族は短頭の傾向があり、低身長の特徴を持つてゐる。然しこの二つの特徴は何れも近隣諸種族との分類規準として絶對的價値を有しない。一層原始的種族の中には身長は低いからである。中頭形指數は又多くの黄色人の一つの特徴である。暗色の皮膚を呈してゐるが、一見すると良い指標の如く見えるけれども、殆んど役には立たない。マルチンはマレー半島内部の原始種族は殆んど暗色を呈して居るが、殆んど差違を見分け難いと云つてゐる。之は風土的條件の影響として考へて宜しからう。之等の條件は之等の異つた種族間の複合を惹き起す傾向がある。

然し乍ら、フィリッピンに於てはマレー半島に於るマルチンの經驗とは反對に、皮膚色と身長とは爾餘の住民に比べてネグリート族に顯著なもの如くである。ネグリート族はヨリ黒く、又身長も可成り低い。此の身長低いと云ふ事はネグリート族の特徴の一つであるけれども、それはネグリート族と南東アジアの褐色又は黄色人種のあるものと區別するのに絶對的に役立つのではないと云ふ事が現在の證據から暗示される所である。

鼻形指數Nasality Indexは一つの確かな規準を我々に與へるものではない。此の場合非常に興味あるのは其の範圍である。一

般的規準として考へると、ネグリート族は恰も最も廣い鼻を持つてゐるものゝ如くであるが、ネジオツト族はそれより僅く徴少に狭い鼻を有してゐる。マレー住民となるとそれよりヨリ狭く、以前に主張された假定にして正しいものとするならば、鼻形指數は環境との均衡關係に次第に這入り込んで來てゐる事が指示されてゐるのである。但し其の適應過程は緩慢である。極めて長期間、極熱と高濕に曝されて來た種族は之等の諸條件と密接な關聯を持つ極端な指數を示してゐるのである。

ネグリート族と其の近隣諸族との間にある最も顯著な差違は毛髮の形態である。それは平たく、部分的にはリボンの様であり、頭の上にちんまりとカールしてゐる。彼等は屢々鬚鬚を有してゐる。

此の特徴がネグリート云ふ名前を獲得するに至つた由縁である。ネグロ族も毛髮及び皮膚の相違に従つて東アジアのネグリート族と中央アフリカのネグロ族との二つに分れる。

此の二つの集團が分布してゐると云ふことは困難な問題を提供してゐる。現在ネグリート族は其の特質を持てる地域内に附屬的分布を占めてゐる。以前にはもつと廣大な地域を占めて居り、元々の發生地は現在の地域の中央部か、或はアジアの本土に占めて居つたものと考へられる。ヴェルノーによつて彼等の痕跡があると報告されてゐるけれども然し今日、本土には集團として存在して居ない。ボルネオ島には何等の痕跡が発見せられなかつたけれども、之はさして重要な問題ではない。ジャバ島は我々に何等證左となるやうなものを提供しないけれども、更に此の島から何等かの知見の得らるべき事は可能である。スマトラにネグリート族の痕跡があるかも知れぬと云ふことは不可能な推論ではないやうに思はれる。然し乍らマレー半島の西部及びベンガル灣内の西部島嶼には何等の痕跡をも認め難いやうである。現在、我々はこの方面に於る種族を明確に一線を以つて色分けする事は可能でなく、通例オセアニア・

ネグロと云ふ名で呼んでゐるけれども、之は一に將來の調査研究の成果に俟たねばならない。之についてはジョイス(S. T. A. Joyce)とマルチンの論稿がある。ジョイスは「マダガスカルに住民は元來オセアニア・ネグロイドである」と云つてゐるが、之丈では、二つの集團を關聯せしめる役目を果すものではない。

マルチンは

「マレー半島のネグリート族と其の近隣族との間の最も重要な差違は毛髮形態の差に求められる。」と考へた。我々は毛髮形態が人種區別の適切なる規準と考へて來たのであり、多くの場合確かに其のやうに考へられてゐるが、褐色人種に分派の毛髮と其の近隣族或は親族關係を持つ種族の毛髮との間には相當の差が認められるのである。之等の差違は大部分、一定の風土的條件と關聯あるものの如くである。それ故、ネグリート族と眞のネグロ族との間に發見せられる毛髮形態の相似が親縁關係に基くのではなくて、寧ろ同様な地理環境の影響に基くものと考へることは少くとも妥當であるやうに思はれる。トムソン教授は、ネグロの毛髮形態は頭を熱帶太陽の激しい光線から保護するのに特別の利益を持つてゐると私に話した事がある。疑ひもなく熱帶地域に住む總ての住民は、之等の特異原因を發展せなかつたけれども、アフリカ及びその他のネグロ型が特にその厳しい環境に適用されたとする事は妥當であらう。我々は顯著な特徴原因に對する親縁關係ではなくて同様な環境の効果に寧ろ注目しなければならぬのである。

アジアの人種を考察するに際してこの事は依然として可能である。何故ならばアフリカのネグロは一定の極めて顯著な特徴を現してゐる様に思ふけれども、アジアに於てネグリート族とその近隣族との差違は毛髮の特徴を除くなら何處に於ても顯著ではないからである。

問題の解決は依然として探求されねばならないが、ネグリート族とアフリカネグロとの間の親縁關係を發見する人

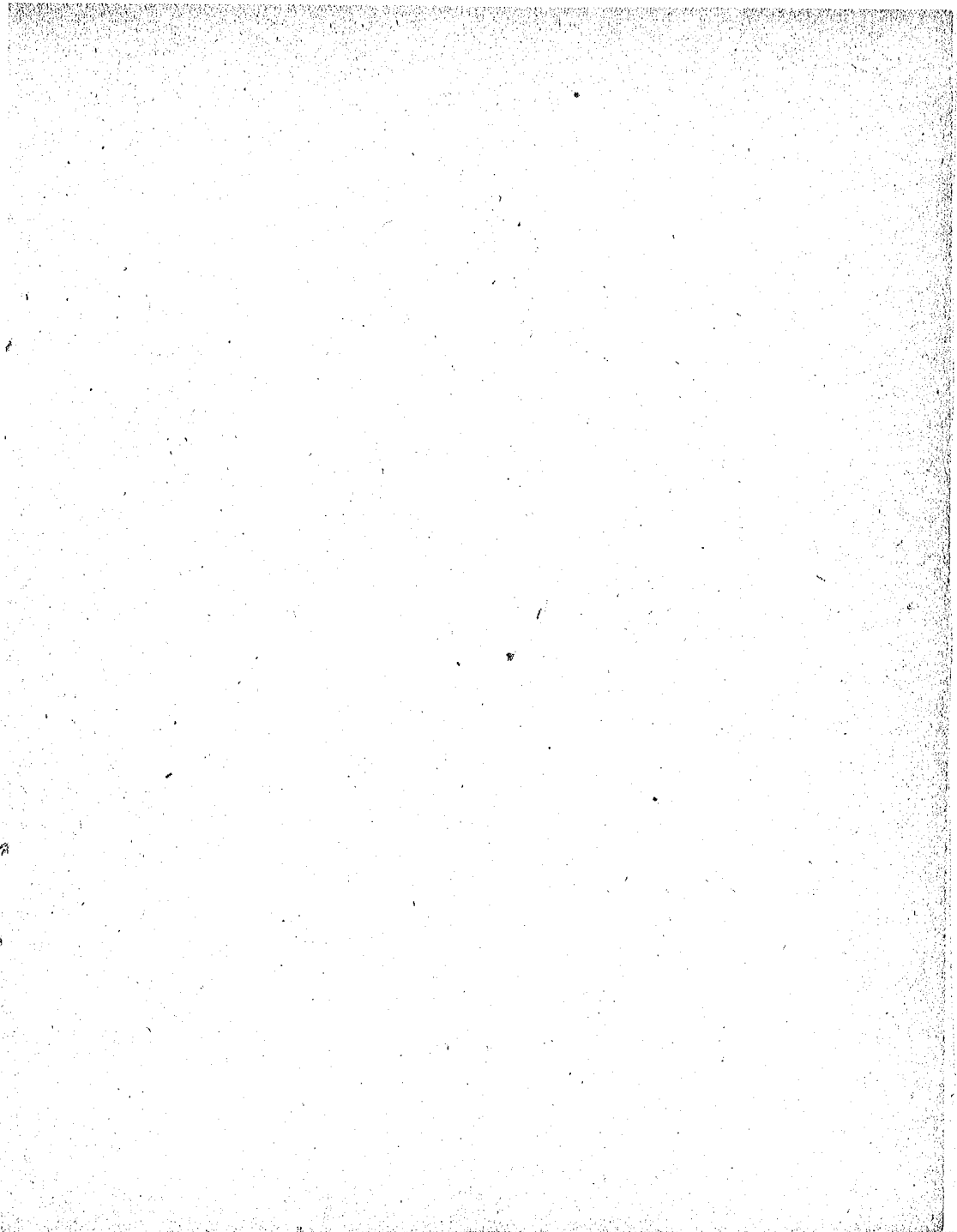
は二つの特殊化された地域を結合する化石人を探し求めねばならぬ様に思はれる。複合説を支持する人は、人間の毛髪質がどれだけ環境と相關々係を持つものであるかと云ふ事に付いて正確に跡付けねばならない。熱帯が人種とは全く獨立な人間の構造に何か極めて決定的な効果を持つと云ふ事實に鑑みて、後者が最も容易な假説なりとする事は可能の如く思はれる。

倍、アジアの人種を要約するならば、先づ第一に西部アジアの北方型である、之は極東のアイヌを含んでゐる。第二に様々な褐色人種集團が擧げられる。第三の集團は中央ヨーロッパのアルプス人種に近い種々の亞人種である。第四に人種的親縁關係が未だ充分に研究されていない人種集團たる黄色人がある。之は恐らく二、三の亞種族に分類されるであらう。最後にネグリート族である。少数にして大部分は南東熱帯アジアのあちこちに住んでゐる孤立種族である。

第二章 關係文獻

- (1) Keane, A. H. *Stanford's Compendium of Geography and Travel Asia* (2 vols.), Lond., 1886.
- (2) *Brit. Mus. Handbook to the Ethnographical Collections*, [T. A. Joyce.] Lond., 1910.
- (3) Hogarth, D. G. *The Nearer East*, Oxford, 1902.
- (4) Little, A. *The Farther East*, Oxford, 1902.
- (5) Czapliska, M. A. *Aboriginal Siberia*, Oxford, 1914. [Summarizes Russian Literature.]
- (6) Buxton, L. H. D. *The Eastern Road*, Lond., 1924.
- (7) Richards, L. (S. J.) *Geographie de l'Empire de Chine*, Sh'anghai, 1905. [Eng. Trans., Kennelly, 1908.]

- (8) Broomhall, T. H. (Editor). *The Chinese Empire*. Lond., 1907.
- (9) Richthofen, Freiherr V. China. Five vols, Berlin, 1877-1911.
- (10) Holdich, Sir T., India. Oxford, 1902.
- (11) Czaplicka, M. A. *The Turks of Central Asia*. Oxford, 1918.
- (12) Haddon, A. C. *The Wanderings of Peoples*. Camb., 1911.
- (13) Hrdlicka, A. Amer. Journ. Phys. Anthrop. Washington, 1920, 111. 4.
- (14) Zwaan, K. de. *Die Inseln Nias*. Haag, 1914 (2 vols.).
- (15) Giuffrida-Ruggieri, V. Prime linee di un antropologia sirtemica dell' Asia. Archiv. Antrop. Enol. Florence, 1917, XLVII. also issued separately, Engl. Trans., Univ. of Calcutta, Anthrop. Papers, 1921, VI.
- (16) Fleurs, H. J. In *Eugenics Review*. 1922, XIV. 97.
- (17) Smith, G. Elliot. *The Ancient Egyptians*. London and New York, 1923.
- (18) Baur-Fischer-Lenz. *Grundriss der menschlichen Erblichkeitslehre and Rassenhygiene*. 1923.
- (19) Günther, H. F. K. *Rassenkunde des deutschen Volkes*. Munich, 1924.
- (20) Duckworth, W. L. H. [Note on a skull from Syria.] *Studies in Anthropology*. Camb., 1911.
- (21) Haddon, A. C. [The pygmy question] in Wollaston, A. F. R. *Pygmies and Papuans*. Lond., 1912.
- (22) Marth, R. *Die Inlandstämme der Malayischen Halbinsel*. Jena, 1905.
- (23) Sullivan, L. R., in *Mem. Bishop Mus. Honolulu*, 1923, IX. 211.



第三章 アジア諸人種の起源

先の章に於て考察したのは現在に於るアジア人種の形態と分布状況であつた。之等の人種の起源を尋ねることは人種學專攻の學徒にとつては最も興味ある問題である。特に、アジアを研究の對象として撰んでゐる場合にはそう云へるのである。其所で我々は此所に其の問題を検討して見たいのであるが、何分にも此の大陸の廣がり巨大であり際限もないのであるから、殆んど此の方面に關するアジア住民の研究に關する正確な知識は得られまいと考へられる。

一八九一年にジャバ島トリニルに於てデヌボアが直立猿人の化石を發見した事が動機となつて、人類と高猿類との間に何等かの關係を見出さんとする研究に刺戟を興へた。それに對して種々の結論が興へられたが、次に述べるものは特に記述するに價するものであらう。ブウル(M. Boule)は *Les Hommes Fossiles, Paris, 1921* に於て次の如き見解を持してゐる。直立猿人は現實には巨大な手長猿であり、人間に似てゐる特徴は複合に基いてゐる。即ち斯く解すれば、猿の先祖と人間の頭を有する頭蓋穹隆部、直行大腿骨、齒質等の中間的特徴を考慮するに最善の道であると云つてゐる。所で之迄の發見は不幸にも骨格の三部分に限られて居り、其後繰返し行はれた調査も更に此の問題に光明を投げ與へるべきものとは發見せられてゐない。

所で次の事項には特別の注意を引くものがあらう。其の頭蓋穹隆部容量は之迄評價されて來た所では人間と猿との中間的特徴を持つてゐる。アークキース卿によれば、其の前顎部は人類と云ふよりは寧ろ猿類に屬するものである。後頭部の位置は中間的であるけれども、一般的に云へば、手長猿とチンパンジーのそれに相似してゐる。エリオット

・スミスによれば、其の頭蓋内部の形は特徴に於ては人間に屬してゐるけれども、前顔部は猿類のものである。

舊石器時代人がアジア大陸に居住してゐたと云ふ事を證明すべき痕跡が數多くある。ラールテ(Lake)は一八六四年に舊石器時代人がシリヤに發見されたと報告して以來、數多くの發見が西部アジア、特にシリヤ及びパレスチナで爲されて來た。其等は氷河期の動物と一緒になつて發見されたのであるが、其の器具形態はヨーロッパの其れと一致してゐるのである。ブウル(B. Boule) ムンヘン(Chellean) アッシュウレアン(Achwelean) ムステリヤン(Mousterian) オウリニアン(Aurignacian) 及マガレニアン(Magdalenian) 型が發生してゐると報告してゐる。人間が此等の器具を作つてゐた頃に、氷河作用は高山の傾斜面や高原地域に依然として延びてゐたやうに思はれる。尤も、小アジア地域やペルシヤでは此等の現象は殆んど見受けられない。然し一方平原では舊石器時代と新石器時代との兩方の堆積物を包含してゐる。

數多くの舊石器時代の堆積物が印度に於てパンジャブ地方からマドラス地方にかけて發見された。其等は古代動物と關係あるものであり、而して印度に於る考古學的問題は極度に西部ヨーロッパの其れに似てゐる。ロシアの考古學者は北部アジアに於て又舊石器文化段階に屬する人類がエニセイ狹谷に居住して居つた事明かであると云ふ。然し氷河作用はヨーロッパに於るほど大規模なものではなかつたようである。

イルクツク地方からとれた新石器時代の殘片は赭土で被はれてゐるので興味深いものがある。然し現在の處、特別の意義を此の奇妙な一致に對して持つものではない。

日本の貝塚やその他の前史殘存物は我々の問題に何等の光明を投げ與へてゐない。何故ならばそれ等と既知の事實を結びつける事が可能である所には、此等の地域に現在住んでゐるものに近いものとなる様に思はれるからである。

此の事に關する論議は之等の種族を取り扱ふ種族に於て見出されるであらう。

現在西部、北部及南部のアジアには初期の人間が居たと云ふ證據が存在する。極東からとれた文化的な證據は現在疑はしいものであるし、亦、左程價値のあるものではない。ヨーロッパに於る大抵の發見が極めて最近のものであり、亦先史考古學が如何に再述されたかを記憶する場合、最近二十年間に於てすらその證據の特質が疑はしい事が立ち所に明らかなものとなる。

種々の古代發見物が支那に於る黄土からの判斷によつて報告されたのであるが、其の中最も重要なものはテラー^(P. Teilhard)によつて記述された黄河のオルドスの遺跡である。五つの異つた位置が舊石器時代の殘片物を含んでゐると云はれてゐる。之等のものは北部廣西省に於るニンシャであつて、そこではその型はムステリヤンと云はれてゐる。第二はスヤラのオンゴールで、第三はユーフエン、第四はキンヤン、第五はシーツイツエで發見される。

私はアンダースン博士及その他の人々の好意によつて、支那に於る所謂石器時代の殘存物を數多く吟味する機會を持つた。其れ等のものはヨーロッパで用ひられてゐる色々違つた名前で屢々記述されてゐた。だが慎重に吟味してみると、此の記述は全く誤謬であつた事が判つた。然し乍ら之等のものは支那の銅器時代に明かに屬してゐるのであつて、その銅器は明かにアナウからとれたものと同一の型を示してゐるのである。

南方及印度支那のものだと主張されてゐる發見物は共に疑はしい性格を持つてゐる。色々の證據を要約するならば、シベリアの發見物に重點を置き、廣西からとれたものに疑念を抱いてゐるけれども、我々は北方の初期の人間に就いては何事も知らないし、又報告された發見物も依然として困難な問題を形成してゐるのである。

人間の製作物の證據が極めて疑はしい場合に、その骨が一層眼に止らないと云ふ事は自然である。直立猿人はさて

置き、アジアに於る初期の人間に就いて二つの明瞭な報告書が提出されてゐる。

第一のものはオウリナシャ期に屬するものと言はれてゐる。それはベニシアのアンテリヤスの洞窟の中でズモフェンが發見したのであつた。完全に形態學的な報告書は何等出版されて居らない様に思はれる。(10)

第二のものは一九一五年(11)松本博士に依つて記述された薦骨である。その骨は河南省に於る古代の堆積物から齎された。その形状及彎曲の基礎に立つて松本博士はそれがネアンデルタールロイドであるとしてゐる。薦骨に生じてゐる變異を考察し、既に公にされた數字から判斷してこの薦骨がネアンデルタール人の代表型に屬すると云ふ事を形態學的基礎の上に主張する事は、極めて危険なものに思はれる。ブラツク博士の報告書が出版される迄は、銅器時代の河南省に於る初期の人間の正確な形態が何であつたかについては、主張し得ない所である。地理的證據はさておき、その結び付けは疑しい。然し乍ら、地理的な證據も亦極めて疑しいものである。松本博士はその發見のなされた方法に關しては何らのデータも述べて居られず、それが唯手に入つたと述べて居られるのみである。

アジアに於る初期の人間に關する證據は極めて不十分なものである。その大部分に涉つて我々は現在たしかめ得ない。其の大抵のものが僅かに知られてゐるに過ぎなく、或るものは全く知られてゐない状態にある。にも拘らず多數の學者は確心ありげに、人類はアジアに發生したと斷言してゐるのである。ある種の學派、特にマッシュュー(12)はそれが中央アジアの高原地帯だと暗示してゐるのである。所で中央アジアの高原は遠く離れて居り、アジアに於ける中心位置にあるから其の保險調査は急速に進みさうもないと云ふ事實を除いては、此の魅惑的假説を確かむべき證據は殆んどないのである。若し早期の殘存物が其所に發見されるならば探險者にとつて幸運此の上もない。現在の處、調査者にはこの様な報酬が與へられてゐない。

人間が何處で發生したにしても、特にそれが何等か特別の地域に發生したのだと想定する理由は別に何等ないのである。だが學界の意見はアジアに人類發生を見んとし、それもアジア北部ではなく南部に傾いてゐるのが一般である。所で、一方ヨーロッパの諸資料に基礎を置いて考へると、アジアよりはヨーロッパに於てより早く人類が發生してゐると云ふ事を地理的に知り得る殘存物がある。之はヨーロッパがどうしても人間の搖籃地であると論ずるのではない。それは我々に一つの出發すべき地點を提供してゐるのである。更にヨーロッパに於ては後の人類が移動してゐる證據が存在して居り、限られた程度にはあるが、少くもヨーロッパの三大人種史を跡付けることが出来るのである。

其の事情はプウルが極めて明快に記述してゐる。北方種族の現在の分布中心はスカンジナビヤである事は明瞭である。舊石器時代、瑞典は氷で被はれ、彼等は止むなく氷から解放された地域に移行しなければならなかつた。此の地域が、中央・南部及び東部ロシアであつたと考へる事が出来る。トランスウラル地帯はさうではなからう。さてこゝまで來て我々は再び眞の證左たるべきものを有してゐないのである。ジュフリダ・ルジェリ⁽⁴⁾及びフリユール⁽⁵⁾は北方種族は地中海種族の一分岐であると暗示した。之は決して不可能な議論ではないのである。だが此の説を確證すべき證據でもないのである。プウルは北方種族又は先北方種族がマダレニヤン時代に存在したと暗示してゐる。

全體として、北方種族はヨーロッパに屬しアジアには屬せざるものとするのが妥當のやうに思はれる。現在、それについて我々は其の判定を與へることが出来ない。然し乍ら、現在の住民が棲息し初めた時よりはすつと以前に既に現在の住民と相當異つた住民が歐亞大陸の北部ステツプ地帯や、ツンドラ地帯に散布して居つたと云ふ提案もあるのである。現在北部型に屬する長頭種族の生存者がある。ヨーロッパに於る北方族、アジアに於るアイヌ族トルコマン

族の或るものが即ち之である。之等は相當に違つてゐるのであるが、窮局するに同じ系統に屬してゐると考へることが出来る。所である時期には長頭人種が極めて廣範に分布してゐたことは明瞭である。其の起源は何處であつたかは云ふことが出来ないし、また其の分布してゐた者が全部同一種族である等とは決して言ふことが出来ないのである。日本で取れたアイヌの頭蓋骨及他の前史時代人のそれを試して見ると、北方種族とアイヌ族との親縁關係は屢々提案された程遠いものでないことを示してゐる。

偕、そこで次の様に考へる事は可能であらう。即ち分布の中心は東部ヨーロッパと北部アジアにあつたのであつて、其れが二つの方向に分れた。結局一方に行けるものは北部ヨーロッパの背高の明色種族となり、他方に行けるものはヅングリせる卷毛のアイヌ族になつたのである、と。アイヌは殘存種族であり、此の初期の人種から殆んど特殊化されてゐない。彼等の間で一緒に生活して見ると、ヨーロッパの諸族とアイヌ族との親縁關係があることに思ひ付くやうになるであらう。

此の提案は必ずしも北方種族の發生搖籃の地をブルが提案せるよりは、更に東に移さんとする意味を持つことにはならない。親縁關係を提案することは決して何等かの特別な原生地を斷言することではないと云ふことを記憶して置かねばならない。親縁關係は一つの共通の系統を意味してゐるけれども、其の共通の系統が發生した場所は現在の所全く不定である。而して共通の親縁關係を持つものを一應假定的に認めても、一方斯る親縁關係は充分に證明されてゐるものではない。またたとへ證明される場合ですら、他の背景に立つて主張されたもの、例へば北方人種は相當の昔に歐亞大陸の北部に發生し、爾後全く何等か不明の理由で移動したと云ふ主張を一步も出でないであらう。

新石器時代に於て此の移動が極めて能動的な事は殆んど疑ひ得ないものゝやうに思はれる。北方人種又はその類縁

人種が更に極東に迄延びたと云ふ事はあり得るが決して確實だとは言はれない。現在、それを支持すべき直接的證據は殆んどないのである。當時、北方人種がスカンデナヴィヤ半島に蔓延し、其處が彼等の發生地だと云ふ幻想を興へる程、確固たる地位を築いたのである。

地中海人種は一つの異つた問題を提供してゐる。北方人種又はそれに類する人種が少くも此の風土的條件の下で生活する様に特殊化され、全體として南の風土條件に適合する事に失敗してゐるのに對し、地中海人種は南の子であると云ふ事は明らかである。之が同一人種からなる二種族、即ち熱帯又は亞熱帶的條件に適合せる種族と、北部の風土條件に適合せる種族とである事は確かであらう。此の説を支持し又は辯駁する證據を我々は現在有して居らない。然し乍ら、他方長頭種族と互に關聯し合つたと云ふことが問題を包蔵する一方、地中海及褐色人種が廣範に分布し、恐らくは多數の亞種族を有してゐる事を暗示する理由が數多く存する事は今迄示されてゐたのである。之等のものは蘭領印度からジブラルタル海峡に至る迄分布されてゐる。彼等は前王朝時代の埃及に見出され、之迄、メソポタミヤ地方に於て慎重に試されて來た最も早期の墳墓となつて現れてゐる。然し乍ら、之は總ての近代史に屬するものである。我々の人種起源探求に於て、それは僅か昨日起つたことの様之感ぜられるに過ぎない。ヨーロッパからとれた多くの早期頭蓋骨の中の或るものは明かに此の型に屬してゐる。我々が云ひ得ることは斯うである。即ち永劫の時代より人類が地上に登場して以來、此の型の人種が、大陸の西部及南部沿岸に沿つて散布して居つたと云ふことである。だが其の搖籃地が何處であつたかと云ふ事を示す證據は遺憾乍ら何等ないのである。

地中海人の起源に就いては、上述したのとは異つた起源を暗示する二三の提案が今迄爲されて來た。例へば、ジュブリダ・ルヂェリ(4)は「此の人種はクロマニヨン種族と始エチオピア種族との混合物によつて作られた。」と考へてゐる。

る。此の説の難點はクロマニヨン種族の眞の性質に關して殆んど證據がないと云ふこと、而して原エチオピア種族に關しては更に殆んど何物もないと云ふことである。何れにせよ、之は現在の褐色人種の分布を説明して居らないし、又同様の主要特長を備へて居り乍らも、どうして色素に於ける現在の顯著なる相違を生ずるに至つたのであるかについても説明する所がないのである。

著者がアルプス人種、デイナール人種及びアルメノイド人種に分割した短頭型種族集團は一般に其の根源をアジアに有するものと認められてゐる。プウルは西方への種族移動が恐らく氷河期の始めの頃、アルプス人種は西方に進むにつれて其のモンゴロイド的特徴を漸次喪失するに至つたものであると提案してゐる。尤も此の過程がどの様に經過したかについては彼は説明して居らない。

初期のアルプス人の前進が他の住民の中に滲透する程多量の移動でなかつたらしく思はれる。然し乍ら、青銅器時代になると彼等は確かに西部ヨーロッパに大いに滲透してゐたのであるが、それより以前には埃及の王朝期²⁵の初めに近東に滲透してゐたのである。偕、其所で、彼等は少くもアジア及びヨーロッパに於て初期の近代人類の代表者ではないのであるから、上述した所とは多くの點で異つた問題を提供してゐることになる。今日我々はアルプス人種がアジアに廣く分布してゐるのを見出すけれども、其の到着は早期ではなかつたやうに思はれる。ヨーロッパでは彼等は本質的に山の子である。彼等がアジアに發生したと云ふ事は現在我々が持つ證據から引き出され得る殆んど唯一の結論であるように思はれる。其の黄色人種との關係は多くの反對意見の表明あるにも拘らず、今日明瞭に理解されてゐない。若し我々が頭形指數に最高價値を認めるならば（尤も多くの人類學者はその價値について極めて懷疑的である。）我々は恐らく兩人種の類似性を知るであらう。之以外には黄色人種とアルプス人種との間に緊密なる連絡關

係がある事を主張し得ないこと明瞭である。

我々は未だ黄色人種の起源に關する何等の知識も持つて居ない。アジアの中央は未だ充分に探索されてゐない地方であり、現在此の型について發見せられた最も初期の殘片物ですら大古代のものには屬して居らないやうに見える。上述せる如くアルプス人種が其の起源に於て黄色人種と關係を持つてゐるかどうかについては我々は興り知らない。黄色人種の初期の形態に關して此處に考察を必要とする一點は其れと新世界アメリカの住民との關係如何である。

アメリカ人種の起源は多くの論議の種であつた。多くの人類學者達は（特にヒルドリック(A. Hrdlicka)に於て顯著に）アメリカには初期の人類の痕跡は何等存しないと信じてゐるのである。

然し乍ら、何故にアメリカに於る初期人類の殘片物が何等かの古代に屬さず、同時に近代的インディアンに可成り似てゐるのであるかと云ふ理由は何等存在するのではない。今日北東アジアに於ては後章に檢討する如く近代的アメリカ人と緊密に相似してゐる住民が存在してゐる。此の相似は彼等が其の近代の後裔者になつても殆んど異つてゐない共通の祖先を持つてゐただと想像することによつて、恐らく最もよく説明され得るであらう。成程今日のアメリカ人は頭蓋形態、色、身長等々の點で一定の相違あることを示してゐる。だが然し、之等の相似は、一方にはヒルドリックをして彼等が同一人種に屬すべしと思はしめ、他方にはアメリカに於て若干の顯著なる人種型が存すると考へさせる呈のものである。とも角、今日一般的にはアメリカ人と黄色人種との相似が其の同一種族基に屬する事から來てゐるものに相違ないと云ふ意見が容認されてゐる。其等のものがアメリカに發生したと思惟さるべき證據は何等存しないのであるから、彼等がアジアに發生したものとすることはあり得べき見解である。然し乍らベーリング海峡の近隣で二方面に若干の種族移動があつた事が考へられ得る。アジアに於る現在の住民はそれ故、其の起源をア

アメリカ大陸に負ふてゐるかも知れないがそれは第二義的人種播種地として過ぎないのである。

アジアのエスキモー族は數に於てこそ少いが、此の興味ある種族に對して可成りの注意が之迄引かれて來た。アジアのエスキモー族は北アメリカのエスキモー族よりはエスキモーならざる其の近隣種族により密接なる關係を持つて居つたやうである。いづれにせよ、我々はエスキモー族と云へば一方ではアメリカンド族と區別し乍らも、黄色人種を聯想するに違ひないやうである。恐らく其の分化は比較的遠い昔に行はれたものらしいが、再び此所で我々は理論の基礎たるべき證據を握つてゐないのである。Chance-lade からとれた頭蓋骨はテツウ (Testu) からソラス教授 (22) (Prof. Solias) に至る迄の觀察者によつて、正にエスキモイドたるべしと考へられた。それ故、我々はアジア大陸の極北東部の住民の原基的祖先はアジアにはなくて、ヨーロッパに見出すべきなのだらうか。

斯る結論は極度に冒險的なものであらう。先づ第一に、單一の頭蓋骨だけでは殆んど頼りになる判断を下し難いと云ふ事、第二に我々は現在一見してエスキモー族の特徴に似てゐる様に思はれる特徴が現實に斯るものとして考へらるべきであるかどうかを判断することが出來ないと云ふことである。鼻の形態は或る者によつては、エスキモー族との關係を實證する重要な證據たるべく考へられて來たのである。だが極端に寒冷なる風土條件に屬せしめられてゐると云ふこと、鼻の狭さは幅合であつて、關係の問題ではないと云ふ事が想起されねばならない。頭蓋形態も亦同様に考察されるかも知れない。トムソン教授はエスキモー族に於る龍骨狀突起は人種の特徴ではなくて、之等の種族が其の咀嚼器管を尊重する習慣に基いてゐると想定するに適切なる理由を示した。此所で再び我々は何等確かなる證據を持つてゐるものではなく、唯、觀察された事實を記述する事が出來るに過ぎないのである。

我々が現在握つてゐる證據に基いて認められた結論は黄色人種の成員として一括され得る種々の種族が總て恐らく

はアジアに發生したと云ふことであらう。舊石器時代のヨーロッパにモンゴロイド人がゐたと云ふ提案は未だ證明されてゐない。

我々は現在、ネグリート族の起源については何も知つてゐないし、それがアフリカから來たものか、アジアに起源があるかどうか云ひ得ないのである。ニグロ族がアジアに發生したと云ふ信念を吐露する如き決定的證據を我々は現在握つてゐないのである。生物學的規準に立つて主張される議論は、現在純粹な推察に止らねばならない。

そこで、此の章の結論を與へると云ふことになれば大部分純粹に否定的なものになつて來る。窺局の起源に關する證據を握つて居らない爲に我々は明確に斷言する事が出來ない。恐らく黄色人種と少くとも白色人種の一分岐種族は其の散布中心地をアジアに持つてゐたのであらうが、如何なる地點かに就いては現在明記し得ない。然し乍らもつと一般的に言へば、人類の最も初期の播種地がアジアの何處かにあつたとする事は不可能でもなさうである。

第三章 關係文獻

- (1) Boule, M. Les hommes Fossiles. Paris, 1921.
- (2) Pumpelly, R. Explorations in Turkestan. Carnegie Inst., Washington, 1904, LXXIII. (2 vols.).
- (3) Savenkov. Congres internat. d'anthrop. et d'archeol. Moscow, 1892, I.
- (4) Baye, J. de, and Volkov, Th. L'anthrop. Paris, 1899, X, 172.
- (5) Hamada, K., and Hasebe, K. Rep. Archaeol. Research, Dept. of Lit., Kyoto Imp. Univ., 1920-1921, IV-V.
- (6) Teilhard, P. L'anthrop. 1923, XXXIII, 630.
- (7) Andersson, J. G. Palaeontologica Sinica, D. Peking, 1923, I, 1.

- (8) Andersson, J. G. Bull. Geol. Surv. China. Peking, 1923, V. I.
- (9) Buxton, L. H. Dudley. Man, 1925, XXV, 10.
- (10) Zinnoffen G. L'Anthrop. 1897, VIII, 272.
- (11) Matsumoto, H. Science Rep. Imp. Univ. Sendai. Japan, 1918, III, 36.
- (12) Giuffrida-Ruggieri, V. Riv. ital Sociologia. 1915, XIX.
- (13) Giuffrida-Ruggieri, V. Riv. ital. Paleont. 1918, XXIV.
- (14) Giuffrida-Ruggieri, V. A. A. E. 1916, LXV.
- (15) Keith, Sir A. J. R. A. I. 1915, XLV.
- (16) Hardlicka, A. Proc. U. S. Nat. Mus., 1924, LXIII, 12, 1.
- (17) Hardlicka, A. Amer. Anthrop. 1912.
- (18) Hardlicka, A. Bull. B. A. E. 1907, XXXIII.
- (19) Hardlicka, A. Ibid. 1912, LII.
- (20) Hardlicka, A. Ibid. 1918, LXVI.
- (21) Tassut, L. B. S. A. L. 1889, VIII.
- (22) Sollas, W. J. Ancient Hunters. Lond., 1923.
- (23) Bryn, H. Ymer. 1922, 314.
- (24) Christian, V. Anthropos. 1921-1922, XVI-XVII, 577.
- (25) Christian, V. Mith. Anthrop. Ges. Wien, 1924, LIV, 1.

第四章 西方アジア

第一節 近東の諸種族

以上の章に於て我々はアジアに於て人類が歸屬してゐる一般的條件及び其の地域に於る住民が一般に分割されてゐる集團、について廣範な概括を試みて來た。此の章では、アジア諸地域の一般的人種學を詳細に論議する事にする。種々の難點があるけれども、この考察に當つては地理學的分類方法を適用する事が便利である様に考へられる。此の方法はその大部分の研究が特別の小地域を取り扱ふ事に關係を持つと云ふ明らかかな利益を持つてゐる。亦之は、讀者が頁を續けてめくつて行く事が煩しいと思ふ時に、地圖を調べさへするならば讀者の課題をヨリ簡單なものとする。だが然し、地理的、又はその他の境界が人間形成に決定的な役割を演ずるやうに思はれても、人類の分類の觀點から考察される時、斯かる分類は技術的なものである。

情、其所で以上の如き考察に於ては先づ第一に各々の地域に於る人種學研究にとつて重要なる地理的諸條件を出來るだけ簡略に論じ、次に住民其れ自身の類縁關係を考察したい。私は一つの地域以上の、人類學に等しく重要性を持つ或る點に就いての充分な論議を、讀者をして見出させんが爲に常に他の書物の部分に隨分言及して來た。比較的一般的な書物は文獻として一度以上述べなかつたけれども、私は此處で再び緊密な體系的關係に依つて一つの國に特別の興味を有する學徒に、その興味を有する地域を取り扱へる論文を發見せしめんと試みた。

此の章の課題を構成してゐる土地は「近東」、「中東」及び「南東部露西亞の一部」として一般に知られてゐる。其の

中多くのものは昔、古代土耳古帝國の中に包含されてゐたが、現在は種々の集團の下に分割されてゐる。古い分類が一層親まれてゐるので、其れを採擇する事が便宜であるかも知れない。其の中には、アナトリア、サイプラス、メソポタミヤ、シリヤ、アラビヤ、之等の總ては——サイプラスだけが——一八七八年以來大英帝國に依つて統治せられたけれども——アジアに於ける土耳古國の部分を作成したのである。アルメニヤは現在分離せる地方となり、イラクはメソポタミヤの中に包含されてゐる。イランはベルシヤ及アフガニスタンを包含するものと言はれるかも知れない。最後に、此の地域の北部は現在トルコ曼共和國及ウズベツグ共和國に分割されてゐる。

此等の土地は極めて相反した特徴を持つて居り、如何なる意味に於ても一單位を爲してゐないけれども、アジア大陸の他の部分と分離する事の出来ない一定の人的特徴を共通に備へてゐる。

此の地域のみが、二大陸と直接的接觸をなしてゐるのであり、従つて此處では人種的問題は一方に於てはヨーロッパと、他方に於てはアフリカと分離され得ないのである。然し乍ら、爾餘のアジアと同様に此所では他の國がアジアに持つたよりはヨリ大なる影響を其の近隣國に持つたやうである。山嶽地域は一般にアナトリアの北部及南部沿岸に平行に走つてゐる。其れ等は二つの方向に走り、一はシリヤ沿岸に、他はベルシヤ灣との二方向に平行して走つてゐる。エルブルツ山脈はカスピ海の南方に位置し、南東に曲つて結局アフガニスタンの大斷層に結合してゐる。ベルシヤの山嶽地帯は先づ第一にラット沙漠の低地に依り、それから北西及南東に走る區域を横切るセイスタン沙漠に依つてアフガニスタンと分離されてゐる。

アラビヤはアラビヤだけの地域を作成してゐる。一つの例外があるが最高の部分は西部にありベルシヤ灣に長く連る地域を作成してゐる。

地表特徴の相違の爲に風土には相當の相違がある。アラビヤの南西隅及び黒海とカスピ海との間の地帯を除いて、七月に於る平均降雨量は何處でも一時以下である。地中海沿岸地方は一月に四―八時の降雨量がある。此の沿岸地帯及び中央西部アナトリアに於る小降雨量地帯はさて置き、スウエズからカスピ海の南東隅に至る線に屬する北西部地域は平均二―四時の降雨量がある。メソポタミヤ地方、ペルシヤ灣、カスピ海の南に横はれる地方は一―二時、爾餘のアラビヤ半島及びイランの沙漠地帯は一時以下の降雨量である。

一月等温線は大體東及び西に走つてゐる。アナトリア及び其の東部地域は四〇―五〇度、シリヤではそれよりも一〇度高く、南部アラビヤでは七〇―八〇度である。七月には、アラビヤ盆地、メソポタミヤ平原、クルデイスタン及イラン高地を含む中部地域は九〇度を越える等温地帯であり、現實には最高温都市の若干部を包含してゐる譯である。勿論、山嶽地帯の範圍は之等の概觀を大なる範圍に涉つて變へてゐる。多くの部分では、冬のきびしさは等温線が示すよりも一層丘陵地帯に激しいのである。

植物は恐らく氣候的條件を單に敷へ上げる以上に人間の生活する條件へのヨリ良き指針となるものであらう。主要山脈に相應じて大アルプス植物地域が存在する。之等の比例的に最も大なるものはアルメニヤに於て見出されるが、最も長い範圍はタブリツからメシエツド、及びカシヤンの北部からケルマンの南に至る迄擴つてゐる。

アンゴラとコニヤ及びエルツエロームの南西部との間にはステツプ地帯がある。さもなければ、アナトリアの大部分は耕作地であるか、或は耕作可能な土地から成立してゐる。同じ事はシリヤ沿岸及びエーメ沿岸についても當てはまる。此の國は殆んどクルジスタンのヴァン湖から南西に長く延びてゐる。カスピ海の南に當る山嶽地帯の境界及び、メソポタミヤの比較的底部地域は同様であり、シリヤにはオアシス地域がある。大部分のペルシヤ及びチグリッ

地域はステップである。その他の地方はネフド及びセイスタンのグリーンに於いて半沙漠地帯であるか、或ひは草原地帯であり。イランでは眞の沙漠となつてゐる。

此の事からして大低の動きがシリア沿岸地帯を除いて北西又は南東に向つてゐるに違ひないと云ふ事が知られるであらう。然し乍ら此の地域には可成りな變動があり、道路も或る場合には以前程収容力がなく、嘗て人々の住んだ地域が今や沙漠となつたと云ふ事を信すべき理由がある。變動した様に考へられる處の大低の地域はオアシス型の文化を持つてゐた如くである。而して此の型は特に其の環境に感受性あるものである。

人種的に最も密接に聯關のあつた西部の國は重要である。地中海には最も臆病な水夫ですら達し得られる程の數々の連鎖状の島がある。サイプラス及びアナトリア沿岸に近い高山は常に互ひの視野の中に這入る。更に西方にある連鎖的島嶼は一層連鎖的でさへある。それ故、圍繞地域は大中央地域から植民せられると云ふ生物學的法則の爲に、アジア大陸から西部に至る人口壓迫が偶々起つた。東から來た丸頭型の種族はマルタ島の住民を體質的に深く修正した。此の修正たるや、まことに大なるものであつたので、我々は異なる人種が銅器時代以來今日まで其の島を占めてゐると云つてもよいと思はれる。彼等はクリート時代にクレタの住民を更替したのである。其の他の境界については、現在我々は殆んど導くに足る證據を有して居らないけれども、少くも其の住民に影響を興へたと云ふ暗示を得る事が出来る。總て此の地中海地域に於ては、原住民が現在の地中海人種に似てゐたと云ふ事が示されてゐる。アジアからの侵入者は新石器時代より以降、種々の時代に住民を變化させたのである。

地中海地域がアジア地域に回歸してゐたのかどうかの問題を發することは合理的である様に思はれる。現在此の問題に答へる事は難かしい。如何に地中海種族が大部分の西部アジアに涉つて擴つたかについて私は既に示しておい

た。他方、地中海種族の起源が地中海地帯にあつたとする事は妥當ではなさうである。セルジ及び其他の者は地中海人種がニグロ族に近い事を提案してゐる。成程、一定の相似はあるけれども、一般にニグロ族は此の様な關聯の認められ難いほど相違してゐる。

恐らく、アジアから出てゐる西部の進路は唯移動する種族によつてのみ一方向に使用されて來たであらう。外邊部に於ては成程、數多くの種族移動が見られ、西部アナトリアのある地域に於ける變異は極めて大きかつたので、可成りの混淆があつたに相違ない。古代歴史家は又二つの方向に移動のあつたことを提案してゐる。だが然し之等の後の動きは東から西へ向つて有つた大人種移動以外には、極く微少の比重しか持つてゐないように見える。

疑ひもなく各時期にアジアと埃及との間には緊密なる聯關があつた。此の地方は狭い溝になつて居り、此の溝に最も便利な入口の一つは其れに近いのである。現代の背景、及び従前の埃及人口、即ちエリオツトスミス原埃及人は相當長期に涉り此の地方に存在したと云ふ可能性が多分に存する。然し乍ら、歴史用語の範圍内で云ふなら此の型はアルメノイド人種に密接に近い類縁型の侵入者によつて修正された。彼等は他の何處よりも早く其のデルタに現はれ、従つて此の埃及への人種型の侵入がまさしく地中海島嶼への同一人種型の侵入に類似してゐると云ふ事を信ずべき理由があるのである。

東方との交通は一層困難である。キャラバンに乗つて困難なる地方を旅する事が一方法であり、もう一つの方法は住民の型を改變させるに充分な大量を移動させることである。成程、メツカへの遍歴は殆んど人種的移動として記述され得る程數多いものであるが、住民の型は聖都が敬虔なる信徒の群り集る以前に樹立されてゐるものゝ如くである。

東方から人種がイランの土地に滲透し得る自然のコースは種々の制約を持つてゐる。北及び北東に進む一つの途がある。今日メシエツド西方からエルブルツ山脈の南たるテヘランに至る際、商路があるのであつて、別れて一つは東方に向ひ、ベルシヤ、西方のメソポタミヤに至る。一層北の路はテヘランからアゼルバイジャンを通つてアナトリアに西方に走つてゐる。丸頭型が西部アジアに這入つたのはタコマ沙漠、とコトラツサン沙漠地帯との間にある路によつて横切られた地方を通じて爲されたやうに思はれる。メシエツドからカーマンに至る路があるけれども、移動種族は此のルートを通過したやうには思はれない。實際現存せる地理的條件の下で世界の此の部分に於る短頭種族の現在の分布を考察することは困難である。全體として大山脈障壁があつて之が二つの種族集團を分離する様に思はれる。彼等は或る時期にはアジアを全く横切つたに違ひないのであるが、如何なる事情の下に於てであるかは今日決定する事が出来ない。若し彼等が更に一層北部ルートをとつて進んで居つたものとすれば、ヒンズークシの北部地域に於てよりは一層彼等の痕跡を見出す事に希望を持てるであらう。他方、地中海人種の分布せる時期が極めて往昔の事に屬し、大氷河時代に極めて近い結果、セイスタンに於てすら沙漠旅行に必要とされる精密な組織と分化がなくとも交通が可能であつたとする事は、決して不可能でもなさそうである。

此の地域の全體は西歐文明が基礎を置いてゐる文化の上昇と漸次的發展に聯關を持つものである。我々の藝術の母胎がナイル谷であつたか、チグリス・ユーフラテス河の谷であつたかどうかは我々の研究目的上どうでもよい事である。何故ならば、スーメリア人は違つた系統に屬してゐたけれども、今言つた地域の人口は其の起源に於て根本的に異つたものではなかつたからである。

兎も角、此の地域の住民の體質特徴が文明の發生を可能ならしむるに最も大なる重要性を持つものであるかどうか

か、或は地理的又は其の他の要因が主要なる責任を負ふべきものかどうかの興味ある問題が横たはつてゐるのである。全體としてギリシヤ人は同一人種系統を持つて居り、恐らくは近東の住民をして斯くも奇妙な混血たらしめた。其の混交種族が更に東の國に於るよりも一層遅れてギリシヤに這入つたと云ふことは興味がある。我々は埃及が、アルメノイド族が其の住民とならない中に、既に遙かに進歩して居つた事、メソポタミヤ住民も亦地中海人種の大混交種族を包含してゐたと云ふ事を記憶して置かねばならない。我々が若し人種幹が國民の連續に寄與するに重要な要素である事を思ふならば、地中海種族が最も重要なものであり、或はアルメノイド族であつたか、或は結局二つのもの、混淆種族であつたと考へられよう。又、支配階級の間にも北方系統があつたと云ふ事が提案されさへした。現在、我々は如何なる説たりとも、その基礎たるべき證據を充分に持つてゐないのである。然し乍ら、ヨトロツバがその文化發生に著しく恩恵を受けてゐる種屬の初期の人種幹に注意を拂ふ事は興味のある事であり、更に重要性を持つものである。何故なら、若干の權威者達は、之等とは全く異つた他の人種の潜在力が實はヨリ大であると云ふ見解を極めて強く押し進めてゐるからである。

偕、以上の様な一般的考察を加へて、次に我々は近東の住民を考察することにしよう。其の場合忘れてならぬことは、今日の地理的條件は初め人類の居住したときのそれと同一ではないと云ふこと、常に其處は騒亂の巷であつたと云ふことである。不幸にも我々は信すべき證據を持つてゐないけれども、然し乍ら、今日の住民は古代に於るものと餘り異つてゐないと云ふことも併せて忘れてはならない。

記述的目的のためには、それを分ちて地中海アジアの住民とイランアジアの其れとする事が便利であるけれども、全體として見るならば其等住民の型は同一であつたことが記憶されねばならない。二つの主要種族、即ち地中海人と

アルメノイド人があるのであつて、時には其等は純粹な状態に於て發見せられ、それよりは一層屢々混淆したものが發見されてゐる。此の地域の初期の住民は之等二類型の一又は他として異なる著者達によつて見出されてゐる。

最近此の問題に關する最も傑出した著者はルウシヤンである。随分前に出版された後にハックスレーの講義となつて精巧を加へた論文に於て彼は最も初期の小アジアに於る住民が所謂アルメノイド型に屬するものなることを提案した。従つて地中海人は後の來住者であると想定した。フォン・ルーシヤンは之等の丸頭型の住民に場所の名前の語尾たる *issos* 及び *ardos* に關係を持つ種族を見ようとした。即ちそれは、アジア及びギリシヤ本土の多くの部分と關聯を持つてゐるものである。

彼は之等の種族をアナトリアに於てのみならず、北シリヤ及びメソポタミヤに於て見出される種々の異種族系統と結びつけたのである。之等の派は總て其の構成に於て顯著に同質的であり、ルーシヤンの圖式的統計的取扱は大抵の種族が極めて混淆してゐる地域に於る顯著に同質的な種族を取扱つてゐると云ふ彼の陳述を確かめてゐるのである。之等の社會の大抵のものは同族結婚であり、繼續的な異種族結婚によつて、其の近隣種族が獲得した極度の混淆を避けることに成功した。此の族内結婚の状態がどれ位繼續したかに付いては云ふ事が出来ないけれども、其れは恐らく比較的早期より發してゐるに違ひないものと思はれる。之等の奇妙な社會が基督教の到來前に既に族内結婚であり、基督教々義否認の日以前に既に異端者であつたと云ふことは可能である。さもなければ彼等がどれ位、其の型の純粹性を維持したかを見ることは困難である。ルーシヤンは彼等の中に早期の住民の散布せる遺物を見てゐる。即ち彼は後の來住者は地中海種族に屬し、大部分が其の住民と混淆し、之等の社會のみが獨り古き種族の儘、留つたのだと信じてゐる。

果して然りとせば、之等の社會の原基的形成は極めて古い日に行はれたに違ひないのである。既に、青銅器時代には兩種族ともアナトリアの一部に現れてゐたやうである。我々が決定的に跡付けてゐるサイプラスの最も初期の住民ですら、殆んど確かに地中海人とアルメノイドの要素から成る混淆種族である。サイプラスに新石器時代が存したと云ふことは妥當でないやうであるが、此の時代の人骨形態に於る殘滓は今迄の所何等發見されて居らない。私は青銅器時代の様々な時期に屬するものを吟味した。それ等のものはその島に住む現代の住民とは本質的に異つてゐない様と思はれた。若し、原住民達がこの比較的早い時期に地中海人によつて既に壓倒せられてゐるとするならば、此の同質社會の形成は既に始められてゐたに相違ないのである。兩方の人種共、多少共相並んで極めて早期に、キシ(Κίσι)に存在してゐたのである。然し乍らスーメリア人がアルメノイド人種に屬して居つたとすることは正當ではなさそうである。トルキスタン地域から跡付けると云ふ見解は、我々が更に發掘から決定的證據を獲る場合に、恐らく確かめられるかも知れないのである。

それ故、現在我々の有する證據の上で、少くも西アジアに於る原住民が地中海人種に屬せるものであつた事を信ぜざることは難しいやうに思はれる。初期には西方に向つてアルメノイド族の大運動があつたやうに思はれる。青銅器時代には彼等はマルタ島に達し、銅器時代に存せる地中海種族を追出した事になる。之等の同一種族は又サルジニヤのアンジェルウに迄進出したと云ふ痕跡があるやうに考へられる。それから又西に向つて進展せることは此所で詳論する必要はないであらう。移住地は尙も北アフリカ沿岸に残存してゐるやうに思はれる。彼等は其所で異なる種族より派生した住民に取替はれてゐる。然し乍ら、私はマルタで次の様な事實に打たれたのであつた。彼等は明らかに前住民を追出した。そして有史以來繼續的な地中海人の過剰があつたにも拘らず、その人種的特徴、或る地域では相當

程度の純粹さを維持してゐたと云ふことである。或る村では (S. 98) 男八十人の頭形指數の標準偏差は僅かに二・九五に過ぎなかつた。

ハズラック (P. F. Haskick) は、西方アジアに於ける人種の混淆及び現在に於る人種型の分布は比較的最近に其の起源を持つと云ふ見解を有してゐるやうに思はれる。宗教的信念及び人類學的類型の一致に關する同一性を論議した後、ルーシヤンは次の如く續けてゐる。「此の人類學的類型アルメノイド」が最も多數に見出される地方はアナトリア、ペルシヤ、メンボタミヤの肥沃な地方とシリヤとの間にある山邊の土地である。此の土地は宗教的政治的軍事的使節によつて各時期に滲透せられたけれども、今迄決して文明化されなかつた。特に、トルコとペルシヤとの間の古い境界となつてゐるので、元來二國民の長い戦ひの間、ペルシヤの使者の集會地であつた。依然として神を信じない遊牧民たるクルド族や土耳古族或は又恐らくアルメニヤの基督信者の間にペルシヤ側から齎された宗教的宣傳の結果は、顯著に肉體的同質性を持つる住民の間にあつて、外面的には支配的要素がシャ・イズラムとか、アルメニヤ基督教と云つたやうな宗教的和解の寄木細工となつてゐる。之等の種族の一定の割合はオットマン政府の政策によつて西方に移動したのである。其の移動過程は數世紀の間續行された。移民は數世紀に涉つて續いた。時には支配的文明の影響に立つ平野の人間と融合し、時には宗教的差異やその他の差異の爲に己自身を守つて山邊の地帯から移動して行つた。西方に見出される此の様な型のものは、往昔の時期から比較的近代に至る迄、各々廣く違つた時期に行はれた移民たる事を現してゐるのである。

比較的最近、移民があつたと云ふ事を認めながら、昔の種族が現在のものと近似してゐると云ふ事はありさうな事だと思はれる。だが然し、ルーシヤンが恐らくは現住民たるものと考へた同質的集團のあるものが、之とは反對に最

後に來往せるものとする事も一層妥當の如く思はれる。

多くの學者は其の住民の第三の要素として北方族を擧げてゐる。最近此の説を最も支持するものはピークのH. H. E. Paake)であるやうである。彼はトロイ第一次攻略に於る人種的要素に關する興味ある論稿で、約紀元前二〇〇〇年頃、近代のクルド族の如き黄色人種たる長頭種族の侵入が北西から行はれたと云ふこと、更に之等の草原民族の或るものはヒツサリツク族に打勝ち、中央アナトリアの草野に迄進出した事、更に一方ではその殘存者はエーゲ海岸を縫つてテツサリーへの路を發見し、ラリツサの平野に定住したと云ふ事を提案してゐる。ダックワースの人類學に記述されたテツサリーからとれた一つの頭蓋骨はその例證から判斷する場合、充分北方型のものであると云ふ事を言つてゐる。此の見地でクルド族に北方人種の代表型を見たフォン・ルーシヤンを彼はまた跡付けてゐる。

其の起源の如何なるにまれ、我々は現在小アジアに於て若干異なる型の住民を見出す。先づ第一には混淆型で特に頭形指數の極度に高い標準偏差を有してゐる。之は彼等が長頭型と短頭型との合成物たることを暗示してゐる。此の混淆型の住民は特に都市及び海洋沿岸に發見せられ、其所では或る場合長頭型への決定傾向が存する。純粹に丸頭型のもものは山嶽及沼澤地帯に見出される。サイブラス⁽³⁾には二つの型の混淆せる住民がゐる。サイブラスに於て頭形指數の標準偏差は現存の者で約四・二であり、一方クレタでは四・二四である。之はフォン・ルーシヤンに依つて測定されたリキヤのジブシー(二・八三)と強度な對照をなしてゐる。サイブラス島内で明瞭なる地方型が存すると云ふ事を記述するのは興味深い。此の變化は疑ひもなく異なる混淆種族が其の型を形成せる事による。サイブラス島で山脈を横切り、サラミス灣から北部沿岸に旅行すると此の二つの住民が同一型のものでないことがよく判る事を私は見出した。だが此の島の外の集團よりは之等のものはヨリ緊密なる關係があることは勿論である。

それ故、我々が本土に關する正確な資料を獲得するに至る時、我々が既に若干の正確な測定をなした肉體型を持つる宗教的な黨派に加へて一聯の地方型がまた存する様である。

サイプラス島に於て青銅器時代の人間と現代のそれとの間には何等眼につく差違は存しない。此所で再びその島から本土に涉つて論議する事は合理的である様に思はれるが、現在我々は初期に存在せる、今日サイプラスに發見されるものと同様な住民に勝目がありそうだと云ふ以上何事も云ひ得ないのである。

其の歴史的重要性の爲に西洋には極めて馴染み深くなつた三つの國民の考察が残つてゐる。アルメニア人、猶太人及びアラビヤ人が之である。現に我々の有せる知識だけでも如何に西方アジアに混淆住民が存在してゐると云ふ事が明瞭なものであるかについては、我々の既に見た處である。此の混合住民は明かに國民性ナショナルイテを持ち合して居らない。然しこの様な事實あるにも拘らず、我々の資料が極めて乏しいこと、トルコの小農達の間には時には認め得る一つの型が存し、それが之迄の所人類學者の分類する所となつてゐない事が記憶されねばならない。土耳其人の間には東方の或はタタールの血の痕跡がある様である。サイプラス島に於る土耳其人は確かに體質的に近隣のギリシヤ人と異つた様相を呈して居らない。而して之迄の處如何なる觀察者と雖も、此の辨別が爲し得る様には思はれないのである。

其の他の國民性云々の場合は等しく困難な問題を包藏してゐる。勿論人種的特徴を看破する事は容易であるけれども、之等のものが基本的本質をなすものであるかどうかを決する事は一層困難である。眞のアルメニア人の間には少くとも地中海人として分類されねばならない血の混淆がある事は殆んど疑なき所である。最近オックスフォードに於る解剖學教室に提供されたアルメニア人の頭蓋骨は確かに此の型のものである。然し乍ら此れは正常型ではなさそうである。平均的なアルメニア人は約一八二釐の長さの頭を持つて居り、絶對的にも相對的にも短い。幅は絶對的にも



サイプラス島の農民
(典型的アルメノイド)

相對的にも大きく、平均は確實に一五〇耗以上であり、ある學者は一五九耗以上だとしてゐる。頭形指數は従つて極めて大きく、平均八三又は八四から八七迄あるとされてゐる。頭は大きく高く且廣い。サイプラス島に於て最も恒常的な特徴を持つ一つとして見出された觀骨觀幅は一三六耗である。サイプラスに於ては觀骨觀幅は異なる地方的種別を區別するに役立ち得ぬものと考へられる。鼻は高く相對的には狭い。鼻形指數は少く、鼻自體は極めて突出してゐる。身長は時としては高いが、通常平均値一六五―六七厘の間である。全體として此の型はブルーネットであるけれども屢々ワイゼンベルグがブロンドの外觀として記述してゐる所のものである。眼は通常褐色であるけれども淡褐色のものもある。

一般の認める所では其の型は我々がアルメノイドとして記述した所のもとの緊密に一致してゐると云ふ事が見られるであらう。それ故、フオン・ルーシヤンは、アルメニア人の中でアルメノイドの肉體型は決して普遍的なものではないと判断した如く思はれる。我々は統計的形態に迄換元し得る資料を有してゐないから、彼等がどれ程混淆してゐるかについては現在言明し得ない。勿論、アルメニア人はその名を生み出してゐる地域の外に充分散布して居り、ロマ時代以來數多くの政治に統括されて來たのであるが、此處で問題は彼等自身アルメニア人と呼んでゐる眞のアルメニアに就いてである。

此の國には既に暗示して置いた同一型の短頭型種族の宗教的社會がある。

我々が全體としてアルメニアの國民型の一定條件を語るに正當性を持つものとするならば、猶太人を取扱ふにも等しくそうであらうか。猶太人に關する資料は多くの異なる材料から蒐められて居り、人類學的にはそれ等は既に人々の知る所となつて居る。其の問題は元來論議の對象となつて居り、數多くの違つた意見を産む機會を創つて來た。大

抵の觀察者は猶太型の中に人種の最も持続的な様相の一つを見ると主張してゐる。更に他のものは、猶太型は處を異にすれば變つてゐると考へる。之に對してリブレは次の如く言つてゐる。彼等は無意識的に投ぜられた種族の持つ肉體的特徴を受け入れて來た。」と。ボアス(Boggs)はアメリカ合衆國に移入して來た猶太移民の頭蓋形態が、初期の移民時代に於てすらアメリカ人の標準と一致して變つてゐると云ふ事を強く確信して居た。エリス島に於ける拘留者の住民に與へた肉體的影響は、明らかに永久の結果を持つてゐるのだとも彼は主張してゐる。ドニケは猶太人を二つの型に分け、一つはアラビヤ型に近いもの、他はアツシロイド型に近いものとした。彼はこの型が彼等の住む所の住民から受ける要素によつて、或る範圍に迄修正され來つたものとしてゐるが、斯る場合ですら外曲りの鼻、眼の活力、縮れた毛髮等々の多くの特徴は顯著なる永續性を示してゐるとしてゐる。

之等二つの見解は全く相反せるものである。若し證據がかゝる全く相反せる方法で説明され得るならば、何等かの調和形態が必要である。現在迄の所ボアス教授の興味ある假定を支持すべき證據は何等ないのであつて、それは他の立場に於て強く論争されてゐるのである。最近の著者達に依つて之れまで引用されて來た證據は頭形指數の安定性及重要性を確認し、それにレチユウスの熱心な後繼者達がそれを許容したでもあらう所の地位に就いての誇を附與して居らないのである。例外はあるにしても、世界の各地方から來れる猶太人は通常短頭型の特徴を備へ、その平均頭形指數は約八十一である。恐らく依然として顯著なることは、彼等が總て極めて同様な其の指數の標準偏差を持つてゐること、通例三十四なることである。其れは族内結婚の傾向を持つて之等の社會が、極端に異つた環境の條件に置かれてゐるけれども、同様な人種的均衡状態にあることを示してゐるのである。然し乍ら猶太人は多くの場合、其の頭蓋形態を保持してゐるばかりでなく、また彼等はドニケが言明せる他の特徴を維持してゐるのであつて、其の最

も眼につくものは鼻の形態である。

猶太人は種々の理由から顯著なる生活力を以て、少くも多くの場所で相當の程度に生存し續けた肉體型を永續せしめ得たのである。従つて此の型の起源は特に興味あるものである。猶太人とアルメニア人との間には顯著な相似があることは明瞭であつて、恐らくアルメノイド型が支配的であるけれども、明瞭に猶太人種の構成には他の要素が存在してゐるのである。ワイゼンベルグは猶太人とアルメニア人の相似が歴史時代に、パレスチナではなくカウカサスで混淆することによると提案してゐる。此所でブロンドの要素が導入され、其の結果、セム的な色の黒い上品な鼻を持つたものと上品粗野な鼻を持つたブロンド色のアルメノイドユダヤ人の二つの型があつた。

之迄出版された數値では少くも猶太人には二つの型があつて、之等が明かに異つた混淆物であるとされてゐる。先に平均的頭形指數が八〇—八一である事を私は既に上述したが、ギリシヤ人の頭形指數が略々同様である事は興味深い。然し乍らギリシヤ人のそれを分解して見ると、此の平均値は現實には幻想的なものゝ様である。と云ふのは實際には多少とも不完全に結合されてゐる二類型があるからである。此の二つの類型は地中海人とアルメノイド人である。同様な混淆が猶太人の間に行はれ、其の結果たる指數が合成的數字を現してゐるやうである。大抵の短頭型猶太人（グルシニヤ人及びサマルカンドから派生せる種族）⁽²⁰⁾が最も大きな變動を示してゐることは顯著である。恐らく彼等はアルメノイド族の血と最も大なる混淆を爲してゐるのであらう。鼻形指數は常に極めて變動的であり、氣候的條件によつて變動するので、平均値間の差違はワイゼンベルグの提案にも拘らず、恐らく人種の重要性を持つものではないであらう。

若し我々が猶太人は合成的種族なりとする提案を採擇するならば、頭形指數に於る差違は直ちに重要性を持たない

ものとなる。何故なら更に一層の度を加へる混淆は、斯る混淆がヨリ純粹なる種族の場合に持つよりは一層大なる効果を元來持つであらうからである。頭形指數が猶太人種の最も顯著なる特徴であると云ふことは如何なる意味でも確實ではない。今迄述べられて來た其の他の特徴は殆んど彼等の生存に於て一層永續的なものであるやうに思はれる。彼等が最も屢々現はす特性は確かにアルメノイドの血の優性を暗示して居るけれども、疑ひないことは地中海人の混血があることである。彼等がある程度世界各地に於る他の人種と混淆したと云ふことは確かであり、其の起源の混淆的性質は多くの彼等の變動を説明することゝならう。

第三の國民型、アラビヤ人が次に考察さるべき種族である。アラビヤ語とイスラムとの聯結は此の問題を一層困難ならしめてゐる。殊に多くの人々が彼等自身をアラビヤ人と呼んで以來そうである。尤も彼等は多くの人々がその血管の中に殆んどトルコの血液を持つてないけれども、彼等自身をトルコ人と呼ぶのと同様に肉體型に於ては極めて異つてゐるのである。

セム (Semite) と云ふ語は言語上の意味に於ると同様に人種の意味に於て用ひられて來た。時にはそれも猶太人、時にはアラビヤ人を意味するものとして用ひられ、時には更に一層廣くセム語を語る者を意味するものとして用ひられたのである。他の場合には象の年 (五七〇年) に北アフリカに擴つたアラビヤ人の征服者の子孫を意味するものとして半人種の意味で用ひられてゐる。私は確かにヨーロッパのそれに緊密關係を有する種族たるアラビヤ人と主張する人もあつたし、又殆んど純粹なニグロ族とする者もあつた。他のものは大部分マレー族であつたし、或るものは外見上支那人と殆んど異らないものを現してゐた。それ等總てはセム語を語つてゐた。それ故我々が純粹に肉體的な面から人種を取り扱つてゐる場合、極めて廣い意味を持たせた語は人種の特徴を現すものとしては用ひられ得ないの

である。

今日、猶太人とアラビヤ人はパレスチナに兩々相並んで住んで居り、アラビヤ人とシリヤ人との接觸は常に緊密になつて來てゐる。此所でアラビヤの住民を記述する前にメソポタミヤを論じたい。と云ふのは此の二つの國の歴史が緊密に結びついてゐると云ふ理由ばかりでなく、またアラビヤに關する人種學によつて提起される問題が、メソポタミヤの問題を論ずる事によつて一層容易に理解されうるからである。

既に論ぜられた種族に加へてシリヤに於ても、小アジアに於ると同様に、純粹なアルメノイド型を維持せる一定の宗教的社會が発見されるのである。

更に永くシリヤの住民であつたメソトワリ族集團がレオンテス谷に生存してゐる。彼等は又同様な特性を持つてゐるやうに思はれる。彼等に對して獲得せられた⁽¹⁵⁾測定は殆んど正確にアルメニア人の其れと同様である。シヤントルは後頭部が極端に平たくなつてゐるのに注目を拂つてゐるが、それは此の種族及びアルメノイド族の特性である。彼は此の短頭型はさておき此の種族の總ての他の特性が通常長頭型と關係を持つてゐるものである、と結んでゐる。その陳述は少しく殆んど困難なく理解され得る様に思はれる。

アルメニヤ族の東方及び敵手にクルド族がある。彼等は恐らく極めて異質的な種族であらう。シヤントル⁽¹⁵⁾は彼等を慎重に研究して來たのであつて、彼は其の一般的特性を要約して、狭い顔、強い頬、長身であるが、正確な數値を獲得する事は困難であると結んでゐる。彼等の六〇パーセントは中頭型であるが、地方を異にするに従つて著しい變動を現してゐる。特に彼等が異つた種族と接觸するやうになつた所では其の事が言へる。アルメニアの近隣にあるものは短頭型でありベルシヤ人又はアラビヤ人と接觸した者は長頭型である。彼は又他の論稿に於ては、本質的にアル

メノイド的特性を備へてゐるエンディ人がクルド族であり、コンスタンツアのクルド族が又此の人種に屬してゐるやうに思はれると述べてゐる。之等の種族、或は少くとも其の中の或るものは北方人種に近い事が提案されてゐた。シヤントルは彼等を深褐色の眼を持つた極めて暗色のものであるとして記述してゐる。彼等が又アルメノイド人種と地中海人種との更に混濁物を現はしてゐる事は一層可能性を持つものと思はれる。彼等が明らかに測定不可能な一定の頭蓋變形を行つてゐるといふ事が注目されねばならない。

最近に至る迄アツツリア學者は埃及研究家と同様な興味を人間殘存物に持つてゐなかつた。従つてヨーロッパに達した人骨材料は乏しい状態にある。然し乍ら現在此の分野に於る探險は熱心に、此の問題に興味を寄せてゐる。之等の語が印刷される迄は可成りの資料が使用し得べきものとなるであらう。

然し乍らスーメリヤ人及其の歴史的種族に關する全人類的地位は今迄廣く論議せられて來た。グエンテル博士はドイツ民族⁹に關する彼の最近の論作に於て自家撞着せるものゝ如き學說を述べてゐる。彼は次の如く述べてゐる。

「紀元五千年前、スーメリヤ人は上層には北方人、下層には丸頭型で平たい鼻の内部アジア人を交へた種族であり、此の上層には最も早期の北方人移動があるのである。而してスーメリヤ世界の衰亡は創造的北方種族の枯涸に基いてゐるのであり、此の衰亡はセム語を語る東方種族の移殖によつて先觸れされたのである。更に此の衰亡は東洋のセム語を語る種族の移動に依つて始められた。例へばスーメリヤ人種の一つ上の階級を形成してゐた地中海人種が之である。」
更に彼は續けて

「紀元二千年前迄、小アジア、メソポタミヤ、及びアルメニヤは人種的には一つの統一體であつて、恐らくはアルメノイド人種たる Vorderasiatische Rasse (前方アジア人種) の住んでゐる所であつた。北方人の血が交つたのは丁

度此の頃であつた。」と。北方型の血は二千年経つて導き入れられ、フィツジャアの東方人種と混淆する様になつたと彼は信じてゐるけれども、此の陳述は再び東方地域の住民を無視してゐるのである。

所で若しグエンテルの立場を正しく理解するならば、彼はスーメラヤ人が本質的には、アルメノイド人種に屬してゐるものと信じてゐたやうである。彼は唯、内部アジアの影響の可能性を疑問を以て述べたのに過ぎなく、此の影響が如何なるものであるかについて彼の考へた如くに思はれるのである。だが彼が平たい鼻を持つた種族に言及してゐるのは、黄色人を念頭に留めてゐた事を暗示するものである。

ホール博士⁽⁶⁾はスーメラヤ人がインド人に其の起源を持ち、即ちドラビダ族に近いと云ふ極めて異つた假説を主張してゐるが、思ふに彼の説は顔面特徴の相似に基礎を置いてゐるのである。エリオット・スマイス⁽⁷⁾は次の如く述べてゐる。古いバビロニアの彫刻は最も初期のメソポタミヤ及びバビロニアに侵入せるセム種族がアルメノイド型の鼻や其の他の特徴を具へてゐる事實を表はしてゐると提案した。後に彼は北シリアのアルメノイド族がユウフラテス河を降り一層文化を存するスーメラヤ人を征服したのだと主張してゐる。

彼の説はホール博士により自家撞着せるものとして論難された。然し乍ら彼はメソポタミヤに於ける二つの型、即ち初め入つて來たスーメラヤ人(スマイス氏は之を眞の文化を持ち來りたる者にして、褐色人種に屬すると信じてゐる。)と後のアルメノイド族(文化を持たざる征服者、セム族)とを對照せんと欲してゐる事は明瞭の様に思はれる。

體質人類學は不幸にも明確にセム人及びスーメラヤ人について語り得ないのである。然し乍ら、此の狭谷の初期の住民が如何なる人種型に屬してゐるかについて述べることは可能である。尤も此の證據が現在極めて乏しい事は遺憾に思はれる。最近に至る迄、此の地域から復活せる最も初期の頭蓋骨はカーケミツシの城跡から取られた初期青銅器時

代のものであつて、ウーレイによつて齎されたものである。其れは疑ひもなく地中海型に屬してゐる。

一個の頭蓋骨だけでは其の國の人類について我々に告げ得る所殆んどないが、斯くの如き比較的遠い時期に於てすら、地中海人がユーフラテスの狭谷に發見さるべしと云ふことを示してゐるものとして價値を持つてゐる。オックスフォード大學及びシカゴ、フィールドミュージアムの合同探險の發掘は一層稔り豊かな結果を齎した。相當數の頭蓋骨が發掘されたが、之等に基いた判斷を下すと、明らかに地中海群に屬してゐた。顯著に現はれてゐる特徴は頭蓋指數が低く、大部分のものは七〇以下である。カーケミツンからとれた頭蓋骨が既に同一の型に屬してゐる事を述べた。そして之は結局地方的な變異たるもの様である。之に就いては之等の種族の頭蓋特徴の詳細な分析を加へた充分な證據があるのである。

之等の長頭種族にかへて加へてキツンから發掘された墓穴は又アルメノイド型として記述さるべき第二の廣頭種族型の殘存物を生じてゐる。之等二つの型は之等の墓穴の屬せる時期に兩々相併んで存在してゐたものゝ如く思はれる。ランドンは其れが恐らく埃及に於ける初期王朝時代のものに一致してゐる様だと私に語つてゐるが、更に彼はアルメノイド族はスーメリア人及び長頭のセム人であると提案してゐる。其の様な籠罩的な陳述を立證する證據は不充分であるが、歴史的地盤に立つて考察すればスーメリア人が人種的には大部分アルメノイドであつた事は可能であらう。遺跡として残つてゐるスーメリア人の特徴の一つは傾斜せる眼窩であり、之がアルメノイド型に屬するものなることをランドンは指摘した。セム族の侵入者が南部アラビヤから到來し、之等の種族が殆んど長頭型であつたことは歴史的に見て眞理である。然し乍ら全メソポタミヤの原基的住民が此の長頭型の原埃及人であつたと云ふ第三の可能性がある。

此の型の分布に關する現在の知識から判断すれば之は最も可能なる提案である如く思はれる。だから我々がスーメリア人に就いて語る場合には、我々は體質的統一體についてよりは寧ろ文化的統一體について語つてゐるのである。尤も記念物の證據から判断するならば優れてスーメリヤ型のものがアルメノイドであつたと云ふ事は確かなやうに思はれる。

ベルシヤ灣沿岸の低いメソポタミヤ地方、即ち高温地方には、古代にネグリート族に近い住民の殘滓があると、ヒュウズイング⁽⁸⁾及其他の學者が提案した。其等の種族の特徴は其の近隣種族と異つてゐる。今日其の子孫は同一地域に住んで居り、ニグロの奴隸の子孫と随分混淆してゐるとヒュウズイングは提案してゐる。之以上の證據としては別がないが、とも角、原始埃及人種に屬する頭蓋骨の中にニグロの特徴があることは極めて屢々困難に遭遇する。更に第二に今日存在してゐるニグロ奴隸は其の種類の最初の特徴を變化されたものかも知れない。西部アジアに決定的に明かな土着ニグロイドが存在すると云ふ事は大なる興味をそゝる問題である。

メソポタミヤ住民の體質型は初期の歴史の時期以來、本質的には變化して居ない様に思はれる。リブレはアルメノイド型が今日メソポタミヤ地方に生存してゐると述べてゐる。之が正鵠を得た説明だとするには我々の有する材料は否定的である。メソポタミヤに於ける一定の寧ろ孤立的人種集團が爾後の住民の場合よりは一層其の純粋度を保持することが眞實であらう。住民中の支配型は地中海人種である。其所には又可成りのアルメノイド型の血の混入がある。我々はリブレが嘗てメソポタミヤ地方に存在したと暗示せるが如き同質的アルメノイド族があると想像し得べき證據は何等存してゐないが、彼が人種的殘滓として記述せる孤立的種族は恐らくは一層後の時代に到來せる種族であらうと思はれる。然し乍ら此の地域に關して我々の存する證據が未だ不幸にも極めて不完全であり、従つて進歩的結

論と雖も試験的な性質を持つてゐるものなる事は認められねばならないのである。

河の流域の東はアルメニアとイラン高原を結ぶ連絡地となつて居り、人種學的には此の地域は最も大きな興味を抱かせる處である。尤も人種學的境界を一線を以つて劃する事は困難であるけれども、次にアルメニアと南東及び北西イングスとの間の地域及ツラン低地と北部及南部の海との間の地域の住民に就いて論ずることにしよう。

アラビヤ人に關する全人類學的問題は極めて明白にセリグマン⁽²³⁾に依つて論ぜられた所である。彼はアラビヤを北部、中部、南部の三部分に分けた。第一の北部アラビヤはシリヤ沙漠の縁に迄延びて居り、大部分は遊牧人の住むオアシスのある沙漠である。牧畜には不適當であるけれども一年の中の或る時期には動物の食物が可成りある。私は此の地域にその生涯の殆んどを送つたアラビヤ人を知つてゐる。此の地域は動物の生存が可能であるけれども、各々の遊牧民社會は彼等の有する水の権利保持に就いて極めて神經質になつてゐる。

ヘジヤス、ネエド、エラズルを含む中部アラビヤは石のある草原であるけれども、聖都の肥沃な地域を含んで居り、廣く沖積土が擴つて肥沃な河原となつてゐる。

最後に南部アラビヤはエーメン高地、アシル、及びハドラムイトから成つてゐる。之等のものは人も殆んど住まない南部沙漠を圍んで居る。我々の人類學的資料は實際には南部と北部に限られてゐるのである。

セリグマン (C. G. Seligman) は證據を吟味した後北部アラビヤには長頭型が南部には短頭型が支配的であると云ふ結論に到達した。彼はこゝにメソポタミア文化との接觸があり、南アラビヤから來れる短頭型種族が頭蓋形態及顔面特徴に於てメソポタミア型と一致してゐると云ふ事を提案してゐる。彼は之が二千年前のものであつたと云ふ事を貨幣の證據に基いて發見してゐる。彼は更に我々の現在の研究目的外に屬する北アフリカのアラビヤ型を論じてゐる。

る。だが然し、彼が短頭的要素がアラビヤの影響に基くと云ふ事を信じてゐた事は注目されねばならない。然し乍ら私は既に述べた様に、此の丸頭型のものは早期に齎らされたものであると考へ、後に侵入して來たものは一つの重要な影響を與へたものと考へる。

最近メソポタミア地方で發見されたものはセリグマンの論作に重要な光を投げ與へてゐる。キシからとれた丸頭型蓋は彼が南部アラビヤからとれたものに基いて形成せる種族に極めて似てゐる様に思はれる。其所で之等二つの地方は初期には一連の關係があつたものらしく考へられる。だが然し南部アラビヤの住民と異り長頭型のものがキシの大部分に存在してゐる様に思はれる。尤も現在我々が有する證據は餘りにも乏しい。

セリグマンはアラビヤに於ける丸頭型的要素が恐らくメソポタミヤを通じて達せられたものと考へて居る。之は極めて妥當な提案のやうに思はれるけれども、假令現在の北アラビヤ人がその特徴に於て此の要素を持つてないにしてもそれでは何故に北地からは來なかつたのであるかについての證據は何等ないのである。然し現在、我々が更に一層の證據を獲得する迄は問題解決に關する極めて試験的な提案以上の見解を述べること、及び丸頭型の要素が來りたる二方向に於て丸頭型の證據が豊富にあるが、住民は北アラビヤに支配的に長頭型のものが認められると記述することは不可能である。

セリグマンが與へてゐるものは之等丸頭型が大部分典型的なアルメノイド族である事を明瞭にしてゐる。北部アラビヤの住民は南部の住民程困難ではない。住民に支配的な要素は本質的には褐色人種であり、其等のものは殆んど全アラビヤの原住民であつたのである。

不幸にも我々は現在此の二つの型が、どの程度に混淆したのかを示すに十分な證據を握つてゐない。従つて此所、

アラビヤに於ける問題は小アジアに於る人種學的問題に極めて類似してゐるのであり、二つの同様な人種系統が又關係づけられてゐるのである。我々がアラブと云ふ名辭に何等かの人類型をはめ込み得ないといふ事は餘りにも明瞭なものであらう。我々はアラビヤからメソポタミヤに入つたセム族の侵入から、セム族又はスーメリヤ人の型が何であつたかについては論じ得ない。何故ならば、異つた型が各々の地域に支配的であると云はれてもメソポタミヤにはアルメノイドと地中海人とが存在し、北部アラビヤ及南アラビヤにも二つの型が存するからである。

第二節 中東の諸種族

此の節の主題を構成する地域は地理學的には過つて提議されてゐる地域である。政治的に云つて、其所には二つの獨立國と、ロシヤ及び印度の一部を包んでゐるけれども、人種的には極めて便利にして興味ある單位なのである。それ故此の人種學的對象となる統一體の住居せる地域を名付けて、中東と呼んで置く。だがその限界は通常その名前によつて呼ばれてゐるものを越へて居り、中東の西部の一さいを含んでは居らない。此の説に於て私はベルシヤ、バルチスタン、南方のアフガニスタン、及びトルコマン共和國及びウズベツク共和國の如き中央アジアに於ける政治の動搖する状態の下にある所の地域を論議したいと思ふ。一般にその地域はベルシヤ灣頭からカスピ海の最北端及びインダス河口からカシガルに至つて擴つてゐる地域として定義されるであらう。南の境界はカスピ海及び北シル・ダリアである。カスピ海とアラル海との間には何等の境界もない。

若しベルシヤ灣頭にゐるネグロイドを包めるならば、黄色人種、白色人種、褐色人種を一つに集めた處となり、アジア人種學研究の學徒にとつては重要性を持つてゐるが、之を全體として慎重に研究する事は最近爲されて居らな

い。尤も古い人類學的研究では、ウチフアルヴィの研究が特にこの地域とこの近隣の種族との關係を示さんと試みた事がある。

トルコマン草原地帯はさておき、大抵の地帯は高みになつて居り、パミール高原よりも大きな高さとなつてゐる。その大抵は沙漠であり極端に暑い。尤も或る時期及び或る地域では常に一層高みとなつてゐる。地域の或る部分はツンドラの條件に酷似してゐる。チグリス・ユーフラテス兩河谷の東及び西アジアの高地と中央アジアの高地とを結び付ける所にはその大部分の地域に涉り、時には不規則に、時には平行に走つてゐる山嶽地帯を構成せる大平原地帯がある。中央高原は互ひに廣大な平原によつて分離されて居り、西アジアの高地の中低地帯は河谷からなつてゐる。その地帯は北はトルキスタン草原により、南はオーマン灣、ベルシヤ灣によつて境界づけられてゐる。西方には沖積層や小丘、森林、一聯の限られたオアシス地帯の連結がある。その邊境地帯はイラム國及び昔のオアシス、現代のベルシヤを形成して居つて、そこには内陸平原及び高地谷が見出される。沙漠が横はり、その大部分は鹽分を含んで居るが、銅器時代には人口を支へてゐたものに相違ない。草原地帯の境をなす北部地域はまた初期の文明に一つの役割を演じた。我々はアスカバッド^{Scabard}に近いアナウの地點から、この事を知つてゐる。尤も此の地帯はトルキスタンの境を越えて存在してゐる。北東地方にはアフガニスタンの高地帯があり、ヒンヅークシ及びパミール高原と密接に繋つてゐる。

アフガニスタン及びバルチスタンは殆んど沙漠地帯から成立してゐる。バルチスタンには殆んど何處にも住民が存在せず、北西部及びシンド境を除いては耕作の見るべきものがない。アフガニスタンに於ては肥沃な土地が一層好適な谷をなして見出される。人類學的觀點から見て環境的條件に於けるその對照は極めて興味あるものである。その國

の沙漠的性格は特に主張されねばならないものである。近東と印度との間のこの不健康な地帯を通じて疑ひもなく人種の聯關が存してゐる。ハンチントンの説を持つ困難な問題はさて置き、以前よりは現在に於てより乾燥した状態を想定する事は必要である様に思はれる。印度と西部地帯の境界は我々の研究目的上極めて大なる興味がある。その境界の北部はアラビヤ海の沿岸にあるメ克蘭の低丘陵に至つてゐる山嶽地帯によつて守られてゐる。インダスと丘陵との間には二百哩の隔りを持つ小地帯がある。その地帯は極端に乾燥してゐる。尤も水のある所では強度に耕作を加へられてゐる。植物は南から北に行くに従つて減退して居り、丘に近づくにつれてその景色は岩塊から構成されてゐる。夏に氣温は極めて高く冬は寒さが特にひどい。ピンセントはこの種族の生存手段と若干の穀物、若干の燃木、小川からすくはれる水、として記述してゐる。

コイマリクシヤからナシキ、更に南東に延びて印度に至る極めて往昔の道路がある。カイバー及びボランの通路はさて置き、若干の山嶽地帯を通過する路がある、そこには長い帯狀をなした峰が續いて居り、高さ一萬呎である。沙漠や山脈が道路を防衛して居り、今日往昔の種族移動が行はれた路を跡づける事は困難である。

アフガニスタンの北にトルコマン族の家郷がある。彼等の生活してゐる環境は慎重にヤボルスキー^(W. Javoski)によつて記述されてゐる。彼等はベルシヤの山嶽地帯とアフガニスタン及びアラル海からカスピ海に延びてゐる北西境界たるオクセスとの間の大なる地帯を占めてゐる。實際にこの地域の全體は草原地帯であり、この九割までが平野、後の一割は山又は丘陵である。この地域にある四つの河はアマダリア河、ムルガツト河、ヘルリツド河、及びアトレツク河であるが、後の二つの河は殆んど水がなく、此の地域の基調は水である。草原地帯は大部分典型的な草原植物を持てる黄土及び砂から成つてゐる。アマダリアとシルダリアの間にあるトルキスタンのジュニアブは同様な特質を持

つ草原から成立つてゐる。

謂はゞこの地域全體の楔石はバミール高原即ち世界の屋根によつて造られてゐるのである。此の全地域は一聯の平
行にして深淵な谷から造られてゐる。その高みは平均一萬一千呎であり、切り立つた山は之より更に數千呎高くなつ
てゐる。此の峻嶒な地域に異れるアジア種族の會合點がある。

此の全地域に北方種族の代表型或はもつと正確には原北方型がトルコマンの間に見出される事確かな様に思はれ
る。その住民の大部分は確かにアルメノイド型、又はアルプス型であり、一方地中海人に近い種族を跡付ける事が出
來る。その東に於いて黄色人との接觸が見られる。

現在此の地域の初期の住民に關する證據は殆んどない様に思はれる。私が後に示す様にトルコマン族の未分化的特
性は、彼等が初期の住民のまゝであるが、恐らくは全體としての此の地域よりは草原地域に一層縁がある事を示して
ゐる。

アルメノイドの特徴化された地域は恐らくトルキスタンであつたらうことが既に提案されてゐる。確かにアルメノ
イドは此の地域に發生したやうである。此の事を考慮に入れずに現在の分布を考へる事は困難なやうに思はれる。此
の地域から、恐らくは氷河期の終り頃、丸頭型の種族が歐亞大陸の中央線に沿つて流れ出たものゝ如くである。兎も
角、彼等が中央大斷層の北部に發生したと云ふ事は殆んど疑ひなき所であらう。而して其れに沿へる分布は其の發生
の母胎が北に程遠からぬ所であらう事を暗示してゐる。此の丸頭型の運動は早期に屬してゐるものと考へられる。中
央アジアの住民は現在ある所のものとそう違つてない様に思はれる。大民族移動は紀元前三千年頃に行はれたのであ
つて、ハツドンは之に就いて此の地域の現在住民の特徴のあるものが其れに基いてゐると考へてゐる様である。だが

然しかゝる問題は考古學的な研究を可能ならしむる多くの資料が獲得される迄は、純粹に推測の問題として留めおかれねばならない。

此の地域に關する人種學は現在特に困難である。其の理由は斯うである。此の人種は非常に混淆して居り、未分化な種族にあるものと考へられるからである。ウジフケルヴィは二つの型、即ち長頭型と短頭型とを別けてゐるが、集團は更に分化さるべきもの、如く思はれる。

長頭族は地中海褐色人種から派生物を含んでゐるものと考へられる。其の或るものは明らかに所謂、印度の前ドラビタ族に近似せるものである。ハツドンは之等の種族がスシアナにも居た痕跡があると信じて居り、ホールデイツヒ²はバルキスタンに同様な型があると提案してゐる。然し乍ら、此の種族の正確なる位置は現在の所では殆んど知られてゐない。他方では、現在の西部アジアの褐色人に近似せるものがあることの證據が豊富にある。而して恐らく之等兩集團の差違は本質的なものではないものと思はれる。斯る種族はベルシヤの南西部に發見され、殊にパーセポリスの近隣のロリ族が之である。實際、又此の型はベルシヤ人の間で極めて一般的なものと云はれるかも知れない。

アゼルバイジャン族も亦恐らくは同一集團に屬してゐるであらう。然し乍ら、之等一切の場合に於て、何等かの混淆が行はれてゐるものと考へる事が出来るであらう。其の混淆は原北方人の血の存在せることによるのである。この原北方人の特徴は身長高く、骨太であることである。トルコマン草原地帯に於て我々は此の型が極めてよく現れてゐることが判るのである。ヤボルスキーは之等の者は身長高く(約一六九糎) 男性の頭形指數は七六であることを發見した。尤も此の數値は極めて變動的でありその限界は六九及八二である。頭は極めて長く且大きい。眉間後頭長は一

九三耗、幅は一四六耗である。眼の褐色の者が四五%であり、一四%のものは淡灰色であることが判つた。此の地域に於る二つの長頭族集團を明確に識別する事は困難であるが、其の差違は極めて明瞭である。

此れと同様な型は、又東部近隣高地に見出されるものと思はれる。ヒンズクシ及アフガニスタンの住民の間に、又身長の高い長頭型の人間が見出される。其等のものはインドアフガン、インドアリアン又は其他の名前で呼ばれてゐるけれども、一般的には我々はそれをトルコマン族から分類して考へるやうに思はれる。恐らくは其等のものも混淆したのであらうが、にも拘らず其の主要特徴は變らずに残つてゐる。

教科書の中に現はれ研究家の混亂を惹き起しがちな術語に注意が拂はねばならない。通常トルコマン族は主としてイラニヤ型に屬するものとされてゐる。だがその後は若干相異つた意味を包含してゐる。リブレは其れを地中海型と同様なものとして定義してゐる。然し乍らウジアルヴィは既に其れを丸頭型種族を意味するものとして明確に定義してゐる。ハッドンは其れより古い用語に立ち返つて使用したのであるが其れが用ひられねばならないのは此の意味に於てである。然し乍ら、リブレの意味に於てすら、其れは全く充分ではないのである。何故ならそれは長頭型種族の異なる型を明確に區別する事に失敗してゐるからである。

私はハッドンの付けた原北方人と云ふ名前を使用してゐる。多くの學者殊に最近、マイルス、ピック等は草原地帯に注意を拂つてゐる。此のトルコマン草原地帯では條件はよく整つてゐるからであるが、此の草原地帯が人種發生の母胎的草原であつたかどうかは現在論ずるに困難である。

此所の住民の中には極めて重要な丸頭型的要素が残つてゐる。丸頭型種族は平野に於けるよりも高地に豊かに存在してゐる。ヒンズクシ及パミール地帯に於ける住民は極めて丸頭型のものであり、特にタジク族の如きもの、

間にそれが見られるのである。身長は屢々高く、多くの場合、原北方人との混淆によるものらしい。皮膚の明色の程度も亦夫々異つてゐる。ウジフアルヴィに依つて興へられた數値に於ては、高身長と肌の美しさとの間には決定的な相關々係があるやうに思はれる。之は原北方人の血との混淆があると云ふ提案によく一致してゐる。大抵の丸頭型種族はフェルガナのタジク族及びバルチヤ族の中の或るものである。

之等の丸頭型種族と我々が既に研究して來た所の種族との正確なる關係は可成りの困難さを現してゐる。頭の極形態はアルメノイド人の血の交つてゐることを暗示してゐる。然し乍ら他の多くの場合に於て、其の種族は眞のアルプス人種と一線を以つて區別さるべき特徴を持つてゐるものゝ如くである。

極めて屢々皮膚の明色が現はれてゐるのは原北方種族との混淆があつた事によるものと思はれるが、多くの場合に於て、比較的白い種族は他の原北方種族的特性を持つたものはゐないのである。然し乍らヨーロッパに於いて少くもアルプス種族は相對的に白いものなる事が想起されねばならない。それ故、此の白さが中央アジア地帯に於いてさへ、彼等の特徴の一つではないかも知れないと想像する事には何等現實的な困難は存しないのである。然し乍ら現在、二つの丸頭型種族集團の存在を我々の手に握つてゐる證據が指摘してゐるものと思はれる事實を考慮することは困難である。其の困難から脱れ出る途は二つあるやうに思はれる。一つの可能なる解決は、我々が同一人種から出た二つの異なる分岐種族の混淆を此所で持つてゐると云ふ事である。他の解決策は、パミールに於て二集團の未だ分化せざる原基種族の生存殘滓があると云ふことである。換言すれば、イラニア族を原アルプス族として記述せねばならぬ、と云ふことである。此の丸顔型はイラニアと云ふ名前を當然受くるべきものである。ウジフアルヴィ(B)はバルチヤ族及山嶽チーク族とは中央アジアに於ける此の型の最も純粹なる代表物であると考へてゐる。彼は其の三つの最も重

要なる特徴に注意を引いてゐる。中庸の身長、栗色の毛髪、極度なる短頭が之である、彼等は平原に於けるよりも山嶽に於ける方がヨリ純粹である。而して實際、平原に住むタジク族は原北方種族の血が極めて多量に交つてゐる。

私は之迄専ら住民中西部的要素として記述されるものを取り扱つて來た。我々が考察してゐる地域の東には、此の要素が支配的なるものとして記述され得るであらう。少くも文化的に言ふならば、全地域の歴史に於てそれは一つの重要な役割を演じてゐるのである。若し中央アジアに於けるトルコ族の一般的地位が包括的に吟味されるならば、問題は一層、明瞭なものとなるであらう。人種學的證據は既にツアツプリカ⁽¹⁾ (Cypriota) によつて極めて慎重に要約された。彼女はイランのトルコ種族を次の六集團に分けてゐる。

- (一) トルコマン族 (既に論ぜられたもの)
- (二) ファーガナ、シルダリヤ、トルキスタン地方に居るサルト族。原初イラニア族とウズベツク族との混淆物とされてゐる。
- (三) タランチ族又はイリクター族
- (四) ウズベツク族、シルダリア、ファーガナの部分に見出され、キバ、ボカラのカナテに見出される。
- (五) キベハー族
- (六) カラカルベツク族

此の様な分類が我々の眼前に横はる困難な問題に相當な光明を投ずることは明らかである。我々はウズベツク共和國によつて提案されてゐる人種集團を除去しなければならない。ウズベツク族は比較的少く、單に支配階級を現はしてゐるに過ぎない。サルト族は明らかに混淆である。その殘存者に關する證據は殆んどないものゝ如くである。だが

其れ等はツアンプリカがカラキルギツスとして記述してゐるものと同様な系統に屬するものゝ如くである。之等は充分長く知られて居り、後にも記述する所であるが、黄色人に近い。それ故我々が中央アジアの人種學を論ずる場合にトルコと云ふ名辭を無視し得る様に思はれる。イワノフスキーによつて與へられた中央アジア型の記述はアルプス型と原北方型との血の交りの記述である様に思はれる。それは中央アジアのトルコ及び中東の種族の間に廣く擴つてゐるものである。

第四章 關係文獻

- (1) Myres, J. L. *The Dawn of History*. Lond., 1911.
- (2) Luschán, F. V. *Huxley Lecture*. J. R. A. I., 1911, XLI 241.
- (3) Hall, H. R. *Ancient History of the Near East*. Lond., 1913.
- (4) How, W. W., and Wells, J. A. *Commentary on Herodotus*. Oxford, 1912.
- (5) Boas. *Descendants of Immigrants*. New York, 1912.
- (6) Myres, J. L. (Dodecanese) *Geogr.* Lond., 1920, LVI, 329 and 406.
- (7) Luschán, F. V. (Early inhabitants of Lycia) *A. f. A.*, 1891, XIX, 31.
- (8) Hasluck, F. W. J. R. A. I., 1921, LF, 310.
- (9) Penke, H. J. E. J. R. A. I., 1916 XLVI, 154.
- (10) Buxton, L. H. D. *Biometrika*. Camb., 1920, XIII, 92.
- (11) Chantre, E. (Armenians) *Bull. Soc. Anthrop.*, Lyons, 1896.
- (12) Weissenburg, J. (Armenians and Jews) *A. F. A.* 1915, XIII, 383.

- (13) Chantre, E. *Recherches Anthropologiques dans le Caucase*. Paris, 1885-1887.
- (14) Zichy, Count de. *Voyages au Caucase*. Budapest, 1897.
- (15) Chantre, E. *Bull. soc. Anthrop.*, Lyons. [Necropolis de Sidon.] 1894.
[Metwali, Bakvvari, Yesidi.] 1895. [Armenians.] 1896. [Kurds.] 1902.
- (16) Hogarth, D. G. [Hittites.] *J. R. A. S.* XXXIX, 408.
- (17) Messerschmidt, L. [Hittites.] *Smithsonian Rep.*, 1903, Washington, 1904.
- (18) Weissenberg, J. A. f. A., 1895, XXIII, 347. [South Russian.]
- (19) Weissenberg, J. [Yemen.] *Z. f. E.*, 1909, XLI, 319.
- (20) Weissenberg, J. [Samargandi.] *Mith. Anthrop. Ges.*, Wien, 1913, XLIII, 257.
- (21) Hauschild, M. W. Z. f. E., 1921, LII-LIII, 518.
- (22) Salaman, R. N. *Journ. Genetics*, 1911, I, 273.
- (23) Seligman, C. G. J. R. A. S., 1917, XLVII, 214. [Bibliography.]
- (24) Bury, G. W. *Arabia Infelix*. Lond., 1915.
- (25) Christian, V. *Anthropos*, 1919-1920, XIV-XV.
- (26) Pösch, R. *Osten und Orient*. Wien, 1920, III, (1), 729.
- (27) Danilov, J. [Persians.] *A. f. A.*, 1900, XXVI, 872.
- (28) Husing, R. [Iran.] *Mith. Anthrop. Ges.*, Wien, 1916, XLVI, 233.
- (29) Bogdanof, A. P. [Iranian Colonies in Turkestan.] *A. f. A.*, 1900, XXVI, 800.
- (30) Javorski, W. [Turkoman.] *Mitl. Acad. Anthrop. Soc.*, Petrograd, 1895, II, 145.

(31) Ujfalvy, C. F. Essai d'une carte ethnographique de l'Asie centrale. Paris, 1896.

(32) Troll, J. Individual Aufnahme central asiatische Eingebornen. Z. f. E., 1890, XXII (226).

第五章 印度

アジアの如何なる部分に於ても人種學者が印度ほど地理的特徴を研究する必要のある所はない。之までアジアの若干の部分については人種學や地理學が極めて慎重に研究した所がある。それ故私は之等の問題を可成り扱つて見た。その理由は本質的な興味をそゝるからであり、亦此の問題についてなされた仕事の量の少いことによる。

印度は廣大な菱形を呈して居り、言語的には二つのものに分たれてゐる。面積は一五〇萬平方哩以上もある。北面は世界最高の山嶽に境界付けられて居り、南面は海に面する。ヒマラヤでは、氣候は北極地帯の其れに近く、北西部の沙漠地帯は高温である。密林地帯は世界のどの國にも劣らぬ湿度を持つてゐる。

斯くの如く印度だけで極寒と極暑、乾と濕の多様性を持つてゐるのである。そこには最も可能な氣候のコンビネーションがあり、季節にしたがつて場所的には可成り相違してゐる。適度な氣候條件は全體として稀であり、印度の多くは熱帯圏外にあるけれども大部分、氣候は極端な型を呈してゐる。

印度の政治的境界はアラビヤ海岸のメクランから雲南、メコンに至つてゐるけれども、此所ではもつと狭い境界を觀察することにする。人種學的には北方のキルギツトから河口に至るインダス河の線に沿へる印度の北西境界を取り扱ふ事が一層便利である。

東方の人種的境界は大雑把に云つてチタゴンから北東方向に走れる山脈に、即ちブラーマプトラとイラワジを分割する所のものに沿つて走つて居り、政治的名辭で云ふならアツサムの東方境界が之である。それ故、私は北西邊境地

方及びビルマは除外し爾餘の印度を含めてゐる。

此の章で研究される地域は北部のヒマラヤから南部のケーブコセリンに涉つてゐる。而して此の地域は分れて二つとなるが其の境界はヴィンジャ山脈である。南部に入る唯一の實際的經路は北部を通じてあるが、其の南部に關する地理的知識は地理學的にも人類學的にも異つて居り、切り離された取り扱ひを受けて居る。

印度の北部は地表が高みになつて居る。此の中最高のヒマラヤ山脈は現實に北部境界を劃して居り、常にアジアに於て通過し難きもの一つを形成してゐる。此の廣大な地帯は印度平野を今以つて荒涼たる中央アジア高原から遮斷してゐる。此の地帯内では即ちスリナガルからブラマプトラの狭谷に到る迄、人は殆んど通過する事が出来ないものと思はれる。たゞチャムピの通路によつてのみ、便利な接近があるけれども、此の通路によつてすら、中々容易な經路ではないのである。それ故、印度に到る經路は北西邊境とアッサムの境界を形成する比較的容易な地帯である。住民中にある西方の要素は北西邊境からアッサムの境界を越えて來りたるものに相違ない。

ヒマラヤの直ぐ南には印度ガンヂス平野が横たはつてゐる。其所にヒンドスタンがあり、ヒマラヤ系の一部、大沖積平野、マルワ及びアンデルクンドの中央高原が含まれてゐる。山嶽地帯は西方に一連の肥沃なるカンシミール、クルウ、デエラダンの峽谷によつてアジアの内部と直接連絡してゐる。けれども、山嶽は東方に向つて、テライの不健康地帯によつて低地と遮斷されてゐる。

平原は殆んど全くの沖積層から出來てゐる。インダス河はヒマラヤの北に起源してゐる。だが其の長さ一、三〇〇哩は印度内部に屬して居り、印度では河流は南部に方向をとつてゐる。ガンヂス河は殆んど一、五〇〇哩、山脈に平行して流れてゐる。海に流れ込む前に此の河にはブラマプトラ河が合流してゐる。此の兩河間に、之等の河は五〇〇〇

○平方哩のデルタを形成してゐる。二つの大河系はアラバリスによつて分離されて居り、その山の西方に沙漠地帯があるのだが、以前はハクラー河が流れてゐた。

二つの峡谷の氣候は極めて大きな對照を與へてゐる。インダス河は高温乾燥せる地方を通つて流れてゐる。住民は此の地域に於て密度少く、ガンヂス河谷と強い對照を構成してゐる。ガンヂス谷の風土は濕氣があり、植物は繁茂し、平方哩當りの住民数は極めて多い、降雨量は北印度の人類學を專攻せる者の關心を引く所の最も重要な特徴の一つを構成してゐる。而してクルークが此の地方の住民を三部分に分けてゐるのは可能である。即ち降雨量の不十分な地方に住む者、デルタ地方に住む者、及び高峡谷の持つ中間的條件の下に住む者が之である。殆んど大部分の者は湿度の高い沖積地帯に、即ちデルタの中にか、或は其のデルタの上流の峡谷かに生活してゐる。而して大部分の住民の職業は農業である。

印度の南部と北部とを分けるものは深い溝梁であり、此の溝梁をナルバタ河が流れてゐる。

此の様にヴェンヂヤ山脈はヒンドスタンの南部境界を劃してゐる。其の分れ目は全體として丘陵地帯によつて劃されてゐる。東方にはマハナジイ河が西方のナバタの其れと同様な境界を劃してゐる。半島は一つの地理的構造を持つて居り、其所に住む人間の構造及型の點で他と異つてゐる。然し乍ら、ヒマラーヤ植物と云ふやうなある奇妙なものがある。その境界は北部のヒンドスタンに於て遮斷してゐるほど絶對的なものでない。西部及び中部に於る通路は容易であり、侵入者にとつて容易な通路を構成してゐる。嘗つてマラツタ族の南方發展によつて著しく浸蝕された事實がある。東方では問題は何か異なるものがあり、チヨタナグプール及びサンタルパルナガスは密林種族が避難せる場所を形成してゐる。

北部の大抵の地方は沖積層であるけれども、デカンは高く臺地を成した高原を爲して居り、それは西から東にスロップをなしてゐる。ナルバタ河、タプテイ河等の例外はあるけれども、總て重要な河は北を限界として、ベンガル灣に注いでゐる。西ガート山は西方で高い斜面をなして居り、唯、山と海との間に小さな平野地帯を残してゐるにすぎない。其れより東の平野は一層廣く、南東にはマズラ、ラムナド、ティンベリ等の比較的廣大な平野がある。

ガード山自身は高原の一般的水準以上にあり、一般的地表は平らな水準として記述されるであらう。其所から一連の孤立した丘陵がある。西の境の地表はガート山から平原に打擴つてゐる山嘴によつて種々の變化を與へられてゐる。此の高原地帯は南方にニルギリの丘によつて境界付けられてゐる。

印度の南部に於て人類に影響を與へる自然的條件の大なる多様性に對しては、かゝる若干の考察だけでは充分ではない。北部に於るほど極端な氣候條件を持つた所は何所にもないけれども、西ガート山は南西モンスーンを吸收するブランケットを構成して居り、沿岸地帯は可成りの雨量があるが、高原地帯は極めて少い。ガダワリの北方に當る丘陵地帯は年平均六〇吋以上の降雨量がある。植物はまた可成りの相違があり、景觀にも差異がある、住民はガンヂス程稠密さもなく、又沙漠地帯程稀薄でもない。丁度其の中間位である。一般的に云つて異つた地域の差違は均一なもの地方的なものとされ、印度の南部は大部分の支那本土と比較され得る程の人口を持つて居る。

北部境界は既に論じた所である。同時に南部境界を論ずる事が一見、一層論理的なものに思はれるであらう。だが私は此の議論を最後まで保留しておく事にする。何故ならばこの位置は一層明確にこの國の特別な地位を齎してゐるからである。南印度は袋小路でありその唯一の出口はセイロンと云ふ相對的に小さい島であり、人種學的にも緊密な關聯を持つものである。一度び印度ガンヂス平原から來りたる種族には彼等が來りたる方向に歸らざる限り何等の

逃げ路もないのである。彼等は彼等を壓倒する人種移動の波に對して彼等自身を保持するが、さもなくば死滅しなければならぬ。北部には所謂原住民と云はれるものの多くの痕跡があるけれども、かゝる種族は南方に支配的な種族の特徴を維持してゐるのである。

ペシャワール、ゴラクプール、及びナグプールが結合されるならば、地圖上に構成された三角形は主要な小麥地帯を包含するであらう。それはナルバダ及びタプチを下つてアムローチーに擴がり、インダスからカンブルに下る。米は大抵、南及び東の地方に涉つての住民の主要食物を構成してゐる。印度に於るその典型的な母胎はガンヂス、マハナジ、及びゴダワリの大なる河谷地域である。キツナ谷も亦、廣範な米作地帯であり、タンジヨールも同様に分類されるであらう。だが米は灌漑によつて生育され得る所は何處でも、殊に南方に於て生育するものであり、その生育には種々の試みがなされてゐる。密林種族は米作に従事して居り、ムレダ族のあるものは東方アジアに發見されるものと同様に臺地で米を作る事が上手である。經濟的觀點から見ると興味のあるのは西部沿岸がコ、ナツト、煙草、香料、胡椒の如き商業的な價値のあるものを急速に育成する事を試みてゐる。だが此處の住民は自給的ではなく、その米をビルマから輸入してゐる。陸稻耕作が大部分の印度に涉つて施行されてゐる。殊に米作條件が充分でない所ではそうである。穀物の型は地理的條件に従つて變動してゐる。野生の植物については殊更に云ふ必要はない。沙漠の植物から赤道直下の稠密な森林に至るまで種々様々である。或る程度まで人間はその飲食物を野生の産物で補つてゐるけれども、穀物が無い爲に密林から追ひ出される様な場合には飢餓の状態につき落されるのである。

我々の眼前にある地理的特徴を考へる場合、印度の人間が廣く異つた氣候條件に曝されてゐると云ふ事が明瞭になるであらう。

或る部分では彼等は長期間、容易に横断する事の出来ない地域に孤立化されてゐる。又他の部分では彼は繼續的障害に曝されて居り、又影響圏外にある事もある。前者に於ては氣候が人間の體質に影響を持つ事が考へられる。後者に於て最も有力な要因は人種的混淆の影響であつた様に思はれる。だが孤立と接觸は印度の現在の人種を形成するに當つて重要な役割を演じた唯一の影響ではない。

地理的環境から受ける影響は印度に於ては極めて適當に研究され得るし、現在に於ても廣範なる調査研究領域を打ち擴げてゐる。風土の直接の影響については印度住民の研究者を悩ます問題である。例へば、北部の大河谷、中部の高原地帯の住民と南部の密林丘陵地帯の住民とは極めて大なる對照を構成してゐるからである。だが氣候は直接的効果と共に又間接的效果を持つて來たのである。例へばそれは互に異つた型の食糧供給を保證したのであつて、密林地帯の住民ですら飢饉の時には其の地帯から産する自然的生産物に頼つてのみ生残するのである。然し乍ら彼等の中、大抵の者は恐らくは斯くの如くして其のストックを補給するのであらう。デカン高原では食料供給の基礎は稷であり、パンジャブでは最も重要な穀物は小麦と小麦とである。濕氣のある溫暖なガンヂス谷に住む住民は其の食料として米を用ひてゐる。

楮、次に我々は氣候が印度住民に與へる直接間接の影響を概観しよう。此所で、遺傳が少くも他の結合されたファクターに等しい有力な一つのファクターである事を指摘することは重要性を持つてゐる。それ故、一定の氣候條件の下に長くあつた人種が大抵其の條件に適合均衡状態にあること、及び一定の環境的條件の直接的結果と思惟さるべき特徴がまさしく人種的と云はるべき長年の過程を經たる特徴として現れたものたることを見つけ出さねばならない。それで我々は例へば二つの型を見付け出す。コンドとムンダが即ち之であつて之は兩々相並んで住んでゐる。其れ等

は同じ系統から出たものか、或は極めて異つた起源から出たものであらう。一つは其の地で経験せられた氣候的條件に優れて適合し、最近に到着せる他のものは、極めて異つた條件の下に於ても住み得る幹族と共通せる多くの特徴を依然として兼ね備へてゐる。

此の書に於て私は人種學的特徴を決定する社會的要因については殆んど言及しない様にして來たけれども、印度に於ては此の事は困難である。複雑なカースト制度は少くも人間の慣習に關する研究家と同様に、人間の構造の研究家にも、部分的には興味あるものである。此の問題は元來一つの極めて困難な問題となつてゐるが、主要な概観を試みて見ると次の様なその制度の特徴が我々の現在の目的にとつて最も重要である様に思はれる。

リチャードが提案せる如く、一般にカーストは族内結婚群として定義されるかも知れない。此の規程には殆んど例外は存しない。マラバルに於ける、マンブドリとネイルの少女の關係は現實に結婚關係ではなくて、一層適切に云ふならば、上位の身分と結合された古い母系卑屬的條件の殘滓なのである。マンブドリは一種のマナーの君主であり、とも角、ネーアの少女によつて産れた彼の子孫はやはりネーアに屬するのである。之はカーストに於ける重要な點である。之は殆んど結婚としては考へられないものである。高い階級の男と低い階級の女との間に出來た同棲關係は常に斯るものとして考へられて居り、勿論、其の事情が逆轉するとは考へられてはゐない。ゼミンダー階級の間に此の一般の基準に對する奇妙な例外があるけれども、之等のものは一般的基準を不妥當なものとするに充分な力をもつものではないのである。タブーは現在我々の研究目的の範圍外にあり、我々は現在少くも理論に於てカーストは一連の族内結婚群を作り出してゐると云つて宜しからう。だが、上記せる條件は之等の集團が純粹に體質的觀點から見て、絶対に他の流れの混入を防ぐものとしては考察され得ないことを指示してゐる。

斯る制度のある所ではたとへ例外はあるにしても、他の所で見出される程の型の變動はないと云ふ事が考へられよう。一部はカーストがその最も嚴密な意味に於てそれ自身極めて昔の制度ではないと云ふ事實のために、又一部はカースト制度そのもの性質のために（斯るものは印度の生活の極めて力強い特徴をなしてゐる爲に繼續的に擴大されて來た。）之は全體として妥當ではない。

一見すればカーストは本質的には社會を水平的に分割する一つの手段の如く思はれるけれども、其の範圍はヨリ廣範に涉つて居り、所謂垂直的分割も存してゐるのである、カーストの多くの異つた型があれこれ區別されるかも知れないが、本質的にはリズレーによつて與へられた次に述べる分類は實際的目的の爲には簡單なる分類と考へられる。

（第一）種族的なるカスト型。自然的傾向によつて種族がカストとなる。スードラ族は元來、初期住民の全體を表はしてゐたものと思はれる。我々は今日チョク、ナグプールの種族、オリツサのコンドラ族、ナガ族の中にこの適切な事例を獲る。北西邊境地帯の種族はカーストになるやうな傾向を示してゐるやうに思はれる。

（第二）第二の型は職業的カーストとして記述されるであらう。此のカースト型は恐らくはヨーロッパ人には最も馴染み深いものであり、商業カーストは必要以上に數多く存在する。

（第三）第三のカースト型は特に興味のあるものであり、人種學者には誤謬に導くカースト型の如く思はれる。此の型のものは宗派型として記述されるであらう。印度に於けるあらゆる改革者は、總ての人間は兄弟でありカーストなどは何等存在しないと云ふ事を宣言する事によつて始める。其れによつて彼の後繼者達はカーストの圏外に立つ。カーストの中にある住民集團は間もなく新しいカーストとなるばかりでなく、亦彼等自身の間に新しい亞カーストを

構成する。

(第四) 一聯の新しいカーストが一つのカーストと他のカーストの交叉によつて生ずる。リズレーは第五の階級として國民的カーストを提案してゐる。それについて彼はネワール族、及び一七六九年のグルカの侵入までのネパールに於ける支配的人種であつたモンゴロイドを例として擧げてゐる。

カーストは一集團が、移動する移民及び古い環境に屬してゐたものとは異つたカーストを新しい環境に於て作り出す事によつて形成されるであらう。最後に一定のカーストは慣習の變化から起る。例へばラヂプト族及びジャト族などがそれだと提案された。

カーストの本來の意味は色彩の意味であつたやうに思はれる。従つてこのことは最も初期のカーストが種族型或は國民型か、移民型のものであつた事を暗示してゐる。之等の型は混合される事無くれば、其の型に屬する成員の體質的型に顯著なる影響を與ふる傾向を持つた事であらう。今日ですら或るカーストの間では體質的差違を持つてゐるやうである。更に同じ成員に屬する者でも極めて異つた型を呈してゐるものもある。ブラーマンの間の大なる差違は極めて顯著であるけれども、或るジャト族の間にも等しく大きな差違が現れてゐる。ブラーマン社會はセクトに充ち、互ひに敵對して居り、一つのカーストと呼ぶには餘りに大きな集團と云ふことが出來よう。

故に別に決定的な人種學的標準を與へなくとも、カーストは廣大なる印度半島の複雑な人種を分割するに少くも助けとなつてゐるものであらう。

ドニケの分類は不充分なものである。彼は次の如く云つてゐる。

「此の國に發見される型の多様性は二つの土着人種の交流によるものである。印度アフガン族とメラノインディア

ン人種又はドラヴィダ人種、北部に於てはトルコ人種とモンゴール人種、東部に於てはインドネシア人種、西部ではアラブ人種とアツジロイド人種、中央部に於ては恐らくはネグリトイド人種が之である。

高身長インドアフガン族は淡褐色と黄褐色との複合であり、長い顔、波状又は直毛、際立つた細い鼻、長頭を持つて居り、印度の北西部に優勢である。メラノ、インディアン人種又はドラビタ人種は（長頭、短身、暗褐色と黒色との複合物、波状又は縮毛）主として南部に見出される。之には二つの亜類がある。

(一) 廣鼻型種族

廣く平たい鼻をして居り、丸い顔を持つてゐる。西ベルガル、オード、オリッサ等の山嶽地帯に見出される。

(二) 狭鼻型種族

狭い鼻、間延びた顔をしてゐる。ネアリア、テルグ、タミール地方に見出される。更に彼はメラノドラビダ人種をドラビダ族とコラリア族に分割してゐる。

此の分類は之迄提案された他のものと極めて異つて居り、恐らく最もよきものと考へられる。

然し乍ら印度住民の最も一般的な分類はリスレーによつて爲されたものであり、一九〇一年國勢調査報告として最初出版されたが、後に「印度種族」(The Peoples of India)なる一書として公刊された。此の分類は極めて重要なものであるから、詳細に涉つて述べられねばならぬ。

リスレーは印度の住民を分けて次の如き類型とする。彼の第一の型は彼がトルコイラニア人種とするものであつて、實際にはバルキスタン及北西邊境地帯に存在してゐる。廣頭にして平均指數は西ベンヂヤンのパロツク族の間の八〇からアフガニスタンのハザラ族の間の八五に至る迄の値を示してゐる。鼻は薄く中庸であり、平均指數はタリム

族に於ける六七・八、ハザラ族に於ける八〇・五を示してゐる。個人的指數が極めて高い事もある。「顯著な一つの特徴はその鼻が極めて長い事である」……鼻の根本は窪んでゐない。頬骨は平たく支那人か又は蒙古人と同様な容相を呈してゐる。……ハザラ族は二つの例外である。……彼等は二つの型（トルコイラミア型及びモンゴリア型）を共有し、その二つのものゝ間の接觸點を現してゐる様に思はれる。

平均身長はマ克蘭のバロック族に於ける六六・二種から北部バルチスタンのアチアクザイ、パタン族に於ける一七二種間の値を示してゐる。リズレーは此の型のものはトルコ族とベルシヤ族との混淆の結果であり、其の最も顯著な特徴は長鉤狀型の鼻、毛髮の豊富さにあると提案してゐる。

第二のものはリズレーがインドアリアン人種と呼んだものである。此の型はラジプタナ、パンジヤブ、カシミール谷に優勢である。頭形は長く、平均指數は七二・四——七四・四トルコイラミア人種と大なる對照を爲してゐる。鼻の部分に關しては之等二つの型の間には殆んど差違が存しない。平均指數はグジャールに於ける六六・九——チューラに於ける七五・二、インドアリアン人種は大身長に拘らず、トルコイラミア人種よりは際立つて短い鼻をしてゐる。彼等の顔は扁平な感じを起させない。身長は印度最長のものであり、ラヂプト族のそれは身長一七四・八、アローラに住居せるものは一六五・八である。最も重要な點は身長の高い集團と低い集團との間に型の一致があり、極めて微少な差違しか存しないと云ふ事である。社會的にはユダイプールのラヂプト族とパンジヤブの腐肉を喰ふチューラ族とを區別する程の差異は何等存在しない。體質的には彼等は同一のものとして形成されて居り、平均身長の差はラヂプト族が食物や生活慣習について長年に涉つて共有して來たもの程大きくはない。

インドアリアン族は身長高く、明るい皮膚で、眼は褐色、長頭、狭く高い鼻を持つて居り、南東ベルシヤを通つて

民族移動をして来たものと想像される。

次の型はスキトイドラビダ族である。グヂャラートからクルグ族に至る印度の西部地帯に住居してゐる。彼等は一つの極端な場合としてグヂャラートのナガール・ブラーマン族として現はされ、その名前をウール部の小地域に與へた著しい種族によつて現されてゐる。

頭蓋形態はデシヤス・ブラーマン族に於ける七六・九からナガール・ブラーマン族の七九・七、プラグ族及びクルグ族の七九・九に至る變化を示してゐる。リズレは鼻の割合については何等の説明も試みて居らない。指數はクルグ族の七九・二からマハール族の八一・九を示してゐる。

平均身長はクンビ族の間の一六〇からクルグ族の一六八・七の値を示してゐる。

此の種族集團はトルコ・イラニア人種より身長低く、頭蓋長く、鼻は高く顔面扁平である。

リズレは此の種族とサカイ族とを關聯付け、之等のものが支那から來りたるものなる事を提案してゐる。彼等はパシヤブの地域を占めて居り、インドアリアン人種によつて西方の經路が閉塞されてゐるのを見出して南方に向ひ、ドラヴィダ人種と混淆した。

アリヨドラビク人種又はヒンズスタニ型は、ベンヂャブの東方邊境からビハール極邊に擴つて居り、その點からそれはベンガルのモンゴロドラヴィタ型の中に融合してゐる。その占めてゐる地域はガンヂス及びユナの谷であり、北方に於けるヒマラヤの低水準地域から南方の中央印度高原の半スロープ地帯に涉つてゐる。此の型は本質的には混淆型である。頭は長いが中頭への傾向を持つてゐる。頭形平均指數はヒンズスタンのカツチヒ及びコイリに於ける七二・一からビハールのドサドに於ける七六・八及びパパンに於ける七六・七に至る値を示してゐる。だがその起源に關す



タミール族の婦人

る問題にはそれは殆んど光明を與へてゐない。

鼻は最も顯著な特徴である。平均指數はヒンズスタンのパパン族に於ける七三・〇、ビハルのブライマン族に於ける七三・二からヒンズスタンIIチャマ族の八六、ビハルのムサハール族の八八・七の値を示してゐる。身長は一五九糎から一六六糎の間の値を示してゐる。

之等の種族はギルギット及びチトラル路を通じて印度に這入つて來たものと想像される。長頭であるが、身長低く低社會階級のものが之と混淆してゐるものと考へられる。

モンゴロ・ドラビダ型又はベンガリ型はガンヂスの三角洲に位置を占めてゐる。此の型のもののは廣頭型と云ふ點でインドアリアン族及びアリョドラビダ族と異つてゐる。平均指數はブライマン族の七九からラジバンシ・マア族の八三に至る値を示してゐる。鼻の平均比率はブライマン及びカヤス族に於ける七〇・三から西ベンガルのマル族に於ける八四・七及びコッチイ族に於ける八〇の値を占めてゐる。

身長は西ベンガル地方のブライマン族の一六七糎かヒマラヤ支脈地帯のコチヒ族の間の一五九糎の値を示してゐる。此の種族はドラビダ族及び西藏ビルマ族と極度に混淆せるものなることがリズレーによつて説かれてゐる。こゝに移民説はないが單に現住民があつたと云はれてゐる。だがベンガルに於ける現住人種たるチベットビルマ族の提案は、リズレーが何等の證明を與へてゐないのでその論證を必要とする。

リズレーは之等二つの原住種族を斯くの如く分類してゐる。彼は西から東に涉つて境界をなしてゐる地帯にヒマラヤに沿つてモンゴロイド種族を發見してゐる。支配的な頭蓋形態は廣いが平均指數はこの型のものとして著しく相似してゐる。例へばジェンテア族は七二の指數を持つてゐる。鼻形態は一定の變動があるが、比較的高い指數は若干のものし

か測られなかつた種族に特徴的である。大集團に於て平均指數はレブチャ族に於ける六七・二からチャクマ族の八四・五、カシヤ族に於ける八六・三に至る値を示してゐる。グリーンダ族は最大の身長(一六九・八)を持つて居り、ミール族は最少の身長(一五六・四)を持つてゐる。

之等種族の顔は扁平であり、黄色味が、つた黒色である。鬚は殆んどなく、眼は屢々斜である。

最後にドラヴィダ族はリズレに於ては大印度半島の眞の原住種族と考へられてゐる。彼等は印度の最も古い地質形層に住居してゐる。即ち、概略ベンヂヤからケープロモリンに涉つて延びてゐる地帯、高臺、平原の中に住居してゐる。半島の東部及び西部にはドラヴィダ族がガート一帶に涉つて居り、更にそれは一方ではアラヴァリに達し、他方ではラジヤマール丘に達してゐる。原基的特徴が印度アリアン人種又はモンゴロイドとの接觸によつて變化されてゐない所ではその型は極めて統一的であり明瞭である。頭蓋形態は通常中庸であり、寧ろ長い傾向がある。南印度に於るニルギリ丘のヴァダガ族は頭形指數七一・七、ティンベリのシヤナン族は七六・六である。同一地域に於て鼻形指數はマラバールのパニアン族に於ける九五・一と同様な高さを持つてゐる。チヨタナダプール及び西ベンガルに於てその變動範圍は充分顯著ではない。

南印度のドラヴィダ族の間では、身長はティンベリのシヤナン族の一七〇糎からトラバンコールのパレアン族の一五三糎に至る値を示してゐる。其の外貌は極めて色黒く、毛髪、黒色、縮毛、眼は暗色、鼻の根元がへしやけてゐる。之等の種族についてリズレは、今や或る程度、アリアン人種とスキチャ人種及びモンゴロイド人種の要素の侵入によつて修正されてゐる眞の原住民と考へてゐる。

リズレの以上述べた分類は各方面からの批判を受け、又其の批判は重要性を持つものと考へられるので以下、其の

批判を概略紹介することにする。

第一の批判はアリアン種族がパンヂヤブに移入したとする事の困難なる事情を訴へてゐる。クルークは、リズレが餘りに頭形指數に重點を置き過ぎる結果、其の様な判定を與へたるものと評してゐる。同様な困難はジャット族に關して起つて來るものであつて、其の事については、リズレ自身も氣付いてゐたものゝ如くである。傳統的に印度のアリアン侵入者と考へられて居たものに最も近似せる一つの種族型がある。之等の種族は身長高く、白色の外貌暗色の眼を持ち、顔面に毛髪が豊富である。低頭にして狭鼻を持つてゐる。匈奴及びスキタイ族が短頭型であり、ラジプト族、ジャット族には、短頭型は生じ得ないものと云ふリズレによつて表明された論議に、クルークも一致してゐる。クルークは「中央アジアには變改されたモンゴール族らしいトルコ型があること、チベット族の間には二つの型があつて、一は丸頭、扁平顔、斜眼型で純粹なモンゴール族に近いこと。他は前のものより頭形長く、際立つた長い鼻を持ちトルキスタンのタタール族に近いこと。」を提案する事によつて特にリズレに一致してゐるのである。更にクルークは、碑文字から判斷して、パンヂヤビ及びラジプタナの種族の間には可成りな程度の北方系の血の混入あることを暗示してゐると主張してゐるのである。第二の難點は、ラジプト族、ジャット族、グジャール族が人種的には同系のものであり、其の體質的地位が社會狀態に依存してゐることである。而してクルークはマールタ族の地位が同様なものなることを主張してゐる。最後に、クルークはデカン高原の住民中に匈奴及びスキタイ人種の要素を跡付けることは種族史の事實に一致してゐない事を提案してゐる。

更に、南印度派のある著者達は現在の住民中にドラビダ族の要素が支配的である事を主張してゐる。而してアリアン族と其のダスユの始祖の間には人種の差があるのではなくて、單に宗派の差違があるに過ぎない事を提案してゐる。

リズレに反対した最も主要な點はサーストンの論文であり、彼はドラビタ族集團が殆んど單一的でないことを示してゐる。中央印度の高原種族及び北部平野の大部分の賤民を包含する爲に、リズレが擴張した言葉は、モンクメールの型の言語が印度大陸に渡つて廣範な發展を示した事、更に或る時期には印度一帯アツサムに擴大し、さへした事を最近の調査研究が示した爲に、その様な立場から非難されて來た。之と非ドウウイダの要素が北部平原の賤民の中に生存してゐる事が提案されて來た、クルークの批判に加へてラマブレードドチャングーは彼の著者の中でインドアリアンの人種に關して次の如き提案をなした。即ち、リズレのスキトドラウイダ人及びモンゴロイドラウイダ人に於る顏面的要素は上述の如く、今日パミールに見出される型のホモアルピヌスに近いのである。

以上のリズレ批判は詳細な點でリズレを攻撃してゐるけれども、全體としては唯、モンゴロイド的要素の可能性を否定してゐる様に考へられる最後の所は除いて、彼の與へた分類の一般的地位を不適當なものとしてゐるのではない。リズレの最初與へた假説を採擇するに好適な理由が依然として有るのであつて、其等の點は後にふれることにする。

全體としてリズレに對する反對は彼が提案せる現實の集團よりは寧ろ彼の與へた學名又は彼の歴史事實の解決に向けられる事が知られる。大抵の場所に於ては租人種は有史以前に起源して居り、印度が此の一般の規準に例外を爲すものと考へる理由は何等存しないのである。然し乍ら、大抵のリズレの用語は比較的最近の、即ち有史以來の種族に適用して居り、恐らく、印度住民の主要な型は之等歴史的發展の展開されない中に既に長く居住せるものと思はれる。印度に初期住民があつた事は疑ひのない所であつて、最近ハント博士はオックスフォード大學博物館に、現代の住民とは明かに異つた古代頭蓋骨(セカンダラバッドから取れたもの)を提示したのであるが、不幸にも價値ある證

第一表
標準偏差 頭形指數
リズレーのType Seriesヨリ計算

標準偏差	3.0以下	3.0—4.0	4.0以上
頭形指數 80以上	M.	M.T.T.T. T.SD.SD	T.T.S.D
76—80	M.	MD.D.D	—
76以下	MP.D.D.IA IA.AD.AD	D.	—

M ==Mongoloid, T==Turko-Iranian
SD ==Scytho-Dravidian
MD ==Mongolo-Dravidian
D ==Dravidian
IA==Indo-Aryan
AD==Aryo-Dravidian

據として用ふるには餘りに條件が悪いものである。然し乍ら、明かにリズレーがドラヴィダ族の異なる階級に充分ウエイトを附さなかつたと云ふ事を提案せる批判は極めて重要性をもつものなることが判つたのである。更に言語學的な名辭の使用が人種的分類に適用される場合には誤解を招くおそれがあり、リズレーも時としてマックス、ミューラーの短頭型辭典の定言に接近してゐる事が附け加へられるであらう。

生憎、リズレーの與へた圖式は近代的統計方法によつて用ひる事の出来る程の條件に迄換元されてゐなかつたのであり、それ故に、彼が型系列 (Type Series) と記せるものを次の表に譯現する。

此の表は頭形指數の標準偏差と平均頭形指數の數値との關係を示して居り、リズレの區別した集團の型系列から計算せるものである。トルコ、イラニア族は總て短頭型であり、中には大きい標準偏差を持つ傾きがあり、インドアリアン族は長頭にして標準偏差は小さい。

第二表 身長標準偏差

身長	47以下	47—54	54以上
166' 以下	IA	T	IA.T.SD
161—166	AD.T.D	MD.D.D.DAD	SD.SD.MD
161 以下	DM	MN	

此の説明は第一表と同様なものである。各この數字は集團の最初の文字を現はせるものであつて、亞集團はそれらに屬してゐるのでありその平均的身長及び身長標準偏差が表として與へられてゐる。それと共に二十の亞集團が含まれてゐる。身長と身長標準偏差との間には何等特別の關係は存しない様に思はれる。

第一表は各種集團の頭形指數と、此の頭形指數の標準偏差との間の關係を示してゐるのであるが、第二表は同じ集團の身長と、其の身長標準偏差との間の關係を示せるものである。前の場合には、その關係は可成りあるものと思はれるが、後の場合には極く微少にしかないものゝ如く思はれる。鼻形指數の場合には何等同様な關係はない。その範圍及びその相關々係は後に論ぜられるであらう。

全體として、廣頭は長頭より一層變動的であり、此の例外を爲すものは、モンゴロイド群たるチヤクマ族及びレブチヤ族である。例外の場合に於てすら、或る程度の相關々係があるやうに思はれる。それ故、長頭人種は他のものより混淆する所少いと云ふ事が合理的に提案されるかも知れない。然し乍ら、斯る説明は長頭型侵入者であると云ふ可能性を看過する事になるであらう。之はたとへ異つた集團に屬してゐるとは云へ、若し混淆せる人種と同様な頭形指數を持つてゐるならば、標準頭形指數偏差には餘り影響を及ぼさないであらう。丸頭を持つる集團の導入は直ちに變動を増加する傾向を持つ。此の様な基礎の上に我々は次の事を期待する事が出来よう。即ち純粹なる長頭人種には二つの長頭人種の混淆を現はしてゐる之等集團が低い偏差を持つ傾向があると云ふことである。此の場合に概適するものはインドアリアン族、若干のドラビダ族、モンゴロイド族のあるもの等であり、之等はすべてリズレーによつて純粹なる人種と名付けられたものである。モンゴロイド族の或るものに於て頭は丸い傾向を持つてゐるが、偏差は小さい。だが黄色人の傾向が丸頭を持つてゐると云ふ事を我々は發見したのである。それ故、此の事實は何等驚くには當らない。

最も大きな變動を示してゐる集團は、リズレーによつて混淆人種と認められた。スキトードラビダ族、ナガール・ブラーマン族及び二つのトルコイラニア群に屬するジャト族及びミルジャト族を含んでゐるのである。之等のものを非混淆集團とする事は明かに不可能である。此の種人種に豫期されるべきものはヨリ少い頭形指數を持つてゐること、及び大きな標準偏差が現はれてゐると云ふ事であつて、之は恐らく丸頭族と長頭族との間の混淆が確かにあつた事を暗示してゐるのである。

中位の變動を持つた集團は次の如きものである。

(一) 或るトルコ、イラニア族

(二) チャクマ族、リズレのモンゴロイド群の中の一つ。チャクマ族は極めて高い頭形指數を持ち、黄色人中の通常のものよりはヨリ高い値を示して居る。之は黄色人とアルメノイド型との混淆種族と考へられるであらう。その可能性はリズレに依つては彼の集團の中には含められず、アジアに極めて共通な混淆型として含められてゐる。第二にリズレに依つて混淆型と認められた集團があり、最後にドラヴィダ族の三集團がある。

ドラビダ族は三・五以上の標準偏差を持てる者全然なき事が注目されねばならない。だから、彼等は比較的混淆度が少ないのである。だが先に述べた如く、ある批判家は、リズレがドラビダ族中の亞種族の分類の可能性に充分注意を向けなかつた事を述べてゐる。

若し我々が之等の結果を身長のをそれと比較するならば、其の結果は格別の興味あるものである。最も少い變動を示してゐるものはアリヨドラビダ族(チャマール族)の一つの除外例は別として、リズレによつて非混淆種族と考へられた總ての種族集團である。大きな變動を持てるものはリズレによつては混淆種族たるべしと考へられてゐる。混淆種族が變異大きく、非混淆種族が變異小さしと云ふリズレの圖式はチャマール族について見ても、トルコイラニア族の或るものについて見ても根據があるものと思はれる。

次にリズレは鼻形指數に相當の關心を示した如く、此の調査研究は爲すに値するものと考へられる。然し乍ら鼻形指數の値と其の變異との間には何等の關係は存しないのであり、他方、又鼻形指數は一定の氣候條件と相關々係を有してゐるのである。

此の關係の一般的性質については既に説明して置いた所である。印度に於て蒐集した資料から判斷すると、鼻形指

數は或る程度、人種的な性格に依存して居り、窮局的には環境への反應の結果と見ることが出来るのである。

然し乍ら、此の反應は決して直接的なものではなく、其れ故に、一定の型の鼻は一定の人種型と相關々係を持つてゐるのであることが記憶されねばならない。印度に最も長期に涉つて居住せる之等の種族が其の環境との均衡に於て最も密接に安定的なものとなつたとすることは不可能ではないのである。それ故、我々は最も低位のカーストの間に最も廣い鼻を持つるものを見出すものと考へられる。モンゴロイド族を除いて、總ての種族中、鼻は、社會層の適切なる現はれど見ることが出来るのである。更にヨリ低いカーストのものは上層のものよりも一層暗色である。まことにカーストと云ふ言葉こそは單に色に過ぎないのである。

色彩はまた或る程度、環境に關係を持つやうに思はれるけれども、原住民、或は少くとも、高温にして高濕なる條件の中に最も長く生活し來れる種族の中では皮膚は暗色にして鼻形指數は高いことを見出すものと豫期されるであらう。

印度の住民は大體二つの系統を持つてゐるものと考へられる。一つはヨーロッパ系統、即ち白色のものであり、他は黄色のものである。所で此處にネグリートの血のある事を主張するものがある。或る著者は中央及び南部印度の諸種族の毛髮が縮れてゐる事を根據として斯る説を立てゝゐるけれども、白色系にも毛髮の縮れはあるのであつて、ネグリート系のゐる事の完全なる證左とはならない、大體白色と黄色の二つの異つた系統のものがあるものと考へて宜しからう。既に前述せる所では印度に於る混濁度の少い、最も初期の住民が長頭にして短身長なることであつた。之等の種族が褐色人種に屬せるものとする事はさう間違つてもゐないやうに思はれる。ドラビダ語を話す種族集團の到着する前から既に之等のものは南部印度に住居して居つたのである。早くから住んでゐると云ふ證據は彼等がジャン

グルに住居する種族又は其他のドラビダ族の僕卑たる事實に基けるものである。身長短く、長頭なるに加へ、彼等はまた極めて廣い鼻の持主である。之等の種族の中に我々は國勢調査中、ジャングル種族として分類されてゐるもの及びカナリーズ族及びテルグ族中の比較的低度のカーストに屬するものを含めなければならない。

皮膚は暗色であり、其の毛髪は縮毛の傾向がある。然し乍ら羊毛質のものではないから彼等がネグリート系に屬するものとなす理由は何等存しないのである。彼等がメラネシア族、タスマニア及び爾餘の原始種族に近似せるものなることが提案されて來た。之等の提案は純粹なる思惟であり、それが上述せる褐色人種の原始的なる一形態なりとする説を確認する方がよい様に思はれる。リチャードは彼等を原ドラビダ族でなく、前ドラビダ族と呼び、一つの間的人種たることを提案してゐる。此處では東方の密林種族と呼んで置くことにする。

之等の密林種族は其の環境に緊密なる關聯ある事を示して居り、長期に涉り印度に住居せるものであつた。之が眞の原住民だとする事は妥當と考へられる。

次に大低長頭型を呈せる第二の種族が南部印度に住居してゐる。之等は密林種族よりもヨリ狭い鼻を持てるものである。リチャードは具體的に、だが眞實に、次の如く云つた。「密林種族は爾餘のものが立ち去つてゐる所に發生する」と。之等の種族の中にはマヤリス族、タミル族、テルグ族が含まれてゐる。之等の種族は身長低く、極めて多種多様な皮膚色を呈し、波型の毛髪をしてゐる。之等のものが密林種族と異つてゐることは明かであるけれども、決定的に基本的なるものと考へられ得る差違は恐らく存しないであらう。彼等も亦褐色人種の一分岐の如く見えるけれども、疑ひもなく彼等は極めて長期に涉り印度に住居し居れるものである。彼等のカーストは大きく、而も相對的に高い社會層に屬してゐるので、原住民ではなからうと云ふ暗示が得られる。

それは恐らく北方からの侵入者と云ふ事が出来よう。之等のドラビダ族の總てではないが、大低のものは相當の廣範なる多様性を示して居り、褐色人種の代表者と目される。尤も熱帯環境に於てはある程度變つてゐる。

以上の二つの亞種族の外にリズレによつてインドアリアン族と呼ばれたものがある。此所でアリアンなる語の正確なる意味を論議する事は不可能である。言語的立場がたとへアリアン言語を想像させようとも、別に所謂アリアン的な體質型を持つてゐるのではないのである。言語上の證據を見ればアリアン文化の移入の跡が見られるのではあるけれども、言語上の證據と文化的證據とを相關付けることは何か困難なやうに思はれる。とまれ、リズレは今日最も高いカーストは依然として最も狭い鼻を持つた種族なり、と云つてゐる。彼等は他の印度の諸種族と混淆せるものらしいが、どの程度に混淆したかについては困難なる問題を形成してゐる。諸種族中インドアリアン族は最も少い變異しか持つて居らず、それ故恐らく混淆度最も少き種族と考へられる。然し乍らリズレのアリョドラビダ族の中の或る種族は少くとも、頭形指數及び身長の證據に基いて考へれば、明かに非混淆種族たることが知られる。

之等の種族の主要なる特徴は長頭型と云ふことである。而して通常身長高く、狭鼻にして、肌が美しく明るい。總て之等の特徴は唯、頭形指數のみを除いて上述せる種族と此の種族を區別することに役立つ。所で之等の高身長、長頭種族は原北方族と記述されるであらうが、此のリズレの印度アリアン族と他の印度諸種族とを區別することは困難なやうに思はれる。成程、インドアリアン族と草原地帯の諸種族との間には一定の差があるが、全體として、之等の差違は根本的なものと云ふよりは寧ろ皮相的なものである。恐らく皮膚の色は最も顯著なる特徴であらう。

然し乍らラジプト族は其の他多くの近隣諸種族よりはヨリ顯著に明色を呈して居り、皮膚色は地理環境に反應してゐるものゝ如くである。

骨格の特徴は斯る暗示を與ふるものゝ如くであるが、之を原北方族と記述するには條件が不充分に思はれる。彼等はアジアに於る最も近隣せる種族の中の同一系統に屬する一分岐種族にたるものゝ如くである。

彼等は比較的最近になつて印度に這入つて來たやうに思はれる。彼等の血液が國全體に涉つて廣く播布せるものと想像すべき理由が存在するけれども、北部に於る或る種族は極めて大なる範圍に、其の肉體的特徴を保持してゐる。彼等が頭形指數の最低位の標準偏差を有してゐる事を記述するのは興味あることである。彼等は一つの非混種族であると云ふより外、此の型の眞實性を説明する事は可能でないやうに思はれる。明かに、また、彼等は未分化種族として記述され得ないものである。原北方族と云ふ語を何等の限定を附け加ふる事なしに此の種族に適用することが冒險的なものと思はれるのは就中この理由によるのである。彼等とドラビダ族との關係如何は困難な問題であるけれども、彼等との差違は明瞭である。之等二種族の間の差違は相對的明色を呈してゐる事及び相對的に狹鼻を持てる事に基いてゐる。

偕、其所で頭形指數に於る大なる變動を持てる種族から離れて、我々は少くとも印度に於て、三長頭型種族を見出し得る様である。

(一) 前ドラビダ族

|| 褐色人種に屬する。

(二) ドラビダ族

(三) インドアリアン族 || 原北方型に屬する。

前ドラビダ族は褐色人種中、最初の移人民であり、ドラビダ族は第二の移人民で之は西方から來住せるものと考へられる。更にインドアリアン族は恐らく原北方型と同一系統に屬するものゝ如くであるが、其の關係は現在明確に定

義されて居らない。

印度に於る第二の種族集團は圓頭型のものである。之等のものが原住民であつた様に思はれないけれども、恐らく劫初の頃、印度に來住せるものである事は殆んど疑ひない所である。最初來住せるものは一定の地域を占めてゐた事は勿論であらうが、恐らく印度全體に涉り、今日の密林種族の祖先であつた様に思はれる所の住民が最初の來印者であつたであらう。ハント博士はハイドラバッドに於る古墓で此の初期の人類に屬する頭蓋骨を發見したのであつた。生憎、人類學的價値を持つには餘りにも時間や、太陽や、水に侵蝕され過ぎてゐたものゝ如くである。

之等の集團は可成りの混淆を爲せる證據を示してゐる。型は丸く、身長は高いか又は中位である。彼等が白色人種中、アルメノイド型の一分岐に屬するものとする事は妥當に思はれる。我々が現在有する證據は彼等が元來、早期に印度に來住せる事を暗示してゐる。而も最初の來住者はドラビタ族住民中極めて小部分を占めてゐるに過ぎなく、従つてそれ以來、之等種族の一連の來住があつたものと思はれる。さもなければ彼の存在を考察する事は困難である。とも角、彼等は印度來住以前に既に他の種族と混淆し、來住後も混淆せるものと思はれる。印度南部に於る此等の種族が最も混淆度が少いと云ふ事實は彼等が此の方向から印度に來住せるものなる事を暗示してゐる。又實際、我々が既に見た如く、此の型のものは單一的にコンスタンチノールより北京に至る全アジア大陸に涉つて見出され得るのである。キング都市として繁榮したとき、彼等は少くともメソポタミア住民の一部であつた。彼等はリズレによつて、スキタイ人と呼ばれた印度住民に於る要素となつてゐるやうに思はれる。之等のものは大低特徴に於て變動的であり、全體として總ての集團中最も變動的である。彼等はまた特徴に於ては長頭族と短頭族、高身長と低身長との中間型である。その一般的な肉體は既に何等か混淆してゐた二つの人種の混淆と思はれるものと一致してゐる様である。

る。之等二種族の様々な程度の混血たるアルメノイドと褐色人の存在を豫想する事は、我々の考察してゐる國に於ては自然である。

我々が印度大陸で發見する最後の型は黄色人である。之は多くのドラビタ族よりも混濁する事少く、インドアリアン族の或るものよりも混濁する事少い種族である。黄色人は我々の格言たる「頭形指數の標準偏差は平均頭形指數が増加するに従ひ増加」すると云ふ内容に一つの決定的例外を爲すものである。彼等の場合、リズレによつてモンゴロイド族として與へられた集團は小さな偏差を持つてゐるに過ぎない。モンゴロドラビタ族と呼ばれ、寧ろヨリ狭い頭蓋骨を持つ傾向ある種族は一層長頭型である。モンゴロイド族と云はるべき種族は身長低く、モンゴロドラビタ族は身長高くして標準偏差も増加してゐる。それ故、印度に浸透せる黄色人種の分岐種族は適當に丸頭型にして身長低く、實際に此の大人種は、パレアン分岐種族に屬してゐるものゝ如くである。頭蓋測定のみを以つてしてはアルプス型又はアルメノイド型と黄色人との差を見分ける事が如何に困難なる作業であるかについては既に述べて置いた所である。此所ではリズレによつて設けられた印度に於る黄色人種の分布狀況に説き及ぶ事にする。黄色人が印度に來住する以前にどの程度混濁せるものであるかについては殆んど證據が存しない。だがモンゴロイド族中最も丸頭型のもの或るものは最も變動的であり、アジアの他の部分に於る如く、黄色系とモンゴロイド系の要素の混濁が存する事を示してゐるのである。

リズレが「之等の種族中、鼻は社會層の現れでは何等ない。」と云つてゐるのを記するのは興味ある事である、此れは印度に於る黄色人の地位が他の人種の地位と極めて異つてゐると云ふ他の證據から集められる所のもの、明確なる證左たるものゝ如くである。比較的高い指數は比較的小さな集團に現れて居り、既に指摘した通り、リズレが資料の

乏しさに基因するものと考へてゐる。然し乍ら、兎も角彼等は極めて廣範圍に渉る變異を示して居り、風土的條件と相伴的な變動を持つてゐるやうに思はれる。リズレによつて典型的な例として選ばれたものゝ中、シツキムのレプチャ族は七〇と云ふ極めて低位の指數を持つて居り、カシア族は八四と云ふ高い値を示してゐる。

之等各種異なる指數は窮局的には地理的環境と相關々係を持つてゐると云つても宜しいであらう。之等の種族の大低のものは廣範圍に相違せる氣候條件の下に生活してゐるが、問題に對する最後の見解を與へるには現在の所未だ資料が充分でない。此の集團に屬するものが身長の高いことも亦地理環境の結果であらう。

リズレによつて黄色人の血以外の血を持つてゐると考へられてゐる種族の或るものが、純粹なモンゴロイド族と彼が提案せるものよりヨリ少い變動を示してゐる事は注目し得る。例へばコチヒ族はアングマン族の頭型指數に於る標準偏差よりも小さい値を示してゐる。長頭を持つてゐると云ふ事實の爲に、彼等は混淆人種と考へられて來た。然し乍ら、異常に丸頭型のチャクマ族、リズレがモンゴロイドとして記述してゐる總ての種族、及び部分的にはモンゴロイド族等は等しく變異少き種族である。だが現實の平均は可成り變動してゐる。換言すれば、其の集團範圍内の頭形指數の變動は小さいが、モンゴロイド階級内の變動は相當であるのである。其れ故一方に於て、リズレの、印度には黄色人の代表型があると云ふ一般の命題を疑ふべき理由はないのであるが、我々が更に資料を手にする場合には、彼の之等種族に加へた分類を何か改訂する事が出来るやうにも思はれる。而して目下の所、彼がモンゴロイドラビダ族と呼んだ或る種族階級を認めず、其等をバレーン人種型の地方的變異種族として説き及ぶ事がヨリ安全であらうと思はれる。

印度に於るバレーン族分布の正確なる範圍は現在の所確かでない。それはリズレが最初提案せるものよりはヨリ

廣い範圍に涉つてゐるやうである。ムンダ語を話す種族が言語的にはパレアン族のあるものと關係を持つてゐる事を信する理由がある事は既に示された所である。シミット³⁾(Schmidt)の論文はムンダ族、チベット族の或るもの及びモンクメール族等の奇妙な言語學的集團を示したのであつて、其れは極めて暗示的である。此の關聯は單に言語的なものばかりでない事が示され、此の點はシミットによつて強調された處である。それとは全く異つた觀點から研究して、モラントは殆んど同様な決論に達したのである。彼の使用せる術語は何か不十分なものであり、彼の結論の眞實の價値を不明瞭にしてゐる。彼は人類類似係數を用ひて、ドラビダ族とヒンズー族、ヒンズー族とネパール族とを區別してゐる。之によつて彼はマラバール族が、それとベンガリ型と關係ある係數を示すものなることを意味してゐる。此のベンガリ族はリズレによつてはモンゴロドラビダ族と呼ばれて居り、モラントの論文から判斷して我々は南部の所謂ドラビダ族の間にパレアン系統を認めなければならぬやうである。更に詳細なる研究は未だ今後に残されてゐる。現在ある證據から判斷して見ると、パレアン人は以前考へられてゐたよりはヨリ廣範なる地域に涉つて南部印度に分布してゐるやうに思はれる。それ故、更に重要な事項はハイドラバッドに於るハントの論文に觸れてゐるものである。彼等が何かパレアン族の特徴の跡を示してゐるかどうか、或ひは彼等が西方の圓頭型種族であるかどうか、を見る爲の一層完全な頭蓋骨を獲得する場合には興味ある事となるであらう。

セイロン島の住民は南部印度の住民と緊密なる關係を持つてゐる。人類學者によつて最も興味あるのはヴェツダ族である。其の肉體型は、現在、數に於て限定されてゐる現實の社會的國民よりは一層廣く散布して居り、島嶼には廣く涉つてゐるやうに思はれる。身長は極めて低く平均身長約一五三釐(約五呎)である。皮膚は極めて暗い褐色であり、屢々黒色に近い。頭は通常極めて小さく長く、狭い。毛髮は粗く且波型を呈してゐる。眉際は特に男性に於てよ



ヴェッダ族

く發達してゐる。身體には羽毛が可成り生えて居り、特に頸には際立つてゐる。この種族の肉體の作りは纖弱に出來てゐる。鼻は通常極めて廣い。此の種族型はセイロン島に於ける他の種族とは全く異つてゐる。之は本島に於ける前ドラビダ族と關聯をもつたものと思はれる。

之と相並んでセイロン島の大部分の住民は明らかに南部印度のドラビダ族と關係を持つてゐる事が知られる。住民の中にはハツドンがインドアフガン族として記述したもの、ヴェツダとの接觸によつて修正されたりズレのインドアリアン族に近い他の要素の混入が認められる。之等の種族に關する人類學的資料は殆んどないやうに思はれる。身長高く長頭型、皮膚の色は、他の暗色と對照的な明色を呈してゐる。微少乍ら、主としてアルメノイド混濁を導入せるものゝ如き、モズレムの血が或る程度見出される。

セイロン島は云はゞ南アジアに於ける通路の終端であり、此所に於ては印度に各時代に流れ込んだ大低の人種の混濁が觀取出來るものと思はれる。私は住民中に往昔のパレアン系統の血の痕跡を見出す事が出來なかつた。ヴェツダ族マラパール族間には頭蓋上の連關があるとモラントは考へてゐる。彼がセイロン島で獲た資料は乏しいがともかく斯る連關は期待される所である。然し乍ら、四十の頭蓋骨の證據を持つマラパール族と、明らかに三〇以下の證據の上に立つベンガリ族とに連關があるにもせよ、其れはパレアンの混濁の證據として用ひられ得ないのである。

ある特別な問題を有せる印度の東部邊境地帯を考察する前に、アングマン島の極めて興味ある住民が残つてゐる。之等の種族は、明らかに可成りの時期に涉つて、爾餘の世界から孤立してゐたが、現存せる若干の純粹な人種の一たるものを現してゐる。彼等はマレー半島、フィリッピン群島及ニューギニア倭小人種としてのネグリート型に屬してゐる。本土にも之等の種族の痕跡が若干存在するやうである。

アングマン人は黒い羊毛質の毛髪を持つてゐる。尤もネグリロ族と同様に時としては赤味が、つた色を呈してゐる。身長は、五呎以下であるが、身體は均整がとれて居る。頭は短頭、顔は廣く丸い。唇は大きいが反轉して居らない。額は發達してゐない。口蓋は極めて小さい。之等の種族に關する測定調査は極く僅かなものしか爲されて居らず、北アングマンと南アングマンとの住民の肉體の間には若干の相違が存する。南アングマンの男女の頭形指數の標準偏差は（其の中五〇のものが測定され、リズレによつて報告された。）各々二以下である。此の低い値は極めて顯著なものであり、更に一層の確證なしには認め難いものである。然し乍ら、若しそれが正確なものである事が證明されるならば、人間集團中の最も純粹なものの一つたるものゝ小變異は大いに興味あるものである。男女の數値は殆んど同様である。北アングマンの同様な數値は三以下であり、正常的な數値である。

次に印度の東部邊境地帯の種々の考察に移る。印度の爾餘の地方と同様な人種系統を此の地方の種族は示してゐるけれどもネグリート族の血の存在すると云ふ證據はないやうに思はれる。此の種族の政治的集團は生物的系統と一致して居らない。而して混淆も相當行はれてゐるので現在各種異つた種族を單一のものに識別することは困難である。以下の分析に於て、私はハツドン⁽¹⁾によつて爲された提案を若干の修正を加へて述べて見る事にする。

我々が印度に於て發見する所の大低の人種は他の所に於てよりも此所では一層パレアン型との接觸によつて修正された。此のパレアン型は恐らく斯うしてインドに浸透したものゝ如くである。基本型及び恐らくは原住民は前ドラビダ人であるが、現在此の點に關して正確な資料が存しない。それは比較的孤立せる種族間に見出される。私は此の型のもものが南方からアツサムに擴つたと考へてゐる。だが之についても現在の所正確な資料が存在しない。言語學的にムンダ語を語る種族とモンクメール種族の中のものとの關係に關心が拂はれて來た。シュミット⁽²⁾に従へば彼等

は邊境地帯に分布して居り、其の發生地は目下論じてゐる地帯である。我々が肉體型と言語型とを結びつけるならば、之等、前ドラビダ人及びバレン人との接觸又は親縁族を公式化する事は必要であらう。黒色の皮膚及び廣い鼻の證據は未分化時代に暑い濕氣の多い氣候に繼續的に住居してゐたとの暗示を與ふるものである。だが、其の他の移動種族が存在する。特にナガ族の中には確かにネジオト族に近い要素がある。鼻形指數の低い値によつて其れは恐らく前ドラビダ的要素と區別されるであらう。私は既に此の要素が褐色人種に近い系統の中最も東方に擴大せるものを現してゐる事を論じた。ヨーロッパ人種に近いアッサムに現れてゐる第三の要素はアルプス人種の分岐種族なるものゝ如く、比較的後になつて此の地域に這入つて來たのである。此の種族は上述せる狭鼻型のものゝ極めて強度なる對照をなしてゐる。彼等は明かに北方からの恐らくは高原からの移動種族である。彼等は此の高原地帯の西方に廣く分布してゐたものゝ如く考へられる。最後に一連の極めて異つた人種要素がある。其の中にあるものは可成りの時期に涉つてアッサムに住居してゐた。彼等は總てバレン人と關係あるものであるけれども、確かに二つの異つた型が存在する。鼻は二つのものを識別する最も好適な手段である。第一のものはビルマに於けるカチン型に近く、廣い鼻を持つ事が特徴である。ビルマを研究する時に充分論ずる事にしよう。第二のものはビルマには見出されないが、北インドのレプチャの間に見出される。又屢々ベンガルに見出される。此の型のものはバレンと他の要素との混淆に基くものゝ如くである。或はそれはカチン族と同様の系統から分れた型のものであるかも知れず、特殊の環境に長く住居する事によつて影響を受けたものと考へられる。更に此の型に加へてインドから最近移動が行はれた。之はハツドンによつて長頭狭鼻のものとして記述されてゐる。恐らく此の大なる混淆は環境の自然的結果と思はれるが、異つた系統から來れる極めて多數の種族型が夫々異つた時期に會合したものと思はれる。

- (1) Imperial Gazetteer of India. Oxford, 1909 (26 vols.).
- (2) Census of India, 1901 (Anthropometric), Calcutta, 1902-1903.
- (3) Census of India, 1911 (Linguistic), Calcutta, 1912.
- (4) The Cambridge History of India. Camb., 1922, I.
- (5) Smith, V. A. The Early History of India. Third Ed., Oxford, 1914.
- (6) Macdonell, A. A. History of Sanskrit Literature. Lond., 1905.
- (7) Roberts, S. G. Historical Geography of India. Oxford, 1916.
- (8) Vincent, G. The Defence of India. Oxford, 1923.
- (9) Senart, E. Les castes dans l'Inde. Paris, 1896.
- (10) Lyall, A. C. Asiatic Studies. Lond.
- (11) Bouglé, M. C. Essai sur le régime des castes. Paris, 1908. (T0 be used with caution.)
- (12) Anderson, J. D. The Peoples of India. Camb. Univ. Manuals, 1913.
- (13) Guiffrida-Ruggieri, V. Arch. Antrop. Ethol., Florence, 1917, XLVII.
- (14) Richards, F. J. Quart. Journ. Mythic. Soc., Madras, 1917, VII, 243.
- (15) Risley, Sir H. H. The People of India. Lond., 1908.
- (16) Turner, Sir W. (Cranionometry) Trans. Roy. Soc., Edinburgh, 1889, XXXIX, 703; 1901, XI, 59; 1906, XLV, 261; 1913, XLIV, 705.
- (17) Tod, J. Annals and Antiquities of Rajasthan. Lond., 1829-1832.

- Reprint, Oxford. Ed. W. Crooke. *Annals of Mewar*.
 Reprinted separately, Lond. [N. D.] Ed. C. H. Payne.
- (18) Enthoven, R. E. *Tribes and Castes of Bombay*. Bombay, 1920-1922. (Deals with part of South India also.)
 - (19) Crooke, W. *The Natives of Northern India*. Lond., 1907.
 - (20) Crooke, W. *The Tribes and Castes of N. W. provinces and Oudh*. Lond., 1896.
 - (21) Crooke, W. *The North-Western Provinces of India*. Lond., 1897.
 - (22) Crooke, W. J. A. I., 1898, XXVIII, 220, J. R. A. I., 1910, XI, 39.
 - (23) Dalton, E. T. *Descriptive Ethnology of Bengal*, Calcutta 1872.
 - (24) Kirkpatrick, W. *An Account of the Kingdom of Nepal*. 1821.
 - (25) Eickstedt, E. v. [Sikh] *Z. F. E.*, 1921, LII, 318.
 - (26) Eickstedt, E. v. [Paniabi] *Man in India*, 1923, III, 161.
 - (27) Robertson, G. S. *The Kafirs of the Hindu-kush*. 1896.
 - (28) Charles, R. H. [Panjab. craniology] *Journ. Anat. Phys.* Lond., 1907, XXVII, 1.
 - (29) Holland, Sir T. H. [Kanets] *J. A. I.*, 1902, XXXII, 96.
 - (30) Risley, Sir H. H. *The Tribes and Castes of Bengal*. 1891.
 - (31) *Ethnographic Survey of India*. Anthropometric data from Bombay, Calcutta, 1907. (See note to 18.)
 - (32) Thurston, E. *Castes and Tribes of Southern India*. Madras. 1909 (7 vols.).
 - (33) Thurston, E. *Madras Gov. Museum Pubs.* IV, V.
 - (34) Schmidt, W. *A. f. A.*, 1910, N. F., IX, 90.

- (35) Holland, Sir T. H. The Coorgs and Yeravas. Journ. As. Soc., Bengal, 1901, LXX, 59.
- (36) Hornell, J. [Southern brachycephals.] Mem. As. Soc., Bengal, 1920, VII, 139.
- (37) Hornell, J. [Extension of Mediterranean race.] J. R. A. I., 1923, LIII, 302.
- (38) Hunt, E. H. Hyderabad Caim Burials. J. R. A. I., 1924, LIV, 140.
- (39) Iyer, Anantha Krishna L. K. The Cochin Tribes and Castes. Madras, 1909, 1912.
- (40) Lapique, L. Bull. Mus. d'hist. Paris, 1905, 283.
- (41) Rivers, W. H. R. The Todas. Lond., 1906.
- (42) Callenand, J. Rev. d'Anthrop., Paris, 1878 (2me S.), I, 607.
- (43) Parker, H. Ancient Ceylon. Lond., 1909.
- (44) Sarasin, P., and F., Ergeb. Natur. Forschungen auf Ceylon, 1887-1893, III. (Veddas).
- (45) Thomson, A. [Veddas.] J. A. I., 1889, XIX, 125.
- (46) Seligman, C. G., and Z. B. The Veddas. Camb., 1911.
- (47) Lüthy, A. A. t. A., 1912, N. F., XI, 1.
- (48) Virchow, R. Z. f. E., XIV, 302 and XVII, 500.
- (49) Virchow, R. Abh. Königl. Akad. Wiss., 1881.
- (50) Brown, A. R. The Andaman Islanders. Camb., 1922.
- (51) Flower, Sir W. H. J. A. I., 1879, IX, 103; 1884, XIV, 115.
- (52) Man, E. H. J. A. I., 1882, XII, 69, 117, 327.

第六章 支那

支那共和國は四百万平方哩以上の地域に涉つて居り、支那本土の人口は約四億である。支那の一部については既に論じておいたので、他のものがこの後の章に於ての主なる問題を構成するであらう。こゝで私は古い支那本土、即ち十八省について論じ、滿洲、支那人が新疆と呼んでゐる支那トルキスタンの新地域、及び蒙古、チベットを除外する事にする。遼東灣の北端にある小さな人江の地帯は除いて、支那は東を海によつて境界付けられてゐる。北部に於ては全體として之は恐らくは極めて初期の時代を除いて、極めて屢々横斷し得る様に思はれなかつた所の境界を構成してゐる。だが然し支那人の影響はたしかに初期の時代から海か又は陸かに依り、「朝鮮の門」を經由して東方に進展したのであるが、後に我々が見る如く支那人の影響は文化的にも人種的にも日本に達してゐたのである。

だが然し、南の沿岸は一つの異つた歴史を持つてゐた。有史時代に入つてから支那人の水夫は繼續的に諸々の島に進出して行つた。而して今日彼等は住民中の増大的な要素を構成して居り、來住者の大抵の者は南の沿岸地方から來れるものである。

支那の北の境界は常に間違つた定義を受けて來た。一般にそれはゴビ沙漠として記述されるかも知れない。その境界の現實の位置は時々刻々と變動した。我々は恐らくは山脈線即ち人工又は自然の城塞として萬里の長城の走つてゐる線を以て人種的境界を定め得るであらう。更に西方に至り甘肅に於ては沙漠が殆んど人種の現實的境界を構成してゐる。

西は山脈及び沙漠に守られ、南の境界は即ち雲南高原及び廣西高原からの斷崖は南東アジアを取り扱つた所に於いて

て論ずる事にしよう。北の境界の部分は殆んど住居するものなく、亦その地帯は殆んど横断するに困難であるが、支那大平野の北部地帯は移動種族に明け放たれてゐる。黄河のオルドスと海との地帯を通つて支那は様々な時期に北からの影響（モンゴル及びツングース）を可成り受けた。

こゝを通つてその最も大なる征服者（モンゴル人及び滿洲人）が來た。だが然し、その到來が極めて重要な人種的影響を持つたかどうかについては疑はしい。

北西邊境地帯は最も大なる興味のある所である。何故なら西方から來れる侵入者が初期の時代に支那に入つたのは此の困難な經路に沿つてであるからである。支那人自身がタリム盆地のオアシスで困難な農業技術を學んだ後支那に入つたのも、此の經路に依つてであつたと若干の著者達が提案してゐるが、それは恐らく可能である。だが然し南山及び天山から發する流れに依つて灌漑されてゐる廣範な地帯にはそう大した力點を置き得ない。何故ならばこの地帯は東アジアの全體に於いて、人種的には最も要害たる地點を構成して居り、支那とカスガリア及びツングリアとの間の交通路となつてゐるからである。現實の經路の詳細については支那トルキスタン及びチベット人種學を取り扱ふに際して後に論ぜられねばならない。

支那とチベットとの間の境界は古代に經路があつたけれども、支那の人種學を研究するものには恐らく大なる重要性を持つものではなからう。

ビルマと支那との境界は東アジア人種史に一層好適に屬してゐる。

此の廣大な地域の地勢學は元來複雑な様相を呈してゐるけれども、我々の現在の目的にとつて支那本土を三つの部分、即ち北に横はれる中央高地を形成せる黄河流域、南方の揚子江流域及びその南の複雑多岐な山嶽地帯に別けて考

へる事が便宜である。

北の高地はモンゴリアの高原から下つて一聯の斷崖を構成してゐる。此所では人種的境界と地理的境界とは必ずしも一致してゐない。之等の高地の基礎にある地理層は水平的石灰層であり、大部分は煤となつてゐる。その地質のためその地域は平野に至る侵入を勧誘する所となつてゐる。北方にはモンゴリア高原があり、南には斷崖が平野に向つてそびえて居る。之等の高地は地理的には山東高原集團と聯關を持つてゐる。山東高原集團は山東半島を構成してゐる平野並びに若干のものから諸々の島の様に隆起してゐる丘である。

平野は外部に存在し、亦孤立してゐる丘陵をその發生地帯と分離して長く連なつてゐる。黄河盆地及び揚子江盆地の一部を含んでゐるこの平野は疑ひもなく北支那に於て最も重要な特徴をなしてゐる。それは大きな三角形を成し、頂點は北京の北部、基底は上海から宜昌に至る揚子江である。それは黄河と揚子江の二大河のデルタとして記述されるであらう。だが此の記述は地理學的觀點から見れば、恐らく全く充分なるものではない。だが然しこの平野は、單一の人種學的單位を構成してゐる。北部—黄河—は支那の古い郷土を構成し、南部—揚子江盆地—は秦嶺地帯に依つて北部と分離し、多くの點で異つてゐる。此の南部地帯は古い宋王朝を構成してゐた。だが然し、それは北からの壓迫に依つて彼等が南に追放されるまでは支那人によつて侵入されなかつた。漢口と宜昌との間に此の南部平野は巫山脈によつて爾餘の平野から現實に切り取られてゐる。此の巫山脈は山東山脈が北部の斷層であると同じ様に南部高地の斷層を構成してゐる。

黄河盆地の中には甘肅、陝西、山西、河南、山東の諸省が含まれる。それは人種學的に南部と異なるばかりでなく、氣候、食糧生産に於ても亦爾餘の支那とは明らかに異つてゐる。米は總ての人々に恵まれた食糧品であるが、多量に

は收穫されず、主要な穀物は小麦及び稷であり、その他乾燥せる穀物である。土壤の特質は黄土であり、黄河が巨大な量を齎したものである。河は度々氾濫し廣大な地域に溢れ出たが、植物や食物はこの爲に大人口を養ふに足る程生長してゐる。だが此の地方はその穀物の生育には降雨量を必要とする。平均温度は好適である。だが北支那は夏には極めて暑く冬には寒冷なる傾向がある。

他方、揚子江河谷は殆んど亞熱帯である。この地方は充分水に恵れて居り、植物の繁茂が見られる。河は大部分最深部にまで涉つて流れてゐる。それ故、之等の條件は違つた型の生活及び慣習を作り出し、亦微少ながら異つた肉體型を表はしてゐる様に思はれる。

南高地の森林地方は揚子江盆地の北部のそれとは異つた様相を呈してゐるけれども、二つのものを人種學的に分離する事は可能ではない。人種學的觀點から見ると興味のあるのは、主として地勢と肉體型の分布の相關々係にある。

南部高地は簡略に次の如くに記述されるであらう。即ちそれ等は三つの部分に分けられる。北の境地に沿つてその地域は西から東に涉つてゐる。南に於いてその地域の方向は西南西から東北東にあり、南方に於いては一層南に、北部に於いては一層北になつてゐる。之等の地帯は南支那の地形を考察するに際して最も大なる重要性を持つものである。西方には最後に名附けたものと強度な對照をなす一聯の地帯がある。即ち之等のものは古く、低く、切り拓かれてゐるが、南の地帯はそれよりも一層最近に形成された所のものである。河の流れが時々變るために之等の地帯は極めて複雑な系列をなす高原を形成するに至つた。

それ等は便宜的に次の三つの地帯に分けられるであらう。北には大部分が依然として最初の谷形を保持してゐる峻嶒な一聯の山脈がある。その主要な地帯は南山山脈であり、その北にカシガリアに至る路が走つてゐる。第二に渭河

の南には秦嶺山が走つてゐる。その東は河の境界が続いてゐる。此の地帯の東端に即ちそれと伏牛山との間に一つの低地が斷層のために形成されてゐる。此の溝は最も大なる重要性を持つものである。何故ならば、それを通つて襄陽から西安に至る西方の經路の一つが走つてゐるからである。伏牛山と巫山とを分離するこの低地も亦、襄陽から開封に至る一つの通路によつて横斷されてゐる。

第二の地域に於て古い河谷の最大の破壊が行はれた事については既に示した所である。その詳述は我々の現在の目的上必要ではない。注目すべき最も重要な事實は赤粘土の沈澱であり、それは場所によつては一つの不規則な平野を構成してゐる。斯る土壤は極めて肥沃であり屢々大人口を扶養してゐる。此の型の最も重要な地域は東四川の赤土盆地と東雲南の一部とである。

第三の地區に於ては北から南に走る一聯の谷を構成してゐる。河は狭い谷間となつて流れてゐる。

此の南部の山嶽地帯の多くのものは現住民或ひは少くとも非支那種族の家郷を形成してゐた。之等のものは支那人が平野を占めた後にも永く山の中に生存する事が出来た。河谷の極めて複雑多岐な性格は公道として殆んど使用するに役立たず、此の通常路に依つて種族の傳播するのを防止する役割を演じた。平野及び一、二の特に恵れた地域の性質は過剰人口を屢々發生せしむるに至つた。そこに住む種族の一般的な方向は南方にあつた。西は高い臺地となつてゐて注目すべきものは殆んどない。南には様々な河谷及び沿岸平野に對する出口があつた。人口はその出口の可能性に従つた様に思はれる。

斯くの如くして支那人又はそれに親縁關係を持つ種族は殊に現在佛領印度支那と呼ばれてゐる沿岸平野に擴まり、また、ガンヂスの谷に擴まつたやうに思はれる。彼等は亦、蘭領印度にも擴まり、亦擴まりつゝある。

此の廣大な地域の内部に行はれた運動を要約する事は困難である。然し乍ら一般的に云ふならば、北部の地理的條件が種族移動を平野の内部に狩り立て、他方南部の地理的條件が全體として求心的なものであつた様に思はれる。

私が既に述べたやうに支那の初期の歴史は全く不明である。此の廣大な地域の初期の住民が何であつたかについて云ふ事は不可能である。だが今日現住民と考へらるべき一定の種族が存在してゐる。だが彼等は大部分山嶽地域にのみ生存して居り、平野に於る初期の住民の痕跡は一さい失はれた。

今迄なされて來た最も重要な調査研究は既に述べておいた所である。アンダソン博士は疑ひもなく銅器時代及び明らかにアナウと結合してゐる文化の痕跡を發見した。此の文化の痕跡は河南省に發見され、亦楓田のはるか東方に發見された。此の文化の正確な年代的位位置については現在決定され得ない。我々は西から恐らくは既に記述した南山の北部經路に沿つて此の文化の移動があつたものと想像しなければならぬ。此の文化は現在何か決定的な種族即ち近代の北支那人と同様な型のものとして考へらるべき種族と聯關させて考へ得ないのである。兎も角、支那人の起源を極めて往昔の時期に求める事は合理的ではなからう。

我々は此の文化が遠くタリム盆地に迄擴がつてゐた事を知つてゐる。支那の種族の起源がそれ等の地帯にあつたと提案せる歴史的な立場は、寧ろ此の文化の繁榮であるかも知れない。それは今日眞に妥當な起源の暗示よりは寧ろ考古學的證據によつて知られてゐるものである。

だが現在支那の初期の人種史を體質論的觀點から述べる事は不可能である。だが銅器時代の支那に今日の支那人と肉體的に似てはゐるが、異つた文化特徴を持つる種族が住んでゐたと云ふ事が出来る。他の立場の人に依つて支那人の起源が寧ろ南方にあると云ふ事が提案された。體質的立場の上に立つて今日此の説を論難する事も等しく不可能で

ある。だが然し支那人型の分布が北よりは寧ろ南に大きく、黄河盆地の北方には混淆状態が見出されると云ふ事は重要な持つものであり、實際亦此所では極めて他の多くの人種と混淆した様に思はれる。

之等の種族とアルプス人種との關係も亦一つの問題であるが、現在我々は不十分な證據しか持つてゐない。一時眞のアルプス型に近い系統が存在し、北部には北方型及び原北方型がゐた様に思はれる。だが此所で再び肉體型に關する證據は何等ないのである。だが之等の問題に於いて文化的な證據は何か疑ひのある道標を證明する様に思はれる。倭、初期の支那人に關する證據を要約すれば、現在我々は何も持つてゐない事、此のアジアの大なる部分を占める住民に關する推論が總て近代住民の特徴に關する論議に限られねばならないと云ふ事が認められねばならない。

支那共和國の國旗は支那人、滿洲人、モンゴル人、チベット及びモズレム人の支那の五人種をその五つの色彩で現はす事を要求してゐる。一見その分類の基礎は不充分なるものである。だが然し、支那人種の研究にとつてはそれは極めて便利な出發點を構成してゐる。滿洲人及びモンゴル人については後にその家郷たる地域を取り扱ふ章に於いて記述しよう。チベット人も全く異つた問題を構成してゐる。モズレム人が残るが、之はその宗教的立場で分類されてゐる。それから支那人自身が最後のものである。

支那の原住民については支那國旗上何等の地位も與へられてゐない。だが彼等は現在殆んど研究されてゐない。一つの極めて興味ある集團を構成してゐる。彼等は通常支那人によつて次の如く分類されてゐる。即ち四つの分類が之であつて、蠻子族、土獠族、苗族、猪族である。之等の名前は極めて充分ではない。蠻子族——此の支那の語はギリシヤ語の野と云ふ語と殆んど同様である——の中には黒苗、明家、狎家又は龍及びその他の種族が含まれてゐる。土獠と云ふ語は土又は土着を意味してゐる。それは廣西省、貴州に於ては龍、甘肅及びその北部に於ては其の他の名

で呼ばれてゐる。苗と云ふ言葉は植物又は苗を意味し、亦實際には土着を意味してゐる。それは所謂花苗、黒苗、白苗、安平附近の紅苗、隸その他の種族について用ひられてゐる。猪は犬の名前である。貴州に於いてそれは循環する職人種に適用されてゐる。此の名前で呼ばれる種族は亦、廣西及び廣東の一部に發見される。

私が興へた分類は餘りに技術的であるので充分なものでない。少くとも貴州、四州及び北廣西に於ける現住民を苗、羅羅、及び狎家の集團に分ける事が一層便利である。亦、之等の種族に屬する一、二の他の種族がある。彼等の中には南貴州の里民族、及び廣西及び南貴州のベージェン族、北東廣西のビンムー族が含まれる。之等の種族の分布は殆んど次の如きものである。湖南には黒苗及び狎家があり、洞庭湖に近い常德市史には或る現住民の記録がある。狎家族の眞の家郷は貴州の南部及び南雲南を越えて湖南から安南及びビルマに至つてゐる。それ等のものは色々な名前によつて知られて居り、その最も重要なものはビルマに於るタイ族である。

之等の種族の北に黒苗が住んでゐる。彼等は貴州の南部を越えた安順と興義との間の約八〇哩の地帯に住んで居る。彼等は江西から來たものと思はれる。

花苗の二階級は西中央貴州及び北に至る迄延びてゐる。上に詳述せる之等の種族は今日見られる唯一のものゝ如くである。

だが然し現住種族の一般的分布は更に廣い。黒羅羅は恐らく孤立集團としてビルマからやつて來たものであらう。彼等は黒いが故に黒人と呼ばれる、支那の繪を見ると彼等が常に馬と關係があるのは面白い。馬と關係があるのは他の二、三の種族にも見られる。三世紀頃彼等は花苗及び白羅羅族又は苗族の支配階級となつた。彼等は興義縣、スインツェン及びチンフェンチャオの地方、又、白羅羅族の數多い大定縣、及び安順縣の西方に見出される。亦、南東

雲南にも存するが、そこでは彼等は挪蘇族と云はれてゐる。彼等は四川の獨立せる湖に最も數多い。

之等の意見はジェミソン (Jamieson) によつて表明されたものである。彼は極めて錯雜せる問題に關する各種の知識を蒐集整理した。支那地理學調査の陳氏 (C. K. Ting) は寧ろ異つた見解を持つてゐる様である。彼は云ふ。「歴史的に羅維族はチヤン族と共に北西四川、ココノール及び南トルキスタンに於ける重要種族となつてゐる。南トルキスタンに於いて彼等はユウエチ族として知られてゐるイラニヤ族と雜婚した。イラニヤ族の要素は羅維族の中に見出されるであらう。」

雲南に於る陳氏の人種學的研究は最近行はれた様に思はれる。而して若干の企圖の中の、一つは之等の種族から生物學的な資料を獲得する事にあつたのだ。彼はイラニヤ人が確かに長頭型であつたと述べて居り、此の假定の基礎の上に羅維族とイラニヤ族とを結び付けてゐる。だが然し疑ひもなく陳氏はそれはリプレーと同じ意味に於て用ひてゐるやうである。陳氏が獲得する事の出來た若干の測定値は、此の假定を支持してゐる。彼は旅行者が高身長、明るい皮膚及び非モンゴールの特性を示してゐる基底的特徴を記述した事實に言及してゐる。然し乍ら彼自身の測定は、全體として身長が低い事を示してゐる。最も顯著な特徴は極めて小さな頭と極めて低い頭形指數である。頭は絶對的にも相對的にも狭く、絶對的には短いが相對的には長い傾向がある。

斯る説明は西部支那の現住種族の中に西アジアの長頭型住民及びエリオット・スミスの褐色人種に一致した地中海人種の住民に相當する型がある事を示してゐる。西部とネジト族の間には一つの繋りがある様に思はれる。之等多數の現住種族の中にあつて主要な影響が西方から來れるものとする説があるけれども、少くもその若干のものが南から來たと云ふ提案が存在する。之は體質的な觀點から見るならば全く可能な説である。彼等は大方小なり、イナチ

ヤン、ウーティンの狛苗族の如きパレアン系統と混淆して居り、一つの混淆型を代表してゐるものと思れるものである。

彼等が雲南に存在すると云ふ事は特別に重要な事である。何故ならそれは古代に褐色系統とネジオト系統との間に結び付きがある事を示してゐる様に思はれるからである。

第二の現住民集團は更にそれよりも東に進んでゐる。彼等が寧ろ非支那人として考へられねばならぬ事は妥當であらう。何故ならば彼等の現在の家郷は比較的短期間の間に占められてゐるに過ぎないからである。その中には客家族及び本地族が含まれる。外國人又は新來住者を意味する客家族は主として廣東及び廣西に發見されるが、福建、江西、浙江、臺灣及び海南島にすら若干の散布集團として存在してゐる。彼等が最初山東、山西、アンユイに住んでゐた事は明瞭のやうに思はれる。紀元前三世紀頃彼等は山東から驅逐され、その後六百年にも涉つて更に南の江西及び福建國境の山に驅逐された。後に彼等は更に山脈の中に驅逐され、更に福建山脈、江西と廣東との間の地帯に追ひこまれた。結局十四世紀に彼等は福建から追出され、廣東の北に定住した。彼等はその省の南西に擴がり亦、廣西に擴がつた。

現在之等の種族に關しては我々は殆んど人類學的資料を持ち合せてゐない。その集團のあるものはそれを取巻く支那人の文化とは多くの點で異つたものを持つてゐるけれども、支那人と極度に混淆したのであつた。他の場合、原初的型がつきとめられそうである。此所で亦我々はそれと褐色人種とを結び付けねばならない様に思はれるが、大抵の西方現住部族のものとは何か異つた方法に於てなさねばならない様である。此所でアジアを越えて擴がつてゐる所の紐帶關係は何もないが、恐らくはネジオト族の影響の進展が東アジアの周圍に沿つたものと思はれる。

福建省に於ける之等種族の代表者の中で私は彼等の身長が小さい事に驚いた。私はそれを彼等の住んでゐる條件の不充分な事に歸した。彼等の村は屢々遠い山里にあり、不充分な食糧の影響を受け、リブレがフランスに於て發見せる悲惨な地點の様である。山嶽住民の間に身長の低いと云ふ事は非支那人に限らるべきでなく、等しく支那の丘陵民に影響を及ぼした。恐らくそれは人種的な特徴ではなく、環境の直接的結果として考へられねばならないであらう。羅維族のあるものに身長が低いと云ふ事も同様な原因に基づくものと思はれる。

之等の原住民及び近隣種族は總て支那の初期の住民の儘に残されてゐるものである。だが舊石器時代に支那に住民がゐたとする事は妥當ではない様に思はれる。現在に至るまでは随分澤山の殘片物が發見されたにもかゝらず、新石器時代よりも早い時期に住民がゐたとする事は可能ではなさそうに思はれる。だが然しこの國は未だ體系的に人々の前に開かれた所ではなく、その先史考古學も亦、未だ充分知られる所とはなつてゐない。

だが支那には新石器時代に極めて進んだ文化があつた事は疑ひ得ない。この時代の初期の時期に於ける住民については我々は現在殆んど知識のを持ち合せてゐない。新石器時代の終り頃になると随分豊富な文化の痕跡が存在する。それは現在我々が知る限りに於いて現實に何等の青銅を持たなくとも、多くの特別な青銅技術の殘遺物の様に思はれる。銅壺はアナウの作つたものの殘遺物であり、恐らくは之と同様な文化が東に進展した事を現はしてゐる。だが之まで發掘された骨格は同一地域の現住民とは異つてゐないといふ事が興味ある事である。

それ故その證據は支那人と云ふ名前と何等かの肉體型とを結び付ける事が誤りだと云ふ事を暗示してゐる。寧ろそれは言語的文化的な型である。だが然し文化は國民性にしぼりつけられる様になり、亦、近代に於ては明らかに一定の肉體型と結び合つてゐるのでそれらを我々の現在の知識と區別する事は困難である。

肉體的に支那モズレム人とその支那近隣族とを區別する事が不可能だと云ふ事が提案されて來た。私が氣付いてゐる限りこの問題に關しては殆んど資料は集められてゐない。彼等は便宜的にその起源と言語とに依つて、トルコモズレム、モンゴルモズレム、アラブモズレムの三つの階級に分類されるであらう。モンゴルモズレムに就いてはこゝでは述べる必要はない。私は甘肅に於けるトルコモズレムを觀察する機會を持たなかつたが、其處で彼等は住民の可成りの要素を形成してゐるのである。だが然し北京には之等のモズレムが多數存在する。彼等は通常の支那人と極めて顯著な對照をなしてゐる。彼等が各種の時期に支那人と可成り混淆した事は疑ひ得ない所であるが、彼等はその起源型を多くの特異な型として保存してゐる。彼等は充分發達した宗教形式を持ちその鬚鬚は通常充分に發達してゐる。彼等の頭は丸く屢々後ろが平たくなつてゐる。一般に彼等はアルプス人又はアルメノイド人との混淆を現してゐる様に思はれる。

トルコモズレムに加へて少くも北京及び天津に於て數多くのアラブモズレムがゐる。一九二三年に彼等は三萬二千家族存在した。之等の種族は確かに等しく同族結婚である。彼等は若干の改宗が行はれたけれども殆んど自己の宗教を守つてゐる。彼等は亦、宗教組織の大なる發展によつて主として支那人とは異つてゐる様に思はれる。之等のモズレムが持つてゐる奇妙な特徴は人種的な特徴を表はしてゐるのである。彼等は口鬚を刈る風習がある。

之等の種族は宋王朝以來支那に住んで居つた様に思はれる。彼等は依然としてアラビヤ語並びにその古い人種的特徴を保存してゐる。彼等はアラビヤから來住せるものゝ如くである。之がどれ位正しいものであるかについて私は確言する事が出来ない。兎も角彼等は亦、大部分はアルメノイド人種、又は恐らくはアルメノイド人種と地中海人種の混淆に屬してゐるものゝやうに思はれる。彼等は若干の支那人の特徴を獲得したけれども、全體としてそれとは可成

り異つてゐる。或る場合眼の内部に折目があるけれども之は決して一般的ではない。彼等は混交せる褐黄色を持つてゐる。全體として之等のアラブ・モズレム族は其のトルコ同宗派中によりは、一般住民の中に一層吸収されるやうになつた。だが之等二つのものは中央アジアの種族と密接な關係を持つてゐることを示してゐる。

支那には疑ひもなく異質要素、即ち開封の猶太人に近い極めて興味ある要素が存在してゐる。之等のものは全體としてモズレム人口の中に吸収されるやうになつた。彼等は兎も角住民中の一要素と考へられるには充分な數量を持つて居らない。

支那住民中に於ける之等様々な異質的要素は極めて小數の面も重要でない要素を現してゐる。ネジオット型は昔顯著であつたけれども、現在彼等は一層遠隔にして接近し難い地域に住んでゐる。其他の種族は大部分は最近の侵入者である。支那人自身が考察さるべく残つてゐる。私は既に支那人の起源について現在何等直接的知識が存在しない事について述べて置いた。其れに關する資料も極めて乏しく、現在表明されてゐる如何なる意見と雖も、試験的なもの以上を出てゐない。

支那人の異なる集團間に存する差違を考察する前に、私が上述した如く、支那人型とヨーロッパ人型との差違が、若干の著者達によつて根本的なものではないと考へられてゐる事を想起する事は重要である。頭蓋形態は異つてゐないが、他方顔は一定の顯著なる相違を現はしてゐる。毛髮、眼及び皮膚の色は、十七世紀以來の著者達によつて明瞭な人種的特徴と考へられて來た。だが然し之等の構造の下にある骨格組織は少くも或る者の見解によれば、其れ等を區別するに役立つたない特徴を表はしてゐる。

生憎、支那人の社會慣習のために多くの骨格資料を獲得する事は極めて困難であり、此の國に於ては其の發見の方

法は比較的少いのである。又過去に於いて支那の斯る研究につきまといつた困難のために、其の測定研究も殆んどなされてゐない。それ故同一規模又は極めて大なる人口を持つた地域は殆んどなく、それについても、體質論的に殆んど證據が存在しないと云ふ事が出来る。

之迄發表された支那人頭蓋骨の最大なる系列はモラント⁽¹⁾によつて記述されたものである。彼は南支那人と北支那人との差違には大した重要性を附與しなかつた。だが彼の南方の資料は充分に文書を以て現はされず、従つて充分に包括的なものではない。人種的地位に關して彼は人種類似係數を使用する事によつて支那人の諸關係に關する若干の極めて興味ある結論に到達したのであつた。彼は先づ第一に彼等支那人が全體として單一の單位を現はしてゐる事に注目した。だが其の中には極めて數多くの個體が含まれてゐる。此の支那人の人種的地位は永くその特別な地位を持つて來たのであつた。

モラントは北部支那人との結び付き以外に南方支那人が三つの方向に結合されると信じてゐる。先づ第一にそれ等は彼がチベット人Aとして記述した所のものに結び付けてゐる。後になつてこの型は二層正確に記述されるであらう。ターナー卿 (Sir William Turner) は之をチベットの僧侶型と呼んでゐる。第二に彼等は安南人と結び付けられてゐる。安南人は他の要素と恐らくは混淆したものであらうが、肉體的には地方的人種として以外、南支那人とは殆んど區別する事は出来ない。

北方に眼を注ぐとモラントは南支那人と日本人とを結び付けてゐる。之については日本人を取扱ふ時に論じた方がよろしからう。最後に北支那人が朝鮮人と結び付けられる。

人種類似係數の使用から生れる最も興味ある點の一つは、カムチベット人即ちターナーの武士チベット階級と親縁

關係を持つ北部支那人の間に一つの要素があると云ふ事である。モラントは此の點に批判を受けてゐるが、極めて若干のチベット人の頭蓋骨がその係數に影響を及ぼしたと云ふ事を認めてゐる。だがその點については證據が有用なものとなる場合に一層の考察を加へねばならない。

モラントは私が上述したものを除いて、支那人が全體として東洋人種の一般的系列に屬してゐると提案してゐる。變態な北支那人はモラントに依つて正常な支那人型とは顔の長さ、此の長さと頭蓋骨の幅との關係、及び口蓋の長さ、に於いて異つてゐると考へられてゐる。彼等は觀骨の幅、耳點を通つて測られた横狀及び頭蓋骨の最大な長さに於いては微少なが異つてゐる。即ち、顔と頭蓋骨に於いては異つてゐる譯である。之等の差異の意味に付いては何等の提案もなされて居らない。北部種族と何等かの關係が見出されるものと期待される所では、正常的なチベット人ばかりでなく、亦、此の變態型との結合は何等期待されない。だが此の二つの型は最初二つの型に分けて考へたターナーの提案よりは、一層廣く中央アジアに散布されてゐるものと思はれる。

シロゴロフ (S. M. Shirokogoroff) は最近北支那人⁽⁵⁾に關する論文を發表した。彼は乏しい資料から何か徹底的な結論を抜き出してゐる。だが彼の方法は詳細な點については可成りな改訂を必要とする。何故ならば彼はモラント表の正確な使用を充分理解してゐなかつた様に思はれるからである。

彼は支那人が複合的な人類型を持つて居り、西中央支那のみに住んで居り、而して東に北に南に其處から移動したと提案した。東方への移動は支那人、ツングース人、及びパレアジア人との融合となつた。彼はパレアジア人の肉體型を正確に規定してゐない様に思はれるが、その文化については明瞭に規定してゐる。彼は亦、支那人型が滿洲及び朝鮮の住民型に看取されると見てゐる。

この興味ある假定は、多くの人種的證據に根ざされたものであるけれども、全體としてシロコゴロフによつて引用された數字には與へられて居らない。頭蓋指數の標準偏差にのみ多くの證據の基礎を置く事は危険であるけれども著者の數字は直隸の支那人及び山東の支那人、共に三・七である。之等二つの地方は有史以來繼續的に蹂躪されて來た。そこで標準偏差も同様な混淆が行はれた地域が比較される場合驚くべき程低い。

偕、此の證據は支那人が一般に驚くべき程同質的な體型を持つてゐると云ふ一般説をくつがへすには充分なものではない様に思はれる。他の種族の間に行はれた混淆が極めて大なる範圍に涉つて支那人型に影響を及ぼさなかつたとする方が寧ろ一層妥當のやうに思はれる。混淆が行はれたと彼の提案する種族は大抵極度に丸頭型のものであり、恐らくシロコゴロフの假説に立つて見るならば彼等は最初長頭型のものに影響を與へたものゝ様である。だが斯る證據は寧ろ支那人が大抵の南支那人よりは一層長頭であると云ふ事を提案してゐる様に思はれる。尤も此の點については充分研究されて居らない。

山東及び直隸の地方から得た彼の資料は支那人が少くもその地域に於いては極めて身長高く、平均身長約一六七釐を有せる事を示してゐる。之は兵隊について測定した小金井博士の數値以下である。だがそれは他の觀察者の得た數値と一致してゐる。此の大身長は一般には北支那人の特徴の一つと考へられてゐる。

此の身長に關する現在の提案はモンゴールの血の混入である。之は殆んど實際あり得ないものである。モンゴール族の平均身長は約一六三釐の様に思はれる。尤も私が内蒙古に於いて可成り支那人と混淆したものを測定したのであるが、それは寧ろ之より高かつた。滿洲族、朝鮮人、ツングース族は總て之より身長低く、北アジアの他の種族も亦低い。シロコゴロフ及びその他の觀察者によつて表明された假定は、それ故不十分なものゝ様に思はれる。だが然

し、少くもチベット族の或るもの間で可成りな身長の方が現はれてゐると記する事は興味深い。一系列の頭蓋骨に於いてモラントは、北支那人とチベット人との一つの型の間の類似性を發見した事は記憶されるであらう。だが然し、此の點を明確にするには更に一層の資料を必要とする事を彼は認めてゐた。身長に關する一層の證據は少くも暗示的なものに思はれる。蒐集された觀察者數は現在の所一般的な結論に達するには充分でないが、北部支那には若干の違つた系統の混淆ではなくて、南支那人及びカムチベット人と結び付いてゐる第二の系統に類縁關係を持つた系統が存在してゐるやうに思はれる。チベットには之等二つの系統が存在するのであるが、この二つのものは混淆して居らない。北支那に於いては頭形指數の標準偏差に變化を與へる程充分彼等が混淆したと提案されてゐる。之は混淆を暗示してゐるものであるけれども、三つの異つた系統の混淆によつて提案されてゐる異質人口そのものを意味しては居らないのである。遺憾乍ら、小金井博士の頭蓋骨を蒐集された場所と同じだとする事は出来ない。支那から集めた爾餘のモラントの頭蓋骨蒐集の源泉は、種族型分布を強調するには餘りに疑はしいものである。

乏しい資料ながら北支那人に關する資料を要約すれば、南支那人に近いものとカムチベット人に近いものとの二つの型がある様に思はれる。現存せる證據は住民中に高身長な要素の存在を暗示してゐる。之はチベット人中に於ける近隣種族の間で單に平衡化され得ないのである。それ故、全體として現存せる資料は人類類似係數の使用によつてなされた提案を確證してゐる様に思はれる。

南支那人が北方人と同様な人種集團に屬してゐる事は殆んど疑ひ得ない所であるが、一定の重要な相異がある。一般に南方人は小さな値を持つてゐる。頭長も亦北方人より小さい。尤も頭幅は二つのもの間に殆んど相異はない。それ故頭形指數に於ける微少な増加が認められる。多くの著者達、例へばビルクネル及びモラントは二つのも

の間に殆んど差異を認めて居らない様である。此の結論は單に頭蓋骨のみを考察した場合には不可避的な結論であるやうに思はれる。だが然し、我々が持つてゐる資料は身長に於ける大なる差異がある事を示してゐる。だがその資料も明らかに乏しい。北支那に於いては高身長な要素が認められるが、南支那に於いては高身長要素の痕跡を認めがたい様に思はれる。之は亦、頭蓋骨に關する小金井博士の差異を考察する事とならう。南方に於ける此の變態型については何等の證據もない様に思はれる。だが南方に於ける一般的な身長が北方よりも短いばかりでなく、亦生活に於いても相違してゐる事が認められる。鼻は一層廣鼻型である様に思はれる。之がどれだけ眞實性を持つてゐるかどうかについては明確ではない。何故ならばシロゴロフの測定値は北方に於いては廣鼻型の超過を示してゐるけれども、他の種族に關する彼の測定値は一般に使用されてゐる技術を適用しなかつた様に思はれるからである。若し我々が彼の數値を認めるならば、他の觀察者とは一致してゐない所の北部に於ける廣鼻型の小地域を認める事が必要である。更に南方に進むにつれて氣候が暑く濕氣を帯びて來る爲めに、鼻形指數は若干増加するやうである。皮膚の色も亦南方に於いてはヨリ黒い様に思はれる。皮膚の色に於ける差異は本質的には環境に基く特徴なのであつて、人種的特徴としては考へられ得ない。

北方と南方との差異は大なるものではないが、我々をして支那人の二集團を區別せしむるに充分である。最近に於けるその歴史は極めて異なるものであつた。黄河と揚子江との間の分水線は、恐らく同じ種族の二つの亞類を分ける分割線として考へられ得るであらう。最近に至る迄表明された見解が極端に試験的なものとして考へられねばならぬ程證據が乏しかつたと云ふ事は認められねばならない。支那人は單一人種的單位を現はしてゐる。此の單位はあれやこれやの侵入者に直面して充分その個體を維持するに足る程の強力な數であつた。北方に於けるチベットの要素は恐

らしくは極端に早期のことであるけれども、我々の現在の知識状態に於いてはそれに決定的な地位を與へる事は不可能である。

初期の時代に唯に西方の文化ばかりでなく亦、その肉體が支那人口に影響を與へたと云ふ事は當然考へられる所であるが、此の點に關しても亦、現在我々が各省の支那人の現實の肉體に關する合理的な記録を獲得する迄、想像をたぐましくする事は無益である。

第六章 關係文獻

- (1) Jamieson, C. E. The Aborigines of Western China. China Journ. of Arts and Science, 1923, I. 376.
- (2) Legendre. Bull. Mem. Soc. d'anthrop., Paris, 1910 (6^{me} Series) I. 77, 158 (Lolo).
- (3) Ting, C. K. (should read V. K.). Native Tribes of Yunnan. China Medical Journ., March, 1921. [Reprinted in Proc. Anatom. and Anthropol. Soc. of China, 1920-1921, Peking, 1921].
- (4) Birkenr. F. A. f. A., 1906, IV. 1.
- (5) Shirokogoroff, S. M. Anthropology of Northern China. Roy. Asiatic Soc. (North China Branch, extra vol. III), Shanghai, 1923.
- (6) Koganei, Y. Nith. Med. Fak., Tokio, 1903, IV. 1, Intern. centralblatt f. Anthrop., 1902, VII. 130.
- (7) Black, D. [Early Chinese.] Paleontologica Sinica (forthcoming).
- (8) Hagen, B. Anthropologischer Atlas, Ostasiatischer und Melanesischer Völker, Wiesbaden, 1898.
- (9) Henry, A. (Lolo.) J. A. I., 1903, XXXIII.
- (10) Reicher, M. Zeit. f. Anthrop. u. Morphologie, 1912-1913, XV. 421.

(11) Haberer, K. A. Schädeln und Skeletteile aus Peking. Jenä, 1902.

(12) Rose, A., and Brown, J. C. [Lissu] Mem. As. Soc. Bengal, 1910, III, 249.

第七章 支那の邊境地帯

第一節 中央アジア・チベット・支那トルキスタン

先きの三章に於いて私は日本は除きヨーロッパに最も良く知られてゐる、アジアの三大部分の人種學を記述して來た。此の章に於いて私は既に論じた地點の會合點にある地帯に住居せる種族を研究する事にする。之は此の地域の住民が元來邊境地帯に住む者と關係を持つてゐるが故に一層簡略になされる得るのである。この地域の多くは沙漠であり、殆んど人口が住んでゐないと云つてよい、比較的少數の者が此の章で記述される集團を構成してゐるけれども、その環境の特異性がその特別な興味を人種學者に與へたのである。

チベットは面積七〇〇、〇〇〇平方哩であるが、此の地域の七分の六は不可住地域と評價されてゐる。高原は氷に閉ざされ、嵐の吹きすさぶ沙漠であり、低高原と強度な對照をなしてゐる。此の國全體は東から、西にかけて一六〇〇哩、北から南にかけて七〇〇哩と算せられる。南はヒマラヤに依つて區切られ、西も亦、同様な山、即ちカラコルム山脈に依つて區切られてゐる。北は崑崙、アツカタグ、及びアルタイタグに依つてさへぎられ、東は數多くの山嶽地帯に依つて閉ざされて居る。南チベットはツアンボ河（プラーマプトラ）に依つて一三〇〇哩遮られてゐる。大抵のものは人が永遠に定住するには餘りにも高過ぎるが、南方の縁には黑色系の天幕遊牧民が住んでゐる。或る餘り人に知られてゐない名前が教科書に道入つてゐるけれども、粗雑に云ふならカム地方は東經九二度から支那の國境、南は三四度の線に延びてゐると記する事が便利であらう。此の地方には大部分の住民がゐる。カム地方の北東にココノ

ルがあり、一部はモンゴル人、一部はチベット人が住んでゐる。チベット人の住んでゐる西甘肅の一部たるアムドは此の地域の中に含まれる。若干の肥沃な谷、殊にラーサの近隣には大麥、豆、麥が生ひ繁つてゐる。

此の地方は便宜的に四つの地域に分けられるであらう。先づ第一には荒廢たる北部高原であつて、そこに於ける植物は若干のいぢけた灌木に限られる。第二に特に南チベットに於いては高原牧草地があり、その住民は遊牧天幕人であり、小さな石で作られた町がある。第三に多くの深い峡谷と峨々たる谷間があり、そこに村々や僧院が建てられてゐる。第四に特に東カムに於いて豊かな牧草や豊富な植物が低地になつた地方に見出される。全體としてチベットは極度の寒氣にさらされて居り、通常十月から四月迄は氷に閉ざされる。勿論之等は植物に影響を與へる。何故ならば、その地方の全體は四十度の南にあり、夏はそれ故重要な要因である所の特別の光線を與へないからである。

三つの主要道路がある。支那國道はターチエンルウから成る峨々たる縁をつたつて走つて居り、そこをパータンやチャムドーに乗つて通るのである。お茶を積んだキヤラバンがターチエンルウから通る容易なルートがある。第三は甘肅のシンユンから發する北の經路がある。チベットは斯くの如く南には高山が聳え、北には沙漠があつて、外部世界から自然的に驚く程遮ぎられてゐるのである。歴史時代を通じて最も緊密な文化的結合は常に支那とであつたが、それは眞に力の及び得ない程遠隔の地域となつてゐた。それ故孤立と嚴しい氣候條件とがその住民の研究を特に價値あるものとしたのである。支那及び西方との關係に於て中央高原の最も興味ある部分の一つは支那トルキスタンであり、支那人によつては新疆又は新しいドミニオンと呼ばれてゐる。五十平方哩の面積を持つこの地域は高い山脈に依つて區切られた一つの高原である。南方の境界はカシミル及びチベットであり、西方はパミール、ロシヤトルキスタン、北方はロシヤトルキスタン、シベリア及びモンゴリアである。東部に於ける境界は甘肅の地帯であつて、それは

チベットとモンゴリア及び部分的にはチベット自身との間の楔をなしてゐる。

北は天山、南はアルタイダー及び崑崙山によつて區切られてゐる。東は支那に明け放されてゐる。それは顯著な窪地を含んで居る。天山の北の主要な河はバルカン湖に注ぐイリ河とバルカン湖に注ぐコルダ河である。タリム盆地及びツンガリアの低地は天山とアルタイとの間の山を通過する路を含んでゐるが、人種學的論議には一つの便利な單位を構成してゐる。それは人種學的には支那とモンゴリアを含める大なる地域に屬し、西方地域と對照をなしてゐる。だが然し、人文地理の研究に於いてはその境界は決して絶對的なものではない。

我々が研究して居る地域はその大部分が荒廢として居り、人の通過する事の出来ない路である。最も寒冷な住居地部分はバルクルであり、最も暑い所は支那人がホーチョウ（火の地域）と呼んでゐるツルファンである。私は既に貿易路の一般的經路を論じておいたが、スーチョウから、ヂリ、ウルムチからカシガル、ウルムチからクマチに至る通路は記憶されねばならない。クウエイワチエンに至る駱駝路がある。更にコータンからウエンヘンスエン及びスウチョーに至る路がある。旅行が常に困難であるが、人種移動があつた土地には大なる重要性がある。

地理的條件及び種族の曝された影響の相異の爲にチベット及び支那トルキスタンの種族を別々に記述する事が便利である。

チベット人の頭蓋骨は慎重にターナーによつて、後にはモラント⁽⁹⁾によつて研究された。比較的若干の測定が現存せるものについて行はれた様に思はれる。だが然し若干のものはリスレーの印度に關する人種概觀の中に含まれた。最近に到る迄勿論アベユツクの有名な旅行以來若干の旅行家がチベットに這入つた。

若干の權威者の間では相當程度の意見の差異がある様に思はれる。ターナー⁽¹⁰⁾はチベットに長頭型と短頭型のモ

シゴリアがあると云つて居る。彼は長頭型と武士又は戦闘階級を結び付けてゐるのであるが、大部分はカム地方から引き出して来たものである。ターナーは圓頭種族が主要種族を構成してゐると信じてゐる。僧院の大部分の居住者が募集されるのは此處からであると彼は提案してゐる。此のターナーによつてなされた陳述が正しいものであるかどうかは更に今後の觀察に委ねられてゐる。私が吟味せる若干のチベットの僧侶の間では二つの階級が看取され得た。だが、長頭型はその異常な性質を持つてゐるために最も注目を引くものである。それは確かに多くの僧院に發見される。然しその特徴は一つの有用なものであり、命名の目的にとつて便利なものである。従つて私はターナーの名前を採用し、武士型、短頭型を僧侶型と呼ぶ事にする。後に見る様にモラントは、二つの型の存在を確證したがそれらをAとBと名付けた。だがそうした呼名は混亂を招き易く、數學的記號に慣れてない者には容易に記憶されない性質を持つてゐる。

ロツクヒルはそのチベット人種學に關する記述に於いて、北部及び北東部の例外はあるが住民が本質的に一つの型に屬してゐると信じてゐる。此の種族の最も純粹な代表型は遊牧種族又は德魯巴人^{ドムバ}の中に見出される。彼等は身長が低く、モンゴールと同じ高さではないけれども高い顴骨を持つた短頭型である。鼻は通常狭い。原始的な型は遊牧民の中に發見される。何故なら、定住せる種族はそれより一層混淆し、支那に進むにつれて支那人と大なる混淆をなし、南西に進むにつれて印度人と混淆をなしてゐるからである。此の理由は外國からの移民が妻帯者でなかつたと云ふ事である。モラントが集團Aと呼んだものは此の型に屬してゐる。カムの住民中には絶対にモンゴールのものではなく、古いチベット文明をよく現はしてゐるものとロツクヒルは云つてゐる。之等のものはモラントによつて集團Bと名付けられてゐる。

ドニケはチベット人中に二つの異つた型を發見してゐるやうに思はれる。だが然しそれはロツクヒルのそれと同様でない。一はモンゴロイドであり、他は羅羅族と結び付けて居る。羅羅族と結び付けられた型は優しい身體つき、眞直ぐな眼、長い、時には波打つた毛髪を持つてゐる。

ジョイスはその種族が可成り印度ヨーロッパ的血液の混入を持つた南モンゴール人であると云ふ事によつて住民の特徴を要約してゐる。

モラントはチベットに少くも二つの異つた人種があると考へてゐる。之等の中の一種族は南支那人、マレー人、及びビルマ人に密接な類縁關係を持つたものである。他の人種たるカムチベット人は、人種類似係數方法に従へば他の東洋人種と何ら顯著な類縁關係を持たない事を示してゐる。だがそれはチルデスリーによつてビルマ人B及びC即ちカーレンと雜種カーレンと呼ばれた大抵の型に似てゐる。頭蓋骨はフエギア人及びモリオリ人に極めて似てゐる。

後の論文で彼は此の觀念を擴大し、彼のチベット人Aはネパール人及び南支那人の混浴であると述べてゐる。他方に於いて想像された支那人型とは顯著に異つてゐる。小金井博士の測定は又、チベット人Bと純粹な支那人の特徴との混浴たる種族である。だが、C・R・Lは小金井博士の支那人とチベット人Bとの關係觀に結末を與へてゐる。

之等二つの型に加へて第三の系統がチベット住民の中に入り込んだ様に思はれる。アルプス型が即ち之である。だが然しこの型の存在については之まで殆んど報告されて居らないので、その存在については確證を待たねばならぬ。

そこで二つの型の關係について述べる事とする。ハツドン¹は武士型が明らかに古い系統を現してゐる事を提案してゐる。實際彼等はチベットの最初の住民であつたかも知れない。

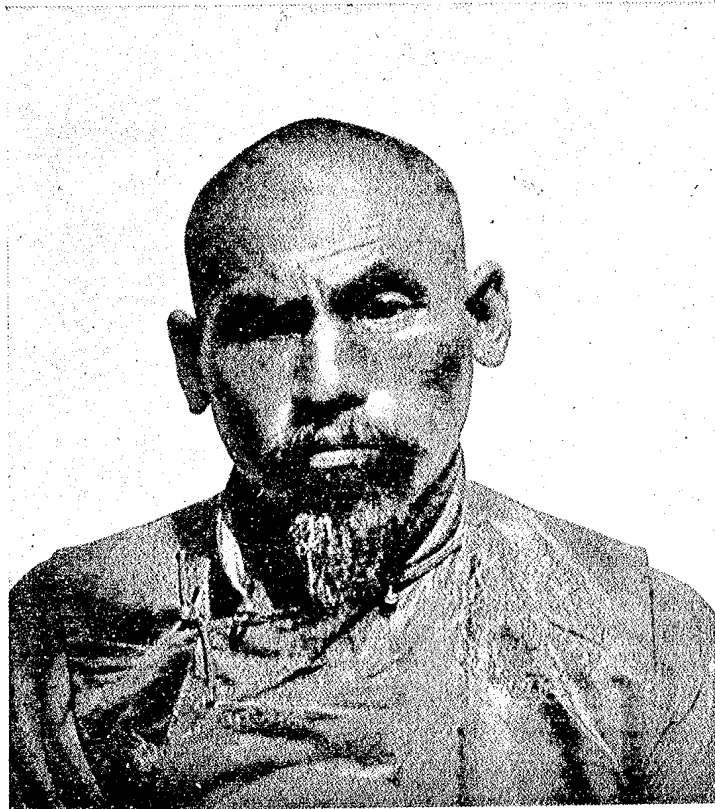
この書の章に於いて、アジアのあちこちの部分に存在し通常は可成り昔のものたる身長の高い長頭人種に既に注目しておいた。彼等は原北方人種と呼ばれてゐる。此のチベットに於いては身長高く、長頭、骨太の、そして全く黄色人種と異つた此の同じ種族が存在してゐる。我々が二つのものを取り扱ふのは妥當であらう。チベットに於いてまた、我々が日本に於いて見る如く此の系統のものは、他の所よりは一層原始的な形態として生存した様に思はれるが、その一般的特徴は異つてゐない。私が同じ名前の下に分類した之等各種集團の間には可成りな差異があるであらう。斯かる差異は我々が廣範な地域に涉つて散布せる原始的な種族の孤立単位を見出す場合に發見される。その證據はこの様な何等かの種族の結論を指摘してゐる様に思はれる。だが然し、その假定は更に之等極めて興味ある種族の諸關係に關して一層多くの證據が集積される迄は純粹に試験的なものとして考へられねばならない。

他の要素即ちターナーの僧侶集團は、パレアン人種に屬してゐる様に思はれる。斯かる結論はハッドンに依つて認められ、モラントの係數の發見と一致してゐる。

チベットの北部には疑ひもなく一定量のモンゴールの影響が存するが、沙漠は極度の混淆を防止した。多くの世代に涉つて支那人の影響があつた。此の影響は恐らくは支那人のそれに近い住民の型を變更しなかつたであらう。

南方に於いて僧侶型のチベット及びネパール人に關するモラントの頭蓋連繫に注目しなければならぬであらう。それは高原や山嶽地帯に這入つたパレアン人の西方への進展が或る程度分化を止めたかの如くに思はれる。恐らくこの分化は西方の系統との混淆に基くものかも知れない。

兎も角、我々が典型的なパレアン人として南支那人をとるならば、之等は北支那人、印度支那の住民又はチベット人と殆んど異つてゐないと云ふ事實に注目しなければならぬ。だが之等の各種の型は一方に於いて相互に可成り相



カームス・チベット族

違を示してゐる。

支那トルキスタンの住民に關しては更に一層の知識がある。支那人自身は三つの住民集團を認めてゐる。極めて古代の原住人種、支那人、及びトルコ族が即ち之である。而してそこには支那人の町とトルコ人の町とがある。此の地域に於いて支那人が始めて一種族として發展し、暫時オアシスの條件の變更のためにバリーム盆地から擴まつて行つたと云ふ事が提案された。此の地域は考古學的觀點からと同様にまた、人類學的觀點からシユタイン卿 (Sir Aurel Stein) に依つて最も慎重に研究された。だが然し、彼の研究の大部分のものは遺憾乍ら問題の近代面に注れたのであつて、初期の歴史は依然として明確にされなかつたのである。彼の人類學的資料の蒐集は既にジョイス(6)に依つて報告された。

此の地域には四つの種族集團がある。第一のものはタランチ族及びトルゴット族である。第二のものはキルギツツ族、ドラン族、ケルピン族及びアクス族である。第三集團は沙漠の種族から構成されて居り、その核心はトウルファン・コータン、コーラ、及びチャルクリクから構成されてゐる。最後に興味ある集團たるロブリツクに關係あるものと思はれる支那人がある。また若干の混淆種族がある。ジョイスはボル族とハミの混淆住民とを沙漠集團と分類し、ニヤ族及びケリア族も亦、相互に他の要素と混淆してはゐるけれども、分類されねばならないと考へてゐる。

タランチ族及びイリクター族は現在、セミレチー地域及びトランスカスピ地域に住んでゐる。彼等はクルヂヤが支那の統禦を受ける様になつた時に新疆から來往した。それ故彼等はその地理學的觀點から見て、その故郷に屬してゐるものと考へられるであらう。ツアプリカは彼等が古いウイグル族の後裔であり、新疆の東部によりは一層西方のオアシスに屬してゐるものと考へてゐる。彼等は色々に記述されてゐる。ツアプリカは彼等がサルト族に似て居り、

肉體型に於いて總てのイラニアトルコ型には似てゐないと云つてゐる。パイゼルの(V. E. Pissel)は彼等をアリアン人種及びモンゴリア人種の特徴を備へたトルコ種族として記述してゐる。彼等はモンゴール(一六五種)の大抵のものよりは身長高く、頭は極めて丸い。頭形指數は約八七と報告されてゐる。鼻は狭く、鼻形指數は六六である。人種的には彼等は丸頭型のブリアート族と分類されねばならない様に思はれる。之等の種族の中にアルプス人の血、又はアルメノイド型の血恐らくはまた初期の黄色人の血の混入を暗示せる證據がある。彼等は連續的な分布状態をなしてゐるのではなしに、極めて廣い地域に涉つて散布してゐると云ふ事は顯著な事である。此の地域は現在の我々の知識状態に於いては殆んど人種的な島の様に思はれ、それと同様に孤立的な丸頭型集團が西アジアに見出される。高地のサルト族がツアブリカが提案せるものと同じ人種集團に屬してゐる事は殆んど疑ひ得ない。

イワノウスキーは彼が中央アジア型と呼んでゐる人類學的集團があると提案した。彼はその特徴を次の如く記述してゐる。彼等は毛髪及び眼の色彩が暗色であり、明るい色を呈せる毛髪及び眼は殆んど例外的な場合にのみ現はれてゐる。大部分のものゝ身長は中位である。高い身長は中ホルドのタランチカイザク族及び若干のサルト族の如き種族の間に現はれ、頭は短頭型又は過短頭型であり鼻は通常狹鼻型であるが、廣い鼻のものも時としては見出される。中ホルドのカイザク族の如きものに著しい。軀幹は通常長い。

眼が青いと云ふ事は特に興味ある事である。私は既に西中央アジアの各地に明るい色を呈した眼を持てる種族の存在に注目して置いた。イリ族に關する資料は乏しいやうに思はれるが、アルタイ地域に於いてヤドリントツエフは次の事實に注目を惹いてゐる。即ち、最近移植して來たものと何等接觸してゐないアルタイ地域に於ける多くの種族は青い眼、栗色の毛髪、目立たない特徴を兼ね備へて居ると云ふ事である。その條件はパイゼルがタランチ族の間にアリ

アンの特徴の存在を記載する時に意味したものを、更に一層正確な言葉で表現したものと思はれる。

此の地域に住む第二の亜類たるトルゴット族は歴史的にはモンゴル族に属してゐるので、之等一層散布せる種族を取り扱ふ所で論じた方が便利であらう。第二の集團たるキルギツツ族、ドラン族、ケルフィン族及びアクス族は第二の地域に於ける他の種族とは極めて異つてゐる様に見える。ジョイスは彼等が南モンゴリア人及びトルコ族の混血であると提案してゐる。ドラン族の顯著な特徴はその六五パーセントのものが薔薇色の褐色を呈してゐると云ふ事である。キルギツツ族の間に此の例外がある。暗色の眼が支配的であるが。ケルピン族の間に此の例外があり、即ち一四パーセントのものが明るい眼を持つてゐる。總てこの集團のものは波打つた毛髪を持つてゐる。之等種族の總ては極めて高い頭形指數を持つて居り、頭は絶對的にも相對的にも短く廣い。

沙漠種族の皮膚の色は屢々黄色味を帯びてゐるが、ジョイスの提案によれば之は恐らく支那人との接觸によるものであらう。だが然し此の要素は、最近の支那人の侵入よりはヨリ早期に混入したものと思はれる。

之等の種族は又、その近隣種族よりも毛髪が黒い。毛髪組織は實際には常に縮れて居り、その特徴はパミール族と共通であり此の點支那人と明らかに異つてゐる。八一の頭形指數を持つコーラ族はさておき、爾餘の沙漠民族は明らかに短頭型である。

最後の集團の中に支那人が含まれる。その六五パーセント以上のものは皮膚の色黄色く、七五パーセントは黒い毛髪を持つてゐる。毛髪は總て直毛である。その大部分は暗色の眼を持つてゐるが、一五パーセントのものは青い眼である。我々の記述してゐる他の種族とは異つて彼等及びロブリツク族は長頭である。二十人の支那人からとつた頭形指數は七六と云ふ低い値を示してゐる。

之等の種族によつて提起される一般的問題は極めて大なる興味を惹く問題である。この地域に於ける大部分の種族は疑ひもなく一つの共通な要素を持つてゐる。之はジョイスに依つてイリニヤ型と記述されてゐる。ハツドンが使つたパミりと云ふ名前を認める事は一層好適なものと思はれる。此の型は確かにアルプス人と關係を持てるものである。ジョイスは四つの他の要素が現れてゐると考へた。第一のものは身長の高い暗色の短頭型人種で、廣い頬骨と眞直ぐな毛髪を持つた白系と類縁關係を持つたものである。之等のものを彼はトルコ人種として記述してゐる。既に示された様に文化型及び肉體型は大なる範圍に涉つて一致して居り、之等トルコ種族の關係は既に西方の地域を取り扱つた際に論じておいた。最後に之等の種族とチベット及びジョイスが南方モンゴル人(例へばパレアン人)と記述してゐる一つの極めて異つた系統と結合せる一つの要素が存在してゐる様に思はれる。彼は此の地域の最初の住民がアルプス系統に屬してゐると云ふ事、モンゴリア型が住民には殆んど影響を與へなかつたといふ點を強調してゐる。

之等の結論は極めて大なる重要性を持つものであるが、特に、支那人の起源に關してその事が云へる。私は既に若干の學者が支那人の母國が支那トルキスタンにあると信じてゐる事を示して置いた。尤も他の學者は西部中央支那にもあるとしてゐる。ハツドンは北部甘肅に求めて居り、大抵の著者達も彼等が少くも西部と緊密な關係を持つてゐると云ふ事を正當なものとして考へてゐる。その接觸が純粹に文化的なものであるか、それ共初期の支那人の影響の痕跡が繼續的なトルコモンゴル族の移動に依つて消滅されたかといふ事を跡付けてゐる様に思はれる。更に我々が今日見る如き支那人型が文化とは分離されてゐるに違ひないと云ふ可能性がある。之が決して不可能でないといふ事は既に引用された事實に依つて示されてゐる。即ち、支那に於ける支那的でない銅器時代の文化は明らかに支那人の肉體型と關聯を持つものであると云ふ事、之である。若し我々が此の矛盾の解決を認めるならば、我々は支那文化の初期の創

造者が大抵はパミリ型のものであると云ふ事を想像しなければならない。又若し彼等が黄色の系統を持つてゐるものとするならば、彼等が西方と接觸する様になつた種族に影響を興へる事は充分ではないと考へねばならない。彼等は東方に進むにつれて、極めて數多くの支那の侵入者を吸引せる黄色人種の中に吸引されたのであらう。斯うした型の理論を支持すべき充分な證據が現在存在するとは思へない。それは違つた角度から同一の問題に接近してゐる様々な著者達の研究を結び付けんとする研究家に直面する矛盾型である様に思はれる。他の種族は恐らくもつと簡単に分類され得るであらう。彼等は之まで分化し來れる種族の、程度を異にせる混淆から構成されてゐる様に思はれる。トルコ人種は人種といふよりは寧ろ文化であるけれども、西方的要素及び黄色人種に近い種族と初期に混淆した様に思はれる。恐らくその混淆は極めて初期のものであり、之等の種族が支那トルキスタンに存在しない中に行はれたのであつた。

第二節 モンゴリア

モンゴリアは極めて多數の人種にその名前を興へてゐるが、極めて廣大な地域から成立してゐる。一般的に云つてこれは水の無い廣い高原から成立してゐる。西方はパミールから、東方は滿洲國境に至るまで延びてゐる。それは溫暖にして肥沃な支那平野と北方の寒冷なシベリア低地とを分つ所である。西方には北から南への總ての人種移動を防止する境界を構成してゐる。此の全地域はアジアの全人種史及び或る時期の政治史に一つの極めて重要な役割を演じたのであつた。

モンゴリア本土は殆んど支那本土と同じ大きさである。その北の境界はトムスク、エニセースク、イルクツク、トランスバイカリアの地方であり、その現實の境界は大部分はアルタイ山脈、ツアヤン山脈である。ツアヤン山脈は更

に東方に延びてヤボロノイ山脈に連つてゐる。東部國境は滿洲と境をなす興安嶺に依つて構成されてゐる。その南の縁に沿つてそれは興安嶺の西に連續せる地域と區切られてゐる。更に西方に行くとき長城が聳え立つてゐる。更に西方に行つて南の境界は、タクラマカン沙漠とゴビ沙漠の分界線を構成する南山の北に横はれる肥沃な土地に依つて構成されてゐる。地勢學的にはそれは高地から成立してゐるが、その高地は暫時南西から北西に隆起し、中央は微小ながら窪地となつてゐる。その境界は極端に山嶽地域であり、ゴビ沙漠は小アルタイに依つて分割されてゐる。

此の境界を經由する路は我々の現在の目的上極めて重要である。西方の天山とアルタイとの間に三つの低地があるが、その總ては西方への接近地點となつてゐる。之等のものはエクタクアルタイとターバガタイ山との間の黒イルテツシ河であり、チユグチャイの町に至る最も屢々利用されるルートである。第三にアヤル湖及びエビ湖に沿ひバルカシ湖と結びついてゐる経路がある。南西境界はアジアに於る軍行路に一致してゐると云はれる。北方の道路は天山の北部斜面に沿つてバルカンから發してゐる。之はズンカリアに至るルートであり、此所から西方への路は私が既に述べた路の一つに沿つてゐる。バルカンの南西方の要害點はハミであるが、之はカシガリアに至る南天山路との關聯に於いて特に重要性を持つて居る。ハミから路はアンシーに至り古い沙漠路に沿つて數丁のジャダゲートに至る。沙漠路の地帯に關して古い支那の地形學者は次の如く記述してゐる。「數哩の間一人の野蠻人も一匹の家畜も視野の中に入らず、水も井もなく草もなく更に路もない。」支那人が此の路を通つて支那に入つたと云ふ事が多くの人々によつて暗示された。又クエイワチンの町及びカルガン、ウルガ、カラコラム、ウリアセツタイに至る道路は大オールドス地帯を經由してゐる。

モンゴリアは三つの部分即ち、北西モンゴリア、ゴビ、内蒙古に分けられるが、或ひは時としてなされる様に内蒙

古、外蒙古に分けられるであらう。この黄河の大オルドス地帯は河に依つてモンゴリアと分離されてゐるけれども、人種的にも地理的にもそれに屬してゐる。此の國の殆んどは山脈に近い所を除いて沙漠である。だが然し内蒙古は水が充分であり、最近遊牧モンゴル人の漂泊する典型的な地盤となつた。

モンゴル族はドニケに依つてトルコ族よりは一層同質的な集團と考へられてゐるが、彼は三つの集團に分けてゐる。即ち、西モンゴル族又はカルマツク族、東モンゴル族及びブリヤート族が之である。之等の種族の進展はモンゴリアの限界を遙かに越えてゐる。カルマツク族は遙か西方のヴォルガに見出され、ブリヤート族は現在大部分シベリアに定住してゐる。尤もこの若干のものはモンゴリアに存在してゐる。

モンゴル族に關する人種の問題は極めて大なる興味を繋ぐものであるけれども、遺憾乍ら西ヨーロッパに於いては殆んど頭蓋骨が蒐集されて居らず、その記録も望み通り充分なものでない。二つの全く相反せる見解がその人種的親縁について起つてゐる。ドニケ(Denis)は「モンゴリア人種の型はカルマツク族及びカルカ族の大抵のものゝ間に極めて強く現はれて居り、ブリヤート族の間には殆んど現はれてない」と云つてゐる。他方モラントはトルゴツト族即ち西モンゴリアの或る遊牧種族、アストラカンカルマツク族、ブリヤート族、カルマツク族、テレンギード族と緊密な關聯を持つてゐると考へてゐる。彼は二つの極端な而して非類似型即ちテレンギード族とカルマツク族との間に彼等が中間的位置を占めると信じてゐる。彼は更に彼等が東洋人種に屬してない、即ち支那人やビルマ人の如き種族を含めての集團に屬してないとしてゐる。

此の極端な意見の差違があるばかりでなく、また色々の著者達は同一名で呼ぶ種族に對して全く異つた測定値を與へてゐる。そこで之等の種族の體質的特徴を論議する前に通常使はれてゐる命名を簡略に研究する事が必要である。

先づ第一に西モンゴル族とはドニケに依ればエレウト族と呼ばれ、その近隣のものに依つてはカルマツク族として知られてゐるものである。この名前は唯に旅行者に依つてのみならず、また人類學者によつても極めてルーズに用ひられて來た。彼等はその好戰的遊牧的習性のために極めて廣大な地域に涉つて散布してゐるが、アストラカン草原及びストラフロポール、及ドヌサツクフオールド地域に集團を形成してゐる。イワノウスキはモンゴル族の西部フオールドが滿洲人によつてはウラツト、支那人によつてはウトウツトと呼ばれ、それがヨーロッパ語に轉じてエレウトとなつたのだと述べてゐる。蒙古史に従ふと四つの分岐がある。即ちズンガー、トルゴツト、チヨシヨツト及びヂユルボツトが之である。トルゴツト族のあるものは一六三〇年にヴォルガの西に移動したのであるが、その時彼等はロシアの支配下に立つた。一七七一年には八ヶ月に涉つて續いた大東方移動があつた。彼等は偶々イリ地域に定住した。ポタニンはタルバガタイのトルゴツト族が移民者の直接の後裔であり、アルタイタール族が長期に涉つてこの地域に定住したと考へてゐる。

或る著者はテレンギート族が此の西方の集團と關聯を持てるアルタイモンゴル族として考へられねばならぬと考へてゐる。また彼等は屢々モンゴル族と呼ばれてゐる。だが然し、文化的には彼等はトルコ族であつて、モンゴルと云ふ名は彼等に適用するべきではない。他方肉體的には疑ひもなく多くのモンゴルの血液を吸収したのであつた。之等の種族の歴史は最近に於いてすら、極めて廣大なる地域を横斷してゐる斯かる遊牧民の慣習の種的位置を明確に表現する事が如何に困難であるかを示してゐる。同様な考察が他の系統のものについても與へられ得るが、トルグート族はその移動能力の一つの例として充分なものに違ひない。

モンゴル族の第二の重要な系統たるブリヤート族はカルカモンゴル族の分派と云はれてゐる。現在の散布中心

地はトランスバイカリアであり、彼等は多くの異つた肉體的・文化的集團の要素を吸収したやうに思はれる。

最後にモンゴールの第三集團、即ち通常は眞正のモンゴル族として知られて居り、成吉思汗と親縁關係を持つ種族はゴビ沙漠及び内蒙古に屬してゐる。それ等の中には數多くの種族が含まれてゐるが、その中でも良く知られてゐるものは北方のカルカ族、南方のチャカール族である。

之等の種族の大多數のものは言語的に結び付けられてゐる。彼等はルーズにはあるが巨大な組織に結び付けられて來たし、その多くのものは同一の文化的要素を持つてゐる。彼等は又、共通の體質的要素を持つてゐるが、少くも部分的には他の多くの要素を吸収した様に思はれる。

彼等は常にはないが、通常高い頭形指數を持つてゐる。だが、同じ集團の成員間には可成りの差異が存する様に思はれる。アラールブリヤート族は頭形指數八二、セラングブリヤート族は八八と報告され、モラントのブリヤート族の頭形指數八四と緊密な關係を持つてゐる。他方、内蒙古に於いてその指數は支那人のそれに近い。だが一般的にモンゴル族が最も廣い意味に於いて極めて廣い頭を持つてゐると考へてよろしからう。彼等は常に中位の身長を持ち、全體としての特徴には大なる變動がない様に思はれる。通常一六三釐。之は顯著な事である。何故ならば彼等は少くも南モンゴリアに於いて、頭形指數に於いては支那人に緊密に似てゐるが身長に於いては似てゐない様にあるからである。

毛髮は常に黒色であるから人種への手引きとして役立つはない。皮膚の色は重要性を持つてゐる。第二にライヘルは次の如く述べてゐる。ブリヤート族の間では皮膚は黄色いが、身體の中、曝されてゐない部分のは明るい色を呈してゐる。ドニクはそれを青黄色又は褐色がゝつた混合色として記述してゐる。プロトフはアラールブリヤート族の間では

白でなくブルーネットであると云つてゐる。内蒙古のチャカールモンゴル族の間では殆んど黄色はなく、顔は褐色であり着物で蔽はれた身體の部分は鈍いブルーネット色を呈してゐる。全體として黄色味が、つた色である事は疑ひ得ないけれども、モンゴル族の複合種族は黄色であるよりもブルーネット又は褐色である様に思はれる。

モンゴル族の或るもの、間には疑ひもなくモンゴル人の折目が現はれてゐる。ポロトフはプリアート族の間で眼の窩が彼の吟味せる場合の半数が斜である事を發見した。之等の觀察は我々が黄色人に典型的な特徴を認めるならば、モンゴル人種集團の屬してゐる證據が何か錯雜なものである事を暗示してゐるもの、如く思はれる。

此の證據の不一致はモンゴル語を喋る種族が此の肉體型に屬してゐないと云ふ事を決定する事に付きまとふ困難に依るもの、如くである。例へば或るツングース種族は現實にはその肉體集團に屬してゐるのである。全體としてドニケ及びモラントに依つて引き出された事實は——彼等は違つた結論に達したけれども——我々が潜在的な肉體型を認める事の出来る様に解釋されねばならない。此の型はモンゴル語を語る種族の中には發見されない。だが嘗ては、比較的同質的な系統が存在し、恐らくはモンゴリアの限界を越へて進展したもの、如くである。此の型はモラントがシベリア人と云つてゐるよりは寧ろ中央アジア人と呼ばれねばならぬだらう。

此の型は我々が南アジアに於いて遭遇する總ての種族とは異つてゐる。沙漠の存在は彼等とチベット系統との混淆を防止した。北支那人は一定量のモンゴルの値を持つてゐるかも知れない。全體としての型にまでは影響しなかつたと云ふ事については既に論じておいた。此の點はライヘル及びモラントによつて共に強く主張されてゐる。彼等はモンゴル種族の間の可成りの相違を認めて居るし、大部分は北及び西モンゴル人と支那人を取り扱つたのである。シベリアの種族を取り扱ふ時に、それとモンゴル族との明確な差異がある事が判るであらう。そこで西方の種族

が残つてゐる。大抵の場合、漠然とトルコ族と呼ばれてゐる種族がある。人種的及び文化的境界が相互に切斷されてゐるために、こゝで再び我々は同様な問題に遭遇するのである。

モンゴール族は南方のパレアン人及び北方の極北種族と亞極北種族との間に驅逐された種族の楔である様に思はれる。地理的條件は此の是案に好適な地盤を提供してゐる。何故なればモンゴール族は東及び西の門たる鍵地點に位置を占めてゐるからである。トルキスタンのアナウに於いて既に述べた様に初期の文化の證據が存在する。此の文化が又東方に延びたと云ふ事を我々は知つてゐる。支那に於いてはそれは肉體型と關係を持たなかつた。だが然し、少くもある程度まではこの運動に於いて此の文化と一致した肉體型がある様に思はれるし、また此の肉體型がモンゴール族に潜在せる同質的な層である様に思はれる。その肉體的特徴を吟味してみると、モンゴール族は私が既にアルプス人として記述したものを現はしてゐる様に思はれる。全體としてみるなら、彼等は他のものより取り分けアルメノイドに近いものゝ如くであるが、此の點については未だ詳細に研究されて居らない。現存せるものを吟味してみると内蒙古の現在の住民中には此の種族系統を暗示する一つの要素が存在する様に思はれる。

屢々可成りの差異があるにも拘らず、斯かる同質性が存在せる事は極めて顯著な事實である。だが然し有史以來、モンゴール族が遠く漂泊し、しかも大なる地域に涉つてその住民が常に少なかつたと云ふ事が記憶されねばならぬ。更に大なる地域を占めてゐる游牧民の間には、相對的に大なる人口密度を持つた地域に定住した住民よりも型の差異が少い様に思はれる。

最初のアルメノイド型が極度に修正を受けたと云ふ事は殆んど疑ひの餘地が存しない。我々は一つの新しい型を提案するか、それ共ヨリ大なる可能性を持つて他の人種との接觸が最初の系統を修正する事に役立つたと想像するかも

知れない。斯かる提案はモラシトの興味ある説に従へば、ブリアート族と朝鮮族との間の聯關が何故に存在するかと云ふ事を示すに役立つであらう。然し乍ら、疑ひもなく彼は内蒙古から頭蓋骨を採取した時に、一つの緊密な聯關を發見したのであらう。

だが然し我々は、多くのモンゴル族が通常モンゴリアンと云ふ名で呼ぶに慣れてゐる特徴を示す如き極めて大なる困難が依然として残つてゐるのである。だが然し若干の點が想起されねばならない。先づ第一に黄色人が白色人と何れ程分類さるべきであるかと云ふ事は決して確かでないと言ふ事である。我々は之等の種族の中に一つの雜交型を見出すであらう。然し乍ら全體として次の事を提案することは一層科學的である様に思はれる。即ち、モンゴル族は長期間に涉り北方型と同じ型のバレアン系統との間に一つの侵入的な要素を成して居つたので、混淆の結果として彼等が一つの雜婚形態を現はしてゐると云ふ事である。兎も角彼等は、通常我々がモンゴリアンと呼んでゐるものと異なるものとして考察されねばならない。若干のモンゴル種族の中には相當の程度に黄色人との混淆の痕跡が確かに存在する。而して之等の種族の中には黄色人の特徴が元來顯著である。だが然し他の種族の間には此の混淆は比較的目立たない。モンゴルの肉體型は私の撮した寫眞に見る事が出来る。そしてその寫眞は北支那の平均的な支那人の寫眞と比較されねばならない。

私は適當な言葉がないので、總て此の論議を通じてモンゴルと云ふ言葉を使つて來た。だが然し肉體型は文化型及び殆んど國民的型と呼ぶべきものと決して一致してゐないと云ふ事が記憶されねばならない。又肉體型も全くモンゴリア又はそこに現はれてゐる唯一の型に限られてゐないのである。私は現在その地域に住んでゐる典型的な人種型に其の名を與へた。この型は東方には殆んど進展して居らないのである。それは判斷され得る限りに於いて「長城」

の彼方を時折り通過したに過ぎない。その「長城」の南にはこれは殆んど集團として見出されないものである。それはモンゴリアの北部國境を越へてトランスバイカリヤ及びアルタイと境をなす地域に進展してゐるが、此の方面に於けるものはシロゴロフに従へば一世紀と四世紀の間に行はれたと云ふことである。

西方に於けるモンゴールの肉體型は多くの場合トルコ族の肉體型とは分離し難いものとなつてゐる。だが此の陳述は限定されねばならない。西方に於いては最近になつて西に移動したモンゴル種族がある。全體として之等のものは彼等自身の特徴を保持して居り、彼等がその現在の居住地には僅かに短期間の間親しんでゐると云ふ事實が考へられるのである。斯くの如くして最近西方への移住者たるアストラカンのカルマツク族は、依然としてブリヤート族と關係を持つた特徴を保持してゐる。他方、文化的には一層トルコ族と緊密な關係を持てるテレンギト族は、その近隣族との關係を現はしてゐるが一層適切に云へばそれはモンゴル型とは遙かに異つたものである。

我々が既に小アジアに於いて見た如く此の場合には全體として、彼等と混淆せるアルメノイド及び地中海住民とを區別するに役立つ若干の差異を現してゐる所のトルコ族と平衡的なものである。だが一層東に進むとアルメノイド型を示し、それは益々モンゴル型と見分け難いほど他の要素と混淆してゐる。

モンゴル族及びその親縁族はさて置き、内蒙古には多數の支那人が存在する。恐らく眞の人種的分類は「長城」の走つてゐる斷崖として考察されるであらうが、様々な時期に支那農民の進展が完全に遊牧モンゴル人を驅逐した事については私は既に別の所で述べておいた。明王朝の始めに支那の領域は明らかにゴビ沙漠の涯に迄涉つてゐた。後になつて彼等は其處を退いたが、今や失はれた地域を再び獲得し始めてゐる。此の支那人の進展及び退却は特にモンゴル族の人種學に關して附け加へておかねばならないし、また餘りに廣く概括する事の危險を示してゐる。疑ひも

なく相當の混淆が二つの系統の間で行はれてゐるが、全體として現在支那人型が内蒙古に大なる進展をなしてゐる。併、モンゴロル型と相併んで北支那人の系統に主とし近い住民の多數が存在してゐる。それ等は殆んど無視し得るものかも知れないが、一定量のモンゴロルの血液を持つてゐる。

亦、モンゴリア本土には他の人種的要素がある。之等のものは第一に滿洲族及びその他のツングース族の要素であり、恐らく東方に於いて重要性を持つものである。彼等の人種的關係については次の説に於いて論ずるであらう。北方に於いては集團として存在する北方的要素が存在する様に思はれるが、此の點に關しては殆んど知られてゐない様に思はれる。南及び西に涉つてモンゴロル族は他の地域を侵害した様に思はれる。尤もそれ程大して侵入した譯ではないが、此所では住民中に重要な支那人の要素が存在してゐる。

併、我々がモンゴリアの住民の肉體型を要約するならば、モンゴロル族と云はるべき種族の中には一つの潜在的同質的要素がある様に思はれる。之は恐らく國境に於いて他の一系統のものと混淆してゐるのであるが、本質的には黄色人又はモンゴロイド人とは異つてゐる。彼等の地域は黄色人によつて侵入されたのであつて、黄色人は一時住民を極度に混淆し、今日屢々モンゴロルの住む地域に集團として存在してゐるが、肉體的文化的には常に異つてゐる。モンゴロル族は血液に於いてはアルプス人の或る分岐族又はアルメノイド人と關係を持つてゐるのである。

第三節 滿洲

モンゴリアの北東には支那人には東北三省、ヨーロッパ人にはマンチュリアとして知られてゐる地域がある。それは支那本土の一部を形成してゐる。これは殆んど人種的な地域と考へられ得ないけれども、それを分離して取り扱ふ

事は便利である。殊に滿洲王朝の名が極めて良く知られて以來はその事が云へる。北及び東はシベリヤ及び朝鮮によつて境づけられ、南西はモロソゴリアよりその南端は黃海に延びてゐる半島を構成してゐる。面積は四〇〇、〇〇〇平方哩である。

滿洲は南から西にかけて興安嶺が横はり、現實の政治的な境界よりは寧ろ北西に渉る人種學的な境界をなしてゐる。南東境界は長白山である。此の地域からの分脈は此の國の中央部に向つて走る。此の南方の中央地域は極めて大なる耕作價值を持つ沖積平野から出來てゐる。それは北方の松花江の谷に續いてゐる。北部及び中央には廣い沼澤地及び森林地がある。これに接近するには二つの主要な経路がある。北部に於いて滿洲は黑龍江の河谷に、南は黃海に打ち擴げられてゐる。此の事實の考察は此の土地の人類史を説明するのに貢獻するであらう。シベリアとの政治的境界は黑龍江であるが、此の境界は人種移動の障壁となるものではない。支那との國境は人工的なものである。

遺憾乍ら、此の地域に於ける體系的な人類學はうち建てられてゐなかつた。而して、王朝名を使用する事はその主張を極度に混亂に陥れた。その位置の自然的傾向から最近に於いても、亦初期の時代に於いても、此の國は極度の移住者に依つて占められてゐた。殊に支那人は滿洲に移入したのであつて、今日最も重要なものではないにしても住民中に於ける最も重要な要素の一つを構成してゐる。亦、可成りモンゴールと混淆したのであるが此の興味ある點については後に考察されるであらう。

滿洲族自身については可成りの意見の差異がある様に思はれる。その名前は最近の起源を持つて居り、十七世紀の初めまでは知られて居らないと云ふ事が記憶されねばならない。

一般に滿洲族はツングース族として記述されてゐる。之は言語的な名前であつて、體質的な證據は適用され得ないも

のである。其の混亂は遺憾乍ら、その他の點では價值ある論文たる滿洲族に關する鳥居博士の論文に於いてなされたものであつた。ツアフリカは東アジアに於ける滿洲と云ふ言葉の使用をアフリカに於けるパンツウと云ふ言葉の使用に比較したのであるが、その兩方の言葉は肉體的な特徴を取り扱ふ場合には無意味なものとなつてゐる。

鳥居博士は眞の滿洲族、即ち移民支那人ではなくてその他の最近の定住者たる此の土地の種族を、黄色な皮膚、絶對的に眞直ぐで黒い髪、身體には少い毛、一つは長く他は丸い顔の二形態を持つるものとして記述してゐる。眼は常に褐色である。私が滿洲族に關して記述し得る斯る若干の觀察は此の記述を確證してゐる。だが然し、時たま眼には淡褐色が現はれてゐる様に思はれるが、頭形指數に關する觀察は通常最も有用な數多い資料である。

こゝで可成り意見の差異が現はれてゐる。クラニヤ・エスニカ(Crania Ethnica)は七九と云ふ値を與へてゐる。その數値は北支那人の頭形指數に一致してゐる。イワノウスキーに依つて引用されたバリヤコフの數値も同様である。(現存せるもので八二)だが然し、他の著者は異つた結論に達してゐる。ウジフアルヴィ及び鳥居博士は滿洲族が極めて短頭型であり、八五及び八七の指數を持つてゐると述べてゐる。

此所では東部モンゴール族の間に見出されるものと正確に平衡的なものがある事が知られるであらう。若干の觀察は北支那人との緊密な關係を提案してゐる様に思はれる。若し詳細に吟味するならば、皮膚の色と眼の色とは同様な分散を示してゐるものと私は考へる。滿洲族のあるものは明らかに黄色であり、他のものは皮相的な觀察者によつては黄色又は褐色のものとして分類されるかも知れないが、身體の曝された部分は褐色、曝されていない部分は白色を呈してゐるものがある。私が提案したいと考へる解決は此所に亦、アルプス人と黄色人と古い混淆があると云ふ事である。極めて大多數の滿洲族は東よりは西に屬せる顔面特徴を示してゐる。少數の頭蓋骨又は鳥居博士がなされた如



滿 洲 族

き一つの地域に於ける一系列の測定に於いては、斯る人種的混淆が國民的及び言語的境界を遮断して不明瞭なものとなり、又は全く封じ込められたと云ふ可能性がある。

十七世紀以來滿洲族はその旗人の軍組織を以て廣範に支那に散布した。殆んど大部分彼等は全く住民中に吸収されてしまつた。だが然し、一定の例外は現はれてゐる。如何なる支那婦人といへども滿洲帝國人の妻妾となるべからず、多くの過程に於いて滿洲人と結合する事が不名譽と考へられた事、之等は支那がその征服者に強制した一つの條件であつた。それ故支那に於いてすら今日、その舊い型を保持してゐる或る滿洲族が存在する。だが大部分滿洲の遠隔地域に於いて舊い滿洲型を調査探求することが必要である。唯に支那人が滿洲に氾濫したばかりでなく、最近に於いては日本人その他の移民者が、殊に鐵道沿線に於いて初期の住民に代替してゐる。

シロコゴロフに依つてなされた滿洲族に關してなされた測定値の標準偏差の吟味は極めて興味ある點を齎してゐる。觀察者は滿洲に於ける支那人について行はれた測定値の平均値が滿洲族のそれと似て居り、北支那の他の支那人とは異つてゐる事を發見した。然し乍ら、この標準偏差は極めて異つてゐる。シロコゴロフは標準偏差が人種混交の測定手段として使用され得るとは考へてゐない。だが然し彼自身の測定値は彼を論破するのに用ひられるであらう。支那人の標準偏差は極めて高い。其處では人種的な混交を期し得られるのである。然し乍ら滿洲族の間では、殊に頭形指數に於いては標準偏差は極めて低い。之は全く顯著な事である。何故ならば大抵の近隣種族は高い偏差を示してゐるからである。私は既に示した如く、殊に他の證據が人種混淆を指摘して以來、此の小なる偏差を考察するのにどうしたらよいか判らない。その系列は充分長いものゝ様に思はれる。(八二〇) 彼等は一つの同族結婚集團に屬してゐるかも知れないが、免も角その數値については慎重に調べてみなければならぬ。而して更に一層の研究が滿洲及び

この興味ある點になされる事が望ましいものと思はれる。

第四節 朝鮮

朝鮮は第三の支那北部邊境地域である。大部分は支那文化の浸透する所となつたけれども、特別に興味ある地域であり、日本と支那との中間地帯を占めてゐる。初期の時代には日本と朝鮮との二つの國の王室間に雜婚が行はれた。佛教使節が日本に達したのは朝鮮を經由してであつた、この國は高い山脈地帯と高原の半島からなる。平野地方は南西に限られてゐる。それは直接、滿洲及びロシア海上地域に連つて居り、豆滿江及び鴨綠江はその北部及び西部國境を形成してゐる。その反對側は海に包まれてゐるが、釜山海峽を越える距離は大きくはない。

朝鮮と云ふ各前は體質的なものよりは、寧ろ國民的及び文化的なものとして考へられねばならない。日本の學者は朝鮮人の體質的性質に關する可成りの量の論文を書いてゐるけれども、彼等の研究の大部分は内包的であり、大部分の比較は日本人に限られてゐる。

公けにされた數字は朝鮮人が極めて異質的であると云ふ事を示してゐる。久保氏及びシロゴロフの研究があるが、彼等は統計的形態に於いて數字を發表した。朝鮮の地理的位置からみて、朝鮮人が一つの混淆人種であると云ふ事が寧ろ考へられよう。有史以來彼等が色々の外國の影響に従屬されて來た事を我々は知つてゐる。支那人の記録は此の點に關して可成り詳細に述べて居り、シロゴロフに依つてそれは便利に要約されてゐる。今日殆んど疑ひ得ない事は西方の國境に沿ひ及び北に於いて、支那人の要素が住民中に可成りの部分を占めてゐると云ふ事である。西方に於いて滿洲族の要素も、亦、朝鮮人の最初の要素を排除する支配的な要素の如く思はれる。歴史的に考へれば最近

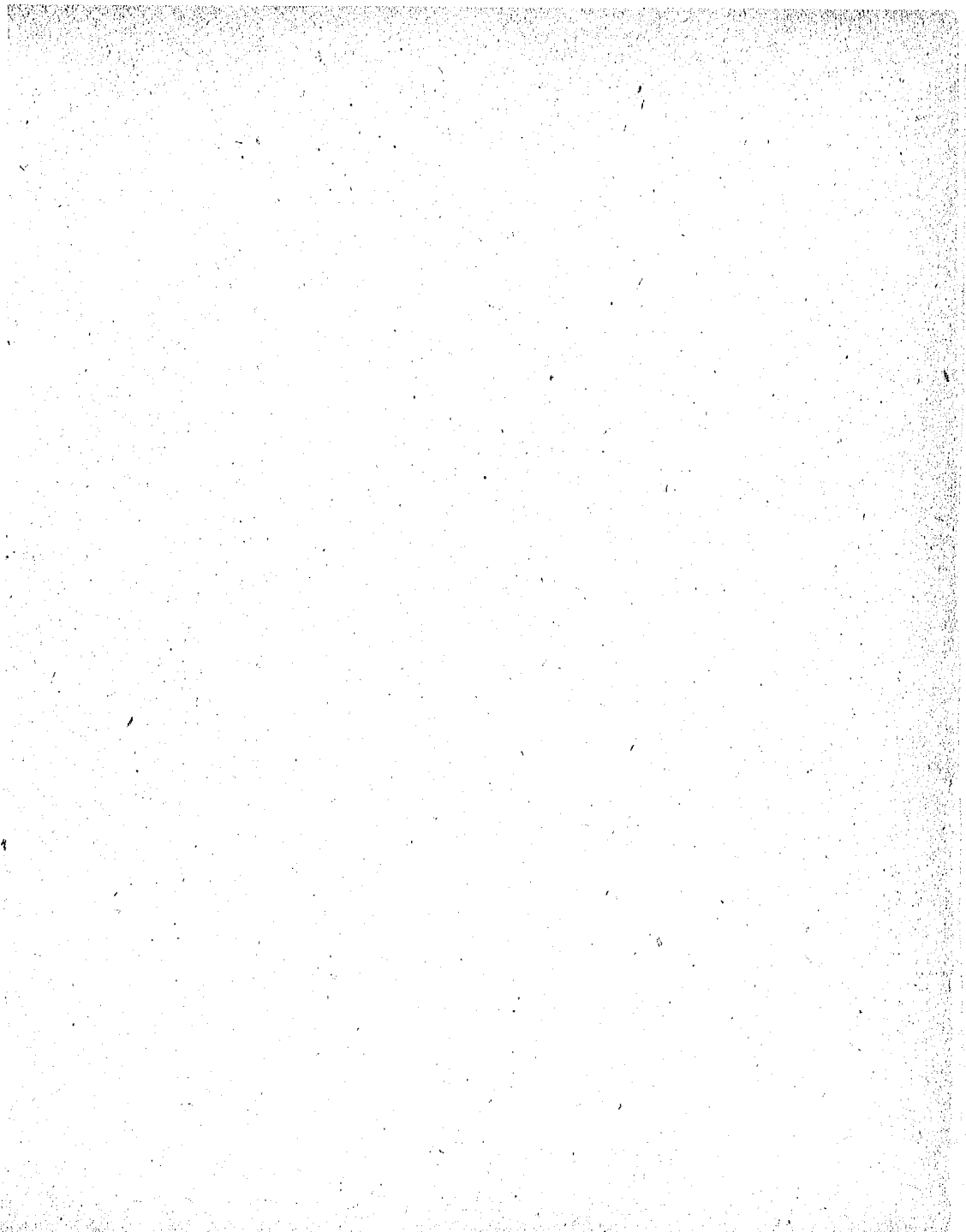
になつてモンゴロ族は朝鮮に氾濫した。それ故、住民の混濁型は疑ふべくもなく統計的な恆常値に依つて判断すれば、朝鮮型について語る事は賢明でない様に思はれる。斯る型は廣く分岐せる一聯の要素の平均に過ぎないであらう。身長のみは寧ろ低い定數を示してゐる。だが然し、此の地域に於ける多くのものゝ間に見出される身長は殆んど一六三糎に近いものと思はれる。之等の種族と同じ身長のものとの混濁は變動を増加するに役立たない様に思はれる。頭形指數は人種的類縁關係に至る路を示し、約八三である。それは八六の指數を持つてゐる極端な型と、八一に近い値を持つたものとの約中間に位してゐる。モンゴロ族の間ですら斯る混濁型、即ち一はヨーロッパのアルプス型に近く他は北支那型に近い混濁型が存する事については既に見た所であつた。斯る單純な説明では朝鮮人の一般型を説明するのは殆んど充分ではない。シロコゴロフは朝鮮人の基本型がパレアジア人のそれであると提案した。斯る種族は直隸灣の沿岸線、實際には朝鮮とバイカル湖をつなぐ線の北の地域を占めてゐたと彼は考へてゐる。當時、彼は約紀元前四千年の最初の人種移動として之を記述してゐるのである。それから二千年後にパレアジア人は朝鮮及び海邊地域に限られた。此の全地域に渉る我々の考古學的知識は、彼が提案してゐる程明確な陳述を與へるには充分ではない。而して我々が人種的變動の極めて緩慢であつた西方の分折を使用して東に適用するならば、斯る極めて短期間の間に行はれたと云ふ根本的な人種變動を認める事が出来ないのである。だが然し、何等か初期の型が朝鮮人の高度に複雑な肉體型の合成物の一つとして原住パレアジア人型を含んでゐる様である。之は全く興味がある。何故ならば彼等は南に於ける黄色人型と、北に於けるそれとの結合として役に立つからである。その事實は斯る型が嘗ては北アジアに廣く分布して居つたと云ふ事、モンゴロ族とトルコ族の侵入的楔が二つの種族を分離するのに役立つたと云ふことを暗示してゐるからである。最大多數の朝鮮人は他の種族よりは取り分け後の侵入者と混濁せる初期の住民の遺物と

して残つてゐる。ハッドンは (Wanderings of Peoples, Page 337) 既にヘルツに依つて朝鮮人が恐らく日本の住民に一つの役割を演じたこと云ふ事が提案された事實に注目を惹いてゐる。歴史的には朝鮮が日本への文化經由地であつたといふ事が知られてゐる。その肉體型も同様な経路を辿つたであらうが、日本がアイヌ以外の初期の住民の住居せる所になつてゐる時代に、恐らくはアシヤの東沿岸の全體は現在よりも一層同質的な住民がゐた様である。だが然し、疑ひもなく朝鮮と日本との間には一つの大きな聯關があると云ふ事、朝鮮が日本の扶養國たる位置を持つ事が忘れられてはならぬ。

第七章 關係 文獻

- (1) Rockhill, W. W. *Red. Nat. Mus.* 1893; Washington, 1895, 673.
- (2) Deisle, F. *Bull. Soc. d'Anthrop.*, Paris, 1908 (3e Series), IX, 473.
- (3) Morant, G. M. (*Cranometry*) *Biometrika*, Camb. 1923 XIV, 196.
- (4) Grenard, F. *Le Turkestan et le Tibet. Mission Scientifique dans la dante la haute asie.* J. L. Dacrenuil du Rhins Paris, 1890-1895
- (5) Ball, C. *Tibet Past and Present.* Oxford, 1924.
- (6) Joyce, T. A. J. R. A. I. 1903 XXXIII, 305; 1912, XIII, 450.
- (7) Stein, Sir Aurel. *Serindia.* Oxford, 1921, III, 1351.
- (8) Paisei, V. E. (II, II) and Broomhall (II, 8).
- (9) Ivanovski, A. A. (*Mongol Torguts*) A. f. A., 1896, XXIV, 1, 1900, XXVI, 852.

- (10) Porotov, M. T. (Ahar Buriats) A. f. A., 1896 XXVI. 159.
- (11) Shrendtkovski, J. J. (Selanga Buriats) A. f. A. 1900, XXVI. 152.
- (12) Erdolin, J. A. f. A. 1901, XXVII. 304.
- (13) Torii, R. and Torii K. Journ. coll. Sci. Tokyo Imp. Univ., 1914, XXXVI 44.
- (14) Deniker, J. Rev. d' anthropologie. 1884, XIII. 297
- (15) Deniker, J. Rev. d' Anthropologie. 1884 XIII. 297.
- (16) Carruthers, D. Unknown Mongolia, Lond., 1913, LXI.
- (17) Buxton, L. H. D. (Inner Mongolia.) Geo. Journ., Lond. 1913, LXI.
- (18) Torii, R. Journ. Coll. Sci. Tokyo Imp. Univ. 1914, XXXVI.
- (19) Koganei, Y. Z. f. E. 1906, XXXVIII. 513.
- (20) Koganei, Y. Mitth. Med. Fak. Imp. Jap. Univ. Tokyo. I. 226.
- (21) Virchow, R. Z. f. E. 1899, XXXI. 751.
- (22) Kubo. Beitrage zur physischen Anthropogie der Koreaner. Tokyo, 1913.
- (23) Chantre, E. and Bourdaret, E. Bull Soc. d' Anthrop. de Lyons, 1902, XXI.



第八章 極北アジア

シベリアは北部アジアに廣大なる面積を占めて居り、殆んど全大陸の約四分の一の領域を構成してゐる。此所ではツラニア及びウラルからベーリング海峡に涉つて擴れる大シベリア平原と云ふ名で知られてゐる地域を問題にしよ。其れは三角形を成して居り、其の頂點はオビ河口の近くに位置し、一つの角はアラル海に、他角はベーリング海の近くに夫々位置してゐる。北面は北氷洋、西はウラル山脈、南は大山脈の連り、によつて境界付けられ、此の南部の山脈地帯に、オビ、エニセイ、レナ河の源が發してゐる。之等の境界に近附く事は地理的制約を持つてゐるので極めて困難である。

南方に於ける支那との境界をなしてゐるのは高い山脈であり、又沙漠である。北部では北氷洋が越え難き障壁を爲してゐる。東部では山脈が世界で最も荒れ狂ふ海洋と此の地域とを絶縁してゐる。

たゞ西部にあつてのみ、其の境界は開けてゐる。山はあつても地圖で見ると程峻しくはなく通行容易であり、航行可能な河が密接に接続してゐる。移動人種が通つて來たルートは此所だと考へられる。殊に南部の草原地帯を經由したものと如くである。

先づ便宜的に二つの部分に別けられるであらう。第一の部分はエニセイ河からウラル山脈にかけての西部シベリアであり、第二のものは東部シベリアである。前者は一般に第三紀層であり、南部は山脈によつて區切られてゐる。後者は地理學的には前者より一層古いものである。地表は丘陵地帯に於けるものと異つて居り、東の涯に於ては高い山脈が境界をなして居る。此の斷續的な地表は東部シベリアに接近する事を困難ならしめてゐる。

然し乍ら地理的困難にも抱らず、此の東の涯とアメリカ大陸との間に緊密なる交渉が時々存在したと云ふ所説を保證すべき充分な證據が存するのである。

全體として考察するならば、地域は極めて廣大である。巍然なる山嶽地帯によつて南部から遮斷されてゐるけれども、北部からは氣候の影響を受けて居る。それ故、シベリアは冷い大陸的氣候に曝されて居り、或る部分を除いて、下層土は常に凍つてゐる。

極く一部分が眞に北極的氣候であり、爾餘の地域は亞北極である。北極地帯はトボルスク、及びエニセイスク州の所管する地帯である。亞北極地帯は種々の地域に分割される。先づ第一には、トボルスクの南部、エニセイスク州及びトムスクの大部分。第二は最も廣い意味に於てキルグイツツ草原地帯、及びトランスバイカリア、イルクツク地帯を含めたシベリアの南東部。最後に、我々は他と異つた氣候區域として沿岸地域も考察しようと思ふ。

北極地域は種々の條件が並存してゐて、別に一致した特徴とはない。世界中で最も極端な熱と冷たさとが其所に於て感ぜられる。

夏は冬よりも、異つてゐるけれども、全體として見て氣候は極端な乾燥状態を呈してゐる。溫暖なる季節は極めて短く、此の短い時期にあつてすら、氣温は低い。夏には一日中明るい、冬には一日中光がなく、而も極端な寒さと乾燥した風に曝されてゐる。最も寒冷なる所は現實の北極沿岸にあるのではなくて、中部エナ河地帯にある。亞北極地帯の中、第一のものは、屢々極寒を示す程極めて厳しい氣候の特徴を持つてゐる。アルタイ山脈では、一般に厳しい氣候であるが、高い山脈によつて北から遮られた或る狭谷では溫暖な氣候を持つてゐる。第二の地帯では、平均溫度約三六度(華氏)であり、明かに溫暖である。殆んど雨雪なく、夏に於てすら降雨は極めて稀である。第三に南東シ

ペリヤでは、寒い季節が長く、寒い季節から暖い季節への移り目は極めて急速である。第四の地帯は極めて寒冷であり、カムチャツカでは極めて温度が高い。

北極は凍土地帯である。南部亞北極地帯は草原とアルプス州を包んで居り、屢々水に潤澤な肥沃な狭谷を成してゐる。

シベリアに關する舊考古學的解明は、特にエニセイ地帯に關して、可成り爲されて來たが、現在此の地帯の初期人類史では大部分のものが手を加へらぬ儘になつてゐる。タルコ・ヒリンツェウイツツ(B. Talko-Hryncevich)はトランスバイカリアに於けるオウスト、キフカタから數多くの初期の頭蓋骨を吟味した。其等の頭蓋骨はセランガ河の支流たるサバ河左岸で發見されたものである。彼の結論によれば、之等の頭蓋骨はモンゴロブリアト族の近代型と異つて居り、南部ロシアのクルガン族から出たものに近似せるものである。

何か之と同様な證據がゴロシチェンコによつて齎されたけれども、彼の證據資料の存在せし時期は青銅期時代と考へられるものである。其の材料はマスクと頭蓋骨との二つに分れてゐる。此のマスクは總ゆる藝術作品にされてゐるので科學的論議を爲す場合に之が本當のものだと主張し得ぬ弱みがあるけれども、其の中の或るものはデスマスクであつたやうに思はれるから、さうなれば價値のある證據物件を提供してゐることになる。マスクは二つの型に屬してゐる。即ち所謂、タガラとチャータスであつて、チャータスはタガラから發展したものゝ如くである。タガラはヨロツパ型を示して居り、チャータスは蒙古型を示してゐる。だが二つとも青銅期時代のものであるから、時代的には異つてゐない様に思はれる。

頭蓋を測定して見るとまた一つの均一型を示してゐる。尤も豫期せらるゝ如く、クルガンの二系列とは異つた平均

測定値を持つてゐるけれども。チャータスから得た頭蓋骨はタガラから得たものよりはヨリ長く、而も著しく高い。だが或る學者が信じ勝ちな根本的な人種差異を認むべき充分な證據は別に存する譯ではない。之等のものはシベリアのクルガンのものから知られてゐる所の他の青銅期時代に屬する頭蓋や、モスコイ地區から出たものと古いクルガンから出たものと極めて緊密な一致を示してゐるのである。九十六の頭蓋骨の中、四十二は長頭であつた。頭蓋形態から判断するならば同一地域に住居せる現在の住民のものと異つてゐるばかりでなく、原北方型のものに寧ろ屬してゐるものゝ如くである。

之等の古代種族と其の近代的相續者との間に横はる溝は、未だうめられて居ない。アジアに於ては繼續的な人種移動があつたのであつて、著しい變化が比較的最近に於てさへ示されて居たのである。ドニケによつて提案された近代住民の分類は二集團を含んでゐる。第一の集團はサモイド族及東匈奴と何等かの親近性を持つた西部シベリアの種族を包含してゐる。ドニケは之等のものをエニセイ族 (Geniseians) 又はトウバ族 (Tubas) と呼んでゐる。第二の集團は此の大陸の極東北地區に於る住民から構成されて居り、之をドニケはシレンク (L. von Schrenk) に從つて (Palaeasiatics) と呼んでゐる。第一の集團の中には彼はアジアのサモイド族及び二つの顯著なる集團たるエニセイ河のオスチャーク族、支那史のトウボウ族を含ませ、之をアルタイ族と呼んでゐる。更に一層南方の住民を彼はトルコ人種及びモンゴル人種として一括してゐる。モンゴル族を彼はヨーロッパの或る人種と體質的には同一のものとしてゐるけれども、決して同値的なものではない事は認めてゐる。トルコ人種を以つて前者よりは一層體質的に同値性あるものと彼は考へてゐるが、兩者をモンゴロイドと呼ぶより外は、相互の關係に關する意見を表明して居らないやうである。

ツアブリカはドニケの分類の基礎の上に立つた分類を更に試みた。彼は (Palaeosiberians) と云ふ通常使用される意味の言葉を無意味なるものとして、(Palaeo-Siberians) と (Neo-Siberians) との二つの主要群に分けた。パレオシベリア系の中には次の如きものが含まれてゐる。

- ① チュクチイ族。アナデイル河と北極洋との北東シベリアに居住してゐる。
- ② コリヤアク族。アナデイル河とカムチャツカ半島の中央部との間のチュクチイの南部に居住してゐる。
- ③ カムチャダル族。カムチャツカ半島の南部に居住してゐる。
- ④ アイヌ族。
- ⑤ ギリヤーク族。
- ⑥ エスキモー族。ベーリング海峡のアジア側に居住してゐる。

此の他、此の章に限界付けらるべき地理區別外のものとして、アリュート群島に居住せるアリウト族がある。ツアブリカはユカギイル族が低ヤナ河と低コリマ河との間に住んでゐると述べてゐる。だが之等のものは絶滅したとボゴラス(Bogoras)によつて主張されてゐる。

チュヴァンツイ族はアナデイル河の上流及び中流に居住して居り、エニセイ河のオスチャク等は低ツングスカとストニイツングスカとの間の低エニセイ河に居住してゐる。之等の種族と他のものとの間の差異と云へば極く微少なものであるけれども、一應之等の分類を爲して置く事は極北地區の種族を理解するのに便宜なものと考へられる。

① フン種族 (Finnic tribes)

ツアブリカが二つの集團に別けたものであつて、其の一のウグリアオスチャヤ族であり、他はヴォグル族である。

② サモエデ種族 (Samoyedic tribes)

之等の中に含まれるものは極北地區に居住するもので、カタンガ河口からウラル山脈に渉る地域を占めてゐる。

③ トルコ種族 (Turkish tribes)

體質的觀點から見ると、何れも不合理のやうに思はれるけれども、人種學的觀點から見れば極めて便利な分類である。之は分れてツラニア族とシベリア族との二族となる。此所ではシベリア族のみが關心の對象となる。

だがツラニア、トルコ族の或るものは、時代を異にする度に其の地域を變へて居るのである。此の中最もよく知られたものはキルギイツ族であらう。中央アジアの數多くの種族と同様、大多數の之等種族の特徴とする所は實に短頭たるにある。而してブリアート族の間の短頭の要素と、同様な集團に彼等が屬してゐるものゝ如く思はれる。イワノフスキーによつて報知された之等キルギイツ族の一集團は平均頭形指數 (Mean Cephalic Index) 八九・四を有してゐる。總て之等の種族中、頭幅は恆常値を示してゐるが、頭長は可成りの變動値を示してゐることが述べられてゐる。之がパレアン人種と區別さるべき點であらう。

キルギイツ族集團と極めて大なる對照をなすものは東方トルコ族である。この中にはヤクウト族、カザンタクル族、バスキル族、ソヨテ族及其類縁族が含まれてゐる。之等の種族は何か低身長のものゝ様であり、殊にヤクトト族に就てこの事が言へる。だが身長に於る之等の差違はキルギイツ族集團と區別するに充分なる徴標ではない。だが頭形指數は本質的に異つてゐる。之等の種族は其の點で一致して居り、八二から八三の値

を持つてゐる。總ての觀察者は此の點では意見の一致を見てゐる。其れ故、我々は其れを以つて信すべき數字と考へて宜しいやうに思はれる。頭長はキルギイツ族よりは長いが、頭幅は二〇ミリメートル短いやうである。之等種族の種類的類縁關係は何か漠然たるものがある。最近になつて彼等がモンゴールと數多く混淆する様になつた事は明瞭であるが、大抵のものは體質的にモンゴールと多方面に於て異つてゐる。彼等は大部分アルプス人とパレアジア人との混淆種族なるものやうであるが、彼等の血管の中には其の他の血も恐らくは流れてゐるであらう。

其れ故、オスマントルコ族及びイラニアトルコ族の場合に於ると同様、トルコ人種に付いて語る事は不可能であるが、種々のトルコ體型は (Turks) 其の地理的環境と歴史を異にするに従つて體質的に異つてゐることが知られるであらう。

文化的にも肉體的にも之等トルコ種族と關係あるものとしてシベリアのモンゴール種族がある。其等のものはトルコリモンゴールと云ふ名の下にトルコ族に屢々入れられてゐる。シベリアに於けモンゴール種族の唯一の代表者は嚴密に文化的意味に於ては、バイカル湖畔のカルカ族、プリアート族である。

④ ツングース種族 (Tungusic tribes)

最後に言語學的にツングース族として記述さるべき極めて重要な種族集團がある。本來のツングース族は東經60度から太平洋にかけて、及び北極から支那邊疆にかけて見出される。混淆の度合を異にした他のツングース系種族は數多く存在してゐる。滿洲族は之に屬するが此處では除外する。此處でツングース系種族に屬するものとしては、チャボギ族 (Chapogi) ゴルヂ族 (Goidi) ラムート族 (Lamut) マンヤグ族 (Manyarg) オロチ

族(Orochi)オロチオン族(Orochon)オロク族(Oroke)ソロン族(Solon)等が擧げられる。

パレアジア系種族に關しては可成りの資料が之迄集められて來た。生憎、其の貴重なる資料は現在、體質人類學にふれる内容を有する事誠に少いのであつて、我々は唯、ヨヘルソン・プロツドスキイ夫人の筆によつて物された短かくはあるが價値ある論作を有してゐるに過ぎない譯である。彼女が蒐集した數字ではパレアジア系統は決して等質的集團ではない事が示されてゐる。最も顯著な特徴は身長のことである。確かに此の低身長は彼等に具備されてゐる本質的特質と云ふよりは寧ろ、彼等の屬してゐる環境の極端なはげしさに基く結果であらう。チュクチャー族、コリヤーク族、アジアのエスキモー族、其れよりは低度のカムチャダル族等は極端に低身長の種族ではない。頭形指數ヒツツクシゲクは約80である。コリヤーク族、カムチャダル族及びオスチャーク族は一層長頭であり、或る觀察者はギリヤーク族が極端に短頭型である事を提案してゐる。ヨヘルソン・プロツドスキイ夫人によつて引用された數値は86以上の値を示してゐる。其の他の頭形指數が互ひに比較される場合、其の差は決して之程著しくはないのである。然し乍ら其等のものゝ間の相違は充分本質的なものであり、地方的差違が存するのである。

一般に之等の種族は極めて異質的なものである事が提案されて來た。一見すれば之は自然な説明と考へられよう。然し乍ら、標準偏差の示す所から判断すれば、彼等は少く共著しく純粹な型に屬するものゝ如くである。例へばコリヤーク族の頭形指數の標準偏差は三以下であり、其の種族が著しく同値的たる事を暗示する充分なる徵標と考へられるのである。チュクチャー族になると一層この關係は著しい。それ故彼等の起源が如何なるものにまれ、之等の種族が少くとも著しい人種統一度に達して居つたとする事は可能であると思はれる。

シロコゴロフ(Shirokogoroff)は彼の所謂第一回人種移動時代(紀元前約四萬年頃)に之等の種族はゴビの北

及び東の全地域に位置を占めてゐたが、ツングース系種族の壓迫により其れより二千年後には其の地帯から追出されてしまつたと説いてゐる。根元的には彼等は、原北方人との初期の混淆及び黄色人に近い種族系との混淆であつたやうに思はれる。又同一種族と分類されてゐるアイヌ族は恐らく黄色系との混淆度ヨリ少きものと思はれる。

之等の種族は亞細亞と亞米利加兩大陸の間を環流してゐたものと思はれる。多くの特徴の中、殊に黄色人の代表的なもの、中に見出されるものよりは一層極立つて發達した顴骨の隆起はアメリカ系を聯想させる。だがアメリカ系は屢々身長、頭蓋形態の點で彼等と異つてゐる。早期に於て、此の黄色系とパレアン系とを分離した現代のトルコ語及蒙古語を話す種族と共に或ひは其れに先立つて、西方からの種族侵入運動があつたものと考へられる。

偕、次に興味ある詳細な點を少しく考察して見よう。アメリカ及びグリーンランドのエスキモ族は特殊な人種であると云ふ理由によつて、或は彼等の服する異常な自然條件に特殊化されてゐると云ふ理由によつて人類學者の間で可成りの注目を引いてゐるものである。之等の諸特徴の中の一つは長頭たることである。アジアのエスキモ族は丸い頭をしてゐると云ふ點でグリーンランドのものとは異り、一般にはパレアジア型に一致してゐるものである。兩者間に關係があるとかないとかを穿鑿し得る程此の種族についての研究は未だ充分爲されて居らない。たゞアジアのエスキモ族は極めて狭い鼻をしてゐると云ふ事は興味深い。

パレオシベリア種族は、北アジア大陸に生存する最も古い層であるようだ。彼等は或る程度異つてゐるけれども、さう大した程度に相異してゐるものではない。彼等は極めて往昔の時期に於て、原北方系又は現在アイヌによつて代表されてゐる此の型に似た或る型、と初期の黄色人との混淆と思はれるが、現在の所ではそれも正確には判らなからう。果して然りとすれば、可成り古い事に屬するに相違なからう。

新シベリア種族は最近になつて人類學者によつて相當の關心を持たれたものである。ルーデニコフ (S. Roudeniko) は其の西方種族の現在分布を與へてゐる。サモエド族は現在歐ロシアの北東地帯及びオビ、エニセイ兩盆地の最北部に見出され、トムスク及トボルク州のオスチヤーク族は河境に沿つて見出される。ヴォグール族はサスプア、シグプア兩河盆地及び、トレンスク、トボルクの北西地區、ペルムに發見される。サモエド族は約二〇%のブロンドで眼は明るい。其の他のものは之よりブロンドの度合が少く、身長は總て一五七糎。サモエド型は、オスチヤーク型より著しく高くボルグ型よりは幾分高い。筋肉は充分よく發達して居る。短頭で、顔は長く廣い。頬骨は出てゐる。前額は相對的に狭く、中鼻型である。齒槽顎 (alveolar prognathism) は可成り突き出てゐる。眼及び毛髮の色は一般に暗色を呈してゐる。

ヴォグール族はサモエド族より座高が高いが兩者の身長は同じである。彼等は共に長頭に近い。彼等の顔は小さく、頬骨は發達して居らない。前額は廣く、鼻は殆んど平たいと云つて良い。

オスチヤーク族は中間型を現はしてゐる。彼等は恐らくヴォグール族と同一人種に屬してゐるようである。

若しサモエド族が他のアルタイ系種族たるコイバル族等と比較される場合、肉體型の差違は直ちに明瞭である。同一型に屬する唯一の種族はウリアンカイ族であつて、之はゴロンチエンコによつて既に吟味された所である。兩方も同様な色であり、頭蓋形態、長顔等同様である。

之等興味ある種族の起源及び關係は不明確である。彼等は全體として見れば、パレオシベリア系と異るばかりでなく、恐らく其の他のものとも相當の差違がある。例へばオスチヤークと云ふ語は唯にオビ、エニセイのオスチヤーク族を包むのみならず、又他の集團をも含んでゐる。

ルーデニコはサモエド族とラップ族との間には關係があること、アルタイ地區から西方に向つての移民があつた事、南方からの移動種族によつて西部集團と東部集團とが分割された事、等を提案してゐる。

特別な論議を必要とする若干の特徴がある。先づ第一に、之等の種族は北方種族と同様に身長が極めて低い。之は環境に基くやうに思はれる。第二に彼等は通常、黄色人の或るものと結び付けらるべき特徴を持つてゐる。通常頭は丸型であり、必ずしも黄色人と高度に關聯あるものとは限らない。彼等は亦、長頭であつて、ブロンド色を交へてゐる。更に彼等の血液に於る一つの重要な傾向はルーデニコが提案せる如きアルタイ地區からの移住に基いてゐるらしい。ボグル族の如き種族の中にあつて、其の頭蓋形態及色彩の差違は北方型又は原北方型との混淆に基いてゐることを暗示すべき理由がある。如何なる場合にまれ、之等歐亞型は可成りの人種的混淆の結果たるものと思はれる。

ツングース族

新シベリア種族は必ずしも人種的に結びついてゐなくとも通常同一集團を形成してゐる所の同一文化的類縁關係に立つた他種族を論ずるに際して、所謂トルコ族は一層便宜的に取扱はれる種族であるかも知れない。

併、それからツングース系種族が最後に残つてゐる。純粹なツングース族の肉體特徴はツアプリカ⁽⁸⁾によつて記述されてゐる。彼等はサモエド族程低くはないけれども、平均以下の身長であると彼女は云つてゐる。此の記述はツングースがモンゴール(二六三種)と同一身長であると報告する其の他の觀察者の述作と全く一致して居らない。頭は總ての觀察が一致して云ふ如く著しく長し。頭長(Head Length)は低頭(Low Head)たるモンゴール族との混淆によつて影響される場合を除いて、通常相對的に高し。頭幅はまた通常大きいから、ツングース族は大頭蓋を持つてゐる譯である。ツアプリカによれば顔は長く、鼻は狭い。彼等は南方支那人及び或る日本人に最も近くモンゴールとは似て

ゐないと結論してゐる。

シロコゴロフ (Shirokogoroff) は寧ろ其れとは異つた見解を持つてゐるようである。ツングース族中の基本型はバ
ルグツインのツングース族中に発見されると彼は云ひ其の特徴を擧げてゐる。(p. 6)

(一) 極めて低身長であること。

(二) 低頭形指数 (Lowcephalic index) を有してゐること。

七七。

(三) 低鼻形指数 (Low nasal index) を有すること。

七七。この點では全ての觀察者の意見は一致してゐる。

彼はまた之等の種族の前額指数 (Frontal index) の低い事に關心を持つてゐる。彼は此の型が支那人中の單なる
附隨種族 (Incidental) に過ぎないものと信じ、ツングース族が人類學的觀點から見て同種の種族に非ずと云ふ難局を
切抜ける最經の途であるとしてゐる。純粹ツングース族の型の規定はそれ故、最近までモンゴール族と混淆しな
つた集團が、或は他の種族が觀察者の眼にとまるかどうかどうかに依存してゐると云つてよからう。

シロコゴロフはツングース旗の起源及最近の移動に光を投すべき興味ある文化的資料の數々を蒐集して居る。彼の
提案せる所によると、彼等ツングースは早期に於ては溫暖なる地方に居住して居つたが(恐らくは支那大平野)、現在
居住せる住民の繼續的移住によつて押出されたものゝ如くである。初期基督教時代に彼等はトルコ族の起源たるヤク
ト族の侵入によつて二分されたと彼は考へてゐる。斯る説はツングース族が南方支那人に最も近似せるものとする
ツアプリカの提案を否定してゐる事とならう。

ツングース族の現實の人種的位置は之等の移動に關する提案によつてヨリ簡明化されてゐる譯ではない。彼等は明かに極めて他のものと混淆して居り、大抵の場合には其の絲を解きほぐす事困難である。若し我々がシロコゴロフの基本型を眞のツングース族を代表するものとして認めるならば、それと關聯をすべき決定的な型を發見する事は困難となる。彼等は頭の大きさに於て支那の南部原住種族とは明かに相違してゐる。彼等が黄色人の初期の系統に屬し、混淆と移住とによつて變異せるものとする事は妥當のやうに考へられる。之等の環境の下に彼等は、パレオシベリア人に近いものとも考へられ、彼等は其れと混淆したものと考へられる。

第八章 關係文獻

- (1) Tal'ko-Hryncevich, J. D. (Early Inhabitants.) *J. Anthropol.* 1886 VII. 80.
- (2) Merhart, G. von. (Archaeology of Yenesei.) *Amer. Anthropol.* 1923, XXV. 21.
- (3) Goroshchenko, Bull. Krasn. S. E. Sib. Sect. I. R. G. S., 1905, 1.
- (4) Goroshchenko. (Soyotes.) *Russ. Anthropol. Journ.* 1901. II. 2.
- (5) Goroshchenko and Ivanovski, A. A. (Yenesei.) *Russ. Anthropol. Journ.* 1907. i. and ii.
- (6) Ivanovski, A. A. Anthropological Composition of the Population of Russia. 1904.
- (7) Ufal'uy, C. E. Expedition scientifique en Russie, Sibirie et dans le Turkestan. Paris, 1878.
- (8) Jochelson-Brodsky, Frau D. (North Siberian peoples.) *A. i. A.* 1906, N. F. V, 1.
- (9) Czaplicka, M. A. Art. Ostryak and Samoyed. *Hastings Encyc. Religion and Ethics.*
- (10) Roudenko, S. (Samoyed, Ostryak and Vogul.) *Bull. Soc. d'Anthropol.* Paris 1914 (Series VI) V. 123.

- 111 <
- (11) Crahmer, W. (Samoyeds) Z. f. E. 1 1912. XLIV. 105.
 - (12) Montefiore, J. (Samoyeds) J. A. I. 1894 XXIV. 400.
 - (13) Charushin, A. (Kirghiz.) Imp. Soc Friends of Nat. Sci. Anthropol. and Ethnol. Moskov. 1889. LXIII. 1
 - (14) Jessup North Expedition. Various Authors. (A mine of information on all these northern tribes.)
 - (15) Bogoras, W. Amer. Anthropol. 1901 III 80.
 - (16) Iden-Zeller, O. (Chukchee) Z. f. E. 1911. XLIII. 840.
 - (17) Schpenck, L. von. Reisen in Amur-Lande. III. st. Petersburg. 1891.
 - (18) Czaplicka, M. A. (Tungus.) Scottish Geo. Mag. Edinburgh. 1917. 299.
 - (19) Seeland, (Gilyaks.) A. f. A. 1900. XXVI. 790.

第九章 日本

日本は其の地理的性質及び住民の體格に關して今迄我々が取扱つて來た大抵の國と強い對照をなしてゐる國である。大日本帝國は、若し我々が最南端たる臺灣と千島群島の北端とを含めるならば、北緯二一度から五一度に涉つて擴れる一長群島を構成してゐる。最も大きな島は九州、四國、本州及び北海道として知られてゐる。北海道は外國地圖には通常蝦夷と記されてゐる。日本々土には、約一五〇、〇〇〇平方哩の地域を包含してゐるが、其の中主要土たる本州は非常に大なる部分を占め、英本土の地域と略々等しい。

全國は極めて鋸齒狀を呈して居り、數多の島と灣を持つた長い海岸線を構成してゐる。數多くの火山脈が走つて居り、日本は特に地震に曝らされてゐる。川は通常短く急流でありその結果短距離間の交通を除いては、交通に役立つやうなと言つて宜しい。日本の約四分の三は山嶽であり残りの七割は高臺から成つてゐる。島嶼地帯のために、日本の氣温は熱帯から北極の氣候を其の範圍としてゐる。然し乍ら、日本々土に於ては、此の範圍はせばめられ、従つて氣候は北海道の北部を除いて適度の温度で、年平均青森では四八度、鹿兒島では七八度である。更に一般的に云ふなら、本土の年平均温度は華氏五〇度―六〇度と云つて宜しからう。南西日本には殆んど雪はないが、其の他の地域では年々ある。夏季、太平洋沿岸には最大降雨量を見、冬季は其の反對である。之等の條件の爲に、植物は豊富であり、全體として見れば温帯氣候の其れと言つてよい。

日本の島嶼は、本土沿岸からひどく離れてゐないけれども、充分分離してゐると云へる距離を持つてゐる。日本人が其の近隣と充分分離した肉體型を發展させたのは之等の事情に基いてゐるのである。地理的に云つて日本本土が初

期に北海道と二分されたと云ふ事は充分注目し値すると云つてよい。此の島に於る氣候條件は、また爾餘の日本に於けるよりは一層極端であり、其の結果、日本人が爾餘の日本から其の祖先を驅逐したけれども、其の北海道拓殖は極く最近の事に屬する事となつたのである。

日本人科學者の學績により我々は、アジアの他の部分よりは一層よく日本の考古學に關する知識を護ることが出来る。古墓を見ると總てが新石器時代に屬する性格を持つて居り、換言すれば、墓には金屬を缺除してゐるのであるが何か顯著な粗雜なる土器が通常存在してゐる。

最も重要な遺蹟の中の或るものについては濱田氏⁵⁾によつて論ぜられてゐる。河内の國の國府の遺跡から若干の新石器時代の人骨が發掘された。頭蓋骨はアイヌのものに似てゐる。顔はアイヌと比較すると廣く低い。眼窩は低く鼻は廣い。口蓋は短く廣い。顔及口蓋の長さはアイヌより短く、顔は一層正常顔である。背柱は四肢に比して短い。背柱の頸部は比較的強く大きい。之等の特徴はアイヌ族のものたる貝塚から發見された人骨の持つ特徴でもある。と小金井氏は考へてゐる。

隨分數多くの骨格が備中及び和泉の國で發見されたが、之等總ては、同一型に屬するし、其の特徴は興味を引くものである。骨軸の中央部に於ける大腿骨及上膊骨の偏平性はアイヌに於るほど、新石器時代の骨格には明かに現れて居らない。他方では、新石器時代の骨は一層、アイヌ人と日本人とを區別する特徴を現してゐる。それ故、石器時代の住民は現在のアイヌの祖先たるものではなくして、多くの場合恐らくアイヌ人と日本人との中間的人種たるものゝ如し、と濱田氏は結論してゐる。

松本氏⁶⁾はそれとは寧ろ異つた見解を持して居られる。彼は石器時代の住民中少くも三つの型のものが區別され得

るものとする。之等のものは其の發見された場所から、青島、宮戸、津雲と彼は呼んでゐる。先づ第一の型に於て、成人男子は、身長約五呎六吋、大きな頭、長頭型か中頭型かである。此の型の骨格は青島及宮戸島で發見された。宮戸型は津雲と國府で發見された。之等のものは矮少なものであつた如く、成人男子の身長は前の型のものより二吋低いものとされてゐる。其等は短頭型か中頭型であつて、津雲から發見されたものは宮戸からとれたものよりも短い頭をしてゐる。最後に「津雲」及び「國府」から發見された高身長型がある。彼等の身長は成年男子で五呎六吋と七吋の間の値を示してゐる。頭形指數は中頭型と短頭型との間の値を示してゐる。最初の二つの型は今日のアイヌ族の中に現れてゐる特性なりと松本氏は考へてゐる。

此處に同じ材料から出發して全然異つた二つの見解が表明されてゐる譯である。一は古代人をアイヌ人と結び付け、他は異つた人種に屬するものとする。

考へらるべき第一の點は、新石器時代の住民が果してアイヌと同一なる體型に屬してゐるや否やにある。文化的證跡は其の相異性を示してゐる。最近の紹介を離れて見るならば、アイヌ人は土器製造の知識を全然持つてゐなかつたやうであり、彼等の使用する容器は櫻の木で作られたものであつたやうだ。この事から見て本土に住居せる人間が北方のものよりは一層進歩せる文化的條件の下にあつた事は確かである。

古代人をアイヌ人と結びつける事を不可とする濱田氏の主要なる反對意見は脛骨と大腿骨の形態であるように思はれる。然し乍ら、Platymeria や Platyonemia の問題は決定的な人種特徴とは考へ得られない。其の正確な起源は現在不明確であるけれども、彼等が恐らく現實の人種的特質に基くと云ふよりは寧ろ姿勢又は步態の習性に基くものと如くである。オックスフォード近くの所からとれた初期英國人の骨に於ては其の Platymeria や Platyonemia は

極めて共通なるものがあり、明かに一定の住民層に属するものであつた。其れは其の他の點は祖先に似る所多いが今日の住民には生じて居らないものである。勿論アイヌが文明社會を現してゐないのであるから其の對比は好適なるものではない。だが少くも我々は特殊なる點では異つてゐても確かに同一人種に属してゐる同一集團を獲得する事が出来るものと思ふ。全體としては濱田氏ですら兩人種の頭蓋が極めて相似してゐるものと考へてゐるのである。結局二つの型の間には本質的な差違はないものと考へられる。此の結論は松本説に一致する。

生物測定學派の業績は一定の條件の下に、正規的變異が如何に大なるべきかを示した。小金井博士はアイヌ人を慎重に研究したけれども、我々は古代人について何等統計的記録を現在我々は有して居らない。確かに多くの點でA型及びB型は單一型の變動を示してゐるやうに思はれる。資料が除外してゐるので確言は出来ないが、更に資料の蒐集を見れば、アイヌ人が日本全土に涉つて日本人の祖先であつた事が言はれ得るのでないかと思ふ。之等の新石器時代の住民がアイヌ人の直接の祖先であつたか又は其れ以上の波に属するものであるかどうかは現在不明確である。

松本氏は之等の型の移動及分布に關して極めて巧緻な説を表明してゐる。彼は青島型が最初に日本に到着したものである。彼等は純粹なる人種として、或は中石器時代に於て次の型と混淆せる人種として北東日本に存在した。現在北海道のアイヌは此の混淆人種に當るものとされ、千島及び樺太のアイヌは土着純粹型に當るものと云はれてゐる。

次に到着したものは宮戸矮小型であつた。此の第二の型は現在日本々士の北部の中央部にあり、其の親縁種族も亦南西日本に發見される。

津雲型は中世紀時代以降日本に見出さるべきものと言はれてゐる。今日それは日本の各地方に分布してゐるけれど

も、特に西日本の北部に見出される。最後に到着したものは岡山型と呼ばれるモンゴリア系統であつて、其の重要性については日本人を取扱ふに際して論議されるであらう。彼等が混淆した種族は大部分後に來りたるものであつて、其れは元來、比較的接近し得べき地域に見出された。それ故、最も初期に到着したものは、生存してゐるし、其の後のものへの依存性も保たれてゐる。

此の極めて巧緻な圖式は我々が三つの肉體型を確保し得ると云ふ決定的な假定の上に立つてゐる。然し乍ら現在の所、斯る假設を證明し得べき資料を欠缺してゐる譯である。全體として見れば、其れは文化的變動とは關係なきものと云つてよい。何故なら、少くとも三つの時期は日本の石器時代のものと認識され得るからである。

倭それでは日本の現在の住民はどうであらうか。彼等は分れて日本人とアイヌ人となるが、假令近代日本人の血にアイヌの血が多敷流れてゐるにしても、人種的には極めて異つてゐる。アイヌ人は短い丸い胸と、薄く重い肋骨とを持つた頑丈な體格の持主である。皮膚の色は黄色と云ふよりは寧ろ暗色である。屢々オリーブ色の肌を呈してゐる。男は身體全體が毛で被はれてゐる。女は腕や足に薄く短く黒い色を持つてゐるが、身體には毛が生えてゐない。頭髮は多少直毛であるが其の末尾は男も女も縮れてゐる。青年の鬚は波打つて居り、老年になると其れは縮れてゐる。其れは日本人の物とは其の組織が極めて異つてゐる。日本人のは眞直ぐで絹狀であり、アイヌは粗で黒く、觸れると固い感じのするものである。

眼は斜ではなくてヨーロッパ人のその様である。色は通常明るい褐色を呈してゐる。

身長は通常短く、男一五八糎、女一四八糎、である。頭は通常大きく約七六の指數を持つ長頭であり、女は微少ながら男子より廣い頭を持つてゐる。顔面は廣いけれども平らではない。前額は時として高いけれども、常にさうではな

い。顴隆起線は通常充分發達して居り、後頭は突出してゐる。眉毛は大きな一線を形造つてゐると云ふ意味に於て張り出てゐないけれども、通常鼻の根元で初まる窪みのために嵩ばつて現れてゐる。

鼻は眞直ぐである。極端に狭い鼻のある場合があるけれども、通常さうではない。或るものは極端に廣い鼻を持つてゐる。

アイヌ族の人種的地位は極めて興味ある問題である。彼等が其他の東洋人種と著しく異つてゐるのは殆んど確かである。

所でアイヌがヨーロッパ人種に近い種族であると云ふことは確かのことである。人類學者は過去に於て之等アイヌ族を今日現實にヨーロッパに現れてゐるものに限定し勝ちであつた。アイヌ族を之等の如何なるものとしても區別することは明かに不可能の様に思はれる。彼等の長頭は最初に其等の種族の長頭を持つたものに近い事を暗示してゐる。

然し乍ら、彼等を北方種族と呼ぶには餘りに黒過ぎる。また地中海種族は極端なる解剖學的構造を持つてゐる。地中海種族は骨格しなやかで、頭小さく比較的細い骨で出来てゐる。アイヌは之とまるきり反對である。

そこで、若しアイヌ族がヨーロッパ人種に近い種族であるとするならば、現在ヨーロッパに生存してゐる種族と分離した所以を言及する事が必要である。此の事の中には何等固有なる難しさは存在しない。我々は既に若干のアジア人種が、明かにヨーロッパ人種と親縁關係を結んで居つたにせよ、何等明白な鑿型の中にはめこめないと云ふ事を識つてゐる。然し乍らアイヌ族は特殊なる場合を現して居り、他の種族とは異つたものがある。他の集團はヨーロッパ種族と異つてゐるとは言へ、それ等は少くとも或る程度までは、同様な一般的區分に對應してゐるのである。

倅、彼等をして歴史以前の種族たりとする提案は一見極めて暗示的なものゝように思はれる。然し乍らアイヌ族の

間に特殊化された事實は高度に認められる。之等の事情の下に、アイヌ族をヨーロッパ有史以前の最後の生存者たりとする事は出来ないようである。またヨーロッパの初期の人種の中にも、まさしくアイヌ族に一致する種族は發見し難い。それ故アイヌ族が、伯父と有史前の種族に親縁關係を有する其の後繼者と云ふ關係ではなくて、寧ろ従弟として、即ちヨーロッパ人種と同一の種族幹から派生せる種として、現在のヨーロッパ人種に結び付いてゐるものとする方が最もよい提案と考へられる。

アイヌ族は文化的には極端に原始的な段階にあると云ふ事が注目されねばならない。彼等は實際前新石器時代の段階にあり、さもなくば新石器時代文化への推移段階にある。唯、女のみが農業に携はり、其の農耕器具は貝で出来てゐる。男は原始的狩獵に従事してゐる。彼等は一度覺えた技術を忘れたのかも知れないけれども、土器製造の知識を全然缺除してゐる。此の文化の原始性のために、人類學者はアイヌ族をオーストラリア人と結び付けて來たものである。だが之等二つの集團の骨格を慎重に吟味して見ると、この二つのものゝ關聯が不充分なる事を示してゐる。關聯説の基礎を置いてゐる頭蓋骨が極端に相違してゐるばかりではない。其の他の骨も明かに相違を示してゐるのである。オーストラリア人の骨格は總て比較的か細いのであるが、既に述べた如くアイヌ族のは頑丈である。

楮、殘る問題はアイヌ族と同一種族から出た他の人種との結び付き如何の問題である。此の課題は必要なる報告書の缺除してゐるために一層困難な問題となつてゐる。早期の古墓の或るものから得られた報告によると、初期の住民は多くの點で現在同一地域の住民とは異つてゐる。

而も其の中の或るものはアイヌ族ではないかと云ふ感じを與へるものがあるようである。其の關聯については現在完全ではないようであるけれども、少くとも「原北方人種」が黄色人の進展以前に北方アジアに居住して居つたので

はないかと云ふ暗示を與ふるものがある。

此の説の是非については中央アジアの考古學が知悉されるまで其の決定を待たねばならない。とまれ、アイヌ族が此の人種の成員であり、東アジアの原住民であつたと考へる事は理由あることと思はれる。彼等はたゞ小なり近隣民族、殊に日本人に影響を與へたらしく、また恐らくアムール地帯の種族、ギリヤーク族には著しく影響を與へたものらしい。

日本人自身については、多くの點でアイヌ以上に人種學的問題を包んでゐる。昔の人種學者（殊にベルツ）は日本人の二つの型を認めた。第一は美しい型であつて、之は長頭、面長な顔、男の眼は眞直ぐ、女性に於ては多少斜である。上層階級の中には薄い凸狀の鼻の持主が見出される。第二の粗悪型は細長い身體、丸い頭、顴骨のよく發達した廣い顔、細い斜眼、扁平な鼻、幅廣い口等の持主で、之は下層階級の特徴である。ベルツは之等二つの型はモンゴルの要素とインドネシア又はポリネシア的要素の交錯によるものと考へた。此の見解はドニケによつて踏襲されてゐる。北部日本と云ふ正確な意味は之に關聯して不明確であるが、ベルツは恐らく北海道を意味したものと思はれる。

ドニケは第一の型の代表者が我々の想像を絶する時期に朝鮮、對馬、日本の南西部、壹岐島を通じて到着した種族の子孫たるものと考へられるとしてゐる。第二の型に關しては、紀元前七世紀の頃に九州の西海岸に侵入した蕃族の後裔から派生したものとされてゐる。之等の侵入者は未だ知られざる種族に屬する原住民と混淆して大和の國を樹立し、アイヌ族を北方に驅逐した。

此の傳統的なる説は大抵の教科書に見えてゐる所であるし、日本では長谷部の、松本のの兩博士、英國ではモラン博士の説く所となつてゐる。長谷部博士は、石川と岡山の二つの類型を、松本博士は筑前と薩摩の二つの類型の存



南日本の農婦

する事を提案してゐる。

之等の類型の特徴を簡略に述べると斯うである。石川型は極めて身長低く五呎二吋であり、約七八と云ふ値を持つ中位の頭形指數を示してゐる。顔は眞直ぐで短い。一方岡山型は高身長であるが、日本人の平均身長に適合すると云ふべく、五呎五吋である。頭は相對的に廣く、約八二の頭形指數を有してゐる。

他の二つの型は之等の變形である。筑前型は身長高く中頭であり、薩摩型は身長低く、廣頭である。之等二つの型は短い顔を持つてゐるやうに思はれる。

之等の型の分布は次の如くである。第一の型は本土の中央部の北及び北東部に發見される。第二型は内海沿岸、京都近隣、本土の中央部の西に分布してゐる。第三型は九州の北部に、薩摩型は九州、四國の南部に見出される。

松本博士は第一型は石器時代の宮戸型の變形生殘者であり、筑前型は津雲型のそれであるとしてゐる。岡山型はモンゴール種族から出た朝鮮型なり、と長谷部博士は提案してゐる。

之等の類型の提案は先きに論じた初期の種族と、朝鮮から來た最後の型とを分離する所のものである。之等の説を裏付ける證據がどれ程あるであらうか。日本に見出される型は可成りあるのであるが、少くとも三つの類型を指摘する事が出来る。ベルツの提案せる分類は便利な分類であつて、觀察の正しさに裏付けられてゐる。ベルツは優美型(优美 Type)の持つ繊細性は滿洲・朝鮮の影響を受けたものと考へてゐる。現代の日本人が此の興味ある要素を持つものであるかどうかは不明であるが、とに角岡山型の頭は丸く、滿洲型も朝鮮型も頭が丸い所から見ても、一應此の説もなづけるものを持つてゐる。

日本人の總ては共通に一定の特徴を具へてゐる。毛髮は常に黒く、時として縮れた毛髮を見受ける。殊に本土の北部

に於て然りと云へる。其れはアイヌの血と混つた爲と思はれる。男女兩性の身長之差は明かに著しい。一般に身長は低いけれども、身長之差の變動は特に男性に顯著に見受けられるようである。肢は短く、頭は大きい。肢の短いのも拘らず、前肢は相對的に長い。頭形指數は可變的である。眼の色は實際には常に暗褐色である。兩眼の間隔は可成りあり、鼻梁は低いけれども、顴鼻が多く現れてゐる。頬骨は高いけれども、其れはまた可成りの變異を示してゐる。

皮膚の色も種々相違を示して居り男は通常のものよりは寧ろ暗色を示して居る。女の中の或るものは全く明るい色で、この様な場合には頬に薔薇色の班點を持ち、また或るものは黒みがよつた黄褐色を呈してゐる。

地理的特徴の種々相を示せる日本の様な國に於ては、人種型の變動は全く原基種族から離れてゐるものと思はれる。此の多様性は疑ひもなく存するけれども、現在、其の類型のものが全く明瞭に分化してゐるようにも思はれない。更に身長之短く中頭型のもの、身長之高く短頭型のものがあるやうに思はれる。

最後に残るものは日本人の起源如何の問題である。住民の基礎がアイヌ族に緊密に近い種族たりとする提案を認めるには餘りに手堅過ぎる證據が存するやうに思はれる。此の古代種族は後の増加種族に著しく壓迫され、其の結果住民の一般的性格を變動させたのであり、今日優勢なのはパレアン人の型に屬してゐる。然し乍ら日本人が體質に於ても、氣質に於ても他のアジア人と著しく異つた種族である事を認めざるを得ない。

此の後に道入つて來たものゝ要素が如何なるものであつたか、についての認識は現在迄の所云々する事が出來ない。既に述べた通り、日本には朝鮮、滿洲の住民に近い要素があるものと思はれる。此の日本と朝鮮との結び付きは自然である。此の經路を傳つて繼續的な文化移動が行はれたのであり、全く支那文化の日本移入については此の事が

言へる。日本に朝鮮型と近似せるものを發見する事は、其れ自體何等驚くべき事ではないのである。此の型が日本に導入つて來たのは比較的後期に屬するのであつて、石器時代には何等其の痕跡を認め難いのであるが、其れは初期の金屬時代の末期に現れたものと思はれる。

此の型は黄色人とアルプス人に著しく近い種族との混淆から結果したものと思はれる。之等の種族が極めて顯著に短頭型であり、何等混淆してゐない黄色人の例の中には見出されない特徴を有するものゝ如くである。

だが然し之等二つの系統は日本人の性格を考量するに充分なものとは思はれない。ベルツはマレー系の血の混入があると提案した。又、實際疑ひもなく日本には南方からの影響があつたものと思はれる。マレー語を語る種族の意味で、其れがマレー人たるべしとする事は當を得てゐない。總て南方アジアの住民は二つの系統の混淆の存在を示してゐる。一は本質的に極めて長頭型のものであり、他は短頭型の傾向を持つものである。若し日本人が之等の種族の文字通りの後裔であるとするならば、我々は日本人の中にネジオトの血がある事を當然知らねばならない。支那の旅行者は先づ其の肉體型の相似せるのに出遭つて驚かざるを得ないのである。既に述べた如く原始マレー人と云ふ名稱を用ひるならば、我々は南東アジアに於る黄色人のあるものを取扱ふに際しては便利な名稱と思はれる。此の南東アジアの黄色人は蘭印では分化する様になり、其の他の所ではネジオト近隣族と強く對照をなす型に分化するやうになつたのであるが、此の黄色系の分岐種族がまた日本民族の大部分を占めるものとする事は不合理でもなさうである。之れは一見全く相反してゐる様に見える二説を調和せしむるに役立つであらう。即ち第一は日本人が其の體内に強度なマレー系統を引いてゐるといふ説、第二は日本人が蘭領印度とよりは、取り分け一層南支那と密接な繋がりを持つてゐるといふ説が即ち之である。第一の説は比較的一般に認められた説であり、第二の説は最近モラントによつて提

案されたものである。

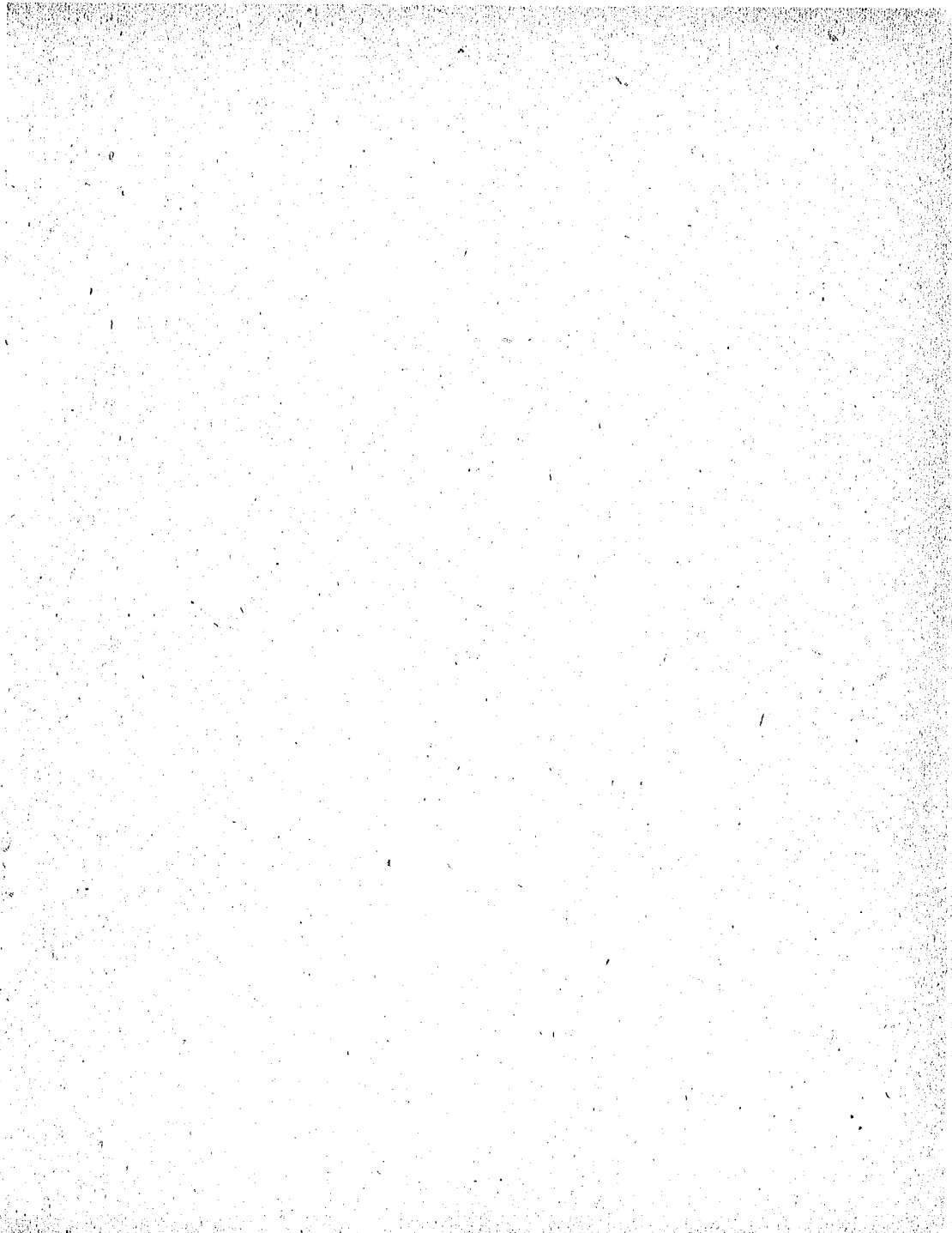
此の型は黄色人の比較的未分化形態をなしてゐるものであらう。それ故、假りに日本人の第三の要素は原マレー人に近い型であるが、今日では恐らく南福建の丘陵地帯に住む住民の中に最も良く表れてゐると提案されてゐる。我々は日本人が南支那人の直接的後裔ではなくして、寧ろ人種的にそれに近い種族の後裔とした方が良さそうである。

此の複雑な問題の解決は未だ完全になされてゐない。何故ならば、何時住民の主要型が變動し、或は日本人が蒙古人化される様になつたか、現在の所では我々には分らないからである。恐らく石器時代の終りか或は早期金屬時代の初めに於る古墓の中に、此の種の證件を探し求めねばならぬであらう。住民の唯一の要素がアイヌ族と朝鮮族であつたと提案する事は比較的簡單であらうが、此の解決だけでは依然として住民中の或る複雑な要素の説明に疑問の餘地を残してゐる。

第九章 關係文獻

- (1) Koganei, Y. *Globus*, 1903, LXXXIV, 101.
- (2) Matsumoto, H. *Amer. Anthrop.* 1921, XXIII, 50.
- (3) Hasebe, K. *Jap. Anthrop. Journ.* Tokyo, 1918, XXXI, 1; 1920, XXXIV.
- (4) Morro, N. G. *Prehistoric Japan*. Yokohama, 1911.
- (5) Various authors in the *Journal of Research, Imp. Jap. Univ. Kyoto* (Department of Literature). This Publication is devoted to the study of prehistoric Japan.
- (6) Koganei, Y. *Minh. Med. Pak. Imp. Jap. Univ. Tokyo*, 1893, II, 1.

- (7) Koganei, Y. A. f. A. XXVI
- (8) Montandon, G. Archiv. suisse d'anthrop. gen. 1921, IV, 233.
- (9) Donitz, W. Mitth. Deutsch. Ges. Natur u. Völkerkunde Orients, 1874, VI
- (10) Schenke, B. Ibid., 1882, XXVI
- (11) Lefevre, A. et Collignon, R. Rev. d'anthrop., Paris, 1889, XVIII (Ser. 3, IV, 129) (hair and eye colour).
- (12) Batchelor, Rev. J. The Ainu. Lond. 1901.
- (13) Baez, E. Mitth. Deutsch. Ges. Natur u. Völkerkunde Orients, Tokyo, 1881, III, 330; 1885, IV, 35; 1900, VII, 227.
- (14) Baez, E. Sitz. Anthrop. Ges., Wien, 1911-1912 [133], Riu Kin.
- (15) Brinkley, F. Smithsonian Rep., 1903, MDXXXVII, 793.
- (16) Chamberlain, B. Things Japanese. Lond., 1891.
- (17) Toldt, E. A. f. A., 1903, XXVIII, 143.
- (18) Adachi, B. Zeit. f. Morph. u. Anthrop., Stuttgart (Orbit and general), 1904, VII, 379 (Foot). Mitt. Med. Fak., Tokyo, 1905, VI, 307 (Hand) id., 340 (Foot). Journ. Anthrop. Soc. Tokyo. 1904 XX, 21, and numerous other Papers on the anthropology of the Japanese referred to in the above.
- (19) Shimada, K. [Central nervous system.] Acta scholae Med. Univ., Kyoto, IV, 1921, 319. (in German)
- (20) Baez, E. Sitz. Anthrop. Ges., Wien, 1911-1912 [133].
- (21) Turner, Sir William. Proc. Roy. Soc., Edinburgh, 1907, XLV.
- (22) Report on Control of Aborigines. Gov. of Formosa Bureau of Aboriginal Affairs, Taihoku, Formosa, 1911.



第十章 南東アジアとインドネシア

此所で取扱ふ地域はアジア大陸の外圍地域及びアジアとオーストラリア、インドネシアを結び付ける島々であつて、其の中にはカンボチャ、交趾支那、安南、東京、即ち通例、佛領印度支那と呼ばれてゐる半島地域ばかりでなく、西方のシヤム、ビルマ、東方のインドネシアをも含めて考察せんとするものである。ビルマは行政的にも政治的にも印度帝國の一部を構成してゐるが、地理的、人種的にはそれと分離してゐる。此の地域の西部は、支那文明に其の文化の基礎を置く國の南方に打擴つてゐる。東部は文化的にも肉體的にも支那と印度とに交渉を有してゐる。それ故政治的位置と地理的細目の多様性にも拘らず、ビルマは人類學的目的のためには便利な一單位を構成してゐる。

此の地域は西藏、雲南兩山脈の根元から發して居り、熱帶地域に屬してゐる譯であるが、モンスーンの影響の爲に、冬には比較的冷い氣候を呈してゐる。

ビルマは印度とは海と高原地帯とによつて分たれてゐる。面積約二六〇、〇〇〇平方哩。地理的には五つの區域に分けられる。中央ビルマ、テナザリム、アラカン、チン高原及びシャン州之である。中央ビルマは暑い高熱のイラワジの大三角洲を包含し、その大部分は米作に貢獻する所大なる地域となつてゐる。土地は水に恵まれ、住民は其の點まことに有用な土の上に生活してゐる譯である。此の國の北部地帯は依然として高濕、高濕地帯となつて居り、河の沿岸一帯の土は沖積層である。

此の地域の南部及び東部にテナザリム及びカレンニがある。其の中に海峽國があるが、其の大部分は稠密に繁茂せる熱帶森林で被はれた凹凸ある山嶽から成つてゐる。アラカンには稠密に森林の被茂つた地方を背景とせる熱帶マン

グロトヴ・クリークのある沿岸地帯が包含されてゐる。

チン高原は海拔約五、〇〇〇呎から九、〇〇〇呎の可成り高い地域から構成されてゐる。其處から稠密な森林が繁茂して居り、一般に好適な氣候を呈してゐる。

最後にシヤン州は五〇、〇〇〇平方哩以上の巨大な地域を構成してゐる。一般に高さ三、〇〇〇呎から四、〇〇〇呎の間の高原から成つてゐる。此の高原の大部分は起伏せる高原國から成り立つてゐるのであつて、通常は樹木充分繁茂し、サルウィン河によつて二地域に分たれてゐる。其れは雲南と低ビルマ地方との間の連鎖地帯を構成してゐるのである。

シヤン州から支那文化がシヤムに遣入りこんだのであるが、今日のシヤムは實際には、バンコックに展開せる大峽谷が其の大部分であつて、其他メナム及其の屬國によつて構成されてゐる。幅、約一五〇哩、長さ六五〇哩の緩やかなる傾斜地帯である。シヤムは南方にはマレー半島に打擴つて居り、其れ故、唯に支那のみならずマレーシアと一つの連鎖地帯を形成してゐる。シヤム國の大部分は野生の荒い密林から成つて居り、其所を通る道はメナム峽谷唯一本であつて、それは人種移動の通路となつてゐたものと思はれる。

シヤム及びシヤン州の東にはフランスから影響を受けた佛領印度支那がある。是は又北方には雲南の高い斷崖と境を成して居り、支那の廣西省の南境となつてゐる。東方及び南方は海洋である。一般に此の地域は、メコン河及、赤河 (Red River) の二つのデルタ、及峽谷沿岸地帯から成つてゐる。

マレー半島の北部は今迄殆んど知られてゐないが、南部の地域は可成り吟味を加へられた所である。マレー半島は梯形状の山嶽地帯から成立してゐるのであるが、その方向は云はば北々西、及南々西を指し示してゐると云ふ事が出來る。

よう。其所には、又一般的連系から外れた孤立的高原地帯が存在する。此のマレー半島は、比較的狭いので河長は短い。主要なる河はペラク河、ペハン河、ケランタン河等であり、此の地域の住民に最も大なる重要性を持つてゐる。

ジャングル其れ自身は其の地域に住む人間の生活に於る最も支配的な要因を成して居り、眞の密林居住者たる原始民族、マレー人にとつては特に其の事が云へる。彼等は單調な氣候の中に生活してゐる。森林は暗く、而も極めて湿度が高い。氣温はペルシヤ灣の近隣國に於る程過激ではないが、日々の變動少きため、年平均温度は高く現れてゐる。森林は旅行者の眼には美しい獄窓の如く見えるが、現實は全く押へ付けられる様な氣温を呈してゐる。

人間の手によつて此の處女地は開拓され、米作地や栽植地が存してゐるが、其の密林の大部分のものは依然として半島に残されてゐる。

微細な點では可成りの論議が存するけれども、東印度を東部と西部とに分けて考察する事に就いては、地理學者、生物學者双方の意見の一致を見てゐる所である。其の西方部はアジアと境を接して居り、云はゞアジアの潛入部と記述されるであらう。其の東部はオーストラリア大陸の一部を形成してゐるものと云ふ事が出来る。

動物地學的、及植物學的分離は既に恐らく往古の頃のものと思はれるが、其の分離は其の地域に住む住民の體質型を分類すべき決定的方法を現すものとして人類學者は考へてゐる。西部に於て住民の親縁關係はアジア的である。東半部に於ては全く異つた住民型が支配的であり、其の最も顯著なる特徴は皮膚の色の暗色にある。この事からメラネシア、即ち黑色種族の島なる名稱が生れるに至つた。

成程、人類學的、動物地學的、植物學の分布は全き相關々係を有して居らない。セレスは親縁的にはアジア的である。だが全體として人種的な及び他の生物的な型の一致は不一致よりもより大なるものがある。宗教的、社會的慣

習も全體として見れば同様な分離の跡を示してゐるのは興味深いことである。例へば古代ヒンヅー佛國の跡を極度に殘してゐる島は地理的にはアジアに屬してゐるものである。セレベス及び其の他の東方諸島は現在に於ける痕跡を何ら止めては居らぬ。

フィリッピンは二つの群島系列としての特有な地位を有してゐる。即ちアジア的な親縁關係を有せるボルネオと境を接し、三分の一は東部セレベスと、四分の一は我が臺灣と連結してゐる。地理學者や生物學者は其の正確なる親縁關係の問題に關して何等かの疑問を藏してゐるけれども、人種學者は其の點一層惠まれた地位にある。

人種學の見地から見て此の群島を二つの集團、即ち蘭印とフィリッピン群島とに分けて取扱ふことは便宜の方法と思はれる。だが然し此の分割は純粹に便宜的なものである。

倭、蘭印の最良なる地理的分割に關しては之迄可成りの議論が存在した。我々は以下次の如き分類規準に沿つて敘述する事にする。

〔第一〕 大スンダ群島 (The Greater Sunda islands)

此の中にはスマトラ島、ジャヴァ島、ボルネオ島、セレベス島及其等の外周に存する小さな島々が包まれる。

〔第二〕 小スンダ群島 (The Lesser Sunda islands)

此の中にはバリ島からチモール島に至る長い島線内のものが含まれる。

〔第三〕 マラツカ島

即ち之である。ニューギニアは多くの點で此の集團に屬するのであるが、此の島の人種學的問題はアジアと云ふよりはオセアニアのものに屬してゐる。

西方の島々は各時期にアジア大陸の一部を構成し、また其れと互に連絡されてゐたと信すべき理由が多數存在するやうに考へられる。第二世紀の頃スマトラとマラッカとは續いてゐたと之迄述べられて來てゐる。東部諸島はオーストラリア大陸の一部を構成してゐたものゝ如くである。斯くて西方に於て、現代の住民が其の居を定めた頃に此の島は大陸の影響の下に曝された事になる。然し乍ら東部では其の條件は極めて相違して居り、其の地域に住居せる種族の形態及分布には、孤立状態が一つの重要な役割を演じたやうに思はれる。

スマトラは約六、〇〇〇、〇〇〇人と云ふ比較的大なる人口を容し乍ら、一六〇、〇〇〇平方哩以上の地域を構成してゐる。古生代の岩石が発見されるが、其の島の大部分は第三紀層から成つてゐる。其の主要な天然の特徴は南西沿岸に沿つて走るバリサン高山脈地帯である。此の山脈は無数の火山を容して居り、其の中の或るものは尙も活火山である。此の地帯の北東には廣大な沖積層平野が打横つてゐる。西部沿岸、及び此の島の北東部には數多くの川があるけれども交通に有利な役目を果して居らない。然し乍ら平野は一層の重要性を有してゐる。最大の河はジャムビ河であるが、モエデ河は長く、交通の最も重要な手段となり來つたものである。スマトラの氣候は極めて暑く、其の湿度は相對的に大である。

ジャヴァ島はスマトラの約四分の一の大きさであるが極めて大人口であつて、約四〇、〇〇〇、〇〇〇人を數へる。此の島の最も際立つた特徴は大山脈があることで、之はビルマからマラッカに走る大地帯の連續と見る事が出来る。此の島の大低の山は火山であり、尙も活火山たるものがある。此の島の大部分は溶岩から出來て居り、全島の三分の二は山であるが而も島は驚くべき程肥沃な土壌となつてゐる。最も原始的な方法を以てしても住民全部の食料を供すべきものを生産する事が出来る。植物は繁茂して居り、其の中を通り抜ける事が出来ない。氣候は極度に暑く湿度も

高いが、此所ジャヴァではスマトラに於ると同様に高地には好適なる圍繞地域があり、庭は百花癡亂たる薔薇に満ち満ちてゐる。

ボルネオはスマトラと同様な氣象條件を有してゐる。寧ろ其の他の蘭印よりは異つた、而も一層規則的な地理的連續層を持つて居り、一般的性格として、ヨリ一層大陸的である。沿岸地帯は大部分は低地で沼澤地となつて居るけれども此の巨大なる島の大部分は處女林で被はれてゐると云ふ現況である。中央山嶽部から發し、各方面の海に注ぐ河が數多く存在する。人口は百五十萬に近いものと評價されてゐる。

セレベス島は比較的未だ探險されざる地域である。其の奇妙なる状態をしてゐるので注目すべきものとなつてゐる四つの長い山脈地の半島が中央から走つてゐる。隣のハルメイラ島は略々同様な形状を持つてゐるものである。河は總て短く、航行に耐へ難きものである。其の地理は依然として未知の領域となつてゐるけれども、セレベス島は往昔の大陸から孤立したものと如くである。其の北部は赤道の氣候であるけれども、南部は決定的に濕季節と乾季節とを有して居り、此の點で他のものと相違してゐる。

マラツカ島は、小さな島から成る三つの集團を包含してゐる。又其れ等は典型的な赤道氣候を有してゐる。動物及び植物を見るとオーストラリアの生物學的領域に密接なる關係があることを示してゐる。小スンダ群島も亦此の生物學的領域に屬して居り、全體として島は乾燥せる地域となつて居り、其の西部近隣諸島と著しい對照を爲してゐる。

フィリッピン群島は極めて多數の島嶼から成る一大群島であり、其の大部分のものは狭い海峡によつて夫々分離してゐる。此の群島の三分の二はルソン (Luzon) 及びミンダナオ (Mindanao) 兩諸島により構成されてゐる。之等二諸島は大潮沼地域を包含してゐるけれども、島の大部分は極めて、山嶽に取巻かれてゐる。山と海との間に肥沃

な沖積平野があるが住民の大部分は此の狭い沿岸地帯に沿つて生活してゐる。

此の地域の人種は其の地理的分割に従つて自ら三つの部分となる。印度支那、マレー半島及び諸群島とが之である。

アジア大陸の南東部の住民はあれこれと多様に之迄分類されて來てゐる。ジョイス (Joyce) は三つの分類を示してゐる。第一のものは、初期ネグリート住民の散在せる残存種族であり、第二のものはモイ族を含むインドネシア集團、第三の種族型は南方モンゴリア族(タイ族、シヤム族、シヤン族、北安南のトウ族、カムボヂヤのラオ族、安南人、ビルマ人)之である。ジョイスはカマール族が恐らくはマレー人と他とインドネシア人との混淆と考へてゐた様である。

ドニケ (Deniker) は一層精緻な分類形態を提示してゐる。之は二つの主要集團と、混種民集團とである。最初のものは數多くの種族を包含してゐる。モイ族を彼は奴隸種族として記述してゐる。タイ族は二つの人種的集團即ちシヤムの南東部及びカンボヂヤの北西部に於る集團と、シヤン州に於る集團との二つのものを含むとドニケは信じてゐる。前者はモイ族と同様な原住種族であり、後者は黒糺族の分岐種族である。モン族及びタラインは昔、低ビルマ地方の全地域を占めてゐたものゝ残存種族である。シヤム族は、ピンタン地方及び他の南アツサム、交趾支那、カンボヂヤに住居してゐる。カレン族はメビンの上谷、アラカンの山嶽地域等に住んで居り、モイ族より遅れてビルマに遣入つて來たものと思はれる。最後に彼はインドネシア人をナガ族とセルング族の二つに分類してゐる。

混淆種族の中、ドニケは四つの集團を分類してゐる。

(1) カンボヂヤ族又はケマール族

- (2) 安南人
 (3) ビルマ人
 (4) タイ人

この中カンボヂヤ及チマル兩族を彼はマレー族又はタイ族とヒンヅトの混血と見做して居り、更にタイを明かにインドネシア人と考へてゐる。彼は一定の體質的特徴を云々してゐるけれども、彼の分類が一部は文化に、一部は種族の言語に基礎を置いてゐることは明白である。

ビルマの住民に關して最も慎重にして充分な考察を與へたのはハーバート・ホワイト卿 (Sir Herbert White) であつた。彼の述べる所によれば、ビルマの住民の約三分の二はビルマ人であつて、それは、シャン州、カチン、メン高原、及びカレンニに於るものを除いては、總ゆる住民に優れて支配的な要素であると彼は述べてゐる。シャン族は、また住民中一つの重要な要素を形成してゐる。而して爾餘のものの中、最も數多きものは、チン族、カチン族、タレイン族及パロング族である。而して常に少くも數百年の間ビルマに數多くの支那人が居住してゐたやうに思はれる。現在之等の支那人は其の數を増しつゝあり、而も自由にビルマ人と混血してゐる。

之等の種族史は、ハットンによつて簡勁に敘述されてゐる。彼によれば比較的最近に至るまでビルマの住民は、ネジオト族であつて、現在の、西藏ニビルマ族は楊子江の上流から這入つて來たものとされてゐる。「ビルマ人が紀元前六〇〇年以前に、イラワジ谷に達したと云ふ證據は別に何ら存しない」とは彼の言である。

此の地方の比較的接近し難い性格のために、此の地域には相互に可成り相違せる集團があり、種々の河谷は各々の集團を特徴付ける地域となつてゐる。そこでビルマを爾餘の地域と區別し、全地域を二分して考へるを至當とするや

うに思はれる。

少くも或る地域に於ては其の原住民がネグリートであつた事を暗示する證據が存在する。このネグリートは現にマレー半島に尙も生存してゐるものである。カンボジャについてベルノイは語り、此の種族は多年の間一つの集團として存在することを止めたけれども、住民の下層を構成してゐると結論してゐる。

此の地域に現れてゐる第二の集團成員は、所謂ネジオト族に近い種族である。彼等は殆んどこの地域の原住民であつて、今日比較的非混淆状態に於る彼等を發見し得る場所は人里離れた山嶽地帯である。更に南方印度の所謂ドラビダ人種に親近せる一要素が存在してゐる。之等のものは明かにネジオト族に親縁關係を持つてゐるけれども、彼等が特殊化された系統を現して居り、此の地方に到達したのは比較的最近のものゝ如くである。最後に一つの重要な要素がある。即ち之は其の言語や文化を住民に課したもので、支那から這入つて來た種族である。パレアン族が即ち之である。

偕以上の如く全體として廣く考へて、此の地方には少くとも四つの種族系統の痕跡が存在する。ネグリオットの起源地が何處であつたかは我々は知らない。其の現在の分布は確かに南西アジアの一點を中心に散布してゐるのであるが、何時、何處から彼等が此の地域に這入つて來たものであるかについて我々は言ふ事が出来ない。ネジオト族の要素は今日依然として雲南に生存して居り、西藏雲南高原から此の國に這入つて來たものとも言へさうである。ネグリート族は、現在迄の報告によればビルマには、何等の痕跡を止めて居らない。それ故我々が知る限りでは、ネジオト族が此の地域の初期の住民であつたように思はれる。

印度から此の地域に向つて人種の東方移動があつたものと考へられが、恐らくそれはドラビダ系の人種であつてネ

ジオト族ではなかつたやうに思はれる。尤も彼等の一部分はネジトと緊密に接近したもので、ビルマ住民の中の長頭の種族たるものがある。ジョイスが南方モンゴリアと記述してゐる要素は、北方から此の地方に入つて來た。

テイレスリ⁹は、モールメンの近隣に住むビルマ住民を三つの集團に分けてゐる。第一の集團は彼女が純粹ビルマ人と記述する所のものである。之はマレー人に近く支那人とは殆んど親縁關係なきものである。第二の集團はカレン人と名付けてゐるものであつて、之は第一のものとは反對に支那人に近く、マレー人に遠いものである。元來支那人はマレー系統よりはカウカサス系統に屬するから、之はビルマ系統と云ふよりカウカサス系統と云つた方がよいと彼女は説いてゐる。恐らく彼女の言はビルマ系統よりはカウカサス系統に屬すると云ふ意味であらうが、其の點は確かなものではなからぬ。

此の問題について一層明確に立論したのはモラント⁽¹⁴⁾ (G. M. Morant) であつて、テイレスリの資料を用ひて一層廣範なる内容を附與した。ビルマ人(A)は肉體的にはマレー型に結びついてゐるが、結局は南方支那人に結びついてゐるものである、と彼は提案する。之は確かにパレアン人より發展せる型と考ふべきものであつて、其の連鎖はモラントによつて提案されたものである。南方支那人は、暑い地方に生活してゐるけれども、現實には熱帯の居住者ではないのであるから、純粹ビルマ人を目して支那人型が熱帯的風土條件によつて特殊化されたものとも云へさうである。

第二の型についてはモラントに於ては少しく異つた取扱を受けてゐる。彼は其れを彼の東洋人種と云ふ一般的圖式の中には含めて居らない。然し乍ら、彼がチベット人(B)と名付けたものは其の他の東洋型よりは、ビルマ人(B)及び(C)に一層親縁關係を有せるものである。とも角、ビルマには北方即ち雲南高原に其の親縁關係を有せる第二の人

種がある。此の型は、南方支那及び西藏高原の住民に親縁關係を有するものである。如何なる場合にまれ、我々が觀察してゐる種族は黄色人に最も近いものではあるが、恐らくは其の他の血も混つてゐるものと思はれる。然し乍ら、ビルマ人の短頭なるものは黄色人と云ふ提案によつてのみは解決され得ない顯著なる特徴を有してゐる。何故なら地上の支那人の大多數のものは中頭型だからである。

然し乍ら、西藏高原及雲南には、アルプス人種の疑ひもなき痕跡が存して居り、タリム盆地西方に幾分純粹な型で存在してゐる。だからテイルデスリがカウカサス系統の證據を見出したので、之をアルプス人とした事もさう不可能な事でもなささうである。ビルマ人の頭蓋骨は若干の點で他のものとは異なるものがある。即ち其れが東洋人の殘存頭蓋より短いばかりではなくまたそれより廣い。頭形指數は複雑な問題を氷解させるに役立つ。鼻形指數は、通常人種特徴を見る好適な指標ではない。鼻は扁平である。

ビルマの外圍地域は人類學者の間に注目を引き付けて來た地域ではない。ヴェルノオ及びベネティアは其の貴重なカンボヂヤ研究に於て、其所に少くも四つの系統が存在すると云ふ結論に達した。最初の而も最も古いものは、ネグリート族とされる。今日此の要素は全一體としての存在は認められないが、住民中の或る成員として認められ得るに過ぎない。

第二のものはネジト族である。此の人種の殘存物は東埔塞（註 湖水にして面積最小八十方哩、雨季には八〇〇方哩に及ぶと言はれる）及其の屬邊の漁族の墓の中に見出される。之等の原始種族は尙も山嶽地帯に見出される。だが之等のものは少くとも後に侵入して來たものと混淆したものと思はれる。

第三の要素は、印度及び諸方の島々から來りたるものである。其の頭形は、中頭型又は半短頭型である。

第四の要素は蒙古及びモンゴロイドと記されるものである。

之は昔、ツアボロフスキー(S. Zaborovskii)によつて分析されたものよりは一層精緻な分類である。

倍、以上ピルマの人種を概観するに當つて我々はテイルデスリーの假定即ち、マレー系統と支那系統の存在を出發點として分析のメスを加へたのであるが、カンボヂヤに於ては正しく此の二つの型の存在を見る事が出来るのである。

マレー半島には比較的正確な調査 Winstedt, R. D. Malaya, London 1923 がある。其の調査には若干の顯著なる事實が現れてゐる。全人口は三百萬以上。之等の人口の中、現在の研究目的にとつて最も興味ある原住民は約、萬以上の數を算する。最近の増加は少く、或る種族の如きは死滅して居り、他のものはマレーに急速に流れ込み、其の密林種族としての慣習を喪失しつゝある。

一九二一年に一萬二千人を數へたユーラシア人の増加は一應除外して考へて、住民の中、其他の構成部分の増加は人口の大移住現象に其の原因を求める事が出来る。何故ならば、死亡は出生より其の數が多いけれども、住民は繼續的に増加してゐるからである。マレー人全數の約半分の者はジャヴァ、スマトラ及び其の他の地域から大部分はゴム工業に募集されてゐるが、全く移住から離れて見ても増加の徴候を示してゐる。支那人は住民中第二の最大要素を構成してゐる。彼等は商人であり、マレー聯邦に於てマレー人と略々同數の人口數で、百萬以上を數へる。五〇萬以下の人口たるインド人は大部分は勞働の目的のために募集されたものであつて、主として南部印度から來航してゐる。大部分は苦力であるが、其の中には數多の小商人も包含されてゐる。其の他約三萬人のアジア人がゐる。之等はジャム人、日本人、アラビヤ人、猶太人等である。

支那人は住民中極めて興味ある要素を成してゐる。彼等は約五百年前、此所に來りたるものであつて、十五世紀の

初頭、マラツカに關する支那の記録が存在する。最も初期の支那人は厦門から來たものらしく、而して大多數の移住民達は常に廣東人か福建人であつた。最も初期の移住民はマレー人と婚姻したものと如くであるが、彼等は常に支那に歸國した。最近支那婦人の移住民が増加したので、多くの支那人は支那國外に其の家庭を建設することが出来るやうになつた。こゝで支那人と云ふのは其の大部分は南方支那人のことである。今迄、此の興味あり、且極めて重要な要素を持つるもの、體質的特徴に關する文獻は存しないやうである。

インド人がマレーに有せる影響力は恐らく支那人より大きいものと考へられる。其の影響は政治的宗教的であると共に、また文學的であつた。マラツカではタミール街があつた。北方印度人中最も數多いものはパンジャブ人であつてベンガル人と同様五千人を數へる。

日本商人は第一次大戰の爲に増加したけれども、全體として、其の在住は最近であり、殆んど其の在住に影響を與へるものと云ひ得ない。之迄の人類學者はマレー人及び原住民に關しては大なる關心を寄せるのであるが、住民に大きな影響力を有する移住民に關しては然うでなく、從つて資料も充分ではない。

之等の移住民を除外して考察するならば、マレー半島には三つの異つた種族が存在する。ネグリート族、サカイ族、マレー族、即ち之である。最後のマレー族中には原マレー人と其れから進化せる親近族とが含まれる。ネグリート族はケグー及上ベラク地方に於るセマング族、ケランタンのパンガン族と云ふ種族名で知られてゐるが、約二千の個々のものに換元される。身長は低く、約一五〇浬程である。丸い頭を有せる場合多く、毛髪は縮れてゐる。クラカンサー山脈からセラシゴル山脈にかけて住んでゐるサカイ族は半島の原住種族中第二の要素となつてゐる。彼等は北方でネグリート族、南方で原マレー族と可成り混淆した。セノイ族及ベシン族は同一集團部分を構成してゐるけれど

も、サカイ族と云ふ名前は總て之等の種族を便宜的に包括するに用ひられてゐる。彼等は皮膚の色の點では少しくネグリート族と異つてゐる。彼等は實に半島の三集團中最も明るい色を呈して居る。彼等は言語上はモンクメール族と、肉體的にはヴェツダ族と結び付いてゐると云はれてゐる。一見、之等二つの説明は矛盾したものとやうである。然し乍ら此の二つの説明は之等の種族の人種的地位を確定する場合には最も大きな價値を持つものである。

之等の種族と原マレト人との混淆せるものがベシン族である。

原マレト人及其の一層進歩せる従弟種族は半島住民の約半分以下のものを構成してゐる。だが地域を異にすれば成りの變異の跡を示してゐる。だが一定の共通なる特徴を抽出する事は出来る。毛髪は通常直で黒色、部分的には丸くなる傾向を持つてゐる。顔や身體には殆んど毛は存しない。皮膚の色には可成りの差違があり、暗オリーブ色から明オリーブ色、時としては赤い斑點を認める事が出来る。眼は常に暗色、時として斜であることがある。鼻は扁平で廣く、頬骨は際立つてゐる。顎は四角く、頭は短頭型の傾向を持つてゐる。

之等の特徴は原マレト型がパレアン人と緊密に連關あることを示して居り、全く時として其れと區別し難い事情を物語つてゐる。だが、其の型の分割を重變異とするには全く充分な相違を認める事が出来る。半島で見出される原マレト型と群島で見出されるものとを區別する事は殆んど不可能と思はれる。

之等の地域の正確な人種學については(フイリツピン群島は除外して)今迄充分研究されてなかつた。一般的に言へば、群島には三つの類型、即ちネジオト族、パレアン人の特殊型、及びネグリート族が見出される。だが其の分布は等しく全地域に涉つて居らない。スマトラ島にネグリート族が居ると云ふ報告は存在しないようである。パチン族は前下ラビダ人に近い系統に屬する跡を止めてゐると云はれる。南スマトラのオランダング族はハツドン(半島)に依

れば、極めて原始的な系統に属するものゝ如くである。恐らく彼等は初期のパレアン人の型を現してゐるものと思はれる。スマトラ島の他の多くの種族中、縮れ毛の存在を見ると、ドラビタ人が現在より一層廣範に散布して居つたものと思はれ、集團としての前ドラビダ人は存在しないにしても、現住民の血管には相當彼等の血が流れてゐるものゝ如くである。

ネジオト系統は大部分は決定的な種族とは思はれないが、大なり小なり大抵の種族の中に見出される。他方パレアン人の要素は純粹な形に於ても、混淆的な形に於ても見出される。例へばバタツク族中には二つの型が存する事をフォルツは指摘してゐる。他方メタウェイ島人は殆んどネジオトと混淆せざる純粹人種たるものゝ如くである。パレアン系統に關する學術語については考察を加へる必要がある。通常其れを我々はマレー人と呼んでゐる。所で眞のマレー人はスマトラのメナカーに於る一種族として起り、十二世紀にマレー半島に渡つたものである。十三世紀の終りまでに、彼等は廣く群島に散布した。モンゴールと同様に、彼等は唯だ彼等自身の種族のより廣範な展開に對してばかりでなく、同族語を話す種族に其の名を附與したのである。其の名前は一定の錯雜感を與へる事なしに一つの肉體型を意味する様に使用し得ないのであつて、言語形態と肉體型とは決して相關的な關係を有するものではないのである。だが然し此の地域に住む丸頭型種族には其の名は一般に使用されてゐる。ハツドンは種々の特殊化された近代のマレー人が派生せるパレアン人の分岐種族を意味すべき原マレーと云ふ便利な名前を創つた譯である。

ジャヴァの巨大な敷を占める住民は人種學者にとつては特に興味ある領域を形成してゐる。其の文化は極めて慎重に調査されたけれども、之等住民には殆んど關心を示される事少かつたと云へる。ジャヴァ本島のケラング族は眞のネグリート族と云はれてゐる。純粹なネグリート族が此の島に生存してゐるものかどうかは極めて疑はしいが、此の

主張を確認するために更に一層多くの證據が必要とされる。一先づ之等の事情を除外するならば、此の島には四つの種族集團が見出される。眞正マレー人はバタビヤ及其他の港市に、スング人は島の西部に、ジャヴァ人は中央部に、マドラ人は東部及マドラに夫々見出される。之等の種族の間の文化及び言語には相當の差違が存するけれども、體質的には殆んど差違なきものと云つてよい。各種族について種々の穿鑿が之を試みられて來たが、總括的に言ふならば等種族の祖先を原マレー人とする事は異論なきものと言へよう。彼等は極端に圓頭型であるが、之は南東アジアに住む同族集團と區別するにさう大した貢獻を與へるものとは思はれない。モラントは最近ビルマ人及アッサム人との關係に注意を向けてゐる。

移住民の歴史的考察に依れば、マレー族が初期の時代から島全體に散布してゐたばかりでなく、また基督時代の初期にインド人の影響があり、長期に涉つて此の影響は少くも文化的には優勢であつた事を示してゐる。

支那人との關係となると、之は全く別問題である。支那人は確かに初期の時代にジャヴァに訪れた。彼等は恐らく殆んど一、三〇〇年の間、此の島と商業的な關係を維持したものと思はれる。此の島の小貿易は大部分彼等の手で行はれたものである。今日此の島に來航する支那人の大抵のものは南支那沿岸の土着民である。

以上住民の體質に一つの重要な影響を持つた之等外國系の要素に加へて、文化と宗教に影響を與へたアラビヤ人もまた此の島に可成りの痕跡を止めてゐる。彼等の人口數は全住民の中でさしたる重要性を持つて居ないけれども、或る都市では其の體質型が確かに比較的純粹な形で残つてゐる。

ジャヴァ島に於る人種的要素を取上るならば、住民は二つの層に分けて考へる事が出来る。第一のものは充分に島に適應化する様になつた型である。此の類型の中にはネグリート族、ネジオト族、及原マレー移住民の後裔が含まら

れる。第二のものは比較的最近になつて此の島に移住して來たものである。彼等は先づ第一に原マレー人的要素に近
いマレー族であり、其れ故彼等を區別する事は出來ない。次に印度から移住があつたけれども、最近移住せる貿易商
を除いて、之等のものは住民に顯著な刻印を残さなかつたように思はれる。第三には、住民中の支那人の要素は古く
から存在してゐる。最近の混血は容易に識別し得られるけれども、支那移住民の窮局の影響は未だ述べる事は出來な
い。アラビア人の侵入者は、個々的に見るならば顯著な型となつて現れて居り、彼等が混淆せる所には其の根源的類
型が保存されて居るけれども、全住民の中に見る場合重要な要素として取上げる程の事もない。

ボルネオの住民はホーズ (Hose) マクドゥーガル (Mc Dougal) 及びハットン (Haddon) によつて慎重に研究
されたから、インドネシアの或る部分の住民よりは一層よく人々の間に知られてゐる。だが此のボルネオの原住民が
どのやうなものであつたかに就いては、我々は手懸りとなる證據を有して居らないのである。ネグリート族につい
ては何等の痕跡も發見されて居らない。またメラネシア人の要素も見出されるに至つてゐない。

ホーズ及びマクドゥーガルによつて提案された此の島の人種史は最も充分な方法で現住民の起源について之迄提案
されて來たものを考察してゐる。彼等によれば住民の主要源泉となるものは四つとされてゐる。ボルネオが本土に結
びついてゐた時にクレマンタン族、ケニヤン族、ブナン族が恐らくボルネオに居住して居つたと、之等の學者は提案
してゐる。次に現在のカヤン族、ムルート族及イバン族を含めての第二移動民の波があつた。カレン族は新鮮なモン
ゴールの血を受けたインドネシア族に最も近いものと思はれる。

其の種族の肉體がさう簡単に説明され得るかどうかは疑問と思はれる。初期の住民はネジト族であつたやうに思
はれるが、各時期に極めて度々他種族と混淆した結果、原マレー人の影響の導入が決定的に何か特別な移住種族に歸

せらるべきものかどうかは極めて疑はしい處である。又同時に混淆せるものが本土にゐるか、島にゐるかも述べ得ない。然し乍ら邊鄙なる地帯にはネジト族の血が比較的純粹な形で保たれてゐる事は明瞭である。だが其の他の地域では、殊に沿岸地帯に於て、原マレー人及びマレー人の要素が支配的なものとなつてゐる。之はジャヴァ島の現象と相似てゐる。然し乍ら、疑ひもなく此の島には比較的容易に接近することが出来るためにネジト族の要素が大なる範圍に涉り、浸透する様になつた譯である。

フィリッピン群島の人類學は爾餘のインドネシアと多く平行的關係を有してゐる。最近のヨーロッパ系による影響を除外するならば同様であるが細目の點になると注意を要すべき差異が存在してゐる。アラブ族の影響は體質的なものと云ふよりは寧ろ文化的なものであり、恐らく住民の人類型には何等の影響を與へなかつたものゝ如くである。印度文化はこの島に廣範に涉つて影響を與へた。然し乍ら再び此所で、體質的影響が恰も全く見落されてゐるやうに思はれる。兎も角、ジャヴァ島に於る程それは廣く散布されなかつた。ジャヴァ島の其れと比較されべき何等の遺跡も見出されて居らないし、またバリ島に於ける如くインド慣習の根深い存続は殆んどないと云つて宜しい。インドと接した文化の影響は疑ひもなく著大であり、群島の最深处にすら浸透してゐるけれども、インドの肉體型の痕跡が残存してゐると云ふ事を暗示する證據とは何等存在しない。支那人貿易商は數世紀に涉つてフィリッピンを訪ねてゐる。フィリッピンに彼等の血の痕跡があると云ふ主張は全く尤もな意見である。然し乍ら支那人と原マレー人との親近性のために、混血の正確な影響を評價する事極めて困難であり、かるが故に問題は極めて困難なる研究領域を構成してゐる譯である。

倭、フィリッピンの島民の大部分を構成する二つの基本的種族がある。或る時期に於ては、ネグリート族は全島と

迄は行かなくとも大部分の地域を占めてゐたものゝやうである。ヨーロッパ人が最初に此の島に來たときには、彼等と廣範に雜婚したものゝ如くであるが、現在は住民中極めて小さな部分となつてゐるに過ぎない。彼等は現在、此の島のあちこちの地域に散布して居り、大體四つの集團がルソンに、一つの集團が各々パラサン、ミンダナオに見出される。

之等ネグリート集團の存在に加ふるにモンテノス人又は高原人と通常呼ばれてゐる他の集團が存在する。之はネグリート族と何等かの親縁關係を持つてゐるようである。彼等は總て矮小人で、平均身長は一五〇糎或は其れ以下である。頭は總て丸型で廣い鼻の持主である。だが最も顯著なる特徴は毛髮が黒く而も多い事、皮膚色が黒いことである。疑ひもなくフィリッピン^のネグリート族はアンダマン族の中の矮小族及びニューギニアの矮小族集團に密接なる關係を持つてゐる。之等の種族に關係ある一般問題については既にアジアの人種問題を考察するに際して述べて置いた所である。

フィリッピンの褐色人種をマレー人とインドネシア人の二つの集團に分けて考へる事は慣例である。此の分割の仕方は充分満足すべきものではない。通常の分類に依れば、ネジオト族として概略、一括される種族は總て極めて低身長で、一五一糎から一五六糎の間の平均値を持つてゐる事が知られるであらう。然し乍ら鼻形指數の點になると豫想以上の多様性を持つてゐる。南方印度の人種學的論議に於ては、一連の相似た事實が記述された。恐らく其の解明も同様なものであらう。ハツドンの提案によればスマトラには前ドラピアの要素が存在する。彼はまた、東スマトラ、セレベスのトーラの前ドラピタ人と真正前ドラピダ人との主要なる相違は長身長と圓頭型の傾向に求められる事を示した¹⁹。ルソン島のポントク族、イラガオ族の種族の中で、平均身長は一五五糎、頭形指數七八・七七、平均

鼻形指數は一〇〇—一〇二である。最初の二つの測定値は彼等を其の他のネジト種族から識別するのに役立つやうである。然し乍ら鼻形指數は、一つの明瞭な道標たるものゝ如く思はれる。之等の種族は他の血液を交へてゐるやうであるが、南方アジアに於る最も古い種族の一つを代表してゐるものゝ如くである。スマトラや其他の地域にはヘッドンが主張した種族の痕跡が在る。彼等が特に興味あるものである事は、或る人類學者が彼等をオーストラリア人と同一種族と結び付け、それ故極めて往昔の時機に此の地域を占めたものとしてゐるからである。

フィリッピンの眞正ネジト族は其の低身長及び相對的長頭によつて識別されてゐる。鼻形指數は平均値八九—九三—九五を示してゐる。頭形指數は、通常八〇で前ドラビダ人より廣い頭を持つてゐる譯である。而も通常原マレー人よりは少しく長頭の様であるがそれも極めて微小であつて、さしたる重要性を持つものではない。之は恐らく兩者の混淆に基くものと思はれる。

以上何れの場合に於ても彼等の合成種族には少くとも二三の要素が混入してゐる事に注意せねばならない。ネジト族、或は原マレー人として區別される種族が總ゆる種族の中に支配的な特徴を現してゐるものと思はれる。

要約すればインドネシアに於る人種は少くとも四つの集團に分けて考察される。第一はネグリート族であるが、今日、其の分布範圍は限られて居り、僅かにフィリッピンに見られるに過ぎない。第二の集團は前ドラビダ人である。之は恐らく廣く散布されてゐるものであらうが、唯、散在的に發見されるに過ぎぬ。第三の集團は、ネジト族であつて、之はアジアの南西沿岸地方に發見される種族中に見出すことが出来る。最後に、住民中支配的な要素は、パレアン系統に近い原マレー族である。總て之等の種族の歴史と移動は現在明かでない。更に其の他の種族の混入が認められる。就中、支那人は多くの地方で全住民中重要な構成比率を示してゐる。然し乍ら彼等は大部分最近の移住に屬して

なる如く思はれるから、群島の人類學を論議するに際しては、近隣族としての範疇に屬せしめて置かねばならぬ。

第十卷 關係文獻

- (1) Logan, J. R. The Ethnology of Eastern Asia. Journ. Indian Archipelago, IV. 478.
- (2) Mc Mahon, A. R. The Karens of the Golden Chersonnese. Lond., 1876.
- (3) Milne, Mrs. L. The Home of an Eastern clan. (Palangs of the Shan States.) Oxford, 1924.
- (4) Anthropometric Data (Burman). Ethnographic Surv, India, Calcutta, 1906.
- (5) Lewis, C. C. Ethnographic Survey of India (Burma). No. 4 Calcutta, 1919.
- (6) Scott, J. G. Burma, Ahandbook, etc. 1906.
- (7) White, Sir H. T. Burma. (Provincial Geographies of India.) Camb, 1923.
- (8) Temple, Sir R. C. D. Journ. Roy. Soc Arts, Lond., 1910, LVIII. 695.
- (9) Thilesley, M. A. [Cranionometry.] Biometrika. Camb, 1921, XIII. 685.
- (10) Turner, Sir W. Trans. Roy. Soc., Edinburgh, XLIX. 719.
- (11) Scott, Sir G. Upper Burma.
- (12) Carey, Sir B. S., and Tuck, H. N. Chin Hills.
- (13) Hertz W. A. Myitkyina District.
- (14) Graham, A. W. Siam (Handbook). 1912.
- (15) Verneau, R., and Pannetier, G. [Cambodgia]. L'Anthrop, Paris, 1921, XXXI. 279.
- (16) Deniker, J., and Bonifacy, A. L. M. Bull. et Mem. Soc. Anthrop, Paris, 1907, 5e Serie, VIII. 106.

- (17) Zaborowski, S. *Ibid.*, 1897. 4e Série, VIII, 44 and 1900. 5e Série, I, 327.
- (18) Roux, P. [Tonkin.] *Ibid.*, 1905, 5e Série, VI, 155 and 324.
- (19) Maurel, E. *Ibid.* 1889, 2e Série, IV, 459.
- (20) Vereau, R. *L'Anthrop.*, Paris, 1909, XX, 545.
- (21) Abadie, M. Les races de Haut Tonkin de Phong-Tho é Lang Son. Paris, 1924.
- (22) Martin, R. Die Inlondstämme der Malayischen Halbinsel. Jena, 1905. [The standard textbook and a mine of information.]
- (23) Annandale, N., and Robinson, H. C. *Fascioli Malayenses*. Lond., 1903.
- (24) Skeat, W. W., and Blagden, C. O. *Pagan Races of the Malay Peninsula*. Lond., 1903.
- (25) Winstedt, R. O. *Malaya*. Lond., 1923.
- (26) Morgan, J. *L'âge de pierre polie dans la presqu'île Malaise*. *L'Homme*, II, 494.
- (27) Swettenham, Sir F. *The Real Malay*. Lond., 1900.
- (28) Swettenham, Sir F. *British Malaya*. Lond., 1906.
- (29) Turner, Sir W. *Trans. Roy. Soc., Edinburgh*, 1907, XLV.
- (30) Evans, I. H. N. *Religion, Folklore and Custom in North Borneo and the Malay*. Camb., 1923.
- (31) Skeat, W. W. *Malay Magic*. Lond., 1900.
- (32) Schmidt, W. A. f. A., 1906 N. F., V, 59.
- (33) Giuffrida-Ruggieri, V. *Archiv. Anthropol. Etnol.*, 1916, XI, VI, 125.
- (34) Hagen, B. *Arch. Studien aus Insulinde*. Ver. Kon. Akad. Wiss., Amsterdam 1890, XXVIII.

- (35) Hamy, E. T. Les races malaises et américaines. L'Anthrop, 1896, VIII.
- (36) Hamy, E. T. [Ahourous de Gholo.] Bull. Soc. Geogr., Paris, 1877, 6, XIII. 491.
- (37) Meyer A. B. The Negritos Dresden, 1899.
- (38) Quatrefages, J. I. de. The Pygmies. Lond., 1835. [Les Pygmées, Paris, 1877.]
- (39) Turner, Sir W. Trans. Roy. Soc., Edinburgh, 1907, XLV. 781.
- (40) Hagen, B. Veroffen. Stadt. Volker-Muc. Frankfurt a. M., 1908, II.
- (41) Voll, W. A. f. A., 1900, XXVII. 719; XXXV. 89.
- (42) Voll, W. Nord-Sumatra. (Tw6 Vols.) Berlin. 1909 and 1912.
- (43) Garrett, T. R. H. J. R. A. I., 1912, XLII. 53.
- (44) Straly, C. H. (Japanese Women.) A. F. A., 1899, XXV. 233.
- (45) Haddon, A. C. Archiv. Anthrop. Ethnol., Florence, 1901, XXXI. 341.
- (46) Haddon, A. C. Appendix to 47.
- (47) Hose, C. and McDougall, W. The Pagan Tribes of Borneo. Lond., 1912.
- (48) Kohlbrugge, J. H. Mittb. Niederl. Reichmus, f. Volk, II. 5.
- (49) Sarasin, F. Mat. Naturgesch. der Insel Celebes. Wiesbaden, 1906, V, Pl. 2.
- (50) Beyer, H. O. The Population of the Philippine Islands in 1916. Manila, 1917.
- (51) Folkmar, D. Album of Philippine Types. Manila, 1904.
- (52) Meyer, A. B. The Negritos. Dresden, 1899.
- (53) Reed, W. A. Negritos of Zambales. Ethn. Surv., Manila, 1905, II. 1.

- (54) Sullivan, L. R. Racial types in the Philippine Islands. Anthropolog. Papers, Amer. Mus. of Nat. Hist., New York, 1918, XXIII. L. [Reference to all the literature.]
- (55) Bean, R. B. Racial Anatomy of the Philippine Islanders. Philadelphia, 1910 [an unconventional work].

第十一章 結 論

私はアジアの主要種族の體質的性質を記述せんと試みて來た。斯る記述は廣範な線に沿つて事實を述べ、極めて多數の詳細な事實の陥穽を避けんがためには、どうしても簡略なものとならねばならない。亦それは、品調への性格を何等か持つに相違ない。即ちそれは、豊富な知識と科學的な觀察の缺乏を示してゐるのである。各種族の生物學的研究から見ると、環境が人間形態の形成に一つの重要な役割を演ずべしと信ずる理由が豊富にあるけれども、色々な地域の住民が地方的集團として記述される場合には、その現在の環境よりは寧ろ、彼等の歴史や移動と容易に關聯づけられ得ると云ふ事が知られるであらう。まさしく同一の條件と思はれるものの下に生活してゐる種族の間で、極めて明瞭な差異を呈せる型がある。他方、型の分布が地圖上に記載される場合に、環境の巨大な相異にも拘らず、それは屢々恆常性を保持してゐる様に思はれる。私が示さうとした様に、一定の特徴は環境と相關々係にあるものと思はれる。斯る研究に對する材料は集積されつゝあるので、斯る研究の基礎となつてゐる表を作成する事が殆んど身近くに容易なものとなつてゐる。

明らかに環境に應ずる變異は大部分はその適應過程に於いて緩慢であるに相違ない。我々はアジアの初期の人種史に就いては殆んど現在知る所がない。近代史及び我々の持つてゐるが如き初期の歴史の斷片の多くは、人種の大移動があつたと云ふ事を明瞭ならしめてゐる。時として之等の運動は匈奴の侵入と同様に激動的であつた。他のものは極めて緩慢であつた。斯る種族移動があつたばかりでなく、亦彼等は違つた系統の混淆を可成り受けたのであつた。人類は大部分肥沃な雜種を作り出す事が出来る様に思はれ、斯る雜種増殖がアジアに於いて劫初の頃から行はれたと信

すべき理由がある。そこでは然し、人種學者に直面する多くの困難が存在する。最大のものの中には環境の影響や移民の結果や雜種培植の結果がある。之等三つの事例の影響を解決する事は困難である。

最近のヨーロッパ植民は問題を容易にしなかつた。だが然しヨーロッパの雜種は例へば中央アメリカに於ける程、土着人種の割合に於いて少數のものと思はれる。だが然しある所では、彼等は影響を免れ得なかつた。

アジアの全人種問題の中最も興味ある特徴の一つは國民的及び心理的要因に關するものであるが、その肉體を考察する場合には無視され得ないものである。何故なれば、之等の要因は屢々肉體と緊密な關係を持つてゐるものと考へられるからである。最近ヨーロッパ人種に依るアジアへの可成りの移民があつたが、一方亦、それに相應じて此の大陸から出て行くアジア移民が見られた。斯る移民を制限せんとする色々の努力が加へられた。その理由は結局經濟的なものであつた。だが然し、經濟的要因は生物的背景を持つてゐる。東アジア種族は長期間に涉つて、ヨーロッパの種族が持つよりは一層困難な條件の下に生存する事を強ひられた。それ故アジア人は普通のヨーロッパ人に比べて、不可能にして極端に劣悪な經濟的條件の下に生存を續ける事が出来るのである。アジアとの經濟的競争は彼等自身の國家には不愉快なものであり、それ故彼等は色々の立場で一定の國から閉め出されたと云ふ事が多くの國民に依つて感ぜられて來た。此の排外政策は屢々人種的なものと呼ばれてゐるけれども、通常は國民的なもの上に實行されてゐるのであつて、眞に人種的な背景の上に行はれてゐるのではない。體質的には、ヨーロッパの或る人種とアジアのそれとの間に殆んど差異がないと云ふ事が論決された。他方に於いて私は國民性、文化、宗教及び言語が屢々現實の體質的問題から全く獨立のものである事を示さうとした。

それ故私が上述した如き問題は、人種學の當面せねばならぬ研究とは全く離れてゐる。だが其れ等は屢々人種學者

から資料を借りてゐる。生物學的に言つて極西から東に至るアジアの大部分の人類は、ヨーロッパのそれと密接な關係を持つてゐる。彼等の間の差異は地方的變異と云はるべきもの以上に出てゐない。尤も或る場合に於いてその文化は、亞人種と云ふ語を使用するに充分である様に思はれる事もある。だが然し東アジアに於いては、黄色人と便宜的に呼ばれてゐる種族集團が廣く散布してゐる。それ等は一層往昔の時代には、ヨーロッパの人類と結び付いてゐた様に思はれる。その相異の程度ですら一定の範圍に涉つて論議せねばならぬ問題を構成してゐる。最後に南東アジアの遠隔なる地域には、他の二つの集團と廣く分離されてゐる全く異つた型の痕跡が存在してゐる。

ネグリート族はアジアの種族の一部を形成するには極めて少數である。黄色人は極めて數多く、恐らくアジアの住民の大部分は此の種族に屬してゐるであらう。だが、その他の人類も可成りあり、相當の數を占めてゐる。大なる種族系統の變異が比較的少い事も亦、大多數の中に現はされてゐる。だがそれ等は一定の顯著なカテゴリーの中に分けられるであらう。現在集められてゐる證據を以て判斷され得る限り、之等の變異は一定の地域に支配的である様に思はれる。その結果、詳細に涉つては相異あるにも關らず、廣範圍な輪廓に於いて一定の地域を占むる體質型を述べる事は可能である。だが然し之は、言語又は宗教の分布を割り當てるに際して獲得されると同様な正確さはなされ得ないのである。それは決して近代國民がその政治的境界を限定せんとしてゐる精密な正確さを以てなされ得ないものである。

